早乙女貢の殺（さつ）

花笛伝奇／妖刀伝奇

bestseller NOVELS

早乙女貢の殺（さつ）

花笛伝奇／妖刀伝奇

bestseller NOVELS

『花笛伝奇』――川開きの花火の夜の大川端、ふと青江弦四郎の耳をとらえた奇妙な笛の音。その時、屋形船の中で、笛の主、芸者きよ香が十方手裏剣で殺され、肌身離さず持っていた桔梗の笛が持ち去られた。大江戸の夏は不吉な殺人事件で幕をあけたのである。やがて弦四郎の身にも災禍が及び、尾花、なでしこ……と笛師庄吉の手になった秋の七草を彫りこんだ七本の笛の主がつぎつぎと消されていく……。

『妖刀伝奇』――何故、斬ったのだ、おれは？……汐のひくように、ふいに伊丹靱負はわれに返った。来月半ばには式を挙げることになっていた記代の兄を斬ってしまったのだ。手には生きもののように無気味な、鈍い光をたたえた古刀、村忠が。お力との手切金にと土蔵から持ち出したものだった。魔性を秘めたこの妖剣が血を求めるように二人、三人と斬らせていく。旗本の名誉も誇りも、安楽な生活もすべて遠くへ去ってしまった。そんな矢先、靱負の許からこの妖刀が消えていった……。

表紙イラスト　横山　明

BESTSELLER novels

早乙女　貢の殺（さつ）

長編異色時代小説

花笛伝奇／妖刀伝奇

KKベストセラーズ

N149

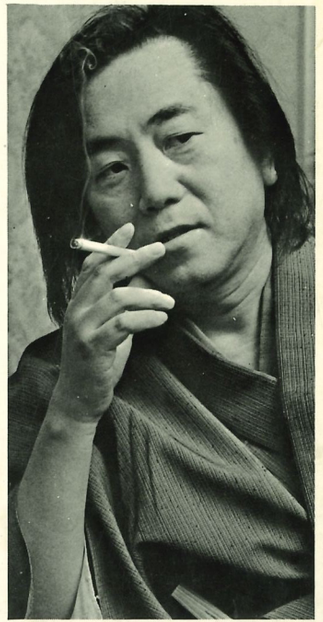
BESTSELLER novels

長編時代小説シリーズ……ベストセラー・ノベルズ

●早乙女　貢の忍び無惨　忍法乱れ雲　忍法無惨帖
忍びの者―その宿命的存在に鋭いメスを入れる代表作

●柴田錬三郎の無頼殺法　遊太郎巷談　修羅の巻　魔女の巻
凄婉なエロティシズムを駆使した長編時代アクション

●柴田錬三郎の秘剣乱舞　顔十郎罷り通る　主水血笑録
流動感あふれる傑作剣豪小説、ここに完全収録！



著者近影・関戸基敬

江戸時代も現代も、人間の営みには変りはない。一見泰平に見えながら、実は上下とも複雑怪奇な欲望の争いが行なわれていることは、今日の世相を見てもわかることである。

コンクリートジャングルになった東京も、昔はこの作品の中にあるような、向島の花などは江戸の人々にとって心の安らぎになったものだ。その花にも、欲望の醜悪さがからみついている。同じカオスの中の凄まじい人間の争いにも、どこか昔は情緒があったようだ。

読者をして、一刻でも江戸の時代の中に心を遊ばせることができたら、作者としては本望である。

（著者のことば）

¥600

0293-511149-7617

KKベストセラーズ

早乙女貢の殺

長編恐怖時代小説
花笛伝奇

長編異色時代小説
妖刀伝奇

KKベストセラーズ
N149

ベストセラー・ノベルズ

早乙女　貢の
殺さつ

長編恐怖時代小説
花笛伝奇

長編異色時代小説
妖刀伝奇

早乙女貢の殺

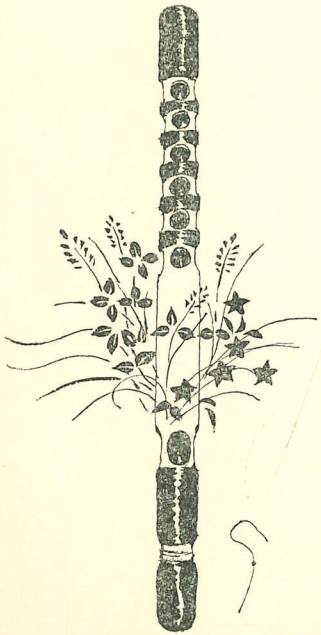
目次

長編恐怖時代小説
花笛伝奇……5

長編異色時代小説
妖刀伝奇……177

長編恐怖時代小説

花笛伝奇



本文イラストレーション　堂昌一（どうしょういち）

狂い花火

一

名を呼ばれたような気がして、青江弦四郎はふりかえった。

両国橋から少し下流の大川のなかでである。まわりには屋形船や伝馬や猪牙など多種多様の船が舷すれあうばかりに行き来している。

宵から打ちあげられ通しの、花火が空に五彩の花を咲かせていたし、そのたびに叫喚があがった。芸者の三弦の音が下手な唄を誘って大川端は時刻を忘れた喧騒につつまれていた。

——そら耳だったか……

苦笑して、瓢箪をとりあげて、

「竹さん、一杯やらぬか」

「へえ」と、若い船頭の竹は櫓を巧みにあやつりながら、「有難うございますが、ここで手をはなしたら、屋形にひっくりかえされてしまいまさ」

「拙者がかわろうか」

「ふわッ、なおあぶねえや。あ、またあがりましたぜ、尺玉だ」

ザーッと花が夜空でひらいた。

どよめきが川波をかきたてる。

「——青江さま」こんどは、はっきりと女の声が聞こえた。

ふりかえった弦四郎に、

「ここですよ、青江さまッ」ひらひら手をふっている女。

七、八間の大屋形に乗り組んだ芸者の一人だった。簪がきらっと光った。

「ああ、小えんか……」

弦四郎は微笑した。

「旦那、すげえ！」

するりと屋形のそばを漕ぎぬけて、竹は空を仰いだ。頭上に落ちてくるようなしだれ桜。

「こいつァ尺五はありますぜ」

玉屋ア、鍵屋ア、の声が両岸からあがる。花火を見ようともせず、弦四郎に何かいおうとしている小えんの姿をかくして、すーっと別の屋形船が間に入ってきた。

これも障子や葦簾をとっぱらって、職人であろうか威勢のいい連中が、「ほうれ、品川女郎衆は十匁」と、やけのように尻とり唄を怒鳴っていた。三弦などには乗らないことは本人たちが承知の、嗄れた声をふりしぼって、

「十匁の鉄砲玉、玉屋の花火は大元祖、大元祖、やれほい、品川女郎衆は……」

莫迦の一つおぼえの怒鳴りかたで、皿小鉢を箸で打ったり銚子の尻をぶっつけあったり、花火なんか見もしない。

苦笑を盃へおとして、弦四郎は手酌を重ねる。以前は陽気な酒で人からも快活だといわれたが、先ごろあることから御役ご免になって以来、酔いかたが違ってきた。

沈鬱に独酌することが多くなった。無役だから閑はあったが芸者遊びもしない。もっとも御役料がたえると、豪奢な遊びをするほど家禄は高くない。

勘定奉行の下役だったせいで、御用商人や金座関係の宴が多く、柳橋でもよく遊んだが、こうして見ていると、

——莫迦騒ぎにうつつをぬかして……

と、批判的な気持になるし、

——あんなに使って惜しくない大金の出どころは？

と、疑惑を感じてくる。

正当な儲けでは、この上下、金づまりの世の中に芸者を十人もそれ以上も侍らしたあげく、珍味佳肴を突っつき散らして踊り狂えぬはずなのだ。

花火はまだ果てるともみえなかったが、弦四郎はなんだか興ざめしてきた。

「竹さん、そろそろ帰るとしようか、柳橋へまわしてくれ」

「え、もうお帰りで」

「うむ」

「花火アこれからなンですが、まだ五ツ（午後八時）をまわったばかりでございます」

「まあいいさ、花火ア今夜ばかりではないのだから」

「そりゃそうでございますがね」

竹さんが未練げであった。しかたなさそうにぐーっ

と、へさきのむきをかえる。
そのとき、ふっと弦四郎は笛の音を聞いた。
「はてな……」口へはこびかけた盃が宙でとまって、「どこかで聞いたことのある曲だが……」

二

酒肴を積みこんでの船遊びには芸者がつきものだ。三味線、鼓、横笛等々、お座敷をとりもつ音曲もまたつきものだったが、川びらきの花火の夜の大川の騒ぎは、せっかくのばちの冴えもかき消してしまう。
田舎のだるま芸者に弾かせても同じならと、この夜ばかりは、本気になって弾く女はいない。
こまかい芸を要求する通人なら、なおさらほかの日を選ぶ。いわば、野暮なお客の、泥鰌すくいの伴奏でしかないから、おしなべて冴えたばちの音も、腹にしみるような鼓の音も聞けるはずはなかった。
その弦四郎の耳をとらえた、横笛の音は、莫迦さわぎの中で、一抹の哀愁と奇怪な無気味さを湛えていたのである。
「あの曲は？……」
曲は思いだしそうであった。
奇妙なのは、その笛の音が、快楽的な初夏の夜を嘲けるような——
弦四郎が、連想したのは、真冬に軒端に下がった氷柱であった。するどい先端にふれれば、無表情な冷たさでぶっすりと、掌を甲まで貫きそうなつらら。孤独と冷酷とが——見えないひとすじの線となって、熱狂した群集の背を撫でるかのようであった。
笛の音はもう聞こえなかった。
弦四郎は酔いざめた目で笛のぬしを探した。三間ほどの屋根船が目にとまった。
とくに、弦四郎の注意をひいたのは、四方に青すだれがさがっていることだった。
日中に青すだれをかけたり、葦簀を立てたりすることは多い。高位の夫人や、人目をしのぶ男女のあいびきには、障子をたてた屋形がよく使われる。
が、しかしこの川びらきの夜、人目を憚かってまで、両国辺に近よることはない。
不審はそれだった。奇妙な冷たいひびきを持った笛の

音と——

人目をさける、ひっそりした屋根船——弦四郎が関連性を感じたのは不思議ではない。

「竹さん、あの船に近づけてくれ」

「え？」

「悪いが……あの船をのぞきたい」

竹さんは呆れ顔になったが、客のわがままには馴れている。また大きく、へさきをむけかえた。

そのときである。喧騒をつき破って、女の悲鳴が聞こえた。

「や？」それは一瞬ではあったが、異変を物語っていた。

「どこだ？　いまの声は」

「へえ、たしか女でござんしたね……」

大小の船が舷をふれあわんばかりの大川は両国橋近く。

思わず立ちあがろうとしたので、猪牙がぐらりとかたむく。

「おっと、旦那、気をつけておくンなさい」

「竹さん、あれらしいぞ」

腰も高く、長さもひときわ長い屋形船で異常な騒ぎが起こっていた。

座敷八間に台所一間と読んで山市丸と名づけられた八百善自慢の屋形船。それには小えんが乗っていたはずである。

「——山市で人殺しだあ」

そんな声が伝わってきた。

「人殺し！」

弦四郎は盃を捨てた。もう笛の音どころではなかった。

「竹さん、急げ」

「ようがす」

いざとなると一梃立ての猪牙は速い。白波を蹴立てて、大小の船の間隙を縫って近づいた。

「小えんではあるまい。まさか、小えんではあるまい」

なぜか、念じるように弦四郎は呟いていた。

「人殺し、早くお役人を！」

狼狽した仲居の声を打ち消すように、どーんと尺玉がまたあがった。玉屋か鍵屋か。

三

「あ、青江さま」

被害者は小えんではなかった。ほっとすると同時に、弦四郎は日頃の冷静さをとりもどした。

屋形船は猪牙よりもぐっと舷が高い。弦四郎は手をかけると、ひらりと身をおどらした。

もうそのときは、まわりの船が漕ぎ寄せていて好奇心に駈られた連中がともやみよしに乗り移ってくる。

山市丸の客は両替屋の連中であった。

千両、万両の黄金を日常左右しているだけに柳橋でも新吉原でもお大尽扱いしている。遊びには馴れて、鷹揚で豪奢がその身上だったが、この椿事には仰天した。あわてふためいて、

「乗るな、乗るな」

と、銚子をなげつける者もいた。

「役人を呼ぶのだ、役人衆を早く」

「うろんな奴を近づけてはなりませんぞ」

目をひからして、芸者を楯にする。芸者のあげる悲鳴がますます、彼らを恐怖に突きおとすらしい。

「さわぐな、静かにするのだ」弦四郎は一喝した。「下手にさわげば、下手人に乗ぜられるばかりだ」

「そうじゃとも、皆の衆、見苦い真似さっしゃるな」

なかから、こう和した者がある。弦四郎は旧知の山城屋甚兵衛のあから顔をそこに見出した。

「青江さん、すぐお役人を呼んでくださらぬか。きよ香が、あのように……」

甚兵衛は目をしばたたきながら、死体をさした。

「きよ香か、殺されたのは？」

その芸者は両の手に虚空を摑んで、うつ伏せになったまま、もうびくりともしない。

黒紹の背ににぶい光を放って手裏剣が突っ立っていた。

「心ノ臓をやられている……」

平静にいったが、弦四郎は内心舌をまいた。見事な手練であった。一寸の狂いもなく、十方手裏剣が心ノ臓を貫いていた。

「下手人は……」

「かいもくわかりませぬ」と、山城屋甚兵衛が深く歎息

しながらいった。「何しろこの船でございます」
そういわれてふりかえってみると、まさしく、大川は水面を蔽って大小の船で埋められていた。
鍵屋の打揚げ船には時ならぬ事件が知れたとみえ、玉屋だけが、まだ花火の音を聞かせていた。
「きよ香には、誰かに怨まれるような事情があったのだろうか？」
「さあ」
甚兵衛は渋い顔で横をむいた。
きよ香が甚兵衛の世話になっていることは柳橋通なら誰でも知っていることだ。甚兵衛の立場からは口にできないし、嫌なことに違いない。
弦四郎は苦笑した。
「出すぎた真似をした」と、彼は身をおこしていった。
「許せ、おれには関りのないことだった」
ちょうどそこへ船の垣をつくった船頭たちを叱りとばす声が聞こえて、町奉行所の同心たちが漕ぎよせてきた。
「これっ、その船はそのまま薬研堀へまわすのだ。乗り合いの者は、お調べが済むまで、下船はならぬぞ」
背の低い同心が贅沢な料理の大皿をじろりとみて、嫌味をいった。あらゆる場合に袖の下を意識するのが、彼らに共通のいやしさだった。
検死の与力が、用心ぶかく十方手裏剣をぬきとるのを一瞥して、弦四郎は、
「竹さん、もどるとしよう」
猪牙を招き寄せた。
「お待ちなさい」と同心が十手で袖をからまんばかりに、「てまえが申したことを何と聞かれた」
「ああ、下船はならぬということであろう」
「左様、お調べが済むまで、お控えください」
「おれア違うよ」
「いんにゃ、よしやお旗本であろうとも、かかる不祥事の場に居合わしたご不運……」
「なアに、いまきたばかりさ」と、舷をまたいで、「芸者を抱いて花火を眺めるような結構な身分じゃない」
「だが、この場に」
「わからねえ唐変木だな。不審がありゃアそこらのお方に聞いてくれ、三味線堀の青江弦四郎、ふた月あまり芸者衆とは縁なしさ」
小えんと眼があった。

まだ脅えた表情のまま、何か話しかけそうであったが、弦四郎は微笑を残したまま、猪牙へとびおりた。
「竹さん、やっぱり間誤々々しないで帰ったほうが悧口だったな。ほら、花火もやんだようだ……」
事件の波紋は、大川端一帯にひろがったのだろう。両岸の桟敷も、橋の上の群集も山市丸に注目している。月のない空には急に星がわがもの顔にまたたきはじめ、天ノ川が妙に白々しく見えた。
文化七年五月二十八日——大江戸の夏は、不吉な殺人事件で幕をあけたのである。

四

「小えんさん？」仲居は首をかしげて、「さっきまで尾州様のお座敷でしたけれど」
「尾張か、尾張の花火は金のしゃちほこほどではなさそうだな」
「ほほほほ、でも、昨夜があんなことでしたから、厄落し花火だとかで」
「厄落し花火はよかった」
と、弦四郎も苦笑して、すだれごしに夜空に散る花片をふり仰いだ。
昨夜の川びらきにつづいては、御三家、御三卿の花火が競いあい、あとは花火好きな大名、または大分限などがお届をだして花火をあげさせる。八月の二十八日まで三ケ月間が納涼の許可期間で、川端の桟敷や葦簀小屋の見せ物、ところてんや生菓子、西瓜売りなどの小店が広小路を埋めて客を呼ぶ。
「今宵も人死にがなければいいが……」
「まあ、いやでございますよ、縁起でもない」
「ははは、なければよい、ということさ」
「そう毎晩、ことがあれば柳橋は火が消えたようになりますよ。ほんとうに冗談ではありませんわ」
「心配なのさ」
「小えんさんのこと？」と、仲居はぶつ真似をした。「お安くありませんこと、これは、おごって頂かなくっちゃア」
「なアに、そんなではないが、尾州の家中が山市丸をくりだしたのか」
「いいえ、山市はお潔めで三日は使ってはいけないんで

すって。それで両国丸のほうを」
　両国丸は四間に一間で、ずっと小さくなる。
「ちょっと見てまいりましょう、もうもどってきたかもしれませんよ」
「頼む」
　小粒を紙にひねって握らせながら、
「尾州ならいい客だろう、あまり無理はいわないでいい」
「お優しいこと。そう小えんさんに伝えましょうね。あちらからも祝儀がでるでしょうから」
「勘ぐりはよしな。おれが上客ではないということさ」
「千両箱を背負った浅葱裏さまより、文なしの東男がモテるのが柳橋ですからね」
「これこれ、文なしはひどいぞ」
　とはいったものの、小判、小粒が湯水のように費消される柳橋では、
　――三百石ばかりの家禄を後生大事に抱えているような侍は、文なしと同じだろう……
　また苦笑が浮かぶ。
　景気のよい花火の音はつづいていた。ここはせまい庭をはさんで、櫓の音が聞こえてくる八百善の離れだった。
　実際、青江弦四郎のような身分の者にとって、ここにくることは大変なことだった。だが、売れっ妓の小えんに逢おうと思えば料理屋で呼ぶ以外にない。
　小えんは自前で出ている。可愛がってくれた姐さん芸者の小えんが、一年あまりまえに亡くなって、家をゆずられた。小えんの名もそっくり貰ったのである。一本になる披露目の費用も八百善や亀清などで面倒みてくれたから、旦那もとらず、どうやら肌を守って芸だけで通してこれた。
　旦那のあるなしは別として、膝をつきあわして二人きりになったことのない弦四郎は、第六天門前町の「小えん」を訪れるのは気がひける。無理をして八百善にきたのだった。
　青江弦四郎、と聞くと、小えんはすぐに立った。
　船から戻ってきて、酔いはまわっていたし、十人以上もの一座で、みだれてもいたし、他の芸者も多数いた。
　船のなかでも執っこく袖の奥に手を這わしてきた男だけが、
「小えん、逃げるなも」と、からんで追いすがった。

「逃げやしません」
「なら、どけ行く、身共に酌をせえ。今宵はフラレついでに酔いつぶれるまで身共と飲み比べじゃ」
「ほほほほ、飲み比べは好きなお方といたします」
「おきやアせ」おもてに朱をそそいで抱きついてくるのをふり放した拍子に、ぴりっと八つ口がさけたが、廊下へ出た。
「こりゃ、きさまは芸者なも、われらが買い切っちょるに」
「およしなさいまし、お国でだるま女郎を口説くのとはわけがちがいましょう」
「おきやアせ！」
「ここはお江戸の柳橋。お座敷はつとめたいだけつとめるのが柳橋の芸者でございます」
　裾をひいて廊下を走った。弦四郎に岡惚れしてのはからいか、小粒の功徳か。あの仲居が、
「まあまあ、安井さま、せっかくの花火が泣きますよ。まあ、とにかくお坐りなさいまし」
　と、なだめにかかってくれた。

五

　渡り廊下で髪のみだれや衣紋のくずれをなおして、離れの室に入ってからも、小えんは、まだ着くずれが気になって、襟やたぼに手がいった。
「――客が放さなかったのだろう、貰いをかけて悪かったかな」
「いいえ、かまわないんです、あんな客」
「よほどの執心とみえる」
「いえ、そんなことでは……」
「帯がとけている」
　顔から火が出るような思いで、小えんは帯をさぐった。
「嘘だよ」
「まあ」
「簪がおちそうだ」
　小えんは、つんとして、
「もうその手にはのりません」
　と、いったとたんに、銀の平打の簪がすべりおちた。

髪のみだれに気づかったつもりがやはり動顚していたのだろう。
「あれっ」と、こんどこそ、火が吹くような恥ずかしさで小えんはおもてを蔽ってしまった。
「ははは、だから教えてやったではないか」
「意地悪！」
「ははは、教えたり恨まれたりでは間尺にあわんな」
「だって……」と、いつか甘えた声になって小えんは、また恥ずかしくなったが、昨夜から暗くとざされた胸が露れていることに気がついた。せいせいした気持になっていた。
——ひとりで呼んで……
と、頼んだことを思いだして、来てくれたのだと思った。そう思っただけで、銚子をとりあげても、胸が高鳴った。
「嬉しいわ、あたし」
「迷惑ではないか」
「いやですわ、そんな……今宵はゆっくりしてらしてッ」
「そうしたいが」
「意地悪！」
「いや、懐中が許さないのでな」
「またあんなことを」と、うす眼らんだ目が、優しく睨めた。「——弦四郎さまなら、玉をあたしが持ちますわ」
思いきって、口にした言葉だったが、弦四郎のほうでは、さらりと受けた。
「有難う、と礼をいっておく」
——冗談にしかとってくれない……
ふっと涙を胸に感じた。
弦四郎のほうは、小えんの気持を意識の外において、
「ときに昨夜のことだが……」と、真剣な表情になっていた。「何か気のついたことがあったら話してくれぬか」
「気のついたことって？」
「たとえばだ、下手人の心当たりとか」
「弦四郎さま、いつからお役人になったのかしら」声には女の怨みをこめて、「思いだすのもいやですわ。きよ香姐さんは可哀想だけれど」
「それさ、おれもきよ香には関りは何もない。が、芸者を手裏剣で殺すなど、聞いたことがない」
「そうねえ……」

「痴情の沙汰や金銭の恨みがあったとしても……」
「そんなことはありませんよ、きよ香姐さんにかぎって」と、いつか小えんも話に巻きこまれていた。「山甚さん、山城屋の旦那ひとりをまもって、浮気なんかこれっぽっちも」
「すると、金がからんでの何か……」
「お金のことだって、そりゃきれいなひとでした。旦那があの通りの分限なんだから、困るようなこともないし……貸してあげるときはもう、返らないものと思ってあげるのだから、と笑っているようなひとなんです」
男女の仲は、ことに芸者のような派手な稼業では身持ちが固いという噂には頭から否定してかかるのが常識だった。
だが、小えんはきよ香と家も近所だし、仲もよかった。
——十方手裏剣で殺す……むごいやりかただ、恋しさあまって憎さが百倍、ということがある……
「女ではあるまい」と、弦四郎は確信的にいった。「十方手裏剣は完璧に打ちこんである」
あの凄惨な情景を思いだしたのか、小えんは袂で半面を蔽ってしまった。
「そうだ、小えん」
「もう沢山。あら、お酒が冷えちまったじゃありませんか」
「酒はよい。変なことをいうようだが、あのとき……笛の音を聞かなかったか？」

六

「——ふえって……」と、小えんはけげんな顔をしたが、「ああ、笛ね、桔梗の笛でしょ」
「桔梗の笛？」
と、こんどは弦四郎が反問した。
「ええ、だってきよ香姐さんの桔梗の笛なら誰だって聞き惚れてしまうんだから……」
——あの、なぞの笛と何か関連性があるのだろうか？……
——桔梗の笛……
弦四郎は燭光を感じた。
いままで、何の手がかりもない、きよ香の生活に一歩

ふみこんだ気持である。
「その、桔梗の笛とやら、どんなものだ。聞かしてくれ」
「どうしたんですの、急に笛のことなんか」
「違うかもしれん、関係はないかもしれん。だが、妙に気になるのだ」
「……」
「あの手裏剣は十字とも十方ともいい、別に珍しいものではない。鍛冶の心得が少しあれば作れるものだ。兇器のほうから下手人を探すことは難しかろう、とすると、きよ香の身のまわりから……」
「笛なんて、でも……」
弦四郎が、ふいに、小えんの手を握った。
「静かに！」
「え？」
花火の音は聞こえていた。
火薬の炸裂する音と喚声と、三弦の音、唄声——それらが混然としたどよめきのなかから、むせぶような、すすり泣くような笛が——
「あれだ！　昨夜の」
「昨夜？」
聞きかえそうとした小えんの目に、弦四郎の手が行燈をひきよせるのが見えた。
ふッと、吹き消すのと、
「危い！」
小えんを突きとばしたのと、どちらが早かったか。
ばりりッ！　青すだれを破って——とんできた礫。
突き倒された瞬間、小えんは耳のそばで、ぶすッと、異様にはげしい音を聞いた。
それは、昨夜、すぐわきで三味線を弾いていたきよ香のからだを、一瞬で硬直させた、あの忌まわしい音だったのである。
——十方手裏剣！
ぱっと花火の閃光が、そのときすだれのうちを水底のように青白く見せた。その光が消えるや、弦四郎はがばと身を起こして、
「けがはないか、小えん！」熱い息が襟あしにふれた。
「大丈夫か？」
「は、はい……」
戦慄は妖しい女の血のときめきに変わった。

——もっとそのままで……
せつない官能の訴えを弦四郎が、小えんの安堵を知るや身をひるがえしたとき、彼女は意識した。
「待って！」とりすがった手をふり払われた。
花火がまたあがった。仄白いすだれ洩れのあかりのなかで、小えんは弦四郎が出てゆくのを見た。
「行かないで、あぶない！」
「くるな！」
「いま行っちゃいけない！　弦四郎さま」裾をふんで、よろめいた。
そのあいだに、弦四郎は濡れ縁にでている。手裏剣のとんできた方向は、青すだれの破れでそれとわかったのである。庭の植込みのあいだを走りぬけた。
すぐに石垣で神田川。昨夜と同じく、大小の屋根船、伝馬、猪牙が客を乗せて大川へ出入りしている。
——笛のぬしは？……
いた。
あの、四方すだれをおろした屋根船。笠をかぶった船頭が、巧みに船のあいだをすりぬけるように遠ざかって——大川へ出てゆく。
「あれだ、逃がさぬぞ！」
弦四郎は、木戸から露路へぬけ、一散に走った。涼しげな帷子や浴衣すがたの男女が、空を見あげながらそぞろ歩いている路だった。
足袋はだしで弦四郎は走った。柳橋をわたって広小路を両国橋へ。混雑のなかをくぐるようにして、橋の欄干へよると、いま、彼の足もとへ入ってくるところだった。
前にものべたように、花火の夜に四方すだれの船は多くない。身を隠そうための方法が、かえって、大小雑多の船のなかで目立ったのである。
その四方すだれがまっすぐに下るのを見て、
「しめた！」弦四郎は破顔した。
相手は気づいていない。平行して河岸を追跡すれば捕えることができる。
「あやしの笛め、いまに！」
勇躍して走り出そうとしたとき、どんとぶつかった男がある。

七

「なにをしやがる」よろけた男は仁王立ちにはだかって、「気狂野郎め、この混み合いで狂い犬のような真似されて、おたまりこぶしがあるけえ」

「済まぬ、急ぎだ」

「ふざけるな、うぬはどこの馬の骨……」ひきぬいた十手をふりまわしかけて、男は弦四郎の顔にはじめて気がついた。「いけねえや、青江の旦那じゃござんせんか」

「おお、薬研堀の哥兄いか」

武平という目明しだった。この界隈を縄張りにしている。以前、始末に悪いごろん棒だったのを叩きのめしたことから、知りあった。心を入れかえて、目明しになりたいというので、知人の同心を紹介してやったのだが、武平のほうではそれを徳として盆暮の挨拶を欠いたことがない。

「どうなさったんでございます」

「うむ」と、話の間にも気が急くから、「明日でも、屋敷にこい」言い捨てて走りだした。

その四方すだれの船がとまったのは、一つ橋殿の木戸そと、新大橋より。ここの一つ橋邸は下屋敷ではあるが御三卿の権益で河岸に木戸がある。その木戸むこうにずらりと大名屋敷の中下屋敷が尻をむけていて、いつもは大川端のうちで淋しい場所。

中洲か浜町へぬけられては、見失ってしまう。

「彼奴……」

四方すだれを排してあらわれた武士を、遠望ながら、弦四郎ははっきりと瞼の裏にきざんだ。

闇のなかにすらりと白の着流しで、同じく白い布でおもてを包んでいる。落し差しの刀が、主持ちとは見えぬ生活のくずれを感じさせた。もっとも、粋とか通ぶって、そうした恰好をする者が直参の中にも近頃でてきてはいたが。役者にしたいようなすっきりした物腰と、その服装が強烈で印象に残った。

その男は、弦四郎の追跡を知らない。悠然たる足どりで、涼み客にまじって行くのはそのせいだった。

たしかに弦四郎はあせっていた。

きよ香を殺したのみか、

——おれたちまで！

——何の理由で？

怒りが、浅慮にも、弦四郎の口を黙らせなかったのである。

河岸から一つ橋邸門前をすぎて浜町へ通じる道——四曲がりほどのあいだに、山伏井戸というのがある。小笠原の上屋敷裏手にあたるところ。この井戸はどういうわけか底が大川と通じているとかで、満潮には水があふれでて、引汐にはぴたりととまる。したがってこの路は始終、雨後のようにぬかるんでいるから、人々はたいてい遠まわりする。

白足袋が、そのぬかるみに踏みこんだとき、弦四郎は、抑えきれずに叫んでいた。

「待てい！」

白頭巾の武士は静かにふりかえった。

「訊ねたき儀がある……」弦四郎は一歩近づいた。

瞬間、白頭巾のからだが、さっと飜った。

「や、逃ぐるか」追おうとした胸に、するどく風をきって飛来した礫。

——十方手裏剣！

さっと身を翳す。ぶっすり背後の白壁にくいこんだ様子。抜刀しようとした胸に二つ目が——そして、三つ、四つ！　走りながら、ろくに後ろを見もせず、さっと手をあげるだけで、狂いを知らぬ命中率をもって、風を切ってとんでくる。

恐るべき手練。内心、舌をまきながら、しかし弦四郎の若さは、奮然とこれを追っていた。

一つは肩を掠め、一つは髷にふれた。

「待てい！」走りながら抜刀した弦四郎に、白頭巾は足をはやめた。

浜町へ出れば町家が櫛比して通行人も多い。だが小屋敷の並んだ一角に折れた白頭巾の姿は、かき消すように消えていた。

「や？……いずれに」虚しく白刃をおさめながら、弦四郎は注意ぶかくあたりを見まわした。

ほそい露路である。いずれも二、三百石どまりの旗本の屋敷。右も左も裏塀で、ところどころに木戸がある。

「——どこかにとびこんだか？　それとも、向こうの道まで走りぬけたか？」

異常なまでの長身痩軀が思いだされた。塀をとびこえ

襲う影

一

翌日、薬研堀の武平が訪れたが、弦四郎は多くを語らなかった。無役とはいえ直参が不浄役人のような真似をすることが公になっては差し障りがあるからである。

「町奉行所のほうでは、きよ香殺しの下手人の当たりがついた様子か？」

「かいもく」と、武平は大きなからだの膝を揃えたまま貧乏ゆすりをした。「見当がつかねえらしゅうござんすねえ。篠田さまも弱ったと仰有っていましたよ」

篠田というのは武平に名札と十手を貸し与えている定廻り同心である。

「――そうか」

「旦那に、何か……」

るにしろ、風のように走るにしろ、常人以上の速さは否めない。

「――いかがなさいました」

提灯が近よってきた。番屋に告げる者があったのだろう。

「賊を逃がした」面倒くさげに弦四郎はいったが、ふっと眼を輝かした。

提灯の仄あかりでは見えなかったが、今宵一番の大花火、尺五の玉を連発したのだろう、五彩の大花弁が頭上に開き、数百の星が流れおちる。狂爛の花片の乱舞が、真昼のように下界を照らしたために、弦四郎の目に、あるものが映じたのである。

「……？」

腰をかがめて、弦四郎は拾いあげた。

一管の横笛。

「なァに、当たりというほどのことはないが、ひょんなことでな、昨夜、すんでに一命おとすところよ」

「え！　じゃァ昨夜は旦那が殺されそうになったんですかい」

「それがわからないのさ」

十方手裏剣のことだけ、簡単に話した。

「狙われたのは、どっちか……小えんにしてもおれにしても、殺される理由はない……」

「へえ、そりアそうですが、物騒な話だ。そいつアすぐお届して何かと」

「まて。おれに考えもある。あまり騒ぎ立てぬほうがいい」

「ですが、旦那の身に万一……」

「甘く見られたようだな」

「いえ、とんでもねえ。旦那の剣術は百も承知でさア」

「棒振り剣術をかえ」

「かなわねえ。ですがね、寄席の講釈でやるじゃアがせんか、闇夜の礫は名人達人もさけ難しってね」

「虎穴に入らずんば虎児のたとえもある」

「なるほど、やっぱり旦那だ。だがよく気をつけておくんなさいまし、虎が腹っぺらしているときはおっかねえから」

「そのことだ。おれのほうはいいから、小えんの身辺を守ってくれぬか」

あの白頭巾の目的が小えんだったとしたらふたたび、襲ってくるにちがいない。あの無気味な雰囲気をただよわした痩軀から、悪霊のような執拗さ、残忍さを感じた。

目明しの武平が帰っていったあと、弦四郎は昨夜の笛と手裏剣をとりだした。仔細にしらべた。

十方手裏剣は、きよ香を殺したものと同じ。するどく研ぎあげられている。

横笛は黒漆の雅趣にとんだもの。別残変わったところもないように見える。神楽笛よりも少し小さい。神楽笛は尺五だが、普通の横笛は一尺三寸二分八厘が定寸である。直径、尾端で四分。

体裁に不審はみとめられない。指穴は七つ。蟬も吹口にも格別の変わりようはない。全体に黒漆塗りで何やら草花の絵が毛彫りしてあった。弦四郎は銘を読んだ。

「――おばな、尾花か？」

そういえば、絵も秋野の尾花である。
あまり楽器に興味のない弦四郎にも、そこらの小娘の手すさび物でないことはわかる。
「これが、あやつの笛でないという確信はおれにはもてぬ……」
偶然ということもこの世にはないことではない。だが、白頭巾は逃げていた。塀を乗り越えるときに落としたと見るのは、安直すぎるだろうか。
彼は、草むらから拾いあげたときのことを思いだした。夏草はすでに夜露にぬれていた。わずかに笛を冷やしていたものは草の露ではなかったか。
弦四郎は、この、尾花の笛が、白頭巾の落し物と断定していいと思った。
「これを手がかりにして、彼奴の素姓を突きとめてくれよう」
うかうかとはしていられないのだ。
あの恐るべき十方手裏剣は、一撃で即死せしめる威力を持つ。
「だが――?」と、また、その疑問にぶつかる。「狙ったのは、おれか小えんか?……」
弦四郎は人の怨みを買うような覚えはない。
小えんにしてもそうであろう。
そしてまた、――小えんに言わせれば――きよ香もまた、覚えがないままに殺害されている。
「やはり……きよ香を洗うよりしかたはない」
弦四郎は、尾花の笛を懐中にして立ちあがった。

二

「――今日もお役人衆に頼んできたところですわい」と、山城屋甚兵衛は沈鬱な顔でいった。「きよ香を殺したやつを何とかして、見つけ出してくださるように」
多少の費用なら、この山甚に受け持たしてもらいたいとまで甚兵衛はいった。
「それは、芸者のことですからな、いろ男の一人や二人あるのは当たり前だし、新橋の芸者の世話をする以上、てまえもあんまり野暮はいいたくないので……」
生活にはあまり干渉していない、ともいった。内訳を話せば、月に三度か四度しか「桔梗屋」に泊まりに行かない。

あとは、浮気をしようが何をしようが、勝手にさせていた、と、寛大なのも大商人のせいか。
弦四郎は役人ではないから、山甚のほうで嫌なら話さなくてもいいのだ。山甚はむしろ弦四郎の訪問を悦んで、いろいろと話してくれた。
「ちょっと、素面ではいい難いことですがな、てまえは今春、本卦帰りをすませたにもかかわらず、あのほうは、若い者に負けませんのでね……」
素面では聞けない話になってきた。
「世話している女はほかに三人おりますがな、きよ香をいれて四人ですな、みんな、わしに惚れておりましたわい」
たしかに、六十一とは思えない頑丈づくりで、髪もまだ半白。娑婆っ気は壮者に変わらない。
「というのが、秘伝がありましてな。きよ香と同じように、放任しております。若いし、美しい女どもだから、一人や二人、情夫ができる。じゃが、てまえと別れれば損じゃから、たまに面を見せたときは精一杯愛嬌を見せる。どんな恥ずかしいことでもする。情夫を隠そうという気持がかえって、てまえを大事にする。という結果になるのじゃな」
大口をあいて笑う甚兵衛の情意には、やはり年齢だけの落着きと老巧さがあった。
「――こんなことまで話すのも、きよ香の仇を討ってもらいたいからですわい……」
沈痛な表情で話を結ぶ甚兵衛に弦四郎はきっぱりと言った。
「おれは役人じゃない」
「……」
「きよ香の仇討ちなどと正義感を持ちあわせぬが、降りかかる火の粉は払わなけりゃならんのでな」
「え? そちらさままで」
「いや、何かの間違いかもしれんことだが」と、彼は言葉をにごして、「ときに、きよ香は笛が上手だったというが……」
「――はあ?」
「横笛だ。芸者には珍しく、優雅な笛すさびだったとか」
「そういえば」思い出したように、甚兵衛はいった。「よく吹いておりましたがな。どうも、てまえは銭勘定と、

寝間が好きなだけの野暮な商人でしてな。唄や振りごとなど一文の儲けにもならんことは、するも聞くも、嫌いなんでして」

「そうでもなかろう」

「いや、もう、とんと……」

「好きな女の趣味だ。それも、きよ香の笛好きは稚児輪髷のころからと聞いたがね」

「らしいですな」煙草盆を持ちあげて、雁首で灰皿をかきまわす甚兵衛の眉間に深いタテ皺が三本きざまれている。

紫煙を吐きだしたときも、苦虫を噛みつぶしたような表情は消えなかった。彼の笛ぎらいは相当のものらしい。

「笛の話はよそう。だが、そのまえにもう一つだけ聞かせてくれぬか」

「なんでございます」

「極端に嫌いなものは、かえって感得が早いものだ。あのきよ香の殺されたとき、妙な笛の音をおぬし聞かなかったか?」

「妙な、笛の音……と申しますと?」

「聞かなんだか」

「はァ、何も……」

「――そうか、いや、いろいろとかたじけない。おぬしも用心したがいいかもしれぬ」

「おどかさないでくださいまし」と、やっと甚兵衛は常態に戻って、「てまえは商人でございますからな、何ごとも荒だてることは嫌いでして、いのちを所望されるなら千両箱を積みます」

三

十方手裏剣の恐怖は、思いだすだけでも、総毛立った。

小えんは、当分お座敷へは出ないつもりで、

「病気だといって断わっておくれ」

と、小女にいいつけ銭湯へも行かず、家の中に閉じこもっていた。薬研堀の武平が朝のうちは守っていて、昼から子分の仙次と亀三ことちょこ亀が交替で張り番をした。

「お、旦那だ!」

と、ちょこ亀が目ざとく篠塚稲荷わきの露路を入ってくる弦四郎を見て、「昨夜は大変だったそうで」素っ飛んできた。

「ご苦労だな、小えんに変わりはないか」

「へえへえ、わっちらが守っていりゃ、石川五右衛門だろうと熊坂長範だろうと、お気づかいいりやせん。鬼に金棒……」

「豆腐にこんにゃくか」

「ご冗談で。姐さんから聞いたばかりなンですが、昨夜はとんだこったそうで」

「危なかった」と、弦四郎は笑いながらいった。「ちょこ亀哥兄いがいなかったのでね、すんでのことに新仏ができるところさ……」

「うへッ、こいつア大恥かき」

弦四郎の顔を見ると、小えんがとびつかんばかりに迎え出た。

「弦四郎さまっ、あたし心細くって……」

「大丈夫だ小えん」と、弦四郎は優しくいった。「あいつが狙ったのはおれさ。ただ、巻き添えをくってはと思って、武平に頼んだだけだ、心配することはない」

「でも……」

「それに仙次やちょこ亀がいる」弦四郎は懐中から尾花の笛をとりだした。「小えん、これをちょっと吹いてみてくれぬか」

「あら? これは、きよ香姐さんのじゃありませんか」

「なに、きよ香の?」

「ええ……」弦四郎の愕きが、むしろ不思議そうに、「たしか、きよ香姐さんの……」

「よく見てくれ、間違いないか?」

念をおされると、小えんの記憶もあいまいになってくる。手にとって、尾花の図柄を見ていたが、

「そういえば、違うようだけど」

「銘は尾花だ。きよ香のも尾花といった?」

「あ、違います。あれはたしか桔梗……」

「桔梗? 桔梗はきよ香の家の名ではないか」

「ええ、そうなんです。あのひと、笛の名まえからとったなんて、いつか話したことがありましたわ……」

きよ香の母は浜町へんで三味線の師匠をしていたという。ものごころつくころから桔梗の笛を肌身はなさなかったとか。

「なんでも、お父っつぁんの形見だとか……」
弦四郎は腕をこまぬいた。
——相似の笛……
——尾花と桔梗……
甚兵衛の話から考えると、きよ香に情夫があったようだ。金銭は、まあ、からんでいないとみていい。
すると、笛と笛が断ち難いつながりを持っていて、彼女を死に追いこんだ——推理の線は、あの白頭巾をきよ香の情夫に浮かびあがらせずにはおかない。
——しかし……
と、考え直す。
——ものごころつく頃から所持していた笛が事件の核心をなす、ということは、痴情などの沙汰ではなかったことを意味するのではないか……
「あの」と、小えんが脅えた眼で、「この尾花の笛はどこで手に入れたんですの」
「さるところだ」
「もしか……」
「その、もしか、だとしたら」
悲鳴をあげて、小えんは笛をほうりだした。
「気味のわるい！」
「ははは、たかが一管の笛ではないか。白頭巾の呪いでもうつっているのではあるまいし」
「白頭巾！……」
言わでものことを言ってしまったと、弦四郎は悔やんだ。
「酔狂なやつよ。案じることはない。こんどでてきたら、逃がしはせぬ」
「そうとも」と、仙次が口をはさんだ。「姐さんへ、青江の旦那が太鼓判おしなさることだ、大船に乗っていてようござんすぜ」
「仙次」
「へい」
「いや、ちょこ亀がいい、ちょっと頼まれてくれぬか」
「合点だ」言下にとびだそうとして、「いけねえ、まだ用事を聞かなかったっけ」
亀のように首をすくめる恰好にも、心から笑えない小えんだった。

四

「旦那」と、仙次が不服そうに、「亀にできることなら、わっしにだってできますぜ」
仙次のほうが兄貴分だから、むかっときたらしい。
「いや、この役目はちょこ亀のほうがいいだろう」
「さいでげす、この亀さんなら、できぬことといったら鼻の穴からそばを食うぐらいで」
仙次は大男で腕っぷしは強い。が、もとは番太郎をしていたくらいで、房州生まれのどちらかというと無骨者だ。ちょこ亀のほうは深川育ち。口から先に生まれたようなおっちょこちょいだから、失敗も多いが、使いよう如何で役にも立つ。
弦四郎の要件を聞いたちょこ亀は、
「——へえ、そんな役なら買ってもしまさア、仙兄い、そねむなそねむな」
「何いってやがる、さっさといってきやがれ」
入れちがいに武平が戻ってきた。同心溜りで篠田伴内の見通しを打診してきた、といった。
「こんどの事件ばかりはお手あげらしゅうございまさ」
「おれも、五里霧中だ。が、他人事ではないからな、彼奴の正体あばくまで、全く枕を高くして寝られないというところさ」
「なんでも、あの手裏剣の出どこを洗うというんで、市中の鍛冶がだいぶ引っ張られたようで」
「あれくらいの手裏剣なら」と、弦四郎は、懐中で触れてみていった。「手裏剣のわざを会得した者なら、自分で作るだろう」
「へえ、そういうもんですかねえ」
「鋼のきたえかた、重さ、手ざわりなど、違っていては、ああ、正確には打ちこめない」
「……」
「五箇が五箇とも、重量、形状、触感など寸分の違いもなかった」
「五箇って……旦那、どうしてそれを」
「なあに、彼奴がくれたのさ。だが武平、町奉行所のほうに内緒だぞ」
「へえ、そりゃア」
「おれはおれの方法でやる……」

ちょこ亀が、息せききって駆け戻ったのは小半刻（約三十分）ほどたってからだった。

「わかったか？」

「へいへい、あンなもの雑作はねえや」

「大口たたく前に、旦那に申し上げろ」

「桔梗の笛は、あったか？」

弦四郎は、それを「桔梗屋」に借りに走らせたのである。

「へい、それが、なんともゆうずうのきかねえ山出し女がいましてね。町方をすっかり恐がっちまって、うんともすうともいいやがらねえ」

「それでどうした？」

「でね、わっちの奥の手をつかいやした。わっちはおめえのような、ずんぐりした色の黒い女が好みだってね。おめえさえその気があるなら、世帯を持ってもいい……」

「あきれた野郎だ」

「そうしたら、がんもどきみてえな顔がふにゃふにゃと、とろけやした」

「おっかなくって総毛立ったんだろう」

「仙次ァ黙ってろ。さアつまらねえことはいい加減に端折って、本筋を話しな」

「へえ、こう順々に話さねえと、意味が通らねえンで。そいつをちょっと手を握ってやって、口を吸ってやろうと思ったら」

「噛みつかれたか」

「ぷんと葱の臭いがしたんでいやになった。わっちは葱と鴨が大きらい」

「殴るぞ、この野郎。ちゃんとオチをつけやがる」

桔梗の笛はなくなっていた。あの騒動のあと、気がついてみると紛失していた。三味線よりもきよ香が大事にしていたものだけに、しまう場所も用箪笥の小引出しと決まっていた。

身寄りのないきよ香の死後は、山城屋甚兵衛が整理をしているが、やきもち焼きの女房がいることだし、大店の主だからかかりっきりになれない。

「――紛失したものは、笛だけだというのだな？」

「へえ、それが妙ちきりんなことには、盗っ人が入った様子もねえというので」

「山甚と、役人だけ、か……」

笛の紛失から見ると、笛を盗るためにきよ香を殺した。という筋も立つ。

が、あの夜はきよ香は笛を持っていない。ただ笛を盗むためならば、あえて殺害の必要もないはず。

山城屋甚兵衛は笛の紛失に気づいていないのか。

あの笛ぎらいの様子では、最初に処分してしまったのかもしれない。

「ご苦労だった……」

弦四郎は泥沼に足を踏み入れたのを感じた。

――あの白頭巾の目的は何なのだ？……

五

笛にこだわるまいと思いながら、やはり白頭巾の正体を割る唯一の手がかりという気持を払拭できなかった。

弦四郎が次の日に訪れたのは下谷練塀小路の木谷孫左衛門の屋敷だった。

孫左衛門は勘定留役の地位にある。嘗つて彼の上司だった。性温厚で、どちらかというと小心なところがあった。勘定方などという役目は、進歩的な性格を好まない。

孫左衛門のように、お役大事と、日々の勤務に間違いや失敗のないことばかり気にしているような人物がむしろ、勘定奉行の目には価値があるものに映る。彼が「算盤のような男だ」と、いわれているのは几帳面というばかりではない。

肉体上の欠陥が、陰性で姑息な性格にしたのだろうが、彼は性不能者だった。五十のこの歳まで妻を娶らずにきている。十五年ほどまえに女の児をもらい、養女にした。萩乃といい、近ごろは美しく成長して、練塀小町などと噂されている。弦四郎をひそかに慕っていて、彼が硬骨のゆえに失脚したときも、父を動かしてくれた。

孫左衛門は心ならずも、弦四郎に有利な証言をしたので、小普請組に落ちただけで助かった。悪くすれば甲府勤番といって一生江戸へ戻れぬところだったのである。だから、弦四郎の気持では孫左衛門は恩人であった。弦四郎を理解する勘定方唯一の存在だと思っている。

孫左衛門はちょうど、お城から下がってきたところだった。

来訪を聞くと、迷惑そうにうすい顔をしかめたが、「お通しするがよい」と、萩乃にいった。

客間に出てきたときは、さも嬉しげな笑顔になってい

た。

「ようこそ見えられた。一別以来じゃな、その後如何されている？　御身のことが気にかかりながら、ご存知のような忙しさにかまけて、つい無沙汰致しておる」

「いや、こちらこそ、その節はお世話になりながら無音にて、左様に仰せられると痛み入ります」

「今日はゆるりとなされるがよい。久々のご来訪じゃ、萩乃の手料理でも賞味してゆかっしゃれ」

「せっかくですが、お言葉に甘えてもいられませぬ。実は身辺に奇怪なことが起こりましたので……」

彼は孫左衛門に逐一話した。

勘定奉行下役で調方の地位を追われた弦四郎は、周囲から無頼としか思われていない。この事件に巻きこまれて、身動きならぬようなことが起こっても、孫左衛門に話してあれば安心だからである。

孫左衛門は、終始無言で聞いていた。話が終わると、黙ったまま、冷えた茶をぐっと飲んだ。

「下手をすると、命とりになりかねぬの」

「だが、どうせ狙われるのなら、こちらから探したほうがいいと思いまして」

「その、笛とやらを、いまお持ちか」

黒塗りの一管、尾花の笛を差しだすと、手にとって仔細に見ていたが、

「これは処分なさるがよい」

と、冷たくいった。

「え、処分とは？」

「儂はあまり因縁めいたことは信じぬほうだが、この笛には、何やら呪いがかかっているような気がする……」

知的な職務にある人とも思えない、恐怖すらおもてに浮かべて、「これは、刀にたとえれば妖刀村正や繁慶のような呪いがこもっている」

「……」

「刀の呪いは、ひたすらに斬れろ、斬れろと願って打つ刀匠の心が、血に飢えた刀を作ってしまうこともあるし、持ち手が殺人を重ねることによって、怨霊が憑いてその刀を殺人刀にしてしまうことも多い」

「しかし、ただの笛が……」

「はっきりしたことは儂にもいえぬ。が、おぬしの話によると、この笛を吹くことによって殺気が生じた、とも見れるのではないかな。その白頭巾が、だ」

怨霊とか呪いとか、若い弦四郎には信じかねる言葉だった。

だが、時代は化政度である。祟りとか狐憑きなど、まだ信じている人のほうが多かったのは事実である。当時の記録によると、大罪とされた主人夫婦を惨殺した使用人が、狐憑きだというので死刑を免れて、浅草の病人溜りへ送られている。一時的な分裂症や精神病を、物の化の祟りとすることは田舎でもよくあることだ。

弦四郎にはしかし首肯しかねた。

「きよ香――殺された芸者が同じものを持っていたということは、怨霊とどういう関係になりますか」

「そこまでは、儂にもわからん」と、孫左衛門は不機嫌な調子になった。「ただ、呪いを感じるだけじゃ。不吉じゃ。おぬしも、いつかは勘定方に返り咲かねばならぬ身。人の悪いということはせぬものじゃ」

「では、この笛は如何ようにすればよいか、お教え願いたい」

「じゃから、処分するのだな」

「処分というと」

「捨てさっしゃい」

「それは」

「それでなければ、預けて置きなさい。儂がしかるべき行者を招いて、お祓いをさせよう、潔めるに如くはない」

たかが笛を――と、弦四郎はややあきれるような心持を蔽えなかった。

六

弦四郎が襲われたのは、その夜である。

何刻ごろだったか、ふっと、弦四郎は目がさめた。深更の闇が部屋を包んでいる。その闇の幕のかなたに彼は、ある呼吸を聞いた。

――誰か、いる？……

闇には蚊の声が泳いでいた。

心得のある武士は、盛夏でも蚊帳を用いない。四方のつり手を切られると、いかなる名人でも四肢の自由を阻まれるからである。蚊いぶしだけを焚いて寝に就く。

弦四郎は、とっさに、

――彼奴か？……

白頭巾を描いた。十方手裏剣ならばしかし、不意を衝くかに吝ではない。弦四郎は刀に手をのばそうとしなかった。僅かの動きでも、攻撃する者にとっては隙となる。

闇中の静は、守と攻の双の意味を持つ。寝こみを襲う刺客が、枕を蹴って狼狽の瞬間を刺すのは、静から動への、心身の間隙を狙うからだ。

——白頭巾以外の？……

全身を耳にして、闇の底にひそむ者の動きを察知しようとしながら、弦四郎は思いめぐらしていた。

——誰が？　なんのために？……

殺すのが目的なら、こんな手間どるはずはない。

——とすると？……笛か。

笛を狙ってきた男？

弦四郎は孫左衛門の申し出を丁重に拒んで、尾花の笛は持ちかえったのである。

唯一の証拠なのだ。うっかり手放せない。彼が持ってさえおれば、当然、白頭巾があらわれるだろう。危惧と期待がそこにかかっていた。

——白頭巾ではない！　ならば、誰だ？

そう思いめぐらすあいだも、弦四郎の呼吸音は変調を示さない。

安らかな寝息と聞こえるはずだ。闇のなかに半眼をあけて、四囲の気配を見まもっているのは、忍びの術にたけた者ならば、漆黒の闇のなかにも、三間離れて絹糸を見きわめることができるからである。

暫く寝息を窺っていた。その影は、熟睡と見てとったのか、ふっと動いた。音もなく枕元にじり寄ってくる。件の笛は、鶯地の帛紗にくるんで文箱にしまってある。その影が、違い棚に手をのばしたのは、忍びの心得による勘を働かせたのか。

文箱に指がふれた、と、

「ははは、そこではない」低い、冷笑が起こった。

ぎょっとして、忍びの影はななめに飛び退った。

ゆっくりと弦四郎は身を起こしながら、

「尾花の笛がほしくて来たか？」

「……」

「誰に頼まれた？」

「……」

「笛好きの白頭巾か？」

依然として無言である。

「——笛なら、ここにある」

枕がすとっと、その影の膝まえにとんだ。

疑いながらも、ふっと気をそらされた刹那、ぱっと弦四郎のからだは床の間へとんだ。刀をつかみとるや手練の居合いが、

「とう！」刃風が闇を裂いた。

うずくまっていた影は、反射的に逃がれた。黒猫のような身軽さであった。

「うぬ！　逃がさぬ」襖が凄い音をたてて破れ、その影は次の間へ転がり出ている。

そこへ弦四郎の刃がのびた。黒影はまた逃がれた。第三撃を叩きつけたとき、弦四郎は相手の手に脇差しを見た。

しかし、二合とその敵とは刃を交えることはなかった。侵入のとき開けたのであろう、廊下の雨戸が一枚あいていて、そこから黒猫さながらにとびだしていた。

朔日の濃い闇が浸している庭であった。せまい敷地だが弦四郎の好みで庭樹が多い。すぐれた忍者ほど遮蔽物を有効に生かすものだ。くせ者が黒闇の戸外へ出るやばっとうしろ手に撒いたのは、桐灰と炭塵と胡椒をまぜた「目くらまし」であった。

追手がひるんだ一瞬に灌木の茂みへとびこむ。弦四郎は、つんと鼻にきた刺戟物におもてをそむけながら、丈一ぱいに追い斬りの刀を送った。

刃先三寸、ざくっと手応えがあった。腰車を斬られた男は、どっと前へのめった。転倒するや、二転、三転そのまま、縁の下へ逃げこんだ。

武家屋敷の縁の下は中仕切がある。床下から刺されないためであり、盗難を防ぐ意味もある。

くせ者がそこに活路をもとめたのではないことは、やがて判然とした。

凄い呻き声が——それは、この男の口から聞いた最初の——そして最期の声であった。

動かなくなった男に、永遠の静を感じてひきだしてみると、見事に喉をかき切って果てていた。逃がれ得ぬことを悟っての自害だった。

「しまった！」行燈をさげてきて、弦四郎はふたたび瞠目した。

男は、喉を切る前に小刀でおのれの顔をなますに切り

恋の雨

一

きざんでいたのである。

この男の忍者としての覚悟もさることながら、

「容易ならぬ敵だ……」

見えない敵の組織の固さ、素姓を秘すためには死を誓わせた敵――個人か集団かは知らず、その権力の強大さに、弦四郎は嘆息した。

朔日の夜の闇は、あくまでも昏く、空には一点の星影すらもない。連日の花火に天が怒ったのか、雲が低く夜気は湿っていた。

「――明日は雨か？」

弦四郎の胸も暗かった。

案じた通り、暁から雨になった。

今年の梅雨は遅れていた。から梅雨かと思われていたが、この雨の降りようでは、本格的な梅雨になるかもしれないと隣屋敷で植木屋が大声で話しているのを聞きながら弦四郎は外出の支度をした。

御役御免になって以来、弦四郎は、使用人のすべてに暇を出した。経済的な理由もあったが、棄てばちな自虐の感情も作用した。

世間が不景気になって、諸物価があがっているから、木っ端旗本の内証は苦しい。旗本の体面を維持するためや規則があって使用人の雇傭にも勝手な真似は許されなかったが、たいていの家が、生計をきりつめていた。

祝日などの登城には中間や供まわりを一日だけ雇う者が多い。幕府でそれを知っていながら、財政上どうすることもできないから黙認する。下手な政治のひずみが上下四民に不安を与えているこの頃であった。

弦四郎が、こぬか雨を枠な蛇の目にさけて訪れたのは笛を商う家であった。

笛屋は、当時江戸でも少なかった。

下谷車坂に一軒、浅草は花川戸と聖天町に一軒ずつ、湯島、飯田町中坂、それから赤坂、芝、大川を越すと深川に一軒あるきりで、神田、日本橋界隈では三軒――これだけであった。

したがって、笛師の数も多くはない。

「笛師か、商った家か、探すのは難事ではあるまい」

弦四郎は一軒一軒、訊ねてまわった。

車坂でも花川戸でも、首をひねった。

「近ごろでは、こんないい仕事をする職人が少なくなりましたので……」

それだけにわかるはずなのだ。

まず、桔梗の笛の話では幼時から持っていたというのだ。少なくとも十四、五年前の制作である。

聖天町でも知らなかった。湯島でも記憶がなかった。

飯田町の中坂では、「江戸の出来とは少し違うようで」と、さえいった。「上方あたりの細工のような気がしますが……」

神田連雀町のある老笛師は、しかし、それを否定した。

「わしらが半ちく小僧のころは、そうでしたね。漆仕上げして草花を毛彫りするなんてえのは上方、京にかぎっていましたがね、二十年ほど前から、その趣きが江戸にも入ってきましてね、一時流行ったことがあります」

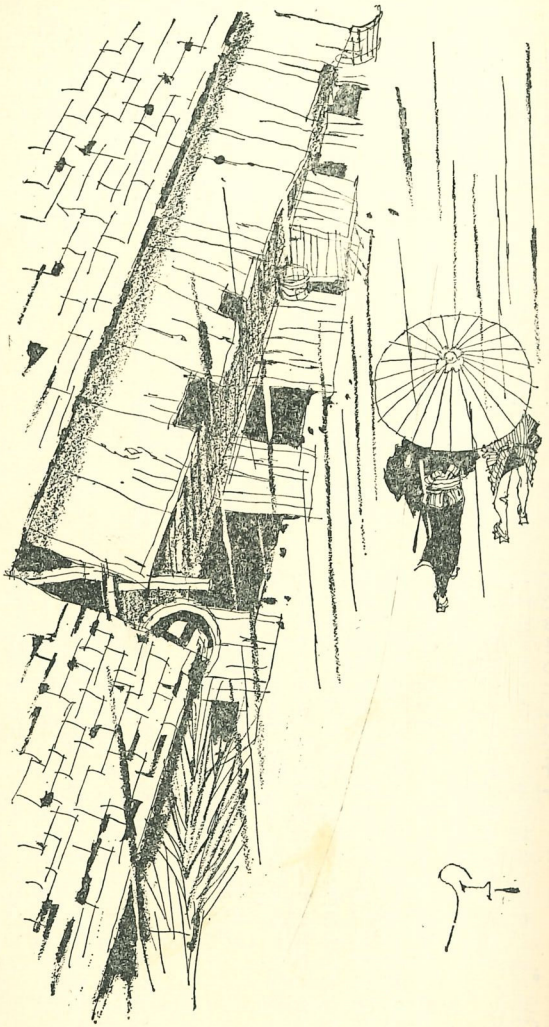
職人の自我の強さは意外なほどだ。その次に訪れた弁慶橋の店では、その説を否定された。

「わしらはね、旦那、江戸の笛作りだ。たしかにあのころ上方風が入ってきたが、よそものなら知らねえこと、大川の水を産湯に使った職人なら、上方好みの化粧塗りなんざ、作らなかったものでさ。だから、近頃じゃそんな笛を持っている者ア滅多にいませんぜ」

――上方に行かなければならないだろうか。

失望が徐々に胸を暗く塗りつぶしてくる。

雨の日は早く暮れる。時刻はさほどではなかったが、



街の掛け行燈や、八間行燈には灯が入った。

夜の雨は、ただでさえ陰鬱で寂寥を誘うものだ。弦四郎は失望と疲労を感じて、半ば事務的な足どりで、人形町の通りを歩いていた。

銀座うらからきた一人の浪人者が、あわてて三光新道に折れたのを、弦四郎は気がつかなかった。むこうは暗かったし、諸式屋の明るい灯かげが弦四郎の端麗な顔を浮きあがらせていたのである。

ほとんど、期待もなく、尾花の笛をしめした松島町の三竹堂という笛屋で、

「存じておりますとも」あっさりうなずかれて、弦四郎は咄嗟は言葉を失った。「これは、一刀庄吉の作でございますよ」

「一刀庄吉……」

「上方生まれでしてね。漆仕上げでは、もうほかにこれだけの仕事をする者はおりませんよ。もっとも江戸では奇妙に嫌いましてね、注文も少ないのでございますが」

弦四郎はわれにもなく急きこんだ。

「で、その一刀庄吉とやらの住居は存じておるか?」

芳町のかげまあがりのような、妙にしなをつくる癖の番頭は、弦四郎の意気ごみをけげんそうに、けろりと答えた。

「この裏でございますよ」

二

雨の宵のせいだったかもしれない。露路を入った裏長屋のどんづまり。文字通りの九尺二間がその住居だった。このあたりの溝には汐の香りが匂う。

一日降っただけでもう、がたぴしする格子をあけて番頭が呼ぶと、暗いなかで、もぞもぞと動くものがあった。

「二、三日前から加減が悪くて臥せておりましてね」と、番頭はいった。

礼をいって追い返すと、弦四郎は土間へ通った。異臭が鼻腔を刺した。男やもめの汚なさは年寄っても変わらないのか、ものの饐えたような悪臭が節穴だらけの天井にも、破れ落ちた壁にも滲みこんでいる。湿気でふくれた、たたみは、老人が大儀そうに身を起こすと、ぶよぶよとへこんだ。

「――おいでなさいまし」老人は歯のぬけた口を手で蔽うようにしていった。「むさ苦しいところへ、ようこそお出でなさいました……」

「病気か、無理に起きなくともよい、どこが悪い？」

「いいえ、もう、この老齢どすさかい、どこと申しまして」自嘲したように笑う。暗い笑いだった。

綿のはみ出た蒲団から這うようにして出てきたのを見ると、無気味なほどの猫背で、ひとつかみしかない、しなびたからだをしていた。脚など折れそうだ。

長年の笛作りが、こうまでからだを痛めつけたのか、正視するのも哀れであった。

番頭の話では、一刀庄吉の異名がつけられたのは、これぞと思う竹を見つけると、無雑作にすぱっすぱっと切る。それが何度やっても、ちゃんと一尺三寸二分八厘の定寸になっている。神楽笛を作るときは尺五にすぱっと切る。七つ穴、六つ穴も他の職人のように物指で、はかるような事をしない。見当つけて錐をさしこむ。そうして一厘一毛の狂いもないという。

彼は江戸好みの笛を作っていれば、いまごろは暮らしもゆたかな親方でいられように、頑なに上方作りを改めようとしなかった。

もっとも、その腕前をねたんで、何かと邪魔されたことが、庄吉を硬化させたともいえる。

「――実は聞きたいことがあってきたのだが」

人生の労苦をすべて背負ったような庄吉の姿に、かすかな不安をおぼえながら弦四郎は、本題に入った。

「笛のことより知らん爺どすよって、お役に立つかどうか」

「おぬしの作った笛のことだ」

心の動きを見ぬくように、表情を凝っと見つめたまま、「これだ」と、帛紗から出した。

すくなくとも、それを見たときの老笛師の顔を占めたものは懐しさであった。若かりしころのおのれが、尾花笛から彷彿と想起されたのだろうか、目やにをこすった手を、袖で磨くようにして彼は懐しそうに持ちあげた。

目も遠くなっているのであろう、煤けた行燈の一分芯の仄あかりに、しげしげと眺めいった。

「――庄吉、たしかに、おまえの作だな」

「へえ、たしかどす、十五年ほど前に、あのお方のご注文でおさめたものどす」

「誰だ、その者は」

「へえ……」

庄吉は残り惜しそうに、そっと帛紗へもどした。

「誰だ」と、弦四郎は膝を進めた、「その者の名を聞きたい、誰が依頼した」

「……」

「名を忘れたならば、住所だけでもよい、いかなる身分の者か、それだけでもよい、思いだしてくれ」

「忘れはしまへん」

「覚えているか。重畳だ、教えてくれい」

「申しあげられまへん」

「なに！」脳天を一撃されたように、愕然とした。「なんと申す？」

「申しあげられまへん」

老人は鼻水をすすりあげた。襟から手をつっこんで、しきりに胸のあたりを掻いている。老猿のような姿であった。ぶつぶつと独り言のように老人はいった。

「はっきり覚えておるさかい、申し上げられまへんのや……何せ約束したことやよって」

「……」

「そのお方は過分に手間もくれはりました。そのとき、はっきりと言いましたんや、誰にも言わないと約束してくれ、約束します、とな。せっかくどすけど、申し上げられまへんのや」

「十五年前の約束か」

「百年たったかて変わらしません、男の約束どすよってな。死んでも破れしまへんね」

とりつく島がなかった。あと何年生きれるか、わからないこのへんくつな老人は、たとえ役所で拷問にかけられても自白すまい。

「おまえの心持は立派だと思うが」と、弦四郎は静かにいった、「人の生き死ににかかっておることなのだ」

「……」

「出来るだけ礼はする」

「銭金やおへん」

「これは悪かった。だが、そうしてもいいだけの理由があるのだ」

弦四郎はきよ香の死と、白頭巾のことを話そうかと思った。話せば、しかし、この老人の心が動くだろうか。笛を作ることだけに、それも一刀庄吉のほこりだけで

一生を送ってきた老人には、たとえ生き死にに関することでも、それが他人のことであれば意にかいさないのではないか。

老人は坐っていることが、苦しくなったように、両手をついた。

「庄吉は約束だけは破りまへん」

「……」

「堪忍しとくれやす、約束や、約束や……」

三

弦四郎は悄然と外へ出た。雨は小ぶりになっていたが、あがる気配はない。露路から出ようとしたとたん、弦四郎は身をひねった。

ひゅっ——するどい矢羽のうなりが襲ったのだ。身をひねりざまに、咄嗟に蛇の目をさげる。ばしッと一本の矢が傘を貫いた。

流れ矢ではない。適確な狙撃であった。初矢を射損じたとみるや間をおかず、第二の矢が小雨をきった。すぼめた傘がこれもしかし叩き落としている。瞬後に飛来した第三の矢はひるがえった袖を貫いた。

弦四郎は左の腕にかすかな痛みを感じると、傘を捨てて、猛然と逆襲に出た。

すじむかいに矢場があった。矢はそこから飛来したのである。

弓を捨てて身をひるがえした男の姿は、弦四郎の記憶にないものだった。浪人者と見えた。逃げる足から草履が脱ぎ捨てられた。

夏の宵なのだ。雨で人通りは少なかったが店はまだ開けていたし、髪結床にも若い者たちがとぐろを巻いていた。

矢場にも客はいた。矢場女をからかっていた客は、顔色の悪い浪人風の男が入ってきたことにも、特に関心は示さなかった。矢場女も、ちらりと見たきりだ。楊弓場の矢にはやじりはないが、真本の矢が三すじ壁にかざってある。浪人者が転瞬の間に射おえてから、矢場女ははじめて悲鳴をあげた。

走りながら、弦四郎は、抜刀の誘惑に耐えた。

——斬れぬ、くそ！

昨夜のように死なせてしまっては惜しい。小柄をとばすこともためらわれた。浜町河岸から少し入ったところだった。裂帛の気合いが弦四郎の口から奔った。浪人者はぬかるみに突んのめった。

手裏剣をとばす気合いを、虚になげたのである。追われる者の焦燥感が、一瞬足を狂わせて、浪人者は泥をはねあげて転がっていた。

「こ、殺せ！」

下緒でうしろ手に縛られながら、浪人者は喚いた。

「殺さぬ」と、弦四郎は嗤った。「おれはきさまたちのような人殺し商売ではない」

ほほ骨のとがった蛟しい相貌だった。泥がはねた顔を一層ゆがめて、

「斬れ、縄目の恥は受けたくない」

「ほう、一人前の口をきく」

追跡を見た弥次馬たちが集まってくると、浪人者はぬかるみの中にあぐらをかいたまま、なおも絶叫した。

「斬れ、斬れ！　早く斬れ」

「あいにくだ。おれは浅右衛門じゃない。とにかく立って貰おうか」

「き、斬ってくれ、おねがいだ、斬ってくれ！」

怒号が、気弱な悲鳴にかわり、浪人者は泣いているかと思われた。ただ、群集の曝しものになっている、その恥辱だけではない。

——誰かを恐れている？……

そう気がついたとき、人垣をかきわけて、

「賊でございますか」

番太郎が顔をだした。

「おお、おまえはこのあいだの」

白頭巾をとり逃がしたときの番太郎だった。

はじめて弦四郎は、山伏井戸の近くにきていることに気がついた。

そのとき、彼は群集のざわめきを通して、幻聴を聞いた。

「……？」

笛の音。あの笛の音——

呆然と佇立して、弦四郎は懐をおさえた。懐中には尾花の笛がある。

「気のまよいか？……」

別人の笛か。だが、弦四郎の耳は、はっきりと、

——あの笛だ！　と、叫んでいる。

場所が因縁の場所だっただけに、特にそう感じるのだろうか。その疑惑を一蹴したのは、きよ香の家から紛失した「桔梗」の笛のことである。

「彼奴だ！」

弦四郎は思わず口走った。

「え？」と、番太郎が聞き咎めて、「何と仰有いました」

「頼む。こやつを預けたぞ！」

四

笛の音は汐風に乗ってくる。

弦四郎は、一つ橋邸の門前を大川端へ——先日白頭巾を追走した逆を行った。

小やみになった雨の大川はすでに昏い。今日は水戸か田安の花火があるはずだったが取りやめになったのだろう。未練げに屋形船がまばらに浮かんでいる。

さすがに猪牙で風流を嘯く者はいない。

「どこだ？　彼奴は……」

啾々たる笛の音は、はっきりと聞こえてくる。

もの哀しく野面を吹く晩秋の風の慟哭にも似ていた。

梅雨の煙雨が、わびしい時雨と錯覚するような。同じ曲なのだ。

以前どこかで聞いたことのある曲——

それは川びらきの夜、耳にしたとき感じたのである。

「——あの屋形だな」

それは座敷三畳に障子をたてた、俗にいう、あいびき船。御殿女中の役者買いや、芸者としっぽり濡れるに恰好な屋形船だった。

弦四郎は矢ノ倉河岸に苫をかぶった小船がもやってあるのを見て、借りることにした。むろん無断である。

追われているとも知らず、屋形船は悠々と大川をのぼって行く。巧みな笛の音は川面をすべって聞く者の胸に、むせぶが如くすすり泣くが如く、哀感を訴えていた。

「逃がさぬぞ、こんどこそ、おれの勝ちだ」

弦四郎の胸は期待に高鳴った。敵の手腕は知っている。笛の音に酔ってはいてもすぐと剣の抜ける男であることを。

饅頭笠に蓑をつけた船頭は、弦四郎が近づいたことに気がつかない。近くまで漕ぎ寄せるや、はじめて船頭はふりむいた。

何か言おうとした目の前に、ぱっと飛び移った。障子を片手で開くや、ずいと踏みこんだ。

——白頭巾……

十方手裏剣に備えた緊張が、一瞬、虚脱したように弛んだ。

意外！

笛吹く手をとめて見上げたのは、

「あ……萩乃どの？」

木谷孫左衛門の娘萩乃だった。

つぶらな瞳が、無心に澄んでいた。

「——そなただったのか」

驚きからさめるのに、暫しの間が要った。

「弦四郎さまこそ、どうなさいまして？」

「む……」

「突然、こんないたずらをなさるなんて、悪いかた……」

怨むような視線をなげるのだ。

予期しない出逢いが、おかしみと喜びをともなって、すらすらと口をきかせるのだろうか。

こんな口をきくことは、始めての二人だった。

当時の武家社会の必然でもあったが、顔を見知ってから、まだ四、五回目ではなかろうか。

——この娘は？

弦四郎の心は、しかし、ほぐれなかった、疑惑が、麻のようにみだれて、胸の中にうごめいていた。

弦四郎を瞠める女の目には、あきらかに、情意があふれている。武家娘の、下手ではあるが大胆な媚であった。

養父孫左衛門の前では、ついぞ見せたことのない、甘い声であった。横坐りになって、はじらうように長い袂で唇を蔽っている。

その姿態も艶めいていて、

——この娘が！

と、弦四郎の疑惑は、つつましい処女性にまで及んで混沌としていた。

固苦しい武家屋敷から離れて、雨夜の大川、あいびき船——

条件は揃っていた。感情をこめて笛を吹いていた女が、自ら招いた雰囲気のなかでは、どんな変貌を見せることか。

しかし——この場合の弦四郎に、妖美の情感に惑溺することをもとめるのは無理であった。

「——萩乃どの」苛責しない語調で、弦四郎はいった。「拙者が突然のふるまいについては、詫びねばならぬところは詫びもする。が、拙者は酔狂でここへ現われたのではない」

「……」

「実はあらたまって、お聞きしたいことがある」

「はい……」はじめて、萩乃も表情をひきしめた。養女という境遇がやはり作用しているのか、あらたまると、整った目鼻立ちにも淋しい影がまつわっている。武家の意地と世間知らずの弱さが表情に読めた。

弦四郎は、つぶらな瞳を直視したまま、静かにいった。

「その、笛のことだ」

五

そのとき、萩乃のおもてに浮いた感情は、ただ、単純な不審でしかなかった。

「笛？」彼女は手の笛を見た。

弦四郎の耳は、幻聴に踊らされたのでもなければ、錯覚を起こしたのでもない。

——同じ笛なのだ……

——同じ曲なのだ……

ただ、吹き手が違っているだけではないか。黒漆の横笛。一目でわかった尾花の笛と寸分の差もない。

「その笛は誰のものだ？」

「誰って……あたしのものです」

「萩乃どのの？」

「ええ」

嘘を吐いている顔ではなかった。

「——いつから、お持ちだ」

「ずっとまえ、ずっと小さいときから、持ってましたわ」

稚ない表情になる。つぶらな瞳は、黒くかがやいて宙に童女のすがたを描いた。

「ずっと前？」

「ええ、あたくし、生まれるときから……」

「——ちょっと、拝見したい」

何のためらいもなく、むしろ嬉しげに萩乃は笛を渡した。

「いい笛でしょ。銘は萩……ね、萩乃の萩」

——どういうことだ、これは……

弦四郎は、偶然の符合に言葉を失っていた。

尾花の笛と寸分の違いもない。ただ図柄は秋野の離々た萩の花が毛彫りされて、銘も〝萩〟となってある。

——どういうことなのだ。誰かがおれを愚弄しようとしているのか？

偶然にしては、あまりに符節を合わしすぎるようであった。

——尾花、桔梗、萩……

笛の音に、白頭巾を想起したのは無理もない。名人庄吉の作になるものだけに、同じ音いろが出たのだろう。

「さっき吹いていたのは何という曲です？」

「野風……野風の曲とか」

弦四郎は首をかしげた。

「以前、どこかで聞いたおぼえがあるのだが」

「そのはずですわ」つぶらな瞳が、活々と冴えて、「いつでしたかしら、弦四郎さまが父とお話しているとき、萩乃が吹きましたもの」

思いだした。そうだったのだ。弦四郎が二回目かに木谷邸を訪問したとき、ふと耳にした笛の音。それっきり忘れるともなく忘れていたのだ。

「すると……」

「え、何か？」無邪気に問いかける萩乃に、うっかり白頭巾のことを洩らそうとしていた。弦四郎は、はっとして口をつぐんだ。

船をおりるときに、

「いずれ、野風の曲とやらを教えて貰いに伺うかもしれませぬ」そういって別れた。

半ば若い娘を嬉しがらせる気持ちもあったが、野風の曲に奇妙に惹かれるものを感じたのも事実である。

雨はほとんどやんでいた。あらたな疑問の渦を胸に抱いて山伏井戸の番屋に戻ると、

「あ、あ、遅うございました！」

番太郎が、真っ蒼な顔で、駈けよった。

「なに、何とした？」

「決して怠っていたわけではありませぬ。三人でしっかり見張っていたのでございますが」

三人のほかに弥次馬も数人いたという。その衆人環視の中で、浪人者は殺された。

「死んだか？」

「は、はい、とても、手当てのしようもない、あっという間の出来ごとで……」

死体はまだ放置してあった。弦四郎は一瞥すると、番太郎を責める気持がなくなった。

――白頭巾だ……

あの十方手裏剣が、あざやかに、浪人者の心ノ臓に刺さっていた。

――二人目だ……

秘密を保つためには平然と死を選ばせる白頭巾の暴虐さ、残忍さ。

報告を受けた町役人たちが駈けつけてきた。検死の与力は川びらきの夜と同一人である。

「――旦那」と、薬研堀の武平が、袖をひいて、「やっぱり白頭巾ですかい？」

「白頭巾？」

と、聞き咎めたのは定廻り同心篠田伴内。彼は眉の迫った眼で、武平を見、弦四郎を見た。

「青江、ひまつぶしに下手人探しもいいが、あんまり探索方の邪魔をしてくれちゃア困るぜ」

「邪魔とは心外だな。そんな気持は毛頭ないのだ」

「勘にさわったら堪忍。ちっとは町方にも協力してくれということさ」

ここで言い争うのはいやだった。弦四郎はこの友人にも不浄役人特有の澱を感じた。

「青江弦四郎はただ、降りかかる火の粉を払っているだけだ。それ以上のことをするほど、暇じゃない」

「だから……」

「聞きたいことがあれば屋敷へ来てくれ、今宵は失礼しよう」

半丁ほどくると、武平が追ってきた。

「旦那、弱りましたよ」

「何が弱った？」

「どうも鼻っ柱が強くっていけねえや。篠田の旦那は、下手人の手がかりが摑めねえンでやきもきしているンでさ」

「奴は手柄をたてるかどうかだろう、おれのほうは命がけだ」

「そりゃ、そうなンですが」

「つまらぬことを心配するな。きさまは小えんを守ってくれればいい」

「そのほうなら、大丈夫金の脇差。鬼がきても蛇がきても、指一本ささせるこっちゃございませんぜ」

武平と別れた弦四郎は、松島町に戻った。一刀庄吉の長屋をふたたび訪れたのである。

血染め屏風

一

尾花、桔梗、萩――三本の花笛の謎がとけぬうちに、魔手は、戦法を変えて襲ってきた。

武平の太鼓判を信じたのが、軽率だった。小えんがさらわれたのである。

「小えんが！」

弦四郎はがばと起きあがった。

注進にきたちょこ亀はいつもの剽軽さはどこへやら、すっかりしおれた青菜のようになって、

「ね、眠っちゃいませんや、三日三晩ぶっ通しで起きていたンですが。へえ、嘘じゃねえンで」

さかんに弁解した。仙次も大きなからだを小さくちぢめて、

「全くでがすよ。寝ちゃいねえ、まさか姐さんと同じ部屋で見張るわけにゃいかねえので、ここんところに二人で……」

「なにをしていた、やい」と武平が、「酒でも喰らって、へぼ将棋でもさしてやがったのだろう」

「済んません。お説の通りで」

知らぬ間に、小えんがいなくなっていた。寝室は蚊帳の吊手が二カ所切られていた。悲鳴もなく、物音一つしなかったという。なまめかしい紅絹うらを見せて夏の夜具がまくれ、枕が転がっているのが、小えんの抵抗を物語っていた。

ただ、行燈には墨黒々と、

〝尾花の笛のかわりに芸者一匹申し受け候、白狐〟

達筆が、弦四郎を嘲けっていた。

「――白狐……白狐とは何者だ?」

白頭巾の無気味な痩軀が、影のように脳裡を横切った。

「彼奴だ、彼奴に違いない」

殺人鬼。輩下をも不利と見れば殺してかえりみない鬼畜の男。

「旦那、すると小えん姐さんは……」

「危険だ、どのようなことをするかわからぬ奴なのだ。目的のためには、血も涙もない奴」

寝巻一つで何処へ連れ去られたのか。裏口も厳重にしまっていた。さるかぎをおろした上に芯張棒までかってある。異常はなかった。

ただ、勝手口の明かりとりの天窓が開いていた。引窓といって、紐で開閉するところである。

「あそこから入って……あそこからでたんですかねえ?」目明しの武平には考えられないことだった。「音がしなかったというンですぜ、のろまな野郎どもだが、眠ってはいますめえ、二人とも聞こえなかったということだから……」

いかに膂力があっても、女のからだを抱えて音もなく天窓から去る、ということは不可能に思えた。

「――常人には難かしいことだ」

「へ?」

「彼奴なら、しかし……」

武平たちは白頭巾を見ていない。

弦四郎はあの妖気ともいえるものを身につけた痩軀に、常人以上の、ある力さえ感じていた。

「白狐……」弦四郎はうめくように呟いた。「負けるものか、小えんはきっと助け出してやる」

その足で、彼はまた松島町へいった。

――白狐、どちらが智慧がまわるか、だ。鼻をあかしてくれるぞ……

敵の数はわからないが、かなりの組織にちがいない。行住坐臥、一刻たりとも放心は許されなかった。どこから狙っているかしれないのだ。兇暴で苛責ない吸血鬼の目を、弦四郎は四囲に意識した。緊張は若い五体にあふれるような闘志をかりたてた。

一刀庄吉のもとから帰宅した弦四郎は、

――彼奴だ!

部屋を一目見て感じた。

白狐の臭い――といっては思いすぎだろうが、ある痕跡があった。

それはあくまでも弦四郎の直感だった。どこといって荒されてはいない。が、どこにでも白狐の手が這いまわった感じ――紫檀の飾り棚も、戸袋も、掛軸の桐箱、文筥、額のうしろ……一分の狂いもなく、元通りにこそなっていたが、留守のあいだに、すっかり調べたようだ。

箱枕の中まで、白狐の舌は舐めつくしている!

そうして、その推測が、妄想ではない証拠に、文机の上に一通の封書が乗っていたのである。

裏をかえすと、二字、

〝白狐〟

と、あの筆跡だった。

「いよいよ、来たな」

挑戦なのだ。文面は簡単だった。

〝小えんを救けたくば尾花の笛を持参されたし、明四日戌ノ刻、待乳山に待つ〟

読み終えた弦四郎の頬に、うすい笑いがきざまれた。

二

待乳山は真土山とも書く。今戸橋のてまえにある山というより丘である。突兀と盛りあがった上に聖天宮があった。丘の下池の中島に弁財天の祠があってその祀られた霊像は、平政子崇導とかで、女の参詣者が多い。

すじ裏の聖天町は船宿を控えていわゆる山谷堀の芸者

家がなまめいた街を作っていたし、猿若町の芝居町も近かった。柳橋に飽きた連中が山谷堀と深川に遊所をもとめて分散するにしたがい、年々盛んになってきている。

四日は昼のうち少し雨が落ちたが、田安家の花火が行なわれた。打ち揚げは鍵屋で六つから五つ——午後八時には終わった。

聖天宮の本殿からは、白昼晴天には遠く市川の国府台まで望める。芸者も交った花火見物の男女が、次第に降りていってまばらになった本殿前に、弦四郎は〝白狐〟の来るのを待っていた。

浅草寺の鐘の音が余韻をひいた雨夜空には、思いだしたように残り打ちに、五寸玉があがっていた。空気が湿っているせいか、ぽーん、ぽーんと遠い太鼓のように聞こえてくる。

——白狐、いよいよ姿をあらわすか……

卑劣な男なのだ。どこから手裏剣をとばしてくるか、計りしれない。弦四郎は油断のない目を四囲にくばっていた。

ぽとっ……と、滴がおちた。花火のやむのを待っていたように、空は泣きだした。

残っていた者も、いそいで帰りはじめたとき、石段にこつこつときざわしげな杖の音が——逆にのぼってきた。

一人の按摩である。本殿前にのぼりきると、匂いでも嗅ぐように人の気配をうかがっていたが、

「——もうし、そこにどなたかお出でございますかい」

こう呼びかけた。

弦四郎は無言で、按摩の眼を見守っていた。

——真の盲か?……

忍者七法出の秘巻「正忍記」には隠形の法として、盲目を装う術がこまかく説いてある。

詳述ははぶくが、その一は魚鱗の眼といい、魚のうろこを上下瞼のあいだにはさむ。

本殿わきの常夜燈の仄あかりに、弦四郎が見きわめようとしたのは、虚ろな、その双眼の真偽であった。

「もしもし、そこのお方」

目が見たか、盲者特有の勘か、その按摩は、こつこつと杖で半歩前を試し突きながら近寄ってきた。

「……」

「率爾でございますがな」

「……」

「お旗本の青江さまでいらっしゃいますかな」

「——む、いかにも」弦四郎は、なおも眸を凝らして、

「青江だが、そちは?」

「梅ノ市と申します。堀の芸者衆にはいつも可愛がって頂いております揉み療治の……」

「わかった」と、いかにも花街の按摩らしい饒舌をさえぎって、「その梅ノ市とやらが、おれに何の用だ」

「へい、青江さまにお渡ししてくれと、裏の鳥居のそばで頼まれましたので、へい」

偽りではなさそうであった。芸者の悦びそうな猥談をしては祝儀にありついているのであろう、末生り冬瓜のあたまといい、いやに紅く濡れた唇が不潔な感じだった。

小銭を与えて帰すと、弦四郎は封を切った。

〝白狐〟

また、その筆跡が目を射った。

〝尾花の笛は留守宅より頂戴に推参仕り候〟

「——やはり!」

素直に弦四郎が尾花の笛を持参するとは、白狐が考えるはずがない。

対決の覚悟で弦四郎が出向いた留守宅から奪う——

弦四郎は嗤った。

「——白狐、なま半可な才智では弦四郎から笛を奪うことはできぬぞ」

真物は、いま、弦四郎の懐中にある。裏をかいて、わわざざ作らせた贋物をさも真物らしく額のうしろに隠してきた。相手の頭脳を計ってのことであった。

弦四郎は待乳山をおりると、町駕籠を探した。

「松島町にやってくれ、急ぎだ」

贋物をつかまされた白狐の怒りは、二様の出方が推定された。

一つは、小えんを、

いま一つは、一刀庄吉へ——

小えんはしかし、白狐にとっては恰好なおとりだ。ムザと殺すのは惜しい。とすれば、一刀庄吉へ目がむくだろう。

この弦四郎の推理は当たっていた。

「庄吉!」

訪ったとたんに、弦四郎は愕然とした。血の臭いを嗅いだ。しめった夜気に、つきにくい灯をともして見る

と、庄吉老人は、うすい夜具から、身をのりだして突っ伏している。

心ノ臓の背後に十方手裏剣が――

最初の、きょ香と同じ正確な打ちこみだった。むろん哀れな老人の呼吸は止まっていた。

「――おや？……」弦四郎は何を見たか、急に目を光らした。

三

それは二つ折の枕屏風であった。

庄吉老人は夜具からのりだして、屏風にかぶさるように死んでいた。手裏剣を打ちこまれた痛苦にもがいて、枕屏風を倒したとも見える。

汚ないその部屋の、調度らしいものもないなかで、鈍い光沢を放っていた。古いものらしく、すすけて、ところどころ破れてはいるが、金屏風であった。格別、由緒のあるものとは見えない。金泥地に淡い色で草花が描いてある。

疑問は、そこに貼られた数枚の色紙から、庄吉老人の手が、その一枚を破りとっていたのだ。

ただ、苦痛がさせたものと、看過できないものを感じたのは、指を折るようにして、ぬきとった色紙に、一首の和歌を読んだからであった。

「これは！……」

他人が見たら、別段のことはない一首――

〝萩か花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤ばかま朝顔の花――憶良〟

山上憶良はいうまでもなく奈良朝前の歌人である。遣唐少録として唐に渡り、彼の地で大伴旅人などとも交って、歌人として知られている。

右の歌は秋の七草を詠みこんだものだが、弦四郎にとっては庄吉老人の最期の意志が奈辺にあるか、ということだ。

「何を言おうとしたのか？」

彼の乞いを頑としてはねつけた秘密。

十五年も以前の約束――老人は残忍な兇刃に息をひきとりながら、これを破りとった。

――何故だ？

弦四郎は判断つかなかった。

――笛と関係があるのはたしかなのだ……

――憶良の歌……秋の七草……七草の笛……

ふっと、思考が破られた。

騒がしい声が、長屋を包んでいた。長屋の人々が、恐怖と疑惑の眼を集めていた。

「庄吉を殺した者を、誰も見なかったか？」

沈黙は、関り合いを怖れる人々の常に執るところだ。

「怪しい男の影を、見た者はないか？」

誰も答えない。白狐は通り魔のように庄吉を殺し、影も見せずに去ったのだ。弦四郎は死体に一瞥して膝を起こした。

翌朝――かなり陽高くなってから目がさめた。

「弦四郎さまっ」女の声がした。夢うつつに聞いていたが、誰か来ている。「弦四郎さま、お留守ですの？」

庭だ。重い頭は、萩乃の声であることに気がつくまで、ちょっと間があった。

――萩乃が？　何しに……

「お留守かしら……」当惑したように萩乃は呟いている。「まあ、きたないお庭、植木屋を入れなくちゃ、まるで、幽霊屋敷だわ……」

「幽霊屋敷に何のご用かな」

襖をあけて、弦四郎は無精髭ののびた顔をだした。

「まあ！」萩乃は、陽のなかで、ぽっと頬を染めた。「弦四郎さまの意地悪！　さっきから百べんもお呼びしたのに、居留守なさるなんて……」

「百べん？　これはしたり、てまえの耳には三べんしか聞こえなかったが」

「あら、意地悪！」

萩乃は、長い袂でぶつ真似をした。

「百べんと三べんでは違いすぎますな、もっとも近ごろ拙者の耳は悪くなったのかもしれんが」

磊落に笑って、彼は大きく伸びをした。

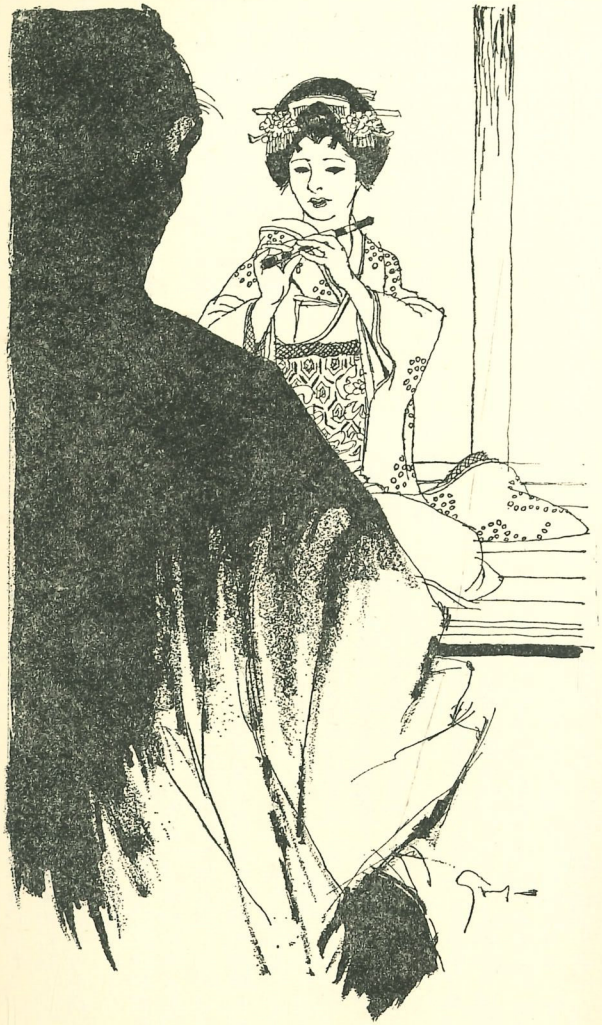
陰惨な連日の怪事件は悪夢だったのかと思わせる、いい天気だ。空も美しく青い。伸び放題の雑草の庭に、また萩乃の姿は何という美しさだろう。

若さがあふれている。簪が強烈な陽を反射して、キラキラとまぶしい。

「意地悪はよいが、お一人か」

「ええ」

「なに、それはいかん、町娘のように慎しみなく男一人



の屋敷に入ってくることは、お父上にお叱りを受けますぞ」

「よろしいんです。どうせ叱られてばかりいるのだから……」語尾がしめった。

みるみる凋れてきた。天候の急変のような若い娘の感情の動きは弦四郎はにがてなのだ。

泣きだされては困ると思ったから、

「どういうのかな、てまえがお詫びしてあげてもよいが、何をして叱られたのです」

「萩乃は何もしませぬ」

「何もしないで叱られるわけはない」

「よろしいんです」と、また泣きそうになって、「意地悪！」

「また意地悪ですか」

「弦四郎さまはお父上に味方ばかりなさるのですもの、たんと萩乃をいじめればいいわ。どうせ萩乃は貰いっ子です」

「弱ったな、どうも……拙者がいつ萩乃どのをいじめた？」

「だって……いじめないのなら、ここで笛を吹いてもよろしくて？」

「笛を？」

四

「笛を、ですか？」

「ほら、やっぱりそんなお顔をなさって、お父上と同じですわ、萩乃は悲しい！」

「笛を？……」弦四郎はその言葉にひっかかっていた。

「お父上がいけないと？」

「ええ四、五日前からですの、吹いてはいけないですって。ひどいとお思いになりません？」

「何故、お父上はいけないというのだろう」

「何故だかしりませぬ」

弦四郎は知らないでは済まされない。

木谷孫左衛門は、尾花の笛を不吉だといった。魔性の笛だといった。捨てろといった。お祓いをうけてやる、とまでいってくれたのである。

——やはり萩乃の、萩花の笛に不吉なものを感じたのだろうか……

だが、不審は、萩花の笛を幼時から萩乃が持っていたということである。萩乃の無邪気な心の投影も、いまさら無理解なことをいう父への怨嗟にほかならない。

——いまさら……四、五日まえから……

この事件が起こってからではないか。

——しかし……

と、上司を信じる弦四郎の心は否定する。

——孫左衛門どのが、まさか！　この怪奇な事件とは関係ないはずだ。勤直を絵に描いたような人ではないか……

典型的な能吏、という先入感が、強く作用していたとしても、あの孫左衛門に、暗い裏面があろうはずはなかった。

「弦四郎さま」と、萩乃は廊下に腰をおろして、「弦四郎さまは意地悪なさらない？」

「え……しませぬとも」

「萩乃をいじめませぬわね」

「いじめませぬとも」

「ああよかった」ほっと胸をなでおろす仕草が愛らしい。弦四郎は、白昼夢のような、白狐のいまわしいおもかげから、ふっと現実の平安にひき戻される。

無邪気、ということが、貴重なものに感じられるのだ。萩乃と話していると、心から昏いものが消えてゆくような気がする。

大人の社会の暗さにいつか馴れて、世の中の不合理や残酷さに平気になっている心が、洗われるような——長いあいだ忘れていた明るい瞳を取り返した思いだった。

「じゃァ、弦四郎さま、萩乃はここで笛を吹いてもよろしくって？」

「——お吹きなさい」

「嬉しいっ」萩乃は帯にさした金襴地の袋から、あの笛——萩花の笛をとりだすと、念をおした。「お約束しましてよ。あとからうるさいなんて仰有らなくって？」

弦四郎は微笑した。

静かに萩乃は笛を吹きはじめた。あの曲であった。野風の曲——夏日の強烈な陽の下で、荒涼たる草原をよぎる秋風のかなしさにも似たしらべが流れた。

——なぜこんな曲を好きなのだろう？

吹き終わるのを待って、弦四郎は聞いた。

萩乃の表情が大人っぽくひき締まり、ためらった後に、

ぽつりといった。

「亡くなったお父さまに教わったの……」

実の父——

孫左衛門は養父とは聞いてはいたが、萩乃の口から実父について洩らされたのは、これが最初であった。

弦四郎が聞きかえそうとすると、

「仰有らないでッ」と、はげしく萩乃はさえぎった。女の柔かい手を彼は腿に感じた。「思い出させてはいや、萩乃は忘れようとしているの、お父さまのことを思いだすと……悲しいから」

「……」

「それに、いまのお父上に、悪いんですもの、ね」

「萩乃どの」いつか惹かれるように、弦四郎の手が重なっていた。掌のなかに温かく肌理のこまかな感触がある。

一瞬、昂ぶった血に駈られて握りしめてしまった。はっとした。夏日の太陽は白昼夢の妖しさと、けだるい現実感がある。彼は顔を赧らめて手を放した。

羞恥の感情は萩乃のほうが濃かった。襟頸まで火のようになって首垂れていた。袂を弄んだり、草履で土に字を書いたり——

弦四郎は怒ったような顔でそっぽをむいている。照れくさいその空気は、萩乃がやぶった。漸く顔をあげた女のおもてには、こよない温かい血が流れて幸福そのものだった。双眸はけむったようにうるんでいた。

「——弦四郎さま」

「は」

「野風の曲、おきらい？」

「いや……なかなかよい曲だ」

「では、お習い遊ばせな」

「拙者が？」と、瞠目して、はにかんだように笑った。

「どうも、無骨者で……音痴でな、笛などとても」

「左様なことはありませぬ。一芸に秀でたお方は、何でも覚えが早いと申しますわ」

「しかし……」

「萩乃がお教えしますわ。ね、そしてご一緒に……」

何の抵抗もなく、彼は尾花の笛を思いだしたのである。

庭の草いきれが、次第に強くなってきていた。

五

二時間かそこらの、僅かな時間だったが、弦四郎は後々まで、このときの和やかな雰囲気を、花園にいるような甘い香を思いだすことができた。

陰惨な白狐頭巾の事件を忘れた。音曲に自信のない弦四郎が、短時間にひと通りは野風の曲が吹けるようになったのも、その幸福な感情のせいだったろうか。

萩乃は尾花の笛を見て、声をあげて悦んだ。同じ笛――夢を見る娘はそんなことにもきずなを感じて親近感を覚えるものだ。

この幸福な時間を破ったのは、けたたましい亀三の声だった。

「旦那、旦那！　青江の旦那！」

「――ちょこ亀ではないか、どうした？」

庭へまわってきた亀三は水をかぶったような汗を流していた。

「ま、また殺られました」

「なに！」

「こんどは浅草でございます。奥山の水茶屋のお島という女が」

「十方手裏剣でか？」笛の練習どころではなかった。弦四郎はふいに、萩乃の腕をつかんだ。

「萩乃どの、この笛、萩花の笛は拙者が預かっておこう」

「ま、急に何となされまして」

「魔の笛だ。そなたが持っていては危い」ひったくるように、荒々しい動作で弦四郎は笛を奪った。

「これを持っていれば、いつそなたの身を魔の手が襲うかもしれぬから」

「嬉しゅうございます」萩乃の返事は意外だった。「あたくしのかわりに、あたくしの笛がいつもお傍に居れるのですもの」

亀三がにたりとして、横をむいた。

「責任を持って」と、弦四郎は表情をくずさずいった。「拙者がお預かりする。しかし、なろうことなら、お父上にはその由を秘めておいてくださらぬか」

「え？　ええ……」

「少し考えがある。それから、隠しごとついでに、そなたが今日拙者を訪ねたことも伏せておいて頂きたい」

「嬉しい」と、また萩乃はいった。「弦四郎さまと二人きりの秘めごとなんて……」

「へいへい、わっちは唖でつんぼで、明き盲でございますから、指切りなすっても見えやしません」

亀三、頭を抱えて縁の下へもぐろうとする。

「ちょこ亀、済まぬが萩乃どのを送っていってくれ」

「合点承知の助。金を出しても買いたい役目。えっへっへっ」

弦四郎は浅草奥山に駕籠をとばした。

奥山は両国広小路にも劣らぬ賑いを見せている。

矢場が並んで厚化粧の女たちが嬌声をあげたり、当たりの太鼓を派手に鳴らしていたし、ビイドロ細工の阿蘭陀見世物やら、鳥娘、一寸法師などの因果物、または目くらまし品、玉つかい、居合い抜き――

その喧騒も、やはりいつもと違ったものがあった。

ごふく茶屋と並んだ一軒――お島の茶屋は役人の検死があっているところで、弥次馬は追い払われては遠巻きの輪をちぢめていた。

「やいやい、見世物はあっちだ、いったいった。お上のご用の邪魔になりゃ、ひっくくっちまうぞ」

と、喚いていた武平が、「おお、旦那、また殺られましたぜ」

「む。お島は笛を持っていたか？」

「へえ、それが……」

人いきれでむっとする砂塵に揺れている紺のれんには〝なでしこ〟とあった。

「なでしこ――撫子の花、やはり」

「ここの客ア、ほとんどがお島の笛を聞きに来たそうで、いまさっき近所から聞いたンですがね。まだ店を開いて間もねえのに、かなり繁昌していたのも、みんなお島が笛がうまかったからだそうで」

「お島の笛に踊らされた、というわけか」弦四郎は舌打ちした。「地獄耳の武平哥兄いが、どうしたことだ」

「面目ござェやせん」

役人のなかには篠田伴内の顔も見えた。

なるべくなら顔をあわしたくなかったが、むこうで先に見つけて、「――見るかね」と、皮肉な片笑いをした。手には血まみれの十方手裏剣があった。「このあいだと、同じやつさ。恐ろしいやつさ。死骸を見るかね」

「いや、その必要はない」

「もうお帰りか」
「うむ」
「身共もそこまで行こう」
与力に一礼して篠田伴内は肩を並べて歩きだした。
旧友の間ではあったが、二人は身分差が大きい。焼けるまで屋敷が隣りあっていて、道場にも一緒に通った仲というだけで、篠田は三十俵二人扶持の町同心。弦四郎は二百五十石の家禄がある。いまでこそ小普請組入りとなっているが世渡りさえうまくやれば勘定奉行もまるっきりの夢ではなかった。
それにくらべて町同心などは、同じ旗本御家人のなかからでも、不浄役人、とさげすまれている。彼らは絶対といっていいほど出世の可能性がない。人相が嶮しくなって、無力の庶民をいためることに愉しみをもとめるようになるのも、そのせいだった。
——昔から思うと、変わったな、こいつも……
同情は禁じ得ないのだ。が、いまの政治組織のなかで、これはどうしようもないことではないか。
二人は黙って、砂埃の中を歩いた。気まずい空気を破ろうと思ったのか、伴内が、口をきいた。
「暑いな……」
「む」
「どうだ、ところてんでも食べないか」
「いらぬ」
それっきり沈黙がきた。弦四郎はこの故友の気持が計りかねた。
——こいつ、何を言おうとしているのだ？
たまりかねたように、伴内が角だった動作で足をとめたのは雷門を出たところだった。
「青江、おぬし、白狐とやらに逢ったというがほんとうか？」
「……」
「教えてくれぬか、おれア、手柄をたてたいのだ。いつまでも定廻りでくすぶっていたくはねえ、何か、手柄をたてて、与力までは出頭できなくとも同心上席にはなりてえ。力を貸してくれねえか……」

ふしぎな女

一

青江弦四郎の身に異変が起こったのはその夜のことである。
殺されたお島の身元を二、三調べて三味線堀に戻ってくると、門前に武士が三人佇んでいて、
「や、帰ってきた！」と、低く叫ぶのが見えた。
提灯のあかりを下から受けて、眉間に深い皺を寄せているのは世話役の曽根八十八だった。
ほかに同輩が四人。二人は留守宅に入っていたのである。
「何か、あったのですか」
「青江」と、苦虫を噛みつぶしたように唇を歪げて曽根はいった。「大変なことをしてくれたそうだな」
「大変？……」
と、むろん弦四郎には見当もつかなかった。
「そこもとは両三日のうちに呼び出されるぞ」
「え？　てまえが……」
「どういう事情があるかしれぬが、儂らにとっても迷惑至極だ」
吐き出すように曽根はいった。
一人で合点しているし、他の若い同輩たちは自然と弦四郎を取り囲むようなかたちになっている。
「話がわかりませぬな」
「白ばくれるとは卑怯ではないか」
「これはしたり、何のことを仰せられるのか、いっこうに」
「では呼び出される覚えはないというのか」
「いかにも」弦四郎は、昼間の伴内の話を思い浮かべた。
悃願を斥けるのは哀れだと思ったが、
——おれはおれの勝手にやる。町奉行所とは無縁でいたい……
と、突っぱねたのだ。

泣かんばかりに頼んだことだし、伴内は拒まれると、蒼くなって怒った。

——その報復が、少し早いようだが……

伴内には何も弱身を握られてはいない。彼がどう策動しようとも少しも恐いことはなかったが、

——町奉行を動かしたのだろうか？

不審が残った。

「——ここで口論してもはじまらぬ」と、曽根八十八はまた吐きだすようにいった、「とにかく、ご足労ねがおうか」

「何処へ？」

「いやか？　拒むは後ろ暗い証拠ではないか」

「拒む、だと……」話すのも嫌になった。弦四郎は、はじめてあからさまに冷笑を浮かべて、みんなの顔を見渡した。緊張が滑稽だった。

「てまえが、いつ拒みました？　何処へ、と聞いたまでではないか」

「何処でもよいわッ」

「よくはない。てまえにも、要用があるし、夜更けて誘われるのは迷惑だ」

「こいつ！」ほかの者が唾を吐いた。安井なにがしという力自慢の大男だった。

曽根は年配だけに、安井の激昂へたしなめるような視線をなげて、

「青江、おぬしが覚えがないというならそれでもいい、とにかく組頭宅へ同行してくれ」

と、折れてでた。

「組頭の屋敷で何を話すのか」

「問いに答えてくれればいいのだ。われらとしても組下から縄付きは出したくないし、寃罪ならそれで打合わしておけば、申しひらきに役立とうし」

お為ごかしの言葉の裏が見えすいていた。

弦四郎は故意に大声をあげて笑った。

「よろしい、何かしらぬが参りましょう」

二

——おれが何をしたというのだ！

——どこへでも行ってやる、おれを陥しいれようとしても限度があるぞ！

弦四郎は毫も恥じるところがなかった。

御勘定方を逐われたのも、原因はといえば調方として当然の金座関係の帳簿に間違いを発見したことにある。

上役はそれを聞いて調査するから他へ洩らしてはならぬ、といった。

明らかに金座役人の間違いとわかっていながら、その後、放置されたままになっていた。その次の勘定吟味のときも帳尻はあっていながら、納められた金銀貨幣の量が少なかった。

立合いの役人たちはそれを黙認した。さすがに黙っておれず、上司にふたたび進言——それは当然詰問のかたちをとったが、それがうとまれたのであろう。

「青江弦四郎、お役目不首尾につき——」

と、御役御免、小普請入りを仰せ出されたのである。

帳簿の不正だけでも素人には見ぬき難いのに、巧妙に納める貨幣の額を誤間化すのだから、証拠は残らない。むろん、一人ではなく各部署の責任ある地位の者が結托してのことだから、弦四郎一人が不正を叫んでも、狂人としか見られない。

権力に抗することの無駄を悟って、弦四郎は無為の日常に青春を沈潜していたのだった。

——いまのおれは、勘定方にとっては、何の邪魔にもならない、小普請組のぐうたら者なのだからな……

弦四郎の脳裡には、やはり篠田伴内が浮かんだ。

——ばかな奴だ、つまらぬ罪を被せて、溜飲を下げようというのか……

小人物なのだ。それほど、しかし憎まれようとは思わなかった。白頭巾——白狐に就いての知識など、教えてやってもどうということはない。

或いは、小えんがそのことによって助かるかもしれないのだが……

そう考えると、もっと寛大になるべきだったと後悔がきた。

組頭の屋敷は本所の一つ目にある。弦四郎を包むようにして、一行が柳橋を渡ったときだった。青江さまではございませんか、三味線堀の青江弦四郎さま、左様でございますね、へい、急ぎの文でございます」

突然走ってきて、べらべらと一人で饒舌ったのはなんと亀三である。

弦四郎には一言もいわせず、封書を手渡すと、「へい、

急ぎでございますよ」と、念を押して、「お呼びとめしまして、相済みません、ご免なすって」

ぺこぺこ頭を下げて、走り去った。曽根も安井も、あっけにとられている間だった。

ちょこ亀の様子から、

——何かあるな……

と、感じた弦四郎は、

「急用らしい、灯をかしてくれ」安井にいった。

渋々かかげようとする提灯をとって咥えると、皆に背をむけて封を切った。急いで書いたものらしく、まだ墨は滲れていた。さっと目を流した弦四郎の表情が変わった。

〝笛師ごろしの疑いがかけられている〟

金釘流を、殴り書きしてあるから、おそろしく拙劣だ。

——武平だな……

弦四郎は察した。職掌がら、耳に入ったのだろう。

篠田伴内がやはり策謀したと思われた。しかし、もはや、矢は弦を離れた。誰の策動であれ、治安当局の手が、弦四郎にのびてきたという事実——

その動かせない事実は、ぎりぎりの場に彼を追いこんでいたのである。

彼は思いだした。庄吉老人の死体を発見した彼へむけられた、長屋の住人の猜疑の目を。

誰も白頭巾も、怪しい影すら見たことはない。そして、弦四郎は現に、白頭巾から奪った十方手裏剣を数箇持っている。

不在証明がなく、兇器まで揃っている！　どうして申しひらきが立とう。提灯をかえし、手紙を懐中へ入れたとき、弦四郎は身のふりかたを決めていた。

「——お手間をとらせましたな」

さりげなく本所のほうへ歩いてゆく弦四郎の顔は蒼かった。

広小路から両国橋へ——

晴天だが今夜は花火がなく、納涼船もどこか淋しげだが、結構歌舞音曲を月明の大川へ流して上下している。屋形船の灯が川面にうつって美しい夜景である。このどかな夜に、弦四郎だけがなぜ苦しまなければならないのだ。

旗本という身分、三河以来の家名が、重く彼にのしかかっていた。嘗つて感じなかった、家、の重さである。

蒼白なおもてに、ぎらっと双眼が光ったのは九十六間の橋のちょうどなかほどまで来たときだった。

「——曽根さん」躓いたように立ちどまって弦四郎はいった。「貴公たちも覚えていてくれ、青江弦四郎は笛師庄吉を殺してはいない」

「ん？……」

ふいをつかれて、曽根は口ごもった。

「いずれ身のあかしは立てよう、御支配に伝えてくれぬか、十日、十日のお暇を頂きたいと」

「おぬし……」言葉の意味を悟って、安井が肩をつかもうとした。ぴしっと、その手は払われた。

「よせ、おれは貴公たちを斬りたくない」

「に、逃げるか」ぱっと袖をつかむ。

弦四郎は身をひるがえした。安井の大きな手に腕をつかませたまま、

「よせ！」

さっと身を沈めるや、安井の巨体は、すさまじい音をたてて、橋板に叩きつけられていた。

提灯がとび、ぼっと燃えだす。

欄干にもたれて、涼んでいた女たちが悲鳴をあげた。

数人の手に前後して白刃が閃いた。

殺意はなかったのだろうが、安井の絶叫と弦四郎の思いきった行動が、反射的に抜刀させたのだ。

「待てい！」逆上して追う連中を、さすがに曽根は色を失ってとめようとした。

弦四郎の端正なおもわがちらっと、ふりかえった。瞬後に、欄干のかなたへ——

「や、旦那が！」柳橋からあとをつけて来た武平たち三人があわてて、欄干へ駈ける。

空間に、ぱーっと、裾が蝙蝠の翼のようにひろがった。思ったよりも夜気の抵抗をうけて、水面へおちた。水飛沫が、丈余もあがった。

「——おや、身投げだよ」屋形船の障子があいた。白い顔がのぞいた。

三

「いけねえ、親分！　青江の旦那ァ死んじまったよ」

「べら棒め、そう易々と土左衛門になんなさるけえ、水

練ができなさるさ。が、念のためだ、仙次、船を」
「へい！」
「このさいだ、御用風を吹かして、急がせろ」
見失わないように武平が見まもる一方、二人が東西に別れて駈けだす。
「誰か、急げ」と、曽根八十八も狼狽していた。「死なせてしまっては、面倒だぞ。まだ下手人ときまったわけではないのだ」
同情ではない。曽根自身の保身が第一であった。組頭に話を聞いて連行にいったのも、組頭へおもねる手段だったし、町奉行所へ顔をよくしようという副産物もある。
同じ罪囚を組下から出すにしても、一応調べて謹慎させておけば、刃傷沙汰も起こらないし、世話役の落ち度とならない。
「に、逃げられも死なれても、われらが責められるのじゃぞ」
五日の月は沈もうとしていた。安井が漸く腰をなでながら起きあがった。曽根八十八の動顚した眼では、遠い水面に、弦四郎の頭を見い出すこともできないのだ。
「や、安井、はやく青江を救けに行かぬかい！」曽根は、色を失った唇で、狂ったように喚いた。
仙次たちも、武士たちも、しかし船を急がせたが、月の落ちたあとの大川に弦四郎の水死体を拾うことはできなかった。
「屋形船に救けられたようだったが……」二、三の船頭がいった。
せめて、弦四郎が救かったらしいだけが、彼らをほっとさせた。
その屋形船は上へのぼったという。首尾の松のあたりまで探してみたが、むろん、わかりようはなかった。
神田川へ入れば屋形船は幾艘もある。星あかりの川面は満潮でふくれあがっていた。
いっとき、この時ならぬお旗本の身投げさわぎで賑った両国橋界隈も、やがて一場裡の余興であったかのように、みんな堀へ帰りはじめたころ、
「――甚公、もういいだろう」ものうげな声で、女はいった。「灯をおつけな……」
「へえ」
屋形の障子がぼっと浮かびあがったのは、駒形堂の

沖。
「船は流していいから、いっぱいやっていな」
「へい、ゴチになりやす」
「酔っぱらっても、目は放しては駄目だよ」
「へい、そりゃあ姐御、てまえの目は」
「ビイドロ細工で精がないから念を押すんだ、変な船が来たら知らせるんだ」
女は寝そべったままだった。弦四郎は、この伝法な口をきく女の朱唇を不思議なものを見るような心持で眺めていた。女は、その視線を見かえして、にこりとした。
「変な顔をするんじゃないよ。お武家さん」
「いや……」
「もう大丈夫だろう、誰かに追われていなさったんですね、いいえね、お前さまが盗っ人でも将軍様でもかまやしないのさ、心配しないで、からだでもお拭きな」
「忝けない」あらためて、弦四郎は礼をいった。
何もきかずに、追われていると見て、灯を消して、船頭に急がせてくれたのである。
「朋輩とつまらぬことで争って……すんでのことに土左衛門と変名するところだった」
「ふふふ、面白いことをいうじゃないか。お武家さん、御直参ですね」
「……」
「隠しても駄目。いくらやつしても江戸っ子は江戸っ子さ。浅葱裏は大丸ののれんから出てきたって浅葱裏に違いないのさ……」
奇妙な女だった。
さっきから、伊達巻一つの艶な姿で横になったまま起きあがろうとしない。長い、変わったかたちの煙管を空吸いしたり弄びながら、陶然とした表情だった。眼も、弦四郎を見ているのか見ていないのか、虚ろな半眼で、伝法な口調もものうげである。
あくどい色彩の枕絵や、あぶな絵、それから黄表紙のたぐいが散乱しているし、酒肴の膳は八百善か代七から仕こんできたのか、鯛の刺身やなまこを食い散らかしたまま、タテのものをヨコにもしようともしない。
全く不思議な女だった。それに、奇妙といえば、この屋形にこもっている臭気も、弦四郎がはじめて嗅ぐ異様なものだった。
弦四郎が半裸の膝をそろえて固くなっているのをうっ

とりと眺めながら、女はいった。
「濡れていては気持が悪いだろう、下帯を絞ったらどう？」
弦四郎は言葉もなく、赧くなった。
女は眉も動かさず、
「かまやしないよ……」

四

弦四郎は奇妙な運命にもてあそばされているのを感じた。
無頼な旗本ではあったが、普通ではこういう女と知りあうことは考えられなかった。奇妙というほかない生活を倶にすることもなかったろう。
女は——お藤と名乗った。
弦四郎が案内されたのは深川お船蔵そばの汚ない長屋。壁は落ちているし杉板の天井は半分しかない。押入れも唐紙がなく、万年床がのべられて、追われる身も、さすがに二の足ふんだ。
驚いたのは、押入れの段の上に瓶が二つ置いてあって、そこからするすると縄がおちた——と見えたのが蛇だったことだ。
錦蛇は三匹いた。ちろちろと絹糸のような舌を泳がせて、お藤の膝に這いあがってきた。
ぎょっとして、身をひいた弦四郎をながし目に見て、
「あたしの可愛い子供たちなのさ」
「そなたは？」
「お藤、といったじゃないか。ふふふふ」
蛇をつかんで頬ずりしたり、頭を叩いたり、口を吸ったり、まるで赤児とかわらない。蛇のほうでも親愛の情をしめして、胸に入りこんだり、首に巻きついて、軽くしめたりしている。
「ふふふふ、ばかッ」
三匹の蛇とたわむれているお藤の姿は、ねっとりした年増女の色香が発散していた。
さきほどまで、屋形船のうすべりのうえに長々と寝そべって、虚ろな眼でものうい口をきいていた女と思えない。喜々として蛇とたわむれている。
ぐっとぬいた襟あしに後れ毛がまつわりついているのも、ゆたかな乳房がこぼれそうになるのも、蜂のように

くびれた胸から腰の盛りあがりが、男心をそそらずにはいない。
蛇と遊ぶ女の赤い蹴出しから洩れた脛が、ときどき弦四郎の膝にふれた。
「そんなに恐い顔をしないで、一緒に遊ばない？　ふふふふ」
お藤は、しなやかに身をくねらせて笑う。蛇が股のあいだに入ってきても、
「ばだかよ、次郎、どこをなめるのさ、ばか、ばかったら」
するするっとつかみ出す、その手から肘へくるくるっと巻きつくのを、
「おまえは、お武家さまのところへお行き」
ひゅっと投げた。お藤の言葉がわかるのか、次郎蛇は、ぬらつくからだをどすっと弦四郎の膝におとす。
武士が気味悪がるわけにもゆかないから、黙っていると、次郎蛇は、しなやかに長いからだをゆすって、胸へのぼってくる。
親しみをあらわすためであろうか、ちろちろっと舌が出ると、どうにも無気味だ。
もっとも爬虫類を可愛いというほうがおかしいのだが、お藤は、太郎蛇と三郎蛇を両手で愛撫しながら、そんな弦四郎の当惑顔を愉しんでいるのだった。
「——甚公、おまえは邪魔だから今夜アどこかへ行ってきな」小粒を投げてやって、「銀猫でも夜鷹でも買うがいい」
「姐はん、邪魔なら帰ってきませんがね、銀猫や鼻っ欠けはひでえ、せめて金猫でも抱かしてくんねえな」
「べら棒なことをおいいでないよ。金猫じゃおめえに勿体ない」
「あれだ」と、甚助はふくれて、「姐はんはそらアよかろう、御直参としっぽり濡れて、こちとらは花ゴザで青かんですかい」
「ぶつくさ言わねえで、早く消えておしまい。首尾がよけりゃ明日ア金猫だ」
「頼ンますぜ、へっへっ、どうぞごゆっくり」
甚助が卑しい笑いを残して出てゆくと、
「おまえたちも寝ちまいな」
お藤は蛇たちを瓶へ追いこんで、「ねえ……」と、流し目をくれた。

「弦四郎さま。あたしたちも寝ましょうか」

五

万年床が臭かったからではない。

追われて、川へとびこんで、救けられた——いってみればそれだけの関係なのだ。

救けたのが女で、救けられたのが男という関係が必ずしも、同衾というかたちに発展しなければならぬはずはない。

女は——お藤は何を考えているのか、

「早くお寝みな、疲れているんじゃないかえ」蒲団から呼んだ。

船の中で長くからだを横たえて起きようともしなかったときは、その豊満な全身が、色香よりも陶然たる妖美の靄に包まれていた。

いまは違う。ゆたかな胸も、腰も、しなやかな腕も脛も、そして、花園にでも彷徨しているような眸も唇も、すべてが、女の情熱を、慾望をあらわして、男を招いている。

「——お寝みな。どうしたのさ……」

同衾を疑わないのだ。いぶかしげな表情になっていた。左右不揃いの眉がぴりっと動く。火のついた情感に水をさされた気持なのか。くずれた生活が、肉体だけの享楽を不自然と感じないらしい。

「拙者はよい」と、弦四郎は女から目をそむけていった。

「眠くないのだ。暫く、こうしていよう」

「眠くないって、笑わしちゃいけないよ。お武家の義理固いのにもあきれるわ。蛇たちも笑っているよ」

「それに、あるいは尾行されたかもしれぬ。暫く様子をうかがってから」

「そんな必要はないさ」

「しかし……」

「あたしの蛇は、憚りながら人間様より悧口なのさ。変な奴がきたら三匹とも、にょっきりかま首をもたげるから、大丈夫」

早くお出でな、と胸を大きく喘いで、無意識のうちに腰が微妙にうねっている。

弦四郎は頸すじに止った蚊をはげしく叩きつぶして、

「藪蚊が多いな」と、いった。「蚊遣りはないのか」

「御旗本なんて、案外にぶいねえ、蚊遣りなぞ独り者がたくものさ。男と女が抱きあって寝りゃ蚊のほうで遠慮するじゃないか」

こうずけずけと言われると婉曲にことわるのも難かしい。

救けられたのは有難いが、

——一難去ってまた一難か……

弦四郎は苦笑した。彼は、無頼な日々に青春のいのちを感じてはいても、まだ、こうした汚れた女体を知らなかった。

熟れきった果実の味——弦四郎も男だ。若い健康な五体は平静ではない。その濃厚な味への好奇な興味は尠なくない。

だが、家名をなげうって、怪奇な事件にとびこんだ彼にとって、いまはその余裕がなかった。

実際、女体の誘惑を拒んでいるのは、白狐一味への怒りなのだ。

お藤には感謝こそすれ、愛情などもとめるのは、あまりにも早すぎるのではないか。

——痴楽に溺れる相手とは、おれも甘く見られたようだ……

弦四郎は苦笑した。

——せっかく身をひそめるには都合のいい家と思ったが……

永くはおれぬ。

子の刻(午前零時)はすぎたろうか。世間はしん、としている。壁一重の隣家ではもし起きていれば嗤っていることだろう。

——空が白んだら、出てゆこう……

弦四郎のそんな思いを気にもせず、お藤は、「灯しを消すよ」と、いった。「当節、油が騰っているんだ」

「拙者が消そう」

と、手をのばすのを、

「嫌みがわからないのかね弦四郎さん、おまえかたわじゃないんだろ」

苦笑がまたのぼる。これは苦笑するよりしかたがない。

「かたわじゃなさそうね。じゃあいいじゃないのさ……」

「よくはない」

「なにいってるんだ」と、お藤は半身おこした。横坐りになると前が割れて、むっちりした肉置きが腿のつけねまであらわになった。「じゃ、なにかえ、おまえさん、あたしが、このお藤がきらいなのかえ」
「きらい、というわけではないな」
「じゃアいいじゃないのさ」
「きらいでなくとも、同衾するほど好きでない場合もあろう」
騎虎の勢いだ。そこまでいわせたのは、女の無知さだった。
「なんだって！」
きりっと目尻が吊りあがった。総体にゆたかな肉づきだけに、凄艶というか、それなりに男を惹きつけるものがあった。
「あんまり莫迦にしちゃいけないよ。それじゃ、あたしを嫌いというわけじゃないか」
隣でも目をさましたらしい。火がついたように赤児が泣きだした。
——時がきた……
と、思った。深夜だがしかたはなかった。弦四郎は立ちあがった。
「弁解がましいようだが、一言聞いてくれ、拙者はいま追われている」
「わかってるよッ」
「十日以内にせねばならぬ仕事があるのだ。人も探さねばならぬ……とても、いまはそんな気にはなれぬのだ」
「なに言ってやがンだい、どうせ男と女じゃないか」
ふてくされたようにお藤は枕をなげた。髪油のしみた枕は、あらぬほうへとんで、障子の骨を折った。
「さわぐな、近所が迷惑する。拙者が去ればよいであろう」
「ふん、どこへでも行くがいいさ」
叩きつけるようにいったとき、思いがけなく、お藤の双眼に光るものが見えた。
「どうせ蛇つかいの女なンざ、お旗本から見りゃ、人間じゃないンだろうさ……」
弦四郎はそのあいだに土間へおりていた。
「命を救けられた恩は忘れぬ」
一礼して、出ようとした。
「恩なンていってやしない、可愛がってくれと頼ンでるンだよッ」
格子戸に何かあたって砕ける音に耳をふさぐような気持で、弦四郎は露路から出てゆくのだった。
真夏の夜のひろい空には、天の川が白々と流れている。
「——十日……十日のうちに探し出さねば」
弦四郎は夜気に頬をなぶらせて呟いた。
「白狐よ、どこだ……そして小えん、死ぬな、必ず救い出すぞ……」

白狐現わる

一

やはり空梅雨だったのか、それから数日炎暑がつづいた。その炎天下の江戸市中を一人の浪人者が横笛を吹きながら歩いていた。
「おや、あの御浪人、昨日も、笛を吹きながら通ったじゃないの」
小間物屋の店先で、尻の軽そうな娘がほおずきを鳴らしながらいった。
深編笠におもてを隠し、着流しに草履ばき。炎暑の中も雨の中もかえりみずに、今日は神田、明日は日本橋と吹き流していた。
誰も顔を見た者がない。すらりとした長身だし足さばきも田舎漢とは見えず、

「あのからだつきでは美男にちがいないよ、きっと……」

名題役者の美貌をあげては、あれこれと、町の女たちは口さがない。

吹く曲もきまっていて、何やら、もの悲しく、淋しげで、宵闇の中から聞こえると、すすり泣いているかのようでもある。それは巧みとはいえなかったが、妙に人々の胸に印象づけられた。

笛を吹き流す——といっても、別に門附けするわけではない。ただそうしていることが好きでしているようにも見えた。

だから、銭を投げる者がいても、見むきもしないで行くし、浮気な女たちが、顔を見ようとして、

「御浪人さま……」と、小銭を懐紙にひねって出すと、笛吹く手をとめて、白扇で快く受ける。

態度も、卑屈なところはなく、毅然としていた。ただ、顔をのぞこうとしても、たくみに見せない。

「——道楽者さ」と、いう者もいた。「ああやっているのが好きな気狂いだろうよ」

と、男たちの酷評は、美男の笛浪人という女たちの噂をねたんでのことにほかならない。

ほめる言葉にも、罵声にも、笛浪人は一顧もしなかった。

——下手を承知で吹いているのだ、なんとでもいうがいい……

と、その日も、青江弦四郎は、浜町あたりを流して歩いた。

ここら武家屋敷と町屋が入り組んでいる、大名屋敷があるかと思えば、旗本屋敷があるし、法眼屋敷、検校屋敷があり、町屋もおもてが商家で、裏が職人の長屋というふうに、一口でいえば江戸の縮図だ。ないものは寺社ぐらい。もっともお稲荷さまだけはある。

——このあたりが怪しい……

と、弦四郎が狙いをつけたのは故なきではない。

町役人は、うかつには武家屋敷にふみこめないし、堀割が大川へ通じていたり露路が多いし、隠れひそむには恰好な場所でもある。というほかに、ここらは因縁がふかい。

白頭巾を最初に逃がしたのも、このあたりだし、哀れな浪人が、矢を射かけて逃走した道すじも偶然かその道すじ。そう思ってみれば、庄吉殺しも、巧みにやれるはず。

——まず正体を突きとめねばならぬ……

自ら、おとりになって出た弦四郎だ。だから、どこから十方手裏剣や、真矢がとんでくるかもしれない。危険はしかし承知の上だった。

一日は虚しくすぎた。

二日たった。

三日すぎた。

——現われぬか、白狐！　なんじはこの笛がほしいはずだ！……

弦四郎が吹いているのは、白頭巾の落としたと思われる尾花の笛である。そのうえ、萩乃から預かった萩花の笛も、これみよがしに帯の前半にはさんで、自ら流すおとり笛。

四日目だった。

彼は、山伏井戸のあたりから、ある気配を感じた。日は暮れたばかり。

跟けられている！

尾行者がいる、ということはおとりが成功したことを意味するのではないか。

——勝った！

弦四郎の背中は、しかし虚ろな淋しささえ、湛えて、平然と、流してゆく。吹く音に少しの翳りも、狂いもなかった。拙劣な〝野風の曲〟であった。萩乃の気まぐれが役に立ったのだ。

——白狐か、その輩下か？……

弦四郎は、武者ぶるいさえ感じていた。強敵への期待——闘志があふれてくる。

白狐ならば話は早いのだ、むこうでも決着は急ぎたいだろう、相手はかなり卑劣なところはあるが、いやしくも武士であればやはり、堂々たる勝負を望むのではなかろうか。

武士の血、といおうか、武家に育った者は多少の差こそあれ、無意味な剣の息吹きに引きずられてしまう。他への見得とか体裁とかを超えた武家義理、それは孤島にあっても対決せずにはいない性質のものであった。

弦四郎が五歩あゆめば、尾行者も五歩あゆむ。距離はほぼ十間。忍びの心得のある者が尾行する場合の心得に「吸えば吸い吐けば吐くなり闇に十」の名言がある。

闇に十間はなれて絹糸を識別する夜目の術は前に述べ

た。

語尾の一句は尾行の原則を十間の距離をおくことを意味して、彼の者が息を吐けば、こちらも吐き、吸えば吸う——これがぴったりとあえば、まずかなりの兵法者にも気づかれぬ。もっとも足音をたてぬ歩き方は、濡れ紙を破らずに歩くなどすさまじい習練によって会得するのであるが。

さて——

両者は、十間の距離を保って歩いてゆく。

二

大通りも露路も、人影があった。夏の宵は花火のないのが残念で人々は床屋や、赤提灯の灯かげを慕う。

若い娘が線香花火をあげていた。ぱちぱちっと闇に散る花火、弦四郎は、白刃と白刃が噛みあった瞬間の、全身を貫く快い緊迫感を想起した。

——まだくるな……

忍びの達者と知るのは、また弦四郎が剣気に敏いことの証拠である。

街かどをまがるとき、一瞬呼吸のみだれに、尾行者の位置を知った。

弦四郎は、尾行者を、はっきりと、

——白狐だ！　と、見ぬいた。

あの白頭巾でなければ、これほどするどい剣気は感じまい。いつぞやの夜、寝こみを襲った男も、真矢を射た浪人も、これほどの使い手ではなかった。

——白狐、今宵こそきさまの毒血を沸騰させてくれるぞ！

弦四郎は疲れを感じた。

虚とかまえていても心根に弛みがなければこそ、おぼえの手裏剣もとばし難い。

背中に真の隙がもれたとき、尾花の笛は声を失って、彼は前へのめるだろう。

緊張の限度を感じたとき、彼は屋敷街へ入ってきていた。

——まだくる……

——場所はどこにするか？

屋敷街に入るとさすがに人通りは少ない。九日の明るい月に応えるように、塀のうちで鼓の音が聞こえていうであった。弦四郎は笛を懐中にしまい、恐るべき敵の出現を待った。

月は中天にある。死闘を最後までゆっくりと見まもることだろう。

——やるぞ……

弦四郎は待った。

秒瞬が長いものに思われる緊張のなかに、忽然と——

おぼろな白衣が浮かびあがったのである。白頭巾であった。雑草のなかを、音もなく藻をわけてくる人喰鮫のように白衣の痩軀は近よってきた。

むろん、無言。懐ろ手をしたまま、泳ぐように近づいてくる白頭巾——

二十間、十五間、十間、五間、三間まできたとき、ぴたりとその影はとまった。

「白狐かッ」

弦四郎はひかれるようにさけんでいた。

「覚えやすかろう、頭の悪い奴にはな、ふっふふふふ」

痩軀は、嗄れ声に笑いを含んだとき左右に揺れた。

一本足で立つ白鷺のような——いや、この邸の混血の美女の亡霊には似ていないだろうか。

弦四郎の眼は、ふと、破れ築地を見た。

彼は思いだした。

そこは空屋敷であった。たしか主は蘭医であったが、大奥御中臈なにがしの診断に誤りありと漢方医に讒訴されて一家五人毒を呷って心中し果てた。半年ばかり前のことである。妻女は長崎で娶った女で蘭人と長崎女との混血で美女だったせいであろう、亡霊が出るという噂がひろまった。

当時ひところ瓦版をさわがせたものだ。以来、住み手がないまま取り毀されるのを待っている。

笛の音がやんだ。

とたんに、背後から十方手裏剣がとんできた。もとより予測していたことだ。弦四郎の影は飛鳥のように、門内へとびこんだ。十方手裏剣は、虚しく破れ築地に突き刺さる。

邸内は、ぼうぼうの夏草であった。あかざやぺんぺん草が、腰を蔽うばかりに繁茂している。

月光が青いひかりで廃屋を浮きあがらせていた。雑草の庭に腰までうずまって立つと、恰も深海の底にいるよ

日蔭者の無情残忍さが、白い痩身が、ゆらゆら、ゆれるたびににじみ出てくる。

「来いッ」弦四郎は叫んだ。「待っていたのだ、この宵を」

「ふふふふ、おれに笛をくれるためか、ふっふふふふ」

「笛は、都合によってはやってもいい」

「……」

「小えんはどこに居る?」

「逢いたいか」

「申せ、武士らしく。女をかどわかして、人質にするなど武士のすることではあるまい」

「狐ならしよう」陰気な笑いで、白頭巾が揺れた。「白狐とことわってある」

「うぬッ! 卑劣な」

「せっかくだが、誇りとか武士道とか、おふくろの胎の中に忘れてきたようだ」

「——もう一度聞こう、小えんはどこだ?」

「笛をもらおうか」

三

この男の痩身は、見かけのままの枯木なのか、昂奮というものを知らないようであった。

侮蔑も恥辱も、白衣に包まれた折れそうなからだには、膳の上の蛇ほどの意味も持たないらしい。

「——きさま、なぜ笛をほしがる?」

「……」

「なんのためだ?」

「何かの為だろう」

「人を殺してまで、奪わねばならぬほどの、名品とも思えぬが……」

「ならば、よいではないかな、くれ、三文で買おう」

「うぬ!」

はじめからまともに話しあう気持はないのだ。弦四郎は語尾からなりと、秘密を捜りあてたいと思っていたが、無駄だった。

「小えんの居場所を、あかさぬつもりだな」

「くどい男だ。それほど惚れたか」

「ばかな、おれとは何でもない女だ。たかが芸者……」

「その、芸者のためにやっきになって白狐を追う奴もいる。ふふふふ、きさまがそれさ」

まっすぐに指さして、

「教えてやらんでもないが、それは、白狐の心ノ臓がとまる直前にとっておこう」

「よしっ」

その一言を、白狐の胸に僅かに残された武士の言葉と聞いたのは、弦四郎が甘かったろうか。

「始めから、そのつもりさ」

いつか——二人の間合いはじりじりと両方から詰めよられていた。

間合い九尺。限度にきたのであろう、双者のからだは佇立した。一寸も動かず、眼が眼をおさえて、風も死んだかと思われる一瞬、

「やーっ」夜気をつんざく気合いはどちらが発したものか、月の面を灼くような火花が、抜き討ちの刃から発した。

錚然たる刃の音は、すさまじく、どちらか一方が折れたかと思われた。が、二人とも、ぴたりともとの位置にもどっていた。

暫し——動かない。

蒼く冴えた弦四郎の額にすーと紅絹糸がひかれた。刃が交わった瞬間に尖先がふれたのか。

それを白狐が見逃がすはずはない。しかし、ふっと腕にのぼった勝利感が、この場合よかったかどうか。

「くたばれ!」

叢が突風に揺れた。凄絶の太刀が、月光を切っておちた。

「おう!」

弦四郎のからだは毬のように白狐の太刀先からはじきとんだ。一間あまり横へ——足が草にふれた。そのまま叢に膝をついたのは、間をおかぬ白狐の追撃を計算にいれてのことだった。

あかざの葉をきらせて、下から掬いあげた——

これも、しかし、数本の草の先端と、白衣の裾を裂いたにすぎなかった。

「ちいッ」と、呻いたのは白狐だった。

白狐はとびすさって、すっくと立ち直っていた。

——互角……

さきにも感じた腕前を、ふたたび、双方で認識した。それは、しかし白狐にとって負けであった。同じ追われる身ながら、弦四郎の脱走に比べて白狐は多くの殺人の下手人である。廃屋とはいえ街中のことだ。いつ役人が現われるかしれない。

漸く、白狐の焦りが剣尖の微動となってあらわれた。

「き、来やがれ！　青二才」

「……」

「お、臆したか、若僧」

すでに、誘いをかける声もかまえる冷静を欠いていた。

弦四郎の蒼白なおもてに、にやりと凄い微笑が掠めた。

ぶるんと剣尖をふるわせるや、弦四郎はその一刀に怒りをこめて斬りさげた。白狐は受けた。が、脛の傷のせいか、どうッと仰のけに転倒している。

瞬間、力のぬけた刀は刀にもぎとられて、宙にとんでいた。

あっと、起き直ろうとした喉もとに、狐四郎の刀はびたりとつけられた。

「白狐――頭巾を剝ごうか」

「う、うぬ……」

「二つ、聞きたいことがある。一つは小えんの居場所、いま一つは笛の秘密」

「……」

「まず、小えんは何処にいる。いえ！」

「……」

「言わぬか、きさまのような殺人鬼には容赦はせぬ」

刀がちくりと喉にふれた。高い喉ぼとけがごくりと唾を嚥む。

さすがの白狐も、あきらめたのか、口を動かしたときだ。

「や、あそこだ！」「おさえろ」わーっと喊声がした。

提灯と人影が、雑草を蹴ちらして駈けてきた。

錚々たる刀の声か、気合いか、死闘が塀のそとへ洩れたにちがいない。

「刀をひかれい、刀をひかれい」

役人が喚いた。近隣の武士たちも出てきていたし、弦四郎も出るところへ出られない身だ。

「この者を縛って貰おう、先日の……」

言いかける言葉を聞こうともせず、

「刀をおひきなさい、話は番屋で」

白狐が――自ら名乗る通り、おそろしい早さで、叢からとびあがった。ほそい脛がまるで、鹿のように、宙を蹴った。

「逃がすなッ」

叫んだ弦四郎の腕をぐいと摑んだ者がいた。町同心だった。

「あんたも逃げないで貰おう」

「何をする！　おれは」

「青江弦四郎、お手配中だ」

四

食事は三度々々きちんとくれた。

だから、小えんは餓死こそしなかったが、不安と恐怖で痩せほそっていた。

――どこかしら、ここは……

土蔵であった。長持や鎧櫃や古びた茶釜、水瓶、のぼり、什器の類が置いてある。あの夜から小えんは、ここにほうりこまれていた。

むろん二重戸で鍵がおりている。食膳は頑丈づくりの老爺が運んでくる。小えんの顔を見ないようにして、膳をおくと、空膳をさげてゆく。一言も口をきかない。唖かと思われるばかりだ。

長襦袢のままさらわれたのだ。夏のことだし寒くはなかったが、連日の着たきり雀で垢づいて気持が悪かった。髪もみだれたままである。

――弦四郎さま、どうして助けにきてはくださらないの……

小えんは祈った。ただ殺される様子がないことだけが、彼女の救いだった。殺すつもりならば、食事をさせるはずがない。

料理屋のものを食べつけている小えんはかなり口栄耀だったが、ここの食膳もひどいというほどではない。猫脚膳の塗りや食器からここは武家屋敷のうちだというのもわかった。

辛いのは毎日二度も三度も責められることだった。いずれも黒い布やありあう布でおもてをかくしているので人相はわからないが、三、四人――武士もいたし、商人

ふうの男もいた。
「――白状するのだ、知っているだけ」
鞭を手にして責める。
「何を言えばいいのです」
「知っていることを」
――何を知っているというのだろう……
小えんはまるっきり見当がつかない。
「きさまは、きよ香と仲がよかったな。柳橋の芸者なかまでは一番の仲良しと聞いた」
それは事実だ。
「そのきさまが、あのことを聞かぬはずはない……」
「あのこと？」
「とぼけるな！」鞭ではめったに殴らなかったが手すれすれに、鼻すれすれに、ひゅっと風を切る。するどい鞭の声に、心ノ臓が破れそうになる。
やはり芸者だし、長襦袢ひとつの姿態が、さすがに非人情の男たちにも、乱暴の手を萎縮させるのだろう。
「――とぼけちゃいません」
おとなしいが、神田生まれの江戸っ子だから気性は勝っている。唇を噛んで頭巾たちを睨めて、
「あのこともこのことも、何もきよ香さんから聞いちゃいません、何を仰有っているのかわかりませんわ」
「――われらのことだ」
角剣菱の紋服を着た恰腹のよい男がいった。
「え？」
「われらの……ちッ」覆面のうちで苦々しく舌打ちする。下手に問えば、語るに落ちて、ほんとうに小えんが知らなかった場合、わざわざ秘密を教えることになる。
彼らは戦法を変えた。
「きよ香が何故殺されたか、存じているか」
「いいえ」
「きよ香を誰が殺したか、その下手人の心あたりはないか？」
「いいえ」
「何も、無い？」
「はい……」
「何故、きよ香は殺された？」
「知りません、だから……何もほんとうに知らないンです」
首をふって武士たちは顔を見合わせる。

「もう一つ聞こう」角剣菱の武士が、大刀の鍔を小えんの膝に乗せていった。「きよ香の持っていた笛……」
「……」
「桔梗の笛は見たことがあろうな？」
「――はい」
「その笛に関して、知っていることをいうのだ。隠すと許さぬ」
「あの笛は、なんでもお父っつあんの形身だとか……」
「それだけか？」
「ええ……」と小えんは真面目に考えた。思いだそうとして、焦った。するどい瞳がその表情を孔のあくように見つめる。
「お父っつあんの顔はよく覚えていないけれども、教えて貰った曲はよく覚えているとか……」
「そのおやじの名は？」
「知らないって……それが悲しいっていってました」
ほっと、安堵に似たため息が流れた。
角剣菱だけは語気も変わらず、
「笛の蟬のことは、聞かなかったか？」
なおも追求した。
「笛のせみ？……なんのことですの？」
「蟬のことだ」
「せみって……あのみんみん鳴く？」
苦笑し頷いたが、それっきり質問を打ちきったのは、ほんとうに知らないとわかったからである。

五

小えんにとっては、この事件ははじめから謎だった。きよ香の死因に、まったく何一つ心あたりがない。さらに、じぶんか弦四郎を殺そうとした忌まわしい手裏剣。身におぼえがないだけに、恐怖は甚しかった。
原因もわからずに狙われるくらい怖ろしいことはない。痴情でも憎悪でも怨恨をうけるおぼえがあれば、身を守るすべもある。見えない敵に、知らぬ理由で狙われるとは、莫迦げたことだし、あまりにも恐怖的ではないか。
見えない敵は、しかし漸く目の前に現われた。ほかにもいるかもしれないが、この連中が主要な面々であることは疑えない。

みんな絹ものずくめだった。恰腹がいいし、痩せている者も、どことなくものいい所作に裕福な暮らしが窺える。頭巾をとれば、いずれも、人に知られた身分の者であろう。その連中がここまで陰険なことをするのは、よほどの理由があるにちがいなかった。

小えんは、ぼんやりしていると不安と寂寥で気が狂いそうになるので、

——弦四郎さまのためにもなる……

質問の分析をこころみていた。

——何を聞こうとしたのかしら……

思いかえしてみると、しかし漠然としている。

笛のこと。きよ香の亡父のこと。きよ香の死因も、その両方の意味を含んでいたし……

「せみ？」

それがひっかかった。

「せみって、蟬……蟬がどうしたというのかしら」

日中はここでも蟬の声は聞こえた。土蔵の中は冷やりとしているが、蜩の、耳を蔽いたくなるような合唱で、八っ下がりの灼けた街すじの炎暑が思いだされる。

「あの蟬かしら、でも〝笛の蟬〟たしか、そういったようだけど」

柳橋の芸者でも一流になるには、三味線、鼓のほかに、笛、太鼓、琴、と一応なんでもこなさなければならない。が、小えんは笛とか尺八とかは習う気がしなかった。

きよ香の吹くの聞いているだけで、だから、笛の蟬、といわれても全然見当がつかなかったのである。

その夜も——

小えんは夕餉を半ば以上残したまま、箸をおいた。逃げだす手だてはない。弦四郎の救いの手をただ待つだけだった。ぼんやりと、もの思いにふけっていると、鍵をあける音がした。

「——あっ」小えんは、入ってきた男を見て、全身が竦んだ。

紗のようなうすい白布でおもてをぐるぐるまきにしている。下三白の、とがった眼だけをのぞかした男。折れそうにほそいからだにまとった越後上布か、白衣で、帯だけが博多の茶献上。

痩せた右肩をそびやかして、じろりと見おろすのも癖だった。

「……」

小えんが、この男に、他の連中とは違い、特に恐怖を感じるのは、ただにその無気味な風貌、妖異な雰囲気のせいばかりではない。

深夜、音もなく忍びこんできて、口をふさぎやにわに抱きかかえた。あまりの愕きに、なかば失神状態のまま大江戸の夜を風のように走った。

星が流れるさまをいつまでも覚えている。耳をきる風の声、風の呻きは、小えんに荒涼たる無人の野を感じさせた。そのときの恐怖が、この男を見ると、ぞっと思い出されるのだった。

白頭巾は、いつも多くをいわない。角剣菱たちのなかにあっても、いつも独りで、別のことを考えているようであった。

その濁った眼は——

たとえば、質問に答えようとする小えんの唇もとを見ていたとしても、他の連中のように期待と疑惑の交った感情ではなく、恋を囁くときもその朱唇の表情は変わらないだろうか、というように、べつのところに立っていた。

それだけに、小えんには人一倍、うす気味悪く肌が戦慄するのだった。

白頭巾のなかから、いまもその眼が、女の襟もとから、胸のふくらみ、腰——と舐めるように這いまわった。裾を、襟を、かきあわせて後ずさる小えんからふっと目をそらせて、白頭巾は呻くようにいった。

「——いま、弦四郎を斬ってきた……」

淫獣

一

咄嗟には言葉の意味がのみこめなかった。
え？　と、聞きかえそうとした小えんの眼に、白衣の裾を染めた血のいろが、恐ろしい現実感をともなってとびこんできた。
「なんと仰有って？……弦四郎さまを……」
「ふふふふ、どうした？　ふふふふ」白頭巾を透して、冷ややかな含み笑いがもれる。
弦四郎さまの血？……
はり裂けるばかり瞠目した。
白頭巾は、そんな小えんの驚愕が愉快でたまらぬように、尖った肩をゆすりながら、せまい土蔵をいったりきたりした。裾の血は、紫蘇の葉をしぼるように、白衣にひろがり、脛をしたたっていた。
――違う！
安堵は、しかし勝ちほこったような白頭巾の態度で、もろくも押し流されてしまう。
「あ、あの、ほんとうに弦四郎さまを」
「斬った」ぶすっといって、血の足をとめ、彼はふりかえった。「哀しいか？」
「ほ、ほんとうに、弦四郎さまを？」
「哀しいか、哀しいだろうな、ふふふふふ、ふふふふ、哀しければ髪を切るか、尼になるか、ふふふ」
がばッと、小えんは突っ伏した。肩がはげしく波打ち、耐えきれぬように腰がうねった。嗚咽はあとからあとから涙を誘って、小えんは身も世もなかった。
――弦四郎さまが亡くなった……
それは恋に終止符をうたれたというほかに、救いの、一縷の望みが断たれたことの悲しさもあった。
白頭巾のなかから、濁った目が、凝っとその姿を見ていた。その目は、ひとの哀しみを見ることの愉悦に酔っている。

――泣け、泣け、いくらでも泣け……
がっくりと根のくずれた髪がふっと寝みだれ髪のなまめかしさを思わせた。ほそい頸に後れ毛がちりちりふるえている。女の恥じらいが、白頭巾の胸にかすかに別の感情をもたらした。
彼はじぶん自身、説明のつかぬ感情が、四肢を蠕動させているのを知った。骨と皮ばかりのからだに、何かが音を立てて流れた。皮膚の下にうごめく虫――
それを慾情の淫虫と知ったとき、三白眼に兇暴な光が点じた。
あわれなほどうすい肩、ほそい腕、しなやかな胴をしめつけた伊達巻から、そこばかり爛熟したような腰の曲線――
嗚咽にこたえて素足が何かをもとめるように動く、伊達巻がそらとけていて床を掃いている。
くーっと、血のかたまりが肺ノ臓からこみあげてきた。
「な、泣くな！」彼は思わず叫んだ。「弦四郎のために泣くのか、きさま」
狂ったように小えんの髪をつかんだ。そのとき、彼の全身は妬心の炎に包まれていたのである。頭髪をひきぬかれる痛みに、ひいいッと悲鳴が奔った。
「泣くのか、泣くのか、弦四郎のために泣くのか、な、泣かせねえぞ、泣かせてやるものか！」
ぐいと小えんの顔を仰向かせて、かぶりつくように唇をおとした。顔を左右にふって拒む小えん。
唇が唇を追った。追いながら、片手は胸のふくらみに爪を立てている。年余も切ってないような五指の爪が、野獣のそれのように、長襦袢の上から乳房を押え、むしりとらんばかりだ。
小えんは、悲鳴も、もはや出なかった。堅牢な土蔵の中、という気持も抵抗力を失わせていたし、何よりも野獣化した白頭巾の四肢が声を奪った。
――ああ、駄目！　弦四郎さまッ。
声なき声が、助けをもとめて、次第に力が弱ってゆく。

二

恐怖で気が遠くなるほどの小えんには、そのとき重い

音をたてて戸が開いたのもわからなかった。
白頭巾の男は、ぎょっとして、「誰だ！」噛みつくようにふりかえった。
「――あたし」女の声がした。ぼってりと肉ののった大柄な女がのぞいて、「おや、派手だこと……」
「お藤！　きさま、何しにきた」
「遊びにね……」と、いいながら臆面もなく入ってきたのは蛇つかいのお藤だった。「暫くおまえさんの足が遠のいたから、どうせこんなことに違いないと思って、わざわざ来たのさ」
「帰れ！」
「ごあいさつだこと」お藤はそこらの箱にひょいと腰をのせて、「新しい女の顔も見ずに帰れるもンかね。ちょいと挨拶させてくださいな」
さすがの白頭巾も図々しく小えんを押えているわけにはゆかない、怒気で、目のまわりが赤くなった。しぶしぶ身を起こしたが、片手は小えんのからだを引きつけたままだった。
指先はまだ乳房にかかっている。痛みと不快感が、どす黒い液体となって、皮膚に浸透した。それは一種の魔力を持っているように、乳房をしびれさせ、小えんの自由を奪った。
小えんは逃がれようとして、わずかに、からだをよじったが、すぐに力がぬけた。同性の目からおもてをそむけて、苦しげにあえぐだけだった。
「へえェ、いい女だこと。芸者衆じゃない？」お藤は、わざと大仰にいいながら、のぞきこんだ。「美い玉だよ。こんなのが両国の掛け小屋に出ると、蛇のお藤なンザ、あがったりさ。やっぱりおまえさんは目が高いこと」
「つべこべ吐かずと、帰れ」
「いやだよ」
「なに、こやつ……」
「なんだい、こんな女に男を寝とられて、お藤が尻尾をまいて帰れますかね、べら棒をいっちゃいけないよ」
白頭巾の手が、はげしくお藤の頬にとんだ。
お藤はちょっと横をむいて、朱唇をとがらしたが、腰をあげようとしない。その頬にみるみる手のあとが赤く腫れた。
「ちいッ、強情なやつめ……」
小えんは急に抱きあげられた。この痩軀のどこにそん

な力があるのだろう。
痴呆のような無気力のからだが、あの夜の恐怖をよみがえらして戦慄した。
「ちょっと席を移ってもらうぜ」
段梯子をあがると、どさっと投げだした。
むろん、はね起きる気力もない小えんをふりかえりもせず、白頭巾はとんとんとおりると、
「お藤、帰ろう」
と、頭巾の顎をしゃくった。
「いやだよ」
「なンだと」
「へんだ。あたしに現場を見られたからって、聖人がることアない。おやりよ、男らしくさア」
「ほざけ、おれア行くぞ」
「いやだよ、行かせない」
お藤はきらっと鮒のような眼をひからすと白頭巾の袖をつかんだ。
「——はなさないのか」
その言葉は、頭巾の布のなかで、意味のわからぬ呟きとなって消えた。お藤のからだが何を期待し、いつもこうした痴話喧嘩のあとで、ふたりがどういうかたちで満足するかは、すでに飽きるほどくりかえしてきたことであった。
お藤は、男の手が腕にかかった瞬間、眼を閉じた。拒むように身を固くしたのは、年増女の情感が血を逆流させたからである。
そのまま、白頭巾の抱きよせる胸のなかに身をいれ眼をあけた。
白頭巾は、したたるような媚のある眼が、じぶんを迎えいれようとしているのを見た。
頭巾の下半面をあらあらしく剝いで、血を舐めたような紅い、うすい唇をあらわにしたのは、お藤の指だった。

三

「——見ているぜ、上から」
この男らしくもない言葉だった。お藤は身をくねらせ、吹きあげるように笑った。
「見せてやろうよ」

痙攣肉の唇へ、冷酷な唇がふれた。その瞬間、堰をきったように、はげしい情熱の氾濫が、お藤のわずかに残っていた羞恥をかなぐり捨てさせた。
白い腕は蛇のように男の頸へ巻きついた。細いからだを責めるように身もだえして、唇を吸った。鮮烈な血を吸いあうような、ながいくちづけのうちにふたりは絡みあって倒れた——
帷子の裾がめくれ、白いはぎに、漸く血が凝固したほそい男の脚がからんでいる。
火をつければ、昼でも夜でも、燃えあがるお藤のからだを、白頭巾はよく知っていた。濃厚な化粧のなかで男はむせんだ。嬌声が奔った。お藤は白いのどをのけぞらして淫らなあえぎをはじめた。
燭の火がはげしくゆらぐ。
お藤は五体の炎のようにしながら、うるんだ眼で二階ののぼりくちを見ている。ゆたかな肩から胸への裸身は、らんぼうに襟をはいであまりにも淫らであった。さす潮ひく潮の快楽の報酬がべっとりと油汗を顔一面ににじませて、燭の火にぎらぎらとかがやいた。
——見るがいい、見るがいい……
身もだえしてあえぐお藤の歓喜は、いうまでもなく、二階の小えんを意識することによって倍加している。が、さいごの強烈な恍惚がきたとき、お藤は小えんを忘れた。その瞬間に、男の口からも殴りつけるような歓喜が奔っていた。
淫らな夜気が動きを失って澱むと、燭もまた、静かに青い炎を垂直にあげた。黒いすすが、まっすぐに天井をめざした。お藤の白いはぎは、ゆるやかな腰のうねりとともに床をなでていた。
藻のようにひろがった髪のなかから手をひきぬいて、男は身をおこした。立ちあがるまえに、彼がしたことは下半面の布をもとへもどすことだった。
男が、ことのあとで、極端に不機嫌になることも、またお藤の知悉しているところである。
けだるい余燼のなかにお藤は身を横たえていた。はだけた胸も裾もなおそうともしない。
男が影のように——燭をゆらめかしもせず土蔵から出てゆくのをぼんやり見送っていた。
彼女は春日の草むらに午睡をむさぼる牛のように横たわっていた。そうして、一年ほどまえ、彼に手ごめにさ

れた夜のことを——それが最初であった——懐しむように思いだしていた。

潮がひくように肌の余熱は徐々にひいていった。

満ちたりた表情で、お藤は、

「もういいよ、降りてお出でな……」と、二階へいった。

返事はない。あろうはずはなかった。聞くに耐えない男女の狂った声に耳をふさぎ、目を蔽って、淫びな嵐の通過をひたすらに待った小えんだった。

お藤のような女には信じられない。

「降りてくるがいいよ。もう済んだから」と、またいった。「目の保養をしたからって、木戸銭をとろうって言いやしないよ」

依然として返事はない。

お藤はこの濡れた肌の匂いをだれかに嗅がせたいのだ。胸のときめきに、ひとの手を触れさせて、——ほらね、といいたい。

彼女は陶然とした顔で、のろのろと段梯子をあがっていった。

——きたない！

小えんは、むさいもののように鼻口を蔽った。

お藤にはその意味がわからなかったようである。彼女は、親しみをこめて笑いかけた。そのとき、はじめて、お藤をはっきりと見たのである。灯がゆらめいていたが、その眼もとが、誰かに似ている、と思った。

——逢ったことがあるのかしら……

ふっと、その想いが消えた。お藤が笑いをやめて、

「お出で」といった。「逃がしてあげるよ」

「え！」

「ごほうびにねえ、逃がしてあげよう」

淫らな風も、霧散した。お藤の背から後光がさすかと思われた。

小えんの胸は烈しく動悸をうちはじめた。

「ほんとう？　ほんとに逃がしてくださるの？」

「ほうびだといったろう。目の保養だったか、毒だったかしらないが、あたしだけがさんざん愉しんで、おまえに指をしゃぶらせていたのは、やっぱり後味が悪いやね」

じぶんで筋を通しているつもりなのか、

「どこのどなたか、名前は聞きたくない。重荷になるのはいやさ。逃がしてあげるから、好きな男のところへ行くがいい」

言葉はすてばちなひびきを持っていたが、にっと笑った顔は親しみがもてる。

小えんは、その目もとに、きょ香の特徴を見い出して、あっと思った。誰かに似ていると思ったが、目もとはきょ香にそっくりだったのだ。

四

久しぶりに充足した肌だった。お藤は駕籠の中でも双の乳房を抱くようにして、余情を愉しんでいた。駕籠の揺れはこころよい眠りを誘った。

両国橋を渡って、因果物の掛け小屋のあるところから元町に入ってきたとき、

「駕籠をとめろ！」

横柄な声がかかった。

うつらうつらしていたお藤は、急に駕籠がたたらをふんで止まったので、がくんとなって目がさめた。

「何をするンだい！」

その目に、御用提灯がとびこんできた。

「女か？」

「おや……」と、お藤は深川の鼻つまみ、櫓下の金五郎の顔を見た。「なにか捕物でもはじまったンですか」

「なんでえ、蛇の姐さんけえ、いまごろ、どこの帰りだえ」

「きまってるじゃないか、女がこんな時駕籠でいい気持になっているのは……」

「しっぽり濡れての帰りけえ、ちょっ。たまにはこっちにも極楽を味わわしてくンねえな」

「おあいにくさま、春狂言の中村座で、空いた席がないってね」

「立ち見でもいいやな、え」

金五郎は十手で、襟をひらこうとした。

「おふざけでないよ、バカ」

乳いろのふっくらした胸のまるみがちょっとのぞいた。

「金五郎、怪しいやつか？」せかせかと誰か歩いてきた。これもお藤は面識がある。同心の篠田伴内。「お藤ではないか」

「篠田さま、捕物ですか、また」
「うむ」
「盗っ人でも立ちまわったンですかね。あたしもお蛇ちゃんを使ってお手伝いしましょうか、青縞五貫文じゃア馬鹿くさいけれど……」
「怪しいやつを見かけたら、すぐにおとどけするンだ」
「はいはい……」
気のない返事に、篠田伴内はふりむいた。黒い唇をひん歪げて、
「おい、あんまり上役人を舐めるんじゃねえぞ、お目こぼししてやっているのを何だと思ってやがンだ」
「あら……蛇はよく馴らしてあるから、ご近所に間違いは」
「とぼけやがンな」
「だって……」
「おれの目を節穴だと思っていやがるのか、てめえが御禁制の唐渡りの阿片を嚥んでいるのは半年も前から知っていることだ」
「旦那、それは……」
「まあいい、今夜はこれくらいで許してやる。帰れ」
「旦那、勘弁してくださいまし、あたしゃ、あれを嚥まないと、気が狂いそうになるもンですから」
「いずれ、ゆっくり聞かせて貰おう」伴内はお藤の盛りあがった胸を一瞥してから駕丁に顎をしゃくった。
同心が岡っ引をつかって庶民の秘密を捜るのも、犯罪捜査に便なばかりではなく、役得の甘い汁を吸うためであった。証拠を握っても、すぐに摘発するようなことはない。じりじりと、いびって、金にもし、相手が女なら肉体の慾望もみたす。
人妻や後家の肌もなぶってきた篠田伴内にとって、蛇をつかう女——という異常な興味を、その頽れた肌の沈んだいろに感じていた。
まだ蛇に馴れぬころ、お藤は腕を噛まれた。幸い毒は持たない青大将だったが、疼痛が連日つづいて苦悶した。
それを見かねて阿片吸飲を教えてくれたのが、剣呑み手品の唐人十官だった。間もなく十官は彼女を取り巻く何人かの男の一人となった。阿片を入手するのに蛇つかいの収入ではたりなかった。傷が治癒したときは中毒していたのである。

十官がある男に殺されてからも、お藤は阿片から離れきれなかった。いつか秘密のルートができていた。酒と男と阿片と——お藤の生活は荒んでいた。
その多くの男たちのなかで、白頭巾の武士の持つ虚無的な肌ざわりが、最もよくお藤の好みにあって、彼女を十二分に陶酔させていた。
「——怪しいそぶりの奴を見かけたら、すぐに注進しろ」うしろから伴内が声をなげた。「おれと同じ年配だ。月代の生えかけた浪人ふうのやつだ」

五

よほどの大盗か、捕物陣はものものしかった。一つ目橋を渡ってお船蔵よこの長屋へつくまでに、お藤は三度も、誰何された。
「ちょッ、莫迦にしているよ、各人あつかいするのも、いい加減にするがいいや」
せっかくの陶酔もさめいた。頭がぼんやりしている。阿片がきれかかっている。一服吸ってぐっすり寝るのだ。
格子戸をあけて、暗い土間へ一歩入ったとき、ふいに、お藤は抱きすくめられた。
「あ……」
「静かに」
口に男の手が蓋をした。もがくからだを、そっと部屋に運んで、その声は、
「おれだ」と、ささやいた。
「……」
「青江弦四郎だ、声を立てないでくれ」
そっと手がはずされた。真っ暗ななかで、二人は膝をつきあわせて坐った。
「もう知っているだろう、おれは追われている」
「では、おまえさんが」
「そうだ。つまらぬことだが、おれを捕えたいらしい」
語尾は自嘲にかすれた。
「何をしたのかえ、一体」と、お藤は、男の膝に手をかけて、身をすりよせた。「あのときは、お武家の喧嘩だと思ったから何も聞かなかったけれど、こんどは町役人じゃないか、え……」
ことの重大さに、いつもの伝法さもかげをひそめて、
「一体、何をしたのさ、いろ女にやる金かえ、それと

も」
「盗みなどするものか、これでも旗本の端くれだ。へんなことから人殺しの疑いをかけられてな……」
この女に詳しく話しても仕方がない。むろん、白頭巾との関係など知らない弦四郎だ。
「誤解されて、この始末だ」
「ほんとうにその、下手人じゃないのかえ」
「おれは嘘はつかぬ。その哀れに死んだ男は……おれが殺さねばならぬ理由がない」
「それなら、ちゃんと出るところへ出てさ、申しひらきをすればいいじゃないか」
「そう思った」
女の唇が触れんばかりに迫っているのから、頬をひいて、
「だが、疑いは故意にかけられたものなのだ。悪いことにおれを陥れようとするものが町奉行所にいる。お白洲へ出るまでに、抹殺する手段が講じられるだろう」
「でも、それじゃア……」
「叱ッ」
足音がした。誰か溝板を踏んで近寄った。

「――お藤！　姐御！　もう寝たのかえ」岡っ引の金五郎だった。「姐はん、おれだ、御用のすじだ、起きな」
――入ってくるか？
弦四郎は動かない。入ってくれば抜き討ちにするだけだ。
いつかお藤は弦四郎にしがみついていた。固く固く、背を抱いた腕に力をこめて、頬がぴたりと男の胸についている。弦四郎の鼓動を聞くように。
安物の鬢付けの臭気が、むれたって、弦四郎は闇のなかで眉をしかめていた。そっと女の背に手をおいて――それは離そうとする意志を示したが、お藤はますます重心を倚せてきた。
「――眠っちまったのけえ」
金五郎は十手を叩いた。
鍵などないから、入ろうと思えば入れる。真実、御用のすじなら横柄にどなるはずだ。そのまま、あきらめて立ち去ったところを見ると、お藤の肌に惹かれてふらふらと立ち寄ったのだろう。
「――いったようだ」
弦四郎はお藤を離そうとした。が、盛りあがったその

胸が、女の弾力をほこるように、弦四郎の胸をおした。手は背中にまわしたまま、
「いるかもしれないよ、まだ……」
「いや、もう大丈夫だろう、灯をともしてくれぬか」
「いやだったらッ」
思わず声が大きくなった。それは、お藤の心をさらけだしたものだった。彼女は、肌がふれたときから、さっきの余燼をかきたてていた。
――このあいだは逃がしてしまったもの、こんどは逃がさないよ。

六

好機だと思えた。麻薬にむしばまれたお藤のからだは、慾望の限度を知らない。白頭巾の飢えた野獣にも似た、愛撫をうけてからまだ半刻となっていない。陶酔はまだ肌に揺曳しているのだ。にもかかわらず、むこうからとびこんできた弦四郎――
美貌の旗本と肌をあわせたい、というあこがれもたしかに、慾情に拍車をかけていた。
「おまえ、あたしを嫌いじゃないって、いったじゃないか」
「……」
「今夜はもう邪慳にしないでおくれよ、ね、そりゃ、お旗本の殿様に抱かれるなんて冥加にあまるけれど、……惚れちまったンだ、可哀想だと思って、ね、ね……」
「――おれは」と吐息していった、「旗本だの何だのと思いあがった気持はない。先夜のことも悪かったと思っている」
「それなら！」
「いや、いまはとてもそういう気持になれぬのだ。追われて……ほかに頼れるところはなかった」
「……」
「ほかにこの身を隠すところがなかったのだ。六尺にも満たぬからだをな。そちが、こころよく入れてくれるかどうか案じていたのだ、済まぬ」
「謝ってくれと、いつ言ったのさ。あたしがきらいなのは、おまえのその義理がたさなンだ。恩だとか詫びだとか、なぜそんなに他人行儀でいたいンだか、あたしとひと晩だって他人でなくなるのがいやなンだろ……お殿様

ぶってなンだい！」

吐く息が炎のようであった。お藤のからだはそのころから、激情にゆすられるように、時々痙攣を起こした。

「きらいだよ、きらい！　きらい！」

拳をかためて、弦四郎の胸をたたいた。弦四郎がその手頸をにぎりとめると、お藤は悲鳴のようなうめき声をあげて、しがみついてきた。男のからだが硬直するのがわかった。

「げ、弦四郎さまッ」

お藤の手は、肩を、背中を、何かを捜るように動き、腰へすべってきた。

「よせ、お藤……」

弦四郎の男が目ざめたのを、燃えあがった女体は敏感に識った。

「お、お、おねがいよ、抱いて！」

吐く息だけではない。女体は火のようになっていた。狂ったようにしがみつかれて、弦四郎は倒れかかって、うしろに手をついた。

女の手を腰に感じると、弦四郎は二つに一つを選ぶべきだと悟った。女の気持はたしかに嬉しいのだ。が、やはり何かが阻む。何かが、彼をけものにはしなかった。

弦四郎は女体をはねのけようとしたが、汗で掌がすべり、のけぞった。女の朱唇がしゃにむにふさごうとする。

「お藤、だめだ……う」

唇は唇をさぐりあてた。かわいた喉から火を吹くようであった。かちかちと歯が鳴った。歓喜が女のからだに走った。

弦四郎が異様に感じたのはその刹那である。お藤のからだは、戦慄というにはあまりに荒く波だっていた。発作をおこしたように、足がたたみを打っていた。

——惑乱した？……

と、感じた。

「どうした？」

ゆすぶる弦四郎にしがみつこうとしながら、手の力を失って、ずるずるとすべりおちた。

「あ、あ、ああ」いまにも殺されそうな、死の断崖を滑りおちるような、呻き。ばたばた畳を叩いて、転げまわっている。

その声が外にもれるのが気になりながら、弦四郎に

は、わけがわからなかった。

「た、たばこを、たばこを！」

「たばこ？」

のたうつ女の苦しみが、身の危険を忘れさせた。

彼は行燈を探し、燧石をまさぐった。火口の火を燈芯にちかづけるあいだ、帷子をはだけた白い姿体がのたうっているのが視界にとびこんだ。すすけて崩れた壁に手が足が、大きく写った。

胸もはだけ、裾はひろがって、もりあがった乳房が、ゆらゆらゆれる。内ももはほとんど奥まで見えた。お藤は掌にあまるほどの、乳房をむしるようにつかんで、呻いていた。

「あ、あ、たばこを、早く、あっ、あ」

くすんだ肌のいろが、ゆたかな姿体とちぐはぐに、病的なものを——はじめて感じさせたのである。

苦悶にゆがんだ顔は一面にあぶら汗を噴きだしていた。髪が藻のようにひろがって、畳を掃いている。地獄の苦しみだった。あれほど情けに濡れていた唇はからからにかわき、干割れて、血がにじんでいた。

「たばこを、たばこをとっておくれ」お藤はあえぎあえぎいった。

屋形船のなかでみた長い煙管を渡すと、彼女はさっと咥えた。

それは、雁首が奇妙にひろがった、珍しい煙管だった。芋虫のようにからだを転がして、お藤が長火鉢の小引出しからとりだしたのは小さな壺。その壺に指をつっこんだ。煙草ではなかった。何やら青黒いいろの練物だった。行燈の火でそれを焙って雁首につめると、火にかざす。

じ、じ、じ……はじけて焦げる音がした。青白い煙がゆらゆらと立ちのぼるにつれ、異様な臭気が部屋にただよいはじめた。

大きく、一呼吸、二呼吸……漸く、お藤の顔に安らぎが見えてきた。眸は弦四郎を見ていながら、虚ろだった。

その臭いと、その表情とは、最初に屋形船で知ったものである。

——この女は……

阿片の話は、いつか船載知識として聞いたことがある。現実感のない、遠い国の話として脳裡の片隅におし

やられていたのだが。

——毒だという。ふしぎな安楽をもたらしはしても、年月を経るにしたがい、からだをむしばんでゆくという……

弦四郎は、かなしげにお藤を見た。

胸のはだけも、裾のみだれも、すでに女の意識にはないらしかった。腿まで露出して、なげだしたはぎのいろも、生々とゆたかに見えた胸の隆起も、不健康な、くすんだものだった。

——この女は麻薬におかされている……

異様な静けさがきた。夏の夜気が、騒ぎのおさまった長屋の一室にも浸してきた。弦四郎は、恍惚と麻薬の世界に身をゆだねた女から目をそらした。

戸外の気配に耳をかたむけた。あまりにもお藤の生活とかけ離れている。麻薬の陶酔を倶に味わうには、彼にはしのこした仕事があった。

宵の稲妻

一

爽やかな冷気が、乳いろに流れこんでくる暁に、青江弦四郎は長屋を出た。おぼろに見るお藤の顔は、まだ深い眠りのなかにあった。

哀れな女だ……救えるものなら救ってやりたい。が、いまの弦四郎は、おのれの身を守るだけで精一ぱいではないか。

自身番や木戸にはまだ、夜来の目明し、手先の姿が見えた。

弦四郎が、その日昼すぎまで眠りをむさぼったのは二つ目すじの弥勒寺境内。本堂の縁の下だった。途中、八百屋の軒先で拾った腐りかけの瓜を二つ割にして近くに置いたのは毒虫の注意をそらすためである。

暑い日だった。縁の下はしかし奇妙な涼しさで彼の眠りを助けた。昼をかなりすぎてから、弦四郎は起きた。

両国橋附近は捕吏の目があるので、本所を小梅村のほうに遠まわりした。

食事は法恩寺門前町で済ませた。合力をうけた銭が意外に多く、二朱銀、一分銀など小粒でまだ残っていた。ここで笠も買った。昨日までの笠とは違うかたちをもとめたのは、もとより追捕の目をくらますためである。

扇子売りの声もけだるい七つ刻(午後四時)、ただれるような西陽のもとを、彼が訪れたのは下谷練塀小路の木谷孫左衛門の屋敷だった。

笛を流して白狐を誘いよせる手段はもうくりかえせない。

と、すると、孫左衛門の不審な点に食いさがることが、残された方法だった。

「——おお、無事だったか」

孫左衛門は、目をまるくした。

「無事?……いかにもこの通りですが。拙者の危難をどうしてご存知で」

「ん? いや、その……おぬし、昨夜は矢ノ倉の幽霊屋敷で誰ぞと決闘した上に、役人を三人もけがさせたと」

「不当におさえようとするので、やむを得なかった」

「うむうむ、だが、脱走は重罪じゃ、どうするつもりかな」

「さア、どうにかなるでしょう」

「他人事のようにいうな。そちのことではないか、家名を汚し、あまつさえ……」

「あいや」と、笑いながら、弦四郎は手をふって遮った。「本日、伺ったのは、お説教を聞くためではない」

孫左衛門のほうも、聞きたいことは別にあったのだ。

「そちは、いまどこにいる? 隠れ家はどこじゃな」

「それを聞いて何となさいます」

「ん……それは、おぬしの身を案じるからではないか、萩乃も心配しているわい」

「案じて頂いてかたじけないが、あいにくと隠れ家というものはありませぬな、ときには辻番に泊めてもらいます」

「辻番に! お尋ね者がか?」

人を食った答も、はじめから嘲弄する意図だとは、孫左衛門気がつかないらしい。

「しかし、何としてあの笛師を殺害したのじゃ、聞けば庄吉とやらいうではないか、まさか芳町へんのかげまでもとりおうてではあるまいがな」
「貴方様とは違います」
「こりゃ、何をいう。冗談ではないぞ、そちは人殺しの大罪をおかしているのじゃ」
「てまえが殺したのではない」と、いってから、凝っと孫左衛門の顔を見据えた。「てまえを陥しいれようとした者のいいふれたことだ」
「そちを？……」
「その者の名はわかっています」
「え？　だ、だれじゃ、そのような企みをするとは。そ、そやつが、笛師を殺したのか」
「別人です」
はじめて、弦四郎は沈静な顔を庭にむけた。陽に灼かれる青葉の照りかえしに、弦四郎の顔は蒼かった。
「――何が何やら、いっこうにわからぬ話じゃが……」
「そうです。てまえも、この二つの関係がどういうものか考えているのですが」
「何かしらぬが、それは、あの笛のせいではないかな。合だろうが」
「なに！」かっとなった。孫左衛門の律儀の看板のような顔が朱にそまり、怒気にふくれあがった。
「なに、なんといった、儂の親切を、きさま無にするとか」
「そちらの罠にはかからぬ、ということです」弦四郎は微笑を消さずにいった。「萩乃どのはいかがなされている」

二

「――萩乃がどうしたと、萩乃は護国寺に参詣にいっている。山内の富士参りじゃ」
「萩乃どのは萩花の笛をお持ちだった……」
「なに！」
「そう一々歯をむかれずともよい。てまえと貴方では勝負にもならぬ腕の相違だ」
「……」
「貴方は年の功にも似ず間違いをおかした。それは、尾花の笛を始めて見た、といわれたことだ。萩乃どのが、

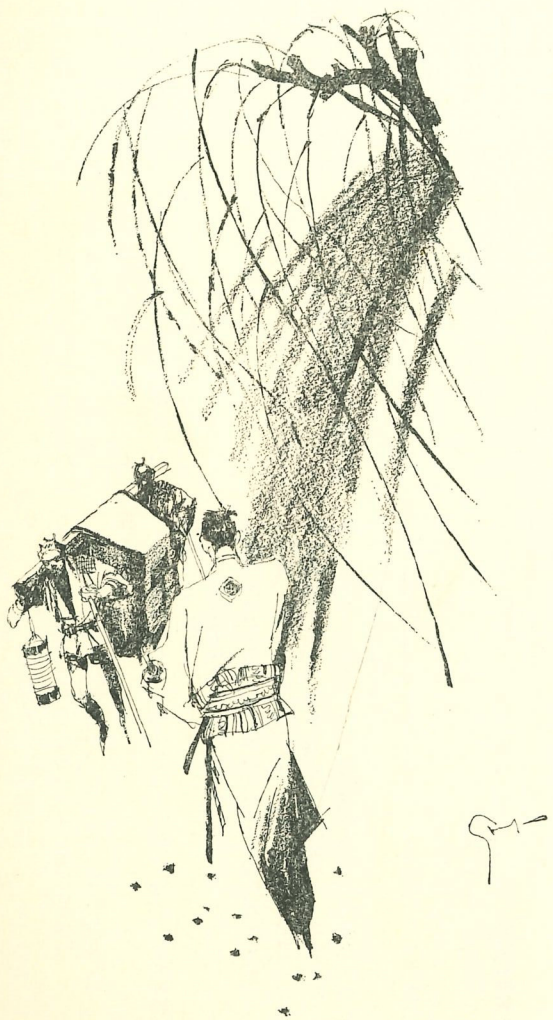
ほれ、尾花の笛とやらいうやつよ。あの祟りだぞ」
弦四郎のおもてにふっと微笑がきざまれた。漠然と、その言動に不審をおぼえていたのが、
――やはり、何かある！
「――の、儂がいうた通りであろうが、あの笛は魔性を秘めておる。処分しなさい」
「……」
「どれほどの愛着があるかしらぬが、決断したほうがよろしかろう、そこにお持ちか？」
「……」
「尾花の笛はどこにしまってあるのじゃな」
「ここに」と、弦四郎は腹部のところを叩いていった。
「いつも肌身につけています」
「それはあぶない」
「なぜ？」
「危険じゃ、物の化が乗り移ろうぞ。あぶないあぶない。さ、儂に預けなさい、早急に行者を呼んでお祓いをして……」
「せっかくだが、てまえは、そのようなものを信じませんな。もっとも、お預けすれば、そちらにとっては好都合だろうが」
実家から持って来て十五年ものあいだ、愛玩していたのに。その萩花の笛はどこにある？」
逆に脅迫されているように、孫左衛門はたじたじとなっていて、
「し、知らぬ。多分萩乃が……」
「萩乃どのはうかつにも落とされた」
「げッ」
「てまえが拾った。これだ」
懐中からだした紫の袱紗から、尾花の笛と萩花の笛がでてきた。
「きさま！」
ぱっと、手をのばすのを、ぴしっと、二管の笛が払いのけた。弦四郎は笑いながら膝を起こしている。
「もうあんたには瞞されぬ。律儀者の勘定方か。全く世間は盲千人だな」
侮蔑を残して立つと、じろじろあたりを見まわしてゆっくり出ていった。
歯ぎしりして見送っていた孫左衛門は、中間に後を跟けるように命じた。中間はすぐとびだしたが、はじかれたように戻ってきた。

「逃がしたか？」
「逃がすも何も、へんでございます、本多様の露路に入りました」
「露路？　あそこは行きどまりではないか」
孫左衛門は思案していたが、
「――そうか、うむ」膝を折って、「多助、町駕籠を呼べ、それからささまは……」何やら耳うちして、にやりと笑った。
孫左衛門の駕籠が地熱の残った街をとんでゆくのを、弦四郎は軒かげを拾うようにして追った。
――何処へ行くのか？……
尾花の笛のみか、萩乃の笛まで所持していることが孫左衛門を驚愕させたのだ。
早駕籠の行く先は、笛と関係なしとしない。笛の謎がわかれば、きよ香殺しの真相も、そして、白頭巾の正体もわかる。そこに小えんを救う鍵があるとも、弦四郎は思った。
小えんはそのころ第六天うらに帰ってきて、駈けつけた武平たちと、
「弦四郎さまはどこにお出でなのかしら……」
と、案じていたのだったが。
駕籠はお成道へ出た。広小路から三つ橋を渡った。
――山内へ入るのか？
と、思ったとき棒鼻が左へむいて仁王門前町をぬける。
茜に染まった入道雲をうつした不忍池が左手にひろがった。池にはいま、白い蓮の花が盛りだった。弁天橋に往き来の人影も少なくないが、涼みの男女が増えるのはこれからだ。
――水茶屋で誰かと逢うのか？
その予想も裏切られた。駕籠はそのまま池の端をお花畑のほうへ走ってゆく。
――谷中だな……
八軒町へ入って突きあたりに感応寺の裏門が見えた。まさか墓参ではあるまいと思ったが、どこへ行くつもりか。左へ行けば日暮しの里から道灌山。右へ芋坂をくだれば根岸、うぐいす谷へ出る。
駕籠は右へまがった。
――根岸になんの用があるのだろう、笛の謎がいよいよとけるか！

芋坂にかかったとき、漸く陽は沈んで、あたりはたそがれてきた。
坂の下はいわゆる新堀。荒川へ注ぐ小川の流れ。その土橋のあたりはもう薄墨が澱んでいる。
江戸もこのあたりまでくると、もう郊外の感じが強い。蕨蚊がぶんぶんしている道だった。
――おや？
弦四郎は、ふと聞き耳をたてた。
暮れなずむ野の果てから流れくる笛の音が……
「野風の曲だ！」
愕然とした。曲ばかりではない。
「あの音……あの淋しい音いろは……花笛だ、花笛にちがいない！」
誰が吹いているのか、すすり泣くような野風の曲。
宵闇が次第に濃くなるなかだった。植木屋か、囲いものの寮か、次第にふえる星の光のように、懐しい灯がちらほら点りはじめた。かなしい笛の音は、その灯を恋う孤独の声だった。
「花笛……誰が吹いているのか？」
弦四郎は焦燥を感じた。
左手はずっと広い感応寺（後に天王寺と改称）の境内。右手は上野のお山である。土橋をわたれば根岸の里につづく金杉新田が、茫洋とひろがっていた。
笛の音は、むせぶがごとく、訴えるがごとく、宵闇に流れてくる。弦四郎は笛のぬしを探したい誘惑を感じた。
「笛か、駕籠か……」

三

孫左衛門を乗せた駕籠は、そのあいだにも土橋を渡っていた。
「――ここじゃ」
根岸お行の松に近い田圃のなかに、武蔵野のおもかげをしのばせる雑木林の一かくがある。大分限の囲いものでも住んでいようという、瀟洒な寮ふうの建物の前で、駕籠をとめさせた孫左衛門は、腕木門をくぐって入っていった。
――ここか？
弦四郎は大欅のかげから見まもっていた。



——あるいは小えんがとじこめられているかもしれぬ……

月は隠れている。黒雲が低く、迅くむくむくと動いて、星の光を浸していた。雨気をもよおして、冷ややかな宵風が颯ッと欅の梢をゆすった。

エイホッ、エイホッ——と、また息杖の声が聞こえてきた。

小田原提灯がぶらぶら揺れながら近づいてくる。

——来たのは、誰だ?……

大欅のかげから見まもる目があるとは、知ってか知らずか、駕籠は腕木門の中へ入っていった。

——誰であろう?

その男の素姓を知るだけでも、謎の解明には役立とう。弦四郎は駕丁を詰問しようと思った。空駕籠が腕木門を出てきた。

欅のかげからとびだそうとした弦四郎は、はっと身をひいた。また駕籠が——それも二挺、提灯のあかりが競うように揺れて走ってくる。

——寄り合いか……何が始まるのだ?

これは腕木門の前でとまった。客が何やら命じる低い声が聞こえ、提灯が消えた。

空には星かげもすでに見えず、黒い風がこの客の風貌を隠した。

弦四郎はあきらめて、田圃を見わたした。野良帰りの百姓の影もない。遠くを提灯が二つ三つ通ってゆくのが狐火のように見えるだけだ。

弦四郎は道へ出た。提灯がついた。二つ——空駕籠がもどってくるのを、見まもったまま片懐手をしている弦四郎だった。

駕丁は、ぎょっとしたように二、三間てまえでたたらを踏んだ。弦四郎の佇む影が、田圃のなかの路だし、無気味なものに見えたのである。

「お、お武家さまで」と、先棒が哀れっぽい声でいった。このあたりはどうかすると辻斬りが出る。近頃のように不景気になると、気の強い駕丁も、夜道は嬢がっていた。

「む……」

「あの」と、後棒が思いきっていった。「もどり駕籠でございます、お安くねがっておきますが」

「いかがなもンで」

「もどり駕籠はわかっている」と、弦四郎は冷たい声でいった。「どこから来た?」
「へ?」
「どこの、駕籠だ」
「へえ……馬喰町の勘八でございます」
「馬喰町? いまの客は、武家か町人か」
「へえ……」言ってよいかどうか、迷ったのを後棒が、
「お武家さまなンで、へえ」
「二人とも?」
「へい、一人はご浪人ふうでしたが」
「どこから乗せた?」
「同朋町のかどでございますが……何か?」
それだけ聞けば充分だった。
弦四郎はうなずいた。
「悉けない」
「へ?……あの、戻り駕籠で」
「あいにくだったな。いずれ乗る折りもあろう」
そういわれると、武士だけにおせない。
「さようでございますか、おう後棒急ごうぜ」
「あいよ、手間どったな」
聞こえよがしの皮肉も、提灯のあかりに、弦四郎を浪人者と見たからであろう。
うしろの駕籠も声高にいった。
「やれやれだ、急がなくちゃ、ひと雨くるぜ」
「降られて帰る阿呆者か、ちょッ、急いだり急いだり……」
その嫌がらせを気にするほど余裕はない。弦四郎は胸に呟いていた。
——同朋町か、すると山伏井戸に近いな……
白狐が消えたのも、現われたのもあの近所なのだ。
昨夜、弦四郎が逃走の際、三人もの役人に手傷を負わせねばならなかったのは、白狐の逃走が、あまりにも迅かったからである。いかに忍びの心得があるとはいえ、それは神業に近かった。
黒装束なら、それも納得がいく。闇に目立つ白衣の白頭巾——月夜とはいえ、かき消すように消えた。
幽霊屋敷を出たか出ないか、役人たちは夜が明けてから、幽霊屋敷を捜査したが、むろん、何の痕跡も発見できなかったのである。
そうしたことは弦四郎、知る由もないが、とにかく、

あまりにも白狐が消えるのが早かったので、役人と弥次馬の全部で弦四郎を追ってきた。役人が半数だったら、斬ることもなかったのだ。
——あのあたりを、武平たちに調べさせねば……
今宵、この家から何かが、得られる。二つの線の交るところに、笛の謎を解く鍵があり、小えんの姿があると思った。
足音もなく、腕木門に近づいていく弦四郎を、凝っと見ている目があった。

四

最後の星の光を、黒い手が蔽った。空はまったく暗く、宵とは思えない闇が根岸田圃に帳をおろした。
見はるかす田圃のなかの寮である。雑木林が、北風や人目を遮って、塀というほどのものはない。腕木門から入った弦四郎は、油断なく目をくばりながら、母屋づたいに、庭のほうにまわった。
八畳の部屋に行燈がともっている。盛夏のことで障子はなく、青すだれが宵風に重く揺れていたし、リリンと風鈴が独りでに鳴っていた。蚊遣りの煙を吐きだしている今戸焼の豚もぽつねんとしている。
——はてな、さして部屋数もないようだが……
客はどこにいったのか。この家の者の姿も見えない。なまじ、蚊遣りがくすぶり、行燈がともっているだけに、異様な感じだった。
——孫左衛門は尾花の笛をほしがっていたのだ、恩きせがましく横奪りしようとしていた。なぜだ?……
弦四郎の予想では、尾花と萩乃の笛が、彼の手にあること——腕のたたぬ孫左衛門がそのことに就いて誰かと協議するにちがいない、と見たのである。
三梃の駕籠があとから来たことは、むろんそのためのはず。
彼らは何処に消えたのだ?……
弦四郎は八つ手の茂みに身をひそめて、あたりの気配をうかがった。静かだ。しわぶき一つ聞こえない。虚ろな座敷を仔細に見やったとき、弦四郎はほそ長い包みを見た。それは行燈の下に、置き忘れたように置かれてあった。
金襴の袋——

弦四郎が、それを花笛と思ったのは早計だろうか。

さきほど、芋坂あたりで聞いた野風の曲は、その笛ではあるまいか。躊躇はない。大胆にも弦四郎は濡れ縁からあがりこんだ。ほそ長い金襴の袋――それは握った感じで、笛と知れた。

紐とく手もせわしく、袋をあける。するりと滑り出たのは黒塗りの一管。

「や……これは？」

銘は、尾花。それは、笛師庄吉に短時日に作らせた、尾花の偽作ではないか。

ちらっと、白頭巾の嘲けるような目が、尾花の図に重なった。

その瞬間であった。襖がひらき、黒豹のようにおどりこんできた影。かわす間もない弦四郎を真っ二つに――

「くたばれっ」

必殺の刃が、弦四郎の髷に触れようとした刹那に、片膝たてたままに、鞘走った一刀はしたたかに脾腹に斬りこんだ――と、見えた。

踏み潰された蛙にもひとしい叫びだった。卑怯な刃に畳を切らせて、その男はもんどりうって転がった。

「殺った！」誰かが口走った。

静かに立ち上がった弦四郎は、とっさに咥えていた笛を捨てて、

「斬りはせぬ」と、うすい笑いを浮かべた。「人殺し専門の誰かさんとは、人間の出来が違うようだ……」

そこには黒い布でおもてを隠した男――浪人ふうの者が目白押しに、刀の柄に手をかけていた。その中の一人の手には短槍まで用意されていた。

「ぜんぶで何人か、ひい、ふう、みい、よ……」

その嘲笑は充分に彼らを誘ったのだ。ひかれるように、一人がたッと闘を蹴って抜き討った。

「手ぬるい！」僅かに身をひらいただけで、鏘然と刀が声を放ったときは、腰骨に一撃をうけて、縁から転げおちていた。

虚しく手からはなれた大刀は最初の男のそばにおちた。ひッと悲鳴をあげたのは、その刃がどこかを傷つけたらしい。

「ああいう同志討ちもある」と、また弦四郎はそそるように嗤った。「腕におぼえのある奴からかかってこい。望み通りの個所を不具にしてやろう、腕でも足でも……」

そういいながら、弦四郎は贋の尾花笛を足で踏み割った。

そして、だらりと刀をさげたままの姿勢でいった。

「馬鹿だな、おぬしたち。いったいどこで剣術を習った？　こんな隙に斬りかけぬやつがあるか？」

青すだれが、ふわっと裾をおどらせた。雨気を含んだ風が、さーっと吹きこんできたのは、一方の襖が荒々しい音で開いたからだった。

「――弦四郎、よく来た」

五

言下に風をきった礫――

得意の十方手裏剣がするどい四つ歯でかみついたところには、すでに弦四郎の姿はなかった。

あざやかに身をひるがえして、床柱を背に立っていた。

「出てきたな白狐！」

懐しいもののように弦四郎は莞爾とした。清潔な歯の白さが、彼らの鋭気をふっとそらす。

「多分、こんなことだろうとは思ったが……そうか、孫左衛門ときさまとは、一つの穴の狢だったのか」

尾花の笛への執着はそれで解けた。

「孫左衛門はどこにいる？」

白狐のほかは、みんな黒布でおもてを蔽っている。浪人たちはただの雇われた無頼であろうが、白狐のうしろで目をひからせている四人の男。

二人は武士、二人は町人と見えた。武士は主持ちらしく立派な服装であった。孫左衛門の背恰好はその中には見出だせなかった。

「逃げたか、孫左衛門！」

剣を地ずり青眼にかまえてはいたが、弦四郎の心は水のように澄んでいる。

その間にも、四人の重だった連中の素姓を知ろうと、目を働かせていたのである。剣気は、刃がまず語り、手がこれを受けて、ひびきに応じるように、敵をむかえる。思考を働かせていても、心眼は行住坐臥に剣気を感応するのだ。

――こやつらは、どこかで……たしかに逢ったことがあるぞ……

武士だけではない。町人の背恰好にも、記憶があった。

ただ四人とも、そういう感じがするだけにすぐとは思いだせなかった。

「真夏に覆面とは大変なことだ」と、弦四郎は揶揄した。「おれにおぼえられては困るほどの顔か？　男らしくさっぱりと脱いだらどうだ。それとも、このままおれを帰してくれるつもりかね」

「生きて帰れると思うのか」こうほえたのも白頭巾である。「われらの秘密を捜る邪魔な存在は、何者たりとも生かしてはおかぬ」

「ほう、それはおかしい」

「なに！」

「生かしておかないつもりなら、何もそろって顔を隠すには及ぶまい」ぐっと白頭巾はつまった。「それとも、おれが死ねば閻魔大王に告げ口すると心配してか？」

「そのへんだと思って貰おう」

これは恰腹のよい武士だった。その声にも聞きおぼえがあった。彼は角剣菱の紋の知人を思い出そうとしていたのである。

「――ところが」と、弦四郎はやりかえした、「おあいにくさまだ。おれが行くとすれば極楽さ」

浪人者たちも、腕前を買われている連中だけに一応の自信はあった。

多人数にとりかこまれながら、びくともせず侮蔑を叩きつける弦四郎に、まず短気者が、かっと喉をならせて斬りこんでいた。宙で刃がかみあった。一合！　二合！　猛然たる白刃が発した火花とも見えて、ぱーっと、部屋も戸外も明るくなった。

百夜燭を百本ももしたような光――

それが消えたとき、轟然たる音がこの家を包んだ。轟轟たる雷鳴のうちに、ざッと雨が叩きつけてきた。雨脚からけむりのように立ちのぼる雨気が、ななめに部屋の中にも降りこんできた。

誰の仕業か行燈が消え、数本の刃が一気に弦四郎をおし包んだ。

剣法も剣理も、刃をかまえて対峙したときに強力に作用するが、ひとたび乱刃となれば、意識は霧散してしまう。ただ剣気に対する敏感な反応だけであった。

道場剣術が実戦に役立たないことは、こうした場合のことである。右から左から、前から後ろから、憤怒と、憎悪と、功をあせっての斬りこみは、恰も草木に叩きつける驟雨にこそ似ていた。

雨は降っていた。雷鳴にそそのかされた豪雨。沛然たる雨脚は、まるで、この乱闘を視界からふさぐかのようであった。それは暗黒の宵を一層塗りこめるように、厚い層のすだれとなって降っていた。

この乱刃のなかにあって、なお、弦四郎の心を支配していたものは、

――斬るな！

という声であった。

良心、というには切っぱつまっている。ここまで殺人鬼を追いつめた以上、身の潔白が証明できるのは難事ではない。できるかぎり、人を傷つけずに、脱出しなければならない。

――斬りたくない！

だが、兇刃はその思慮をせせら笑うように頭上に雨と降り注いでいる。

六

ぴかッと、また光った。一瞬、蒼いひかりが、誰の刀に裂かれたか、ななめに口をあけたすだれ越しに、さっと部屋を照らした。

その稲妻のなかで弦四郎は、かえり血を浴びたおもてをあげた。怒号と乱刃が、瞬後にかぶさった暗黒のうちに弦四郎を包みこむ。

悲鳴が奔った。誰か。弦四郎のからだはチームワークに欠けた刃ぶすまの間隙を切り抜けてすでに包囲の外にあった。

――脱出のまえに！

弦四郎が狙ったのは、富裕な商人ていの男である。浪人者はいずれ無宿にもひとしいし、主持ちは、いざとなると切腹という奥の手がある。自白させるには町人が早い。せめて、顔を見るだけでもよかった。

猛然と迫った弦四郎の行く手を阻んだ刃――

「うぬ！」

凄まじい刃風に白頭巾の特徴があった。

「帰さぬぞ、弦四郎」含み声には、やはり、他の者よりも余裕が感じられた。

刃が刃をもとめたように、撥止と打ちあった互角の力が、異常な吸引力で二つの剣をからめた。天井を刺すように、垂直なまでにあがった刀身から火花が散り、鍔が鍔を殴りつけてするどい衝撃が肘へぬける。

こじり押しは闇のなかながら、相手の顔を咫尺の近くに招いている。

うすい頭巾から熱い、短く、せわしい呼吸がもれていた。弦四郎は勝手知らぬ家のなかに、ふっと女の匂いを嗅いだ。

それは、白狐の頭巾に宿っていたものか、この家の住人のものか？

「――やい、弦四郎」にくにくしげに、白頭巾はうめいた。「今宵こそは帰さねえぞ」

「勝つか、みごとに」

「負けるかもしれねえ、だが、てめえも帰さねえ、地獄の道連れよ」

「また地獄か。よほど、閻魔が恋しいらしいな」

力の均衡はつづいていた。僅かな心の弛みも、敗北を意味した。

弦四郎が間取りすらわからぬ闇ながら、心の乱れがなかったのは、敵のほうに同志討ちをおもんばかる声が交されていたからである。

底がぬけたような土砂降りはつづいている。この雨では剣戟の声は外へはもれまい。偶然の僥倖は望むべくもない。

弦四郎は剣の声を聞いた。

――斬るのだ、皮を切らして肉を斬れ！

攻撃に出てこそ道はひらかれる。死中の活は進んでとるよりなかった。

またひかった。弦四郎は見た。二間とはなれぬところに黒頭巾の浪人たちが、まさに行燈に火を入れんとしているところを。

――死中の活！

弦四郎の口を破って、電霆の一喝が白狐の剣気を圧した。

鍔が刃を殴りつけると同時に、弦四郎の肘は白狐の顎を打った。すさまじい跳躍だった。弦四郎のからだは、襖を蹴倒して、次の間へ逃がれていた。

白頭巾はのけぞりながら、右へ払った一刀に手ごたえを――瞬時に湧いた期待は、瞬後に消えた。虚しく闇を切って半円を描いた無念の一刀にふりまわされたように、どっと片膝ついた。

左手で、下半面をおし剝いで喚いた。

「逃がすなッ、斬れ、斬れ！」

その声も呑むような雨の音であったが、行燈がぽっと、ともって、輩下たちが、わらわらと駈けよった。

「馬鹿、奴だ、奴を追え、逃がすと……」

よろよろと立ち上がった。傷はなかった。顎に疼痛が残っていただけである。

「逃がしちゃならねえ、どこまでも追うんだ！」

狂ったようなその喚きを、木谷孫左衛門は脅えた目をきょろきょろさせながら聞いていた。

せまい納戸部屋であった。あの四人は斬り合いが始まると、ここへ退避していた。

「――まずいことになりましたな」

町人の一人がいった。横に転げたほうが早いくらい肥満した男だった。珊瑚の般若面の根付の煙草入れを、だしたりひっこめたり落ち着かぬ様子で、

「殺せますかな」

「さア……」角剣菱の武士は、目を笑わせた。

「まず……」とどちらにもとれる声でいったのは、もう一人の初老と見える武士だった。注意深いのか、紋のない紺羽織姿で、これは扇子をばちばちさせていた。

「しかし……あれだけ大勢ですから、まず大丈夫でござろう」孫左衛門がいった。「これほど手強いとは思わなかったが、何せ萩乃の笛まで奪われたので、早く抹殺したほうがよいと思い……」

「とにかく、彼奴に疑われたことが、まずい」

「出入りを許さねばよかったのですが」

孫左衛門は苦しげに頭の汗をぬぐった。

「信頼させておいたほうがよいと思い……」

「姑息な手段じゃった」角剣菱はいった。「ここを知られたこともまずい」

「ここは、むろん捨てねばなりませんのう」肥満した町人が残念そうにいった。「おりんのことはまあ別に移すとしても、ちょっと木口を凝ったのでね、惜しくないこともない」

「――まことに、慚愧でござる。ちょっと、様子を見て

泥水が目に入った。がぼっと、彼は泥水を呑んだ。掌に触れる泥を必死に摑んだ。赤土は粘っこく彼の指のあいだからはみ出た。

——どうしたのじゃ、どうしたのじゃ、儂はどうしたのじゃ……

痛みが全身を貫き——頭が火のように熱かった。彼は何か言おうとしながら泥水を夢中で呑み、吐き出した。

——儂は、わしは、わし……

木谷孫左衛門は、血と泥にまみれて苦悶しつづけた。その苦悶が、うすらいだのか、暫くして動かなくなった。彼は死んでいた。

まいりましょう」

こそこそと孫左衛門は立った。小さくなって納戸を出て行くのだった。

先刻から黙って、何か考えていた、いま一人の町人ふうの男が、影のように膝を起こすのが見えた。

「——白狐どの」

嗄れた声が白頭巾に何やら話しかけるのをうしろ耳に聞いて、孫左衛門は濡れ縁から外を眺めた。

雨は小やみになり、雷も遠くの空をごろごろ転がっていた。

——死んでくれ、青江、死んでくれ、そちは要らぬせっかいを焼くから、こんなことになる……。

祈るような気持だった。律儀者の仮面が剝がれるかどうかの瀬戸際に立たされた孫左衛門にとっては青江弦四郎は地獄の鬼のような気がする。

——な、死んでくれ……

そのとき、彼の知覚は、突然火の棒を脇腹に感じた。孫左衛門のからだははねとばされたように絶叫して、宙にとびあがった。そうして、痛みを払うように、身をひねりながら、ばしゃッと泥濘に叩きつけられた。

泣く女郎花

一

「——ま、お父上が？……」

運ばれてきた死体を見て、萩乃は顔を蔽った。死体には検死の与力と同心二人が付き添っていた。

昨夜は、孫左衛門が出た直後に萩乃は帰ってきた。中間に聞いても、

「存じませぬ、わっちが磯貝さまに伺っているあいだのことで」と、いうことなので、案じていたのだった。

検死の与力が帰ったあとで、同心が、

「近辺の者も今朝気がついたということでな、さっそく参ってみましたら、もう何とも……」

「いったい、父は何用で根岸まで参じたのございましょうか」

「さ、それはてまえのほうから、お聞きしたいことなので」

ねちっこく、萩乃の顔を上眼づかいに見たのは篠田伴内だった。

「全然、ご存知ない？」

「あたくし……知りませぬ」

「ほう、全然？」

「その根岸の家は、どなたさまのお住居なのでございましょうか？」

「さ、それがわからぬので困っております。何しろ、あのあたりは囲い女の寮が多ございまして」と、伴内は話のうちにも舐めるような目になっていた。「身分ある者はもとより、分限になればなるほど、名前を出すのを嫌うのでね。近所——と申しても田圃の中ゆえ、地主ぐらいのもので、これが大金貰えば、借主が誰であろうが詮索しないのが普通で」

「でも、お家のなかに、なにか、たとえば調度とか……」

若い娘だが、やはり固い武家に育っただけにしっかりしていた。

伴内は微笑でこたえた。

「なるほど、さすがは木谷さまのお嬢様だ。そこらの女どもとは違う」
「……」
「もとより、てまえどもも、その線から割り出すつもりで、調度や、残された品々を調べましたが、目ぼしいものは運び去られて、がらくたばかり。手がかりになるようなものは残っておりませぬ」
失望が萩乃の頬を蒼くしていた。
——しっかりした娘だが、こういう女こそ手を握ってしまえば、それまでだ。孤独ぐらい女をモロくするものはないからな……
「——まあ、おなげきくださるな。お父上の惨死はいかにも無念だが、てまえも出来るかぎりのお力添えはいたそう」
「おねがいいたしまする」
「てまえは、その点、定廻りとして顔が広い。何かと、お力になれると思います」
何かと、というところを強調したのは私生活に入りこむ伴内のいつもの手だった。
「お父上の傷を、ご覧なさったか」
「いいえ……」と、いってから、ふっと死臭を嗅いだように萩乃は袖で半面を蔽った。
そんな処女の所作が、伴内のような荒んだ男の心には宝石のように、珍重なものにうつる。
好機をとらえては女をものにすることに馴れた気持ちで、萩乃にも軽く手を出そうとしているうちに、伴内は、自分の心が、いつもと違うところまで踏みこんでいるのを知った。
——惚れたか？　莫迦いいなさんな、こんな小便臭せえ娘によ。だが、悪くはあるめえ……悪くはない、と、伴内は自問自答した。
——ものにするだけだ。ものにして、金をしぼって、ぽい、さ……
娘なら娘、年増には年増の、手のひねりかたを伴内は心得ている。
——もっと恐怖的な残酷なことをいっていい。怖がれば怖がるほど、おれにすがりつきたい気持ちになる。
「お父上の傷ですが」と、また話をもとにもどして、
「左の脇腹をグサッと、一突きにされておりましたな。それが致命傷でした。卑怯な奴ですよ。与力とも話しあったのだが、果し合いではない。瞞し討ち。お父上は、刀の柄にも手をかけず……」
「……」
「両手にこう赤土を握って、苦しまれた様子が」
「おやめ遊ばして！」
「それでも、この目で見たご様子をお伝えしたほうが」
「もう結構。それだけ伺えば……」
「左様ですか。ではまたの折りに。本日、お哀しみのところを冗々しい話は卒爾でしたな。お詫びしましょう。お宥しくだされ」
「いいえ、そのように仰有られては」
「お宥しくださるか、忝ない」
「あの、どうも、ご親切に……」
と、完全に萩乃は馴れた伴内の手に乗せられていた。
狡猾な伴内は、最も重大なことを、一度、辞去の言葉を述べた後に、さらりと付け加えたのである。
「あ、そうそう、これは駕丁の証言なのですが、お父上殺害の下手人は、もとお父上の輩下であった青江という男らしい」
「え？　弦四郎さまが……」
萩乃が卒倒せんばかりだった。瞳目した目が虚ろになって、頬は凍ったような蒼さに血の気が引いていた。
「ほう、ご存知でしたか。その青江弦四郎、先日より脱走しまして、お手配中です。仇討ちには何かとご便宜をはからいましょう」

二

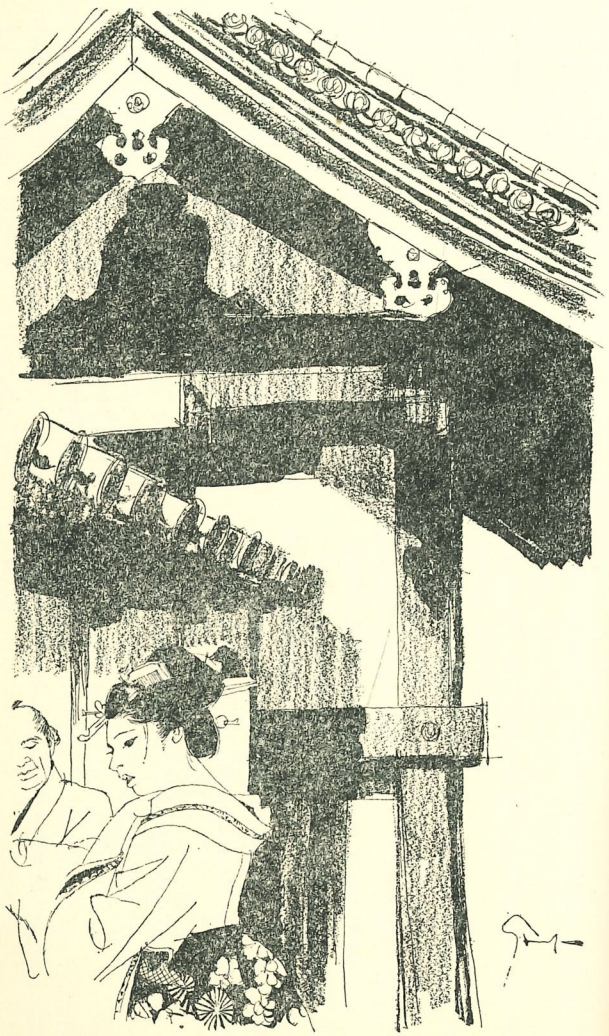
弦四郎が現われたという報せは、その朝、小えんも受けていた。
「ほんとうかえ、かつぐンじゃないだろうね」
「じょ、冗談でしょ。小えん姐さんをかつぐくれエなら、しゃっちょこ立ちして町内をひとまわりすら」ちょこ亀は首を竦めて、「なンでも根岸お行の松の近くだそうで。驚くじゃござんせんか、殺されたのが、もとの勘定方ンときの上役で木谷なにがし。大乱闘があったとみえ、いやもう、家ン中ァ血だらけ泥だらけ」
「ちょこ。てめえ見てきたのか」
仙次が肘でつっついた。
「いえね、見てきたわけじゃねえが、同心溜りで小耳に

はさンだ。たまにゃ、小えん姐さんに耳の保養もよかろうと思ってね。えっへっへっ」
「何が耳の保養だ。嘘っ八じゃ、有難かねいやな」
「だけどよ、講釈師、見てきたような嘘を吐き、というじゃねいか」
「やい、ちょこ亀、てめえは張り扇かい」
「いけねえや、十手捕縄お預かりの、岡っ引薬研堀の武平の子分の……」
「いいから、白狐でも探し出そうぜ。亀も歩けば棒、というでな」
二人が帰ったあとで、小えんは落ち着かなかった。
——弦四郎さまが上役をお斬りになるなんて！
そんなことはない、と彼女の心は叫ぶ、あの弦四郎さまが、そんな……。木谷孫左衛門も小えんは知っている。三、四度見たことはある。いかにも律儀者で、篤実だけが取柄のような俗吏だった。その木谷が殺されたのも不思議なら、弦四郎が斬ったというのも、考えられないことだ。
——でも……
その報せを受けたとき、ふっと心を掠めた娘のおもわがあった。
品のよい、淑やかな武家娘——萩乃という名もさぐった。いつぞや、弦四郎が萩乃と二人で屋形船からおりるのを目撃した。
——小便臭い小娘じゃないか……
柳橋の芸者だという自負を、しかし失わせるだけの美しさ、清純さ、じぶんたちには失われた十代の若さと気品を備えた萩乃にはげしい憎しみをおぼえた。
その萩乃の父を、弦四郎が斬る。
——ないことではない……
もっとも単純な筋は、孫左衛門が無役の弦四郎を嫌って、萩乃に近寄らぬようにいう。弦四郎が怒って斬る。ありそうなことに思われた。そんな想像が、小えんを居たたまれなくした。
——それじゃア弦四郎さまが、萩乃さんを大好きだ、ってことになるじゃないの……
小えんは胸苦しいほどの切なさをおぼえた。
——逢いたい、弦四郎さまに逢いたい……
煙草をすったが落ち着かなかった。三味線をとって爪弾いたが駄目だった。

——逢わなければ、どうしても……
芸者の意地だろうか、小えんは根岸に行くことにした。
支度もそこそこに同心溜りに行くと、
「あ、小えん姐さん」と、武平が立ってきた。「いかがでございます。あれっきり白狐の様子は」
「ねえ、親分。お手すきだったら、おねがいがあるンだけど」
「へえ。なアに、いくら急しくとも青江の旦那の……」
と、いって、あわてて口を噤んだ。
いやしくもお上の御用をつとめる身だ。科人を尊敬したり同情したりは許されない。
小えんは袖をひっぱるようにし、道へ連れだすと、
「その青江の旦那のことなのさ」と、いった。「根岸まで、一緒に来ておくれな、親分」
「ようがすとも。青江の旦那を探しだして、かくまおうってンでしょう。ようがすとも。なあに、青江の旦那ア、これっぽっちも悪事はしねえおかただ。無実ですとも、無実とはこの武平が太鼓判を捺しまさ。いざとなりゃ十手なンざ、ほうりだして、旦那の味方につきまさア、これでも大川の水で産湯を」
「産湯はいいから町駕籠を」
気は急いだ。
夜までには帰ってきてお座敷を稼ごうという気持ではない。当分、客のご機嫌とりなど出来ようはずがなかった。
「急いでおくれ、駕丁さん、酒手ははずむから」
「へい、合点でございます」
「酒手なしでも急ぎな、御用のすじだ」
武平が駕籠を守るように、付き添って走りながら駕丁をおどかした。

三

惨劇のあった家は弥次馬がたかっていた。地主らしい老人が、唾をとばしながら、この家はすっかり灰汁ぬきでもして、総取換えしないことには、住み手があるまい、と怒鳴っていた。
「——どこにいるのかしら、弦四郎さまは」
「全く、ねえ。こんな田舎じゃアかえって目につきやす



いですぜ」
「でも、この辺にいるのは確かなンでしょ」
「さ、そいつは」
来て見てわかったが、全く、田圃ばかり。弦四郎が潜んでいるような家は少ない。一軒々々、虱つぶしに探しでもするより、ほかにない。
「こんなことなら、仙次とちょこ亀を連れてくりゃよかった」
「あんなの二人よりも、親分一人のほうが勘が当たりますよ」
小えんも必死だから如才ない。
「そうでもないが」と、顎をなでて、武平は熱心になった。「かまわねえ。寺でも、目病み地蔵でも、植木屋でも、手あたり次第に聞いてまわりましょうぜ」
美男の浪人青江弦四郎というだけでは、しかし捜索は困難だった。雲をつかむように漠然としている。昨夜の事件の男だと聞くだけで、人々の顔は硬化した。
庶民の中に植えられた〝事なかれ主義〟がすぐにむき出しになる。
「そんな恐ろしい人など知りませんね」「とんでもない、なんでそんなサグリを入れなさるンだ」「誰かあっしとひっかかりがあるとでも訴人したンですかえ」まず保身を考えるのは、民家も寺も変わりはなかった。
なかには小えんをじろじろ見て、からかいに出る者も少なくない。
「いいひとかね……」「大そうなご執心らしいが、何も男は一人じゃござンせんよ……」「美男とは聞き捨てならねえ。芸者衆の面食いは頂けねえぜ……」厚かましい手合いにあうと散々だった。
柳橋の料亭、という、いわば華やかな特権社会の中で蝶のように泳ぐことしかしらない小えんには、まるで他国へ来たような侮蔑であった。
小えんはみじめな感情を味わわされていた。いつまでもいやな客にひきとめられたときのような、疲労と屈辱で、げっそりした。化粧も剝げていたし、やけに照りつける太陽も無情だった。
——どこにお出でなのかしら……弦四郎さま！
足が痛んだ。こんなに歩いたこともはじめてだし、自慢の素足が砂埃りで真っ黒になっていることも気持が悪かった。

——そうだ、弦四郎さまは尾花の笛を持っていらっしゃる。笛のことで知っている人がいるかもしれない……

そこは谷中名物の羽二重団子の店先だった。

谷中の寺に詣でる人たちがたいていここで休息して団子をつまむ。羽二重とはしんこの肌ざわりが羽二重のように柔らかで、しっとりしているからというが、辺鄙なところにもかかわらず繁昌している。

小えんは、食べかけの手を休めて、「ちょっと、お聞きしたいンだけど」と、声をかけた。

へえ、無愛想だが、人のいいおやじが顔をむけた。

芸者姿などは滅多に見かけないから、みんなちらちら眺めている。

「このあたりに、笛を持った御浪人はお出でじゃありませんか」

「へえ？　笛をねえ」

「もとお旗本で、若くて……」

美男だと自分の口からはいえないのだ。

「若くて、きれいだというんでしょうな」

「ええ、あの……」

「若くてきれいで笛好きというなら、そこにいるけどもね」

「え？」

「ほら、団子を食べているじゃありませんか」

四

どっと、その場に居あわせた者が笑った。

小えんは、はじめて気がついた。

腰かけのはずれに、一人の女が、坐っていた。まだ若い。十六か七か。その横顔を見て、はっとした。横顔が、きよ香に似ていた。

——そっくりだわ……

花模様の派手な振袖は、十二、三歳の娘にふさわしい柄だった。あちこちほころびているし、裾がはだけていた。

みんなの視線がじぶんにむいているのを知ると、きょとんと、虚ろに見まわして、

「ほほほほ、ほほほほ、お上手ね、ほほほほ」幼女のように笑った。

それっきり、また団子を食べはじめた。

——狂女だ……

小えんは、ぞっとした。

——でも、似ている……

妹ではないかと思われるほどだった。明るい光線の下では白昼夢を見ているようであった。

髪には簪も笄もなく、真紅な夾竹桃の花をさしていた。

「訊ね人は、ちがいましたかね」

と、おやじが笑いながらいった。

「ええ……」

「あたまが狂っているらしいが、やはり娘なんだね、さっき、寺男がいたずらしようとしたら、思いっきりひっぱたかれたよ」

ほほほほ、とまた狂女は笑った。そして、一つ残った団子の串を、髪にさした。

「珊瑚玉とまちがえてやがる」行商人らしいのがいった。「この団子が珊瑚玉だったら、てえしたもンだがね」

「本人はそのつもりだろ、いい気持らしいぜ」

聞いているのかどうなのか、狂女はまた笑った。

「ごちそうさま」はっきりいった。

小えんがはっとしたのは、狂女がそのとき帯のあいだからぬきとったものを見たからである。

それは、懐剣のように、錦ぎれで包んでさしてあった。

「まっ……花笛」

黒塗りの一管。

きよ香の秘蔵の〝桔梗〟そして、白頭巾がおとしたという〝尾花〟のそれと、そっくりではないか。

小えんの驚きを無視して、狂女は静かに口にあてた。

団子の礼に笛を吹くというのか。それが狂女にとっては自然の様子であった。

気の狂った者とは思われない、巧みな吹きかたであった。

嫋々たる音いろが、目くらむばかりの陽光に爽やかな風すら感じさせて、孫の土産を包んで貰って去ろうとした老婆までが、また腰をおろした。

陽がかげるようであった。無心の境地で吹く笛の音に、狂女自身のかなしい淋しい過去が流れ来たり、流れ去ってゆく。

小えんの顔いろが変わっていた。

——この曲は？……

きゅんと、身内がひきしまるような恐怖をもたらす笛。

あの曲だ、あの笛の音……野風の曲、と、その名こそ知らなかったが、するどい十方手裏剣の風をきる音が、耳のそばを走った。

小えんは、「おやめ！」と叫んで立ち上がっていた。

「やめて、吹かないで！」

みんなは、突然の恐怖にふるえる声にけげんな顔をした。

美しい芸者が、頬をぴりぴり痙攣させているのを、ふりかえった。

——おや、ここにも狂女のような……

と、みんなの視線は、そういっているようであったが、小えんはかまわずに、狂女に走り寄った。

「おまえ、名はなんというの？　その笛はどこで手にいれたの」

「……」

「ねえ、話して頂戴、どこでその笛を……」

小えんが手をのばすと、

「あげないよ、あげるもんか」

夢中で、笛を隠そうとする。そのひたむきな顔には、幼女の清潔さが宿っていた。

「とりやしないの、だからさ、一寸、見せておくれな」

「とらない？」

「ええ、とりやしない」

「ほんと？」

「ええ、ほんとうよ」

小えんの笑顔につられたように、狂女は出したが、また、

「いや」と、ひっこめた。

小えんは笛を見た。黒漆に何やら草花の図が……そして、固くにぎりしめた狂女の小ゆびのしたに、三字、銘が読めた。

——女郎花……

五

「まあ、小えん姐さんが、酔狂な……」近所の人は、あきれた顔で囁きあった。

小えんは、駕籠に乗せて狂女を第六天うらに連れてきたのである。

「どうしたンですね、いったい……」「下地っ子にするンですかえ」「まあ、いい器量だけど気が狂っているンじゃしかたがないでしょうに」うるさい連中が、のぞきにきた。

小えんは、いい加減にあしらって、小女に湯を沸かさせた。狂女はもう何日も垢をおとしていない。顔だけは小川ででも洗うのだろうか。

着物を脱がせようとすると、いやいやをしたが、男女の区別はつくのだろう、小えんと小女の二人だけだから、漸く、裸になった。

庭といっても土一升金一升の場所だから猫のひたいだ。繁った八つ手のかげに、盥をおいて行水をつかわせた。驚いたことに狂女は裸になっても、笛だけははなさない。

「濡れるじゃないの。大切にこちらに置いておくから」

と、取り上げようとしても、

「いやよ」ふりまわして放さないのだ。

小えんは、狂女のからだを洗ってやりながら、

——この子は男を知っている……

と、思った。

狂女になってから、瞞されたのか、瞞されたから処女の潔癖が狂気にしたのか。

ただ、男を知ってはいても、それは一、二度のことかもしれない。ほかの原因で気がふれた場合、肉体的にはルーズになるが、その恐怖が意識下に沈澱していれば、本能的な抵抗があるからである。

小えんはじぶんの着物を——腰のものから帯までそっくり着せてやった。狂女は、行水をつかって、いい気持になったらしく、素直に、されるままになっていた。子供も妹もない小えんは、着せかえ人形の遊びを思いだした。

そんなに素直なくせに、

「ちょっと笛を見せて頂戴な」

というと、

「いやよ」

警戒の目つきになる。

——弦四郎さまを探しだすまで、そっとしておこう……

と、小えんは思った。

武平が汗をだらだら流しながら戻ってきたのは、夕方近くだった。

「――駄目でしたよ、小えん姐さん、日暮しの里から動坂のほうまで聞いてまわったンですがね……あんれ」

と、汗を拭きかけた手をとめて、

「いつの間にこんな子を置くようにしたンで？」

「今日から」と、小えんは笑った。「美人でしょ、親分、手を出しちゃ駄目よ」

「えっへっ、そいつアどうだかわからねえ、名は何……」

「名なしの権兵衛さん」

「へ？　ご冗談……」

武平の目も、笛にいった。

「花笛！」

「女郎花なの。弦四郎さまに一刻も早くお知らせしなきゃア。でもねえ、また白頭巾が狙ってくると困るから、誰にも内緒にしてくださいな」

「へえ、だが、よく見つけなすったね」

「神様のおひきあわせ、ねえ」

狂女はにこにこして、鏡の自分の姿に見惚れている。

小女が医者を呼んできた。こういう病気には、医者は役に立たないのが当然な常識だったが、一応診せることにしたのだ。

山羊髭の医者はもっともらしく、舌を診たり、瞼を裏がえしたり、脈搏を数えたり、指を一本一本数えさせたりしていたが、診察を終わると、首をふった。

「――駄目でしょうか」

「まず、これは難かしい」

「お薬では」

「さ、それも、俗にいう馬鹿につける薬はないなどと申すほどでな。いや、馬鹿と気ふれは違いますぜ」

「あたりめえだ」武平が怒ったように、「藪だね、おまはん、こんな美しい女を気狂いのままにしておこうってのか」

「さ、さように仰せられてはかなわんのう」

「何がかなわねえ？」

「やつがれが、気を狂わせたというのではなく、そうやつがれに突っかかられても困る」

「おめえさんのせいだといやしねえ、治してくれってンだアな」

「それが、いまも申した通り、古今東西に気ふれの薬はない。ま、強いて治療法と申せば、気を鎮めて、気長に転機を待つことじゃな。左様、ある患者がやはり同じような症状であったが、大地震にあってな、家が潰れたとたんに治ったという例が……」

「馬鹿にしちゃいけねえ、地震雷火事おやじで治るンなら、おめえのような腐り筍などいるものか」

「腐り筍とはひどいことを、やつがれは……」

ぷんぷん怒って鳥越の医者は帰った。

いれ違いに、

「武平、またここで油を売っているのか」のっそりと定廻り同心篠田伴内が入ってきた。「やア、旦那、白頭巾の手がかりはつきましたかい」

「白頭巾よりも、お目付から青江のほうを追及してこられて、弱っているのだ……」

じんじん端折りの尻を、上がり框にすえて、伴内は狂女を見た。狂女の胸の花笛に視線が走った。

血祭雛子

一

炎暑がつづいて、雑草はみにくく徒長していった。

空梅雨のせいか例年になく扇子が売れたらしい。扇子売りは白足袋を陽にまぶしいほどひからせて、街々を売り歩いていた。

雨が降らなさすぎて西瓜の出来は悪い。朔日は氷献上といい、加州侯の自慢の氷室から冬の間に貯えておいた氷を将軍に奉るのがならわしだったが、暑熱がきびしく、この年ばかりはひとかけらも無かったという。

「ままにならねえもンだ。あっち立てればこっちが立たずでな。せっかく女郎花の笛が目っかったのに青江の旦那の行く方がかいもく知れねえ」

武平は頭が重い。日照りにやられたのかと思ったが、

どうも執っこい篠田同心のやりかたがまんできなかった。

「かりにもよ、前髪のころア竹刀かついで一つ道場に通った仲だ。ああまで青江旦那を追っかけまわさねえでもよさそうによ」

しかし、疑問は、ただに篠田伴内の私慾や功名心ばかりではなさそうなのだ。

与力も町奉行所も、青江弦四郎の追捕に力瘤を入れていた。旗本が殺人容疑をうけて脱走した。それだけのことにしては、執拗すぎる。連日、大小の事件が起こっている江戸市中のことだ。青江捜索に重点を置くのは、少しおかしい。

他の同心に聞くと、

「旗本が野盗になり下った——これはお上の名誉にかけても早く探し出さねばならぬことにちがいないが……」

首肯しながらも、何か、やはりふにおちないものがある様子だった。

同心溜りに貼ってあるおふれ書きや、人相書なども、白狐のことはもう出ないで、青江弦四郎ばかり。笛師庄吉殺し、役人数人に傷を負わせ、さらに、勘定役人木谷孫左衛門まで殺したことになっている。

噂では、木谷の娘萩乃が、仇討ちの決意をしているという。

孫左衛門の死体は、武士らしくもなく鯉口三寸も抜かずに死んでいるし、原因も不明なので、木谷家がお取潰しになるであろうことは大方の一致した意見であった。

ただし、萩乃が仇討ちして、原因が判明すれば事態は多少変わってくる。萩乃が婿養子をとり名跡をつげば、本知は減っても家名存続という可能性はある。

そうした個々の人生には関係なく、江戸の街は景気のよい夏祭りを迎えていた。六月十五日は永田馬場日吉山王権現の祭礼である。寛永十一年から大祭として、東都第一の賑わいを見せて、氏子も広範囲にわたっていた。

南は芝、西は麹町、東は霊岸島小網町、堺町あたり、北は神田で、いわば江戸の中心部を占めているから、産子町数凡そ百六十町余、祭礼番組四十五番。おのおのの町では花山車を出して牛車でこれを曳かせる。

祭礼の大小は往来の警固や櫓で等差がつけられるという。この祭礼では十三日から、道すじの武家町屋では桟敷をかまえ、商家では大店など幔幕を張り、花むしろ花

毛氈を敷いて金屏風をまわし、軒提灯などきらびやかにととのえてこれを送ることになっている。

遠近の客が知己に詰めかける、むろん酒肴を口をしながら山車を見るのだ。道すじは脇小路に矢来を結って往来を制限されるのは、混雑緩和のためだ。

見下す——というのは不謹慎だといって二階の桟敷は禁じられた。大名からは長柄槍のぼりなどを出して警固する。町役人たちは臨時出役で下町を守る。

奉納花山車がまた大変で、それぞれ趣好を凝らすが、そのなかで大伝馬町の鶏、南伝馬町の猿、七番の弁財天、その他毎年決まった山車の数が二十番ある。こいつを全部おぼえていないやつは氏子じゃない、などといったものだ

娯楽の少ない時代だから、祭礼というと、大金をかけていやが上にも豪華にして町々が競いあう。むろん、この日は商店は休日になる。

ことに話題を呼ぶのは麹町から出る朝鮮人来朝のねりものだった。朱房の旗をかかげたり太鼓を叩いたりして、張りぼての大象は、この祭りの圧巻である。四ッ脚に人間が入ってかつぎ歩くのだが、鼻の長さ十三尺、双の牙は真物で五尺余のやつをつかう。眼には碧いビイドロがはめこんである

それの大きさで総体が推測出来よう。象の背は二階家を越す高さだ。今年は選ばれた美女が乙姫に扮して象の背に乗るというので評判になっていた。

その日、小えんはおなじ柳橋芸者五人と常盤橋そと本町一丁目の山城屋甚兵衛の桟敷にいた。

山甚はきよ香を世話していた両替屋である。

狂女がいるので気は進まなかったが、

「山甚の旦那が、小えんを連れてこなきゃいれてくれないというンだから」

嫉妬まじりに怨嗟されると、小えんは拒みきれない。芸者なかまに憎まれるとお座敷でとんだ恥をかかされることがある。

「あたしの妹分を連れていってもいいかしら、少し気がおかしいのだけれど」

「気がおかしくって、裸踊りでも始めるンでなけりゃ、かまやしないでしょ」

とうとう、狂女を連れて山甚の桟敷にいった。

笛のことが心配だったから、

「三人で、見張っていて頂戴な」
くれぐれも武平たちに念を押した。
「大丈夫金の脇差」
という仙次を、
「あら、あたしがさらわれたときだって、そういったじゃないか。心細いわねえ」
「こんどこそ大丈夫、昼日中から、薬研堀一家の目をくらませるような忍術つかいがいたら、お目にかかりたいようなもんでさ」
そのちょこ亀が、一番山車が山下御門を入ったというころ、「親分々々！」と、とんできた。
武平の耳にかじりつくようにして呼んだ。
「あ、青江の旦那がいやしたぜ！」

二

見まちがいではなかった。群集のなかで、ちょこ亀を見つけると、にこっと笑ったというのである。
「お太鼓が鳴って御幣を先頭に行列が動きだしたところで、いやもう、すげえ混雑で、話するひまもなかったんで」
「馬鹿野郎、話ができなきゃ、袖でもひっ張って」
「さ、そいつも出来なかったンで。ねえ親分、青江の旦那ア、逃げまわるの段じゃねえ、誰やらを探しまわっていなすったよ」
「旦那がか？」武平は首をひねった。
青江弦四郎は、そのころ山下門外の混雑のなかを、目をぎらぎらさせて歩いていた。
麹町十三丁分の朝鮮人来朝ねりものは大象を囲んで、朝鮮使節の異様な服装をした者と武家ていに裃つけて花笠かぶった男たちが、順番をきめたり、水を飲んだり、ざわめいていた。
「――象へ乗る真葛どのとやらに、逢いたいのだが……」
関取のような付け髯をつけた男は、
「何の話かしらんが、この通り行列も動きだすので……」
――真葛。
青江弦四郎がその名を聞いたのも、つい昨日のことだった。
根岸の兇刃の渦から闇と雨にまぎれて脱出した彼が、飛びこんだのは、あの寺の境内だった。

そこが新吉原遊女の業死や労苦で死んだ遊女の投げこみ寺だとは、もとより夜があけてから知ったのである。
住職は親切にかくまってくれた。傷の手あてを――傷はいずれも軽傷ではあったが――するとき、懐中から出た尾花の笛を見て、
「――見おぼえがありますわい」住職は瞠目した。「今春仏になられた遊女の持ち物じゃった」
「遊女の？……」
「やはり尾花という名でのう……拙僧も生前、この笛をよく聞かして貰ったが」
奇妙な因縁が住職の心を動かした。
その因縁とはこういう話だった。
竜泉寺町に十年ほど前から二人の姉妹が住んでいた。
住職が彼女たちを知ったときはまだ母親がいて、美しい母子は近所の評判だった。
もとは豊かな暮らしをしたらしく、品もよくこの界隈に住むのにふさわしくない母子だった。
貯えも尽きて、貧しさが世間の目にも見えてくると、さっそく、廓から話がかかった。
母は充分客がとれるし、娘二人は禿に、というのである。
母子はむろん、これを拒んだ。何やら内職をして細々と暮らしていたが、やはり女手で二人の子を育てる苦労が禍いしたのであろう。ある冬に風邪がもとで、姉妹の手を握りしめて死んだ。
姉妹は笛が巧みであった。
父の形見とかで、それぞれ同じ作りの笛を持っていた。
「その一つが尾花の笛か」
「左様、姉のほうがな」
「では、妹のほうは？」
真葛――という名はそのとき聞いたのである。
「その笛の銘は、葛花、とあったが……」
姉妹はやがて、それが運命であるように、結局廓のひとなっていった。
姉は花魁になって楼主の期待通り、分限の客がついた。妹はまだ年がゆかなかったから禿をつとめた。これは花魁候補である。京の祇園の芸妓になるための雛妓――舞妓に似ている。
「上客で通いつめる者も勘なからずいたというが、妙

なもので、好事魔多しというか、妙な男を間夫に持つようになってのう……」

悟りきった老僧だけに、説教臭いところがない。

「根がおとなしい女ほど、貧乏くじをひくように出来ているものかな、こなたと同じような——怒らっしゃるな、斬りあいの好きなご浪人という話じゃが、恋の達引というか、遊女の意地というか、拙僧にはわかりもせんが、そんなこんなで、自ら仏になってのう」

「自害か……」

老僧は、慈悲ぶかい眼でうなずいた。

「よくある話じゃ、どうして同じことをくりかえすかと思われるくらい、同じような真似をする遊女があとをたたぬ」

「……」

「仏が運ばれてきたときは、この、尾花の笛は持物の中に見あたらんじゃった。妹の真葛も知らぬという。それぎり……見なかったものじゃ」

「——遊女尾花……か」

「左様。妙な因縁じゃのう。こなたは、どこで手に入れられたな」

「ご住持。その尾花が死なねばならなくなった原因の——その浪人者の風貌は、ご存知か？」

三

「知らぬよ。拙僧が知ったとて何になろう、尾花は仏となったのじゃ、冥福を祈るのが拙僧の役目じゃでのう……」

白狐——白頭巾のすがたを弦四郎は思いだしていた。

冷ややかな、人間性を喪失したような白狐が、そのひとであるならば、尾花は真実の恋のために死んだのではあるまい。

分限者の玩弄物でしかない女の肌が、生のねがいを、ふとあらわれた浪人者に——日蔭者だという共通点が情を移して……裏切られたのではないか。

ひとすじに想いをかけた哀れさが、彼女を死に走らしめたとは、考えられることだった。

——あの男ならば、女の真心を踏みにじるのは平気だろう……

野風の曲も、絢爛たる花魁の部屋で教え、教えられたものとみえる。

尾花は死んだ。尾花の笛は白狐の手にわたった。

——なぜ、白狐が尾花の笛をいつまでも持っていたのか？……

笛の謎を白狐は知っている。尾花が教えたのか？　とすると、妹の真葛が知らないはずがない……

「では、その妹のほうは、いまも？」

「いやいや、あまりに不憫ゆえ、楼主に話をつけてな貰いうけ、さるかたに預けておいたが、先般養女の話があっての、いまはまともなお嬢さまじゃ」

「武家か、町人か？」

「それを聞いて何となさるの」

「ご住持、てまえには爪垢ほどの邪心もないぞ」

「どうかの、煩悩は人間からは離れたがらぬ虫じゃ、美女なればこそ、浮世の苦しみも一入に味わうものが多い。さればこそ、拙僧の口から余人には教え難いのう……仏の道にもそむくことではあるし」

弦四郎は、やや呆れて、

「ご住持がそう考えるのも当然かもしれぬ。が、これには仔細があることだ……」

「先日も、そういうて、真葛の行く先を教えてくれと執こい男が来たわい」

「え？」彼奴らだ。弦四郎は白狐の魔手を感じた。「そ、それでご坊は？」

「教えるものかな。追い払うたが、どうでも調べあげる気になれば、隠しおおせぬことでのう……」

「そうなれば、いよいよあぶない」

「なんの話じゃな？」

「実は、この笛を持っていると、いのちがあぶないのだ」

「大仰じゃの」

「冗談ではない。いままでにも、何人か死んでいる。かくいう拙者が危難の目に何度おうたことか。当寺へ逃げこんだいわれを聞こうとされなかったのは、こうなると残念だ。いまから申せば嘘としか聞こえまい」

弦四郎は唇を噛んだ。

「ご住持は、何かこの笛の秘密についてご存知あるまいか」

「知らぬな」

「その姉妹の父……に関しては？」

「それも。ただ、和歌のたしなみがあったと思うが」
「和歌の……」
「拙僧のひとり推測じゃが、あの子らがの、小さなときから、唄うように口誦さんでいたのを憶えている」
尾花と真葛の幼時を思いうかべるように、皺ぶかい瞼をひくひくさせて、
「父御が教えたのであろうが……萩か花尾花葛花なでしこの花……」
「女郎花また藤ばかま朝顔の花」
「左様じゃ……よく知っておるの」
「ご坊」と、弦四郎は強い視線をむけた。「その歌をなぜ記憶しているか申そうか。これを作った笛師が、兇刃をうけていまわのきわに、言い残そうとしたのが、その歌なのだ」
老僧が真葛の倖せをねがうあまりに、口を噤んでいるのはわかっていた。その真葛を、放置していてはあぶないのだ。
弦四郎は、漸く老僧から真葛の住所を聞いて出かけた。十四日の深夜であった。麹町二丁目、というと半蔵門外になるが、ここに名主与兵衛というのがいる。旗本屋敷への貸馬をしたり、すぐ裏が騎射練馬場で、ここの掃除や何か権益を持っていて、子分というものも二、三十人はいる麹町の勢力家である。
真葛がここの養女になっているという。
——急いでとびだしてきたが、今夜は他家を訪問するには遅すぎる。
途中でそう思った。馬喰町の宿は深夜でも叩けば起きるのだ。一眠りすることを考えたが、いつもの夜とはちがい、町々辻々は提灯があかあかと照って多勢の男子が揃浴衣でさわいでいた。
——宵宮だ、今夜は……
と、気がついた。
明朝、山車は未明に山下御門を出るから、みんな今夜は眠らない。この宵ばかりは見附のくぐりも開いている。ことに麹町も氏子だから、深夜でも支障はない。
弦四郎が麹町二丁目についたのは四更をまわっていた。むろん名主の家も大戸を開け放して、提灯をつらね、戦場のような騒ぎだ。
弦四郎は、名主与兵衛を探すのにかなり手間どった。
「わしにご用というのは、こちらさんかえ」

背は低いが、いかにも荒くれを顎で使っていそうな一徹者の老人が出てきた。
——いつ馬に跳殺されるかわからねえ商売だ。こちとらに女房なンざ、要らねえやな——
そういって独身で通してきた変り者だ。さすがに寄る年柄で、老僧の話があったのを幸い、真葛を養女にした。近いうちに、気の利いた若者を娶わせて、後をつがせるつもりの与兵衛だった。
弦四郎が、老僧の名をいうと、うなずいて、
「どういうご用でしょう。何しろ渡御まであと半刻と無えンでね……」
「急な話なのだ、真葛どのに逢いたい」
「娘ア、もう山下御門へ行きついたころですがねえ……」
真葛が、大象の上で笛を吹く、ということはそのときはじめて聞いたのだった。
「あの笛を！」
「どうなさいましたね」と、与兵衛は得意顔で、「娘が横笛の上手なことは、大層な評判らしくてね、水野若狭守さまの仰せなんだ、ことわりきれねいやな」
勘定奉行水野若狭守忠道の名を、この事件に関して、はじめて耳にしたのである。

四

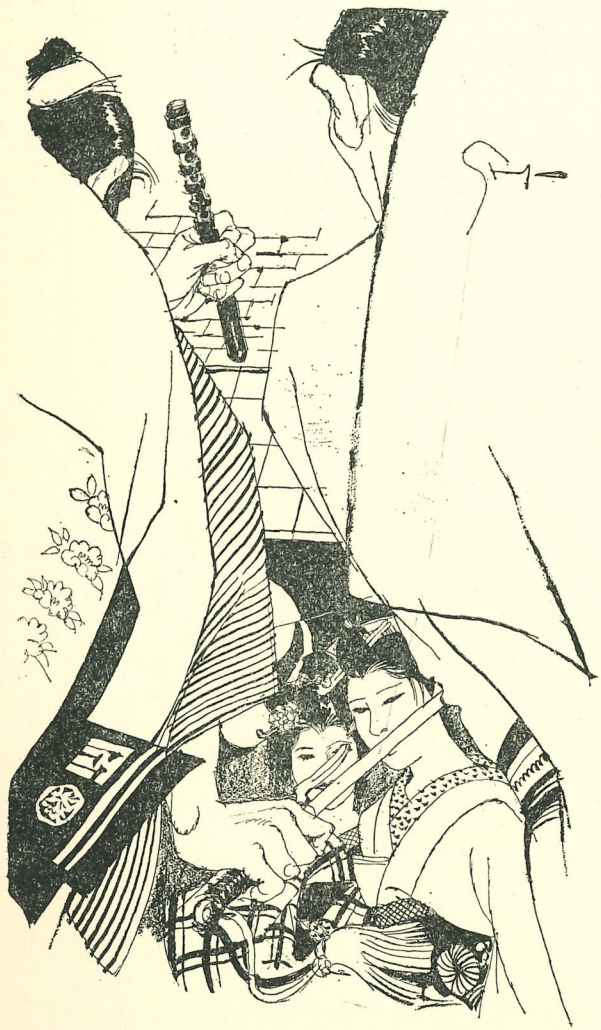
弦四郎は、花笠を借り、肩衣をつけただけで行列に加わった。朝鮮使節を模した行列だから、太鼓を妙な調子で叩いたり、真鍮の喇叭を吹き、銅鑼を鳴らしてのそのそねってゆく。
弦四郎は、大象のうしろから、殿りの七、八人にまぎれて跟いてゆきながら、象の背から目をはなさなかった。真葛は、乙姫さまのような恰好で、恐がりもせず、横笛を吹いている。黒塗りの一管……葛花のそれであろう。
——もう少し早ければよかった。四半刻早ければ……別の笛にとりかえさせたのに……
弦四郎の胸を翳らせていたのは、先日、真葛の行く先を執拗に聞きにきた男の存在である。
——何事もなければいい……杞憂であってくれれば……
案じる一方、勘定奉行の名前が、無気味な黒さで、の

しかかってくるようだ。
——水野が名ざしたという……
それほど評判になったのか？……
この際であった。素直には考えられなかった。
だがまた、
——まさか！
と、打ち消す気持もかなり強い。
——天下の勘定奉行が、何をする？　疑惑もすぎては……
彼の憂いをよそに、行列は、つつがなく、コースを進んでいった。
神輿の行列次第は左のようなものである。
御幣を先頭に、太鼓、榊、社家騎馬、神馬、小旗。それから氏子の山車が、一番大伝馬町から、四十五番霊巌島銀町の分までつづき、神輿の小旗、大旗、長柄槍、太鼓二つ、持人十一人……田楽二人、獅子頭二、持人二十四人……というふうに延々とつづくのである。
コースは山下御門を入って、日比谷御門のお堀端に添って、桜田御門の前から左の通りをのぼって山王社の前から右へ、永田町梨ノ木坂を下って御堀端通り半蔵門から内廓へ入る。
竹橋御門をぬけ出て、大手前の酒井小笠原の上屋敷まえを常盤橋御門へ出る。
ここまでは一緒だが、この門を出て本町一丁目に入ると、山車練りものは退散して、神輿行列が、ぐるぐるまわって御旅所で奉幣あって、本社へもどる。
弦四郎の心痛は全く独りしばいのように、杞憂におわった。
大象のねりものは無事に常盤橋御門を出た。橋を渡れば本町一丁目の両替屋が並んでいる。山甚の桟敷に小えんたちがいるとは知らない弦四郎。
象の背の真葛から目を離さなかった。神輿行列から離れて、大象はのしのしと本石町一丁目のほうへ——麹町への道をとった。
そのときであった。ほっとした弦四郎を嘲笑うように、礫がキラッと——夏日にまぶしく光ってとんだ。
どよめきをつんざく、澄んだ悲鳴が、象の背でおこった。
「や！……」
真葛だ。美しい扮装のすがたが、一瞬、のびあがるよ

うになってがっと、うち伏すのが見えた。
「あぶない、誰かッ」弦四郎は人の群れをかきわけて象のもとへ駈けつけようとした。
が、混雑の中なのだ。真葛のからだは、数丈の高みから、もんどりうって落ちてきた。
わーっと、混乱が、一層、収拾をつかなくした。駈けよる者、逃げだす者。片側はお濠だからあぶない。縄をこえて桟敷からばらばらととび出した者がある。
それは浪人風と見えたが、昂奮に駈られた男女もそれに誘われて意味もなく、われ勝ちにとびだしてきた。混乱に輪をかける騒ぎ。
「痛てッ、誰だ足をふんだのは」「おいらじゃねえ、大象だ」「何を、ふてえ小僧め」とっ組み合いまではじまる。
「ばかな、そんなことをしているまに！」
弦四郎は気にしていただけ、駈けつけるのも早かった。
が、そのまえに、屋根からひらりととびおりる白衣の男——それは物干から浴衣が突風にあおられておちてきたように、軽く、巧みなおりかただったが。
「あ、白狐！」
三間——距離があった。弦四郎は見た。白頭巾が、真葛へ駈けよるや、さっと黒塗り笛を奪いとって風のように走りだしたのを。
「や、白狐待て！」
真葛は即死であろう。白狐の手練は二度三度の経験で知っている。それでもちらとなげた目に、あざやかに心ノ臓を刺した十方手裏剣が見えた。
白狐の姿は、ぱっと、とびあがった。脇小路の矢来をとびこえたのだ。

五

桟敷は総だちになっていたし、そのときはもう、小えんも武平たちも弦四郎の姿を見とめていた。
「旦那だ、青江の旦那が……」武平も仙次も走りだしている。
小えんは夢中で狂女の肩を抱いていた。狂女は、この騒ぎに無関心で笛を口にあてようとしている。真葛の笛の音が、彼女を誘ったのだ。



役人が叱咤して鎮めようとしたが、ひとたび、狂ったような混乱がくると、なかなか鎮まらない。

赤児は殺されるような声を立てるし、好色漢は女の尻や胸に手をだすし、悪童どもはほうりだされた張りぼて象にさわったり朱房の金襴帯をつたわって背にのぼろうとしているし、ひとの膳のかまぼこを素早くつまむ者がいるかと思えば、騒ぎに気をとられた女の髪から銀の簪を盗むやつもいる。

とんだ祭礼になったものだが、場所が常盤橋御門外であり、諸侯の警固の役人が四方から集まってきて、庶民を桟敷においこみはじめた。そこでまた席が、前だの後ろだのと、そこここで騒ぎはじめる。

騒ぎを小馬鹿にしたような笛の音が桟敷に流れたが、ふっと、やんだ。

横合いからふとい手がでて、笛をひったくったのだ。きゃっ！　と、狂女は叫んで、その腕にとびついている。

「あれ、何をするのさ」

小えんは、赤ら顔の大男の手に奪われた笛を見た。

狂女が、金切り声をあげてしがみついたのが意外だったらしい。「こいつ！　畜生！」ふり放そうとする。

「笛をかえして！」小えんも絆纏の裾をつかんだ。

「な、なんだと、こいつは……」

「笛をかえして頂戴」

抵抗は予期していなかったらしい。大男は狂女を殴りつけようとしたが、そのときは、ほうばいの芸者たちも気がついていて、

「まあ、どろぼう！」

「笛どろぼう！」

「お役人を、お役人を」

我がちに騒ぎたてた。

「大きな声をたてるな、どろぼうじゃねえ、おれの面を知らねえか」

「知るもンか、笛ぬすびとが何をお言いかえ」

「金吹き久六といやアこの辺では売れた顔だぞ」十手をぬき出して、「桟敷での鳴物はご停止なのを知らねえか。この笛はあずかっておく」

「そんな法ってあるもンか、かえしておくれな」

「小えんちゃん、薬研堀の親分はどこへいったのさ、このひょっとこの久六さんとやらを」

「ひょっとこじゃねえ、金吹きだ」
「ほら吹きの久六だって。覚えておきますよ」
すったもんだやっているところに、山甚が戻ってきた。
「久六ではないか、どうした?」
「あ、旦那、なにね、棧敷では鳴物御禁止だからこの笛を召し上げようとすると、女どもがぎゃアぎゃア喚きやがって……」
「そうかい、おまえさんはお上の御用をつとめようとしたまでだ。悪くはない。が、この子は小えんの妹分でな、少し脳が悪いのだ。お目こぼししてくれないか」
「へい、せっかく旦那の仰せですから、まあ聞かなかったことにいたしやしょう」
狂女は、笛がもどると、もう泣き喚いたのはどこの誰だという顔で、帯のあいだにはさんだり、両手で抱いたり邪気が無い。
山甚と久六の目が意味ありげに交叉した。それに気のついた者はいない。
小えんは狂女を抱くようにして坐ると、もう弦四郎のことが頭に一杯になって、山車など目に入らなかった。

その弦四郎は——
白狐を追って、ある屋敷うちへ入っていた。
奇妙なかまえだった。塀を越えたところは細長い鰻の寝床のような庭で、すぐ目のまえに、また一丈の塀がある。多少の屈折はあるが四、五十間の塀に非常口らしい木戸がたった二つ。
——ここは?
追跡に夢中になってとびこんだところだが、ここは金座ではないか。
金座はいうまでもなく、小判小粒など金貨の鋳造所だ。日本全国の金山から出る地金は全部ここへ送られてくる。
京阪の下金屋が買い集めた金細工物もすべて一度はこの金座へ入る。
ここは御金改役後藤氏に与えられた邸宅だったが、元禄十一年に敷地内に金座を移されてから、以来流通金貨はすべて新吹き改鋳をとわず、ここで全工程を経ることになっている。
二重塀の厳重さは、そのせいであった。

六

弦四郎は大胆にも、この塀をも乗りこえた。
祭日で金座の仕事は休みらしく、焼金などの煙は絶えている。ひろい工場が世間の祭りさわぎの中から隔離されて、無気味な孤独を保っていた。
金座職人は常に工場の出入にきびしい看視をうけて、脱衣所ですべてを脱ぎ、おしきせを身につける。場所によっては火気がきびしいから半裸、全裸のところもある。
仕事が終わると、全裸にして、髪をさぐり、高低二段の縄をまたがせるというきびしさだ。
したがって、この建物には出入口は中門が一箇所あるだけ。職人は中門を出て、役人長屋の前を裏門へ出るようになっている。窓という窓はすべて赤銅の網窓であった。
厚い板戸が御殿のようにおりたところから長廊下が後藤氏の邸宅へと通じている。
江戸時代は多くの役職がそうであったように、自宅と役所が接続している。だから本町通りの金座表門からいえば、入ったところが役所で左手に役宅があり、裏手三分の二が貨幣鋳造工場になっている、というわけである。
さて、凡そ二千坪のこの金座に入った弦四郎は、
——白狐はどこへ隠れたのか?……
するどく神経を働かして、四囲を見まわした。仕事は休みでも地金や仕上げ半ばの小判なぞ、おそらく何万両というものが置いてあるのだから、番人の警戒は昼夜きびしい。
見まわりの者が革袴に六尺棒といういで立ちで通っていった。それをやり過ごして、弦四郎は奥へ入って行くと、急に、鈴の音がした。
身を翻えして、廊下の下へもぐるのと殆ど同時に板戸があいた。
豁達な哄笑が聞こえた。阿諛するような女性的な笑い声がそれにつづいた。
「——綱をまたがせるとは名案じゃのう、ただ裸にしただけでは、男女とも隠し場所を持っているでのう」
「金銀ほど小さく軽く、そして価値のあるものはござい

ませんので」
「男もなンじゃが、女にやられては金座が潰れてしまうからのう、ははは」
「むかしの話でございますが、毎日十匁ずつ股にかくして持ち出した女がおりまして」
「ほう、小判にして二両あまりだの」
「当初のころは、まさかと思って、取締りも弛かったのでございますな。順次のおしらべにうしろからおされて、躓いた。その拍子に、ころっと、金の塊りが転げたというのですから大変でございます」
「ムサイ金であったな、ははは」
その客は、裏門から帰っていったが、終始綾絹の頭巾でおもてを隠していた。目立たない網代駕籠に身を入れるとき、
「ご帰邸ののちに、召し上がってくださりませ」菓子折り。それはずしりと重く、客の膝を圧した。
網代駕籠が去ると、主、後藤庄三郎はせかせかと戻ってきた。
家人も祭りに出払った居間に、白頭巾が黙然と坐っていた。
「お、首尾は如何であった？」
「――そちらは」
含み声。白頭巾の下半面が動く。
「なに！」
「いまの客は、勘定奉行水野若狭、と見た白狐の目に狂いはない」
庄三郎は憎しみをこめて睨みつけたが、蒼い頬を急にくずして、ほほほほ、とあの笑い声をもらした。
「お気づきになればいたしかたない。いかにも勘定奉行じゃ。お忍びでふいのお越しで、儂も面喰うた」
「苦しい言いわけだな」と、嘲けるように白頭巾が笑った、「おれとは関係ないことだ。金改役が勘定奉行と結んで金塊をくすねようと、おれには関係ない」
「これはしたり、いくら、われらの仲でも、申してよいことと悪いことが」
「どうせ悪人ではないか。いまさら善人ぶっても始まらぬ」
「――水野さまのことはとにかく、おぬしには無関係じゃ」
「そうとも、おれはただ、おめえとの密約をたがわれねば、それでよい」
「おう、勿論だとも。で、首尾は」
せきこむ庄三郎の目の前に、彼はおもむろに黒塗りの一管をさしだした。
真葛の――葛花の笛。
ことッと、どこかで音がした。白頭巾だけしか聞こえなかったようである。彼は、きっと、ふりかえったが、葛花の笛の真偽をたしかめている庄三郎には黙っていた。
また――どこかで聞こえた。
さっと、白狐は片膝立てた。その手から得意の十方手裏剣が書院窓へ――
細い桟を折って、手裏剣は消えた。
「何とした！」白頭巾は無言で廊下へ出た。
庄三郎はその笛をしっかり握りしめて、出てきてみると、十方手裏剣が柱に虚しく突き刺さっていただけである。
「何としたのだ、まさか、怪しい奴など忍びこむはずがない」
と、庄三郎は、疑心暗鬼を嗤うようにいった。
「ここは金座じゃ」
「金座にはちがいないさ」と白頭巾もやりかえした。
「だが……誰か、いた」

恋慕花火

一

小えんは、額をくもらせた。
「当分のあいだ、お座敷は駄目なンです」
「さ、そこを何とか、ねえ、小えん姐さん、今晩は久かたの花火だ。加賀さまが氷献上のかわりに、大花火をあげて景気を吹きとばそうという晩でげす」
幇間の蝶八は、やけにばさばさ扇子をつかいながら、
「ひとつ、蝶八のツラを立てておくンなさいな、もうコンリンザイ、無理は申しやせん。熊野権現でも吉原稲荷でも起請誓文いたしやす。女を断てというのなら、二日でも断ちやす、酒を飲むなというのなら、四半刻でも断ちやすから、ねえ、小えん姐さん、哀れな蝶八を助けると思し召して、小えん大明神！」
扇子であおいだり、手を合わしたり、その口説きのあいまに、西陽に灼かれる襟頸の汗を拭いたり、腋の下を煽いだりするのだから忙しい。
小えんはとうとう笑いだして、
「大明神はよして頂戴な」
「では弁天さま、菩薩さま、吉祥天女さま、なにとぞなにとぞ」
「困ったわねえ」
「困ることアがせンや。今宵の船遊びはぐんと面白い趣好が用意してありまさ、それに加賀さまの花火……」
「加賀でも藪蚊でも、花火は大嫌いなのよ」
「こいつア恐れ入りやした。藪蚊はよござンす、藪蚊百万石！　小えん姐さん、藪蚊にしたってとにもかくにも百万石だ」
「くどいねえ、蝶八さん。汗が出るよ」
「わっちが拭いて差しあげます」
「結構」
小えんは、小女に手拭を冷水でしぼらせた。突っぱねながら、蝶八の分も持ってこさせる。こういうところが、地味な人気で、小えんは誰にでも好かれている。

「ああ――いい気持だ。はいご馳走さん、おっとっと、小えん姐さん、おしぼりで追っ払われちゃかないませんや」
小えんは長火鉢の前へ坐って煙草盆をひきよせながら、
「そのおしぼりを持ってお帰りよ」
「へ？」
「金座のお大尽の汗を拭いておあげな」
「こいつア趣好にちげエねえ。そこまで話のわかる小えん姐さんだ。ねえ、これアわっちの世辞じゃねェですぜ、金座後藤のお大尽がいうことにゃ、小えんのいない屋形船なンざ盂蘭盆の送り船だ」
「蝶八さんが百面相でもやりゃいい」
「えっへっへっ、男の面なら閻魔大王か、赤鬼で、女に化けたら奪衣婆アにしかならねえとは、情けないぞえ蝶八さん」
小えんは、やれやれと呆れ顔で、
「全くよくしゃべるのねえ、おひやをあげようか」
「おひやより、姐さんの三味線を持たしておくンなさい」
「負けたよあたしゃ」小えんは銀煙管を投げだした。「そのかわり、ちょいと挨拶するだけですよ」
「へいへい、悪ひきとめはいたしやせん」
「どうしても、この子の笛が聞きたいンですって？　またおとといのような騒ぎになると困るのに……」小えんは支度をはじめながら、鏡の中から狂女を眺めるのだった。
祭りの日はあれで済んだが、昼でも夜でも気がむけば、いつでも笛を吹いてやめない。
白頭巾がいつくるか心配でならなかった。弦四郎に早く逢えさえすれば、心配ないし、ほめられよう、と思ってのことが、小えんは狂女をもてあますようになっていた。
幸い、武平一家が、二度の失敗に懲りて、十二刻たゆみなく見張ってくれるので、危険は迫らないが、〝女郎花の笛〟の存在を、白頭巾が嗅ぎつければ遠からず襲ってくるにちがいない。
金座後藤、といえば柳橋でも新吉原でも下へもおかない。
庄三郎光包は後藤御金改役として十一代目だった。

——小えんとその笛の巧みな狂女をぜひ呼んでくれ……

庄三郎にそう懇望されると、万八楼としては小えんのわがままなぞ聞いてはおれない。蝶八の口説上手もあったが、著名料亭には弱い芸者の身分が、とうとう承知してしまったのだ。

二

「——よく来たの」

庄三郎はうすい顔をほころばせた。

小えんはもともと女のような笑い声のこの男は生理的にも好きになれなかった。

「ほう、その子が、笛の……なるほど、美人だの、これは惜しい」

「ご挨拶もできませぬから、お許しくださいまし」

「いいさ、いいさ、美人で笛が上手なら、あとはどうでもいい」

「そうとばかりはいえないさ」右わきに坐った肥った武士が、「一日の半分は夜だから……」

「磯貝さま、またお話が下がって行きますよ」

年増芸者が、もう大分酒がまわっているとみて、腰のあたりを抓った。

「ははは、花火が上がれば話は下がる。うむ、こりゃ秀逸じゃ」

「秀逸々々」おべんちゃら芸者たちが和した。

花火はそんなあいだにも、夜空を灼いていた。華麗な花園が頭上に展開するのも、見あいたという顔の庄三郎は、

「一曲たのむとしよう」と、いった。

三、四日一緒に暮らすあいだに、小えんは狂女の扱いかたに馴れていた。

「吹いて頂戴」

と、いってもきょとんとしている。小えんが、笛を吹きたい、という素振りをすると、

「ほほほほ、笛を聞かせてあげましょか。ねえ、おみなえし、あたしのおみなえし……」

ひとりで嬉しがって、おもむろに笛をかまえるのである。

それは、その笛が昨日今日拾ったものや何かでなく、

ながいあいだ、身辺から離したことのないお愛着と由緒のあるものを意味していた。

「さアさア、皆の衆、いかに糠味噌がないからというて、そうそう猫板をかき鳴らしてはせっかくの笛が台なしじゃわえ、ほうれそこの藤八拳やめたりやめたり」

蝶八が道化て一座を静める。もっとも狂女にしてみれば騒いでいようがいまいが、平気だ。

嫋々たるあの音が水の上を流れだした。

時々、思いだしたように、花火があがってしだれ柳の火がぱーっと頭上におちてくる。

小えんは、この曲を聞くと、最初の夜の戦慄が甦って、落ち着かなくなっていた。川の上を行き交う大小の船が、みんな白頭巾のそれに見える。

——恐ろしい手裏剣がとんで来やしないかしら……

蝶八に口説きおとされたとき、小えんはすぐに武平たちに守って貰うことを考えた。

どれが彼らかわからないが、薬研堀一家が警戒の目を、耳を働かせているはず。

「ようがすとも、なアに白頭巾が出てきやがったら、手裏剣なンざなげさせねえ、わっちの竹内流投げ縄の腕前を」

ちょこ亀も仙次も張りきっていた。それでもやはり心配でならなかった。

——やっぱり、これが終わったら、すぐ船を柳橋へ……

その心の動きを計るように、笛に聞き惚れているような顔をしたまま、庄三郎は、ほそい眼で小えんを、狂女を、笛をぬすみ見た。

角剣菱の紋服の、肥った武士、御勘定吟味方改役の磯貝泰之進も、扇子で拍子をとりながら、これは半眼をすれちがう船上にさまよわせていた。

玉屋の花火が、俗にいう末ひろがり。三寸玉、五寸玉、七寸玉、尺玉、尺三、尺五と、おいうちかけるように、ぱっぱっと夜に大きくひろがってゆく。大川端はわーっわーっという喊声だ。さすがに船足もゆるくなるのは船頭も見上げるからか。

笛を聞いていた芸者たちも、のけぞるように、ふなばたからふり仰ぐ。

磯貝は庄三郎を見た。うなずいた庄三郎が視線を〝女郎花の笛〟にもどしたとき、

「すげえぞう！」「玉屋ァ、花火屋ァ」「大元祖ウ、元祖

はこっちの金玉だア」「狸の金玉、大火傷ウ」「母ァちゃん姉ちゃん、膏薬おくれ」「ばかにつけるよな膏薬ねえ！」

猪牙が二艘、近寄ったりはなれたりしながら万八楼の八幡丸に接近して来た。形状、猪の牙に似ているし、速力が矢のごとく疾走できるので猪牙の名があるくらいだから、大型はない。二、三人乗りからせいぜい六、七人どまり。

それだけに揺れもはげしく馴れぬ者は小半刻（三十分）も乗っていれば船酔いする。吉原通いの通人には、乗り工合に秘伝があったという。したがって、素人には櫓さばきが難かしい。横波をうけると、モロに転覆してしまう。

その大騒ぎの一団はがえん人足とも見えた。町火消平人の下で叩き毀し消火をする連中だから、気の荒いことすさまじい。

三人乗り猪牙に七人ぐらい乗って、周囲に水をぶちかけながらやってきた。

三

「あぶねえ！　みよしをむこうへ……」

船頭が竿をとろうとしたとき、どーんと、猪牙が突っかかった。

こちらは大屋形だから、ぐらっと傾いただけだが、あばれ猪牙は、水をかぶってぶくぶく、ともから沈みはじめる。

五、六人のがえん人足は、はじかれたように屋形に転がりこんできた。

キャーッと芸者が総立ちになって、さしもの屋形もぐらりと大きくかたむく。

「いけねえ、一方によっちゃいけねえ」もう一人の船頭が櫓にしがみつく。そこへあとの猪牙がぶつかってきた。

酔いどれ船頭にしては念が入りすぎている。がえん人足たちは、わざと屋形におどりこんできたようでもある。行燈を川へ叩きこむ者がある。芸者に抱きつく、お銚子の酒を飲む。

船頭のとめる声もきかず、逆にくってかかる。

「きさまら、狼藉ゆるさぬぞ」磯貝が抜刀した。

「わっ、ぬきやがった！」

ぐらりとまた屋形がかたむいたとき、小えんは、狂女の悲鳴をきいた。一人の手が笛をつかんでいる。別の男が羽がいじめにしている。

小えんは叫んだ。

「誰か、早くッ」

武平たちは、あばれ猪牙の勢いに気を呑まれていたのである。

あわてて仙次が櫓を動かした。ちょこ亀が、

「あ、あ、いけねえ！」目をつぶってしまった。

がえん二人に抱きつかれて、泣きわめく狂女が揺れる屋形から転落するのが見えた。

「よし、おれが！」

武平が飛びこもうとしたとき、すぐそばで誰やら先んじた者がある。

その水飛沫に顔をそむけながら、

「仙、もっと近づけろ」

花火はつづいていた。が、納涼船はこちらのほうが面白いとばかり、八方から漕ぎ寄せてきた。軒に連ねた提灯や、雪洞のあかりで、水がきらきらした。川波が大きい。

「あがってこねえ、親分だめですぜ」

猶予はしておれない。武平は帯をとき捨てると、下帯一つになってとびこんだ。

そのとき、御用提灯をかかげた小船が漕ぎ進んできた。

「早く、誰か助けてくださいまし」

涙声になった小えんの目に、篠田同心と金吹き久六の姿が見えた。

「久六、おめえ入れ」

「へ？」

「泳ぎぐらいできるだろう、さ、早く」

「へえ、こんな図体はしていますがねえ、実ァ犬掻きしきゃできねえンで」

「ばかッ、それでお上の御用がつとまるかッ」

その篠田同心に、

「女が落ちたのじゃ、手配を頼みたい」

磯貝泰之進が声をかけた。庄三郎も、

「これはよいところへ。同心衆だな、よろしく頼みますぞ」
「は、心得ております」
その会話が何か不自然だったと思いだされたのは後のことである。おろおろとふなばたに摑まって、水の中を見まもったままの小えんだった。
蛍火の集まった甘い水たまりのような水面が、ぽかっと割れて、頭が出た。
「まあっ……」小えんは眼を疑った。「青江さまっ」
弦四郎の精悍なおもては油を流したようにぎらぎら光っていた。そのあとから武平の顔が出た。
「ちょこ亀、たのむぞ」
ぐたりとなった狂女を船にひきあげる。
月代は大分のびて、幾らか人相は変わったようであったが、青江弦四郎の顔を、篠田伴内が見のがすはずがない。
「や、彼奴！　お尋ね者じゃ、捕えろ捕えろ」
弦四郎の頭に提灯をなげたのは、唐突な出現に昂奮したためだったが、弥次馬には効果があったらしい。
「お尋ね者だとよ」「町役人がいうンだ」「とっ摑めえろ！」
篠田伴内は、さらに煽るように付加した。
「そやつをひっ捕えた者にはほう美が出るぞ、捕えろ、斬ってもいい、人殺しの下手人だ」
弥次馬のなかから数人が前後してとびこんだ。事件をおこしたがえんたちも騒ぎをやめてのぞきこんでいたが、
「辰と市があがってこねえぜ」
「溺れたのかえ」
「あン畜生が殺ったンじゃねえか？」
その連中に、磯貝が、はげしく目くばせした。
——早く！……
「おう、みんな、お尋ね者をとっ捕めえろ」
哥兄ぶんが音頭をとると、そのまま蛙のようにとびこんだ。水芸のような飛沫のかげで、庄三郎と磯貝は顔を見あわせて、にやりとした。
「——あの子は、あの子は、死んだのかしら」
「災難だったな……なアに水を吐けばなおるさ……」庄三郎がけろりとしていった。「飲みなおすとしよう、せっかくの花火の夜だ」

四

弦四郎追捕のさわぎはなかなかおさまらないし、小えんはやはりすぐに帰るわけにはいかなかった。
八幡丸を帰そうとしない庄三郎であった。
その意をうけたように蝶八が、
「ほンれ、猫板はどうさっしゃったぞ。柳橋の芸者は、治にいて乱を忘れず、乱にあって三味線を忘れず、はばかりに入って……」
「あれ、またおちた」それでげらげら笑いだして、もう狂女のことは忘れてしまった。
ちょこ亀たちは、篠田同心から、
「こいつはお尋ね者青江にひっかかりのある女だ」
と、狂女の正気のないからだを御用船に移されると、どうするすべもない。
町方同心に対しては沈黙と拱手が、抵抗の精一杯だった。
「武平、青江はお尋ね者だ。わざと見逃がせば臭い飯を食わなきゃならねえぞ」
「——へえ……」
「青江を捕えるンだ。それが嫌なら十手捕縄を返すがいい」
篠田伴内は船頭を促した。町奉行所へ連れてゆくつもりか、船は干潮に乗って下りはじめた。
「——旦那」
新大橋が近くなってから船頭が、
「引き潮なのに、やけに船が重てえンですが」
「なんだと」金吹き久六が目をむいて、「こんな気狂女一人くれえ乗せて重いってやつがあるか。ねえ旦那」
「うむ……」
「あの薬研堀のとん馬野郎の十手を取り上げて、縄張りはそっくりあっしにまわしておくンなさいまし」
「きさま、手がまわりかねよう」
「いえ、そうなりゃ八面六臂の働きを」
「女のほうだけだろう、芸者いたぶりに料亭ゆすりか」
「と、とんでもねえ。ねえ旦那、おねがしいまさア」
「考えておこう、実は櫓下の金五郎もほしいといっていたが……」
——セリ上げやがる。十両もやらにゃなるめえ……

久六は両国の空を仰いだ。

開きそこねた花火が、星が炸裂して流れるように火の玉となって燃え落ちるのが見えた。

伴内は濡れねずみのぐったりとしたからだを人形のように胴の間へ投げだしている狂女のからだに、異常な興味を感じていた。

——気狂いとは見えぬな……

少し前から彼は後藤庄三郎に一味するようになっていた。同心から出世して与力になったという話は滅多にないことだし、同心の上席に出頭することだって容易ではない。という現状から見れば、庄三郎のくれるという金は貰うほうが得だ、と決心した。

「難事なことをおねがいするのではない」

と、庄三郎はいった。

「実は、お町奉行のほうとは、じっこんのあいだがらだから、おてまえにとってもイザというときには役に立ってあげられるし……」

町奉行まで庄三郎の金力に動かされているのなら、一同心が聖人ぶるのは馬鹿な話だと、伴内はじぶんの心を納得させた。

笛師庄吉殺しのとき、

「小普請組青江弦四郎、不審の廉これあり候。青江を糾明するこそ必要かと愚考仕り云々」

と調書を呈出したほかに近隣の証言として、

「庄吉の死体を青江がさわっていた」

「度々訪れていた」

「当夜、ほかには訪れた者はない」

などの口供書と拇印を揃えた。

おせっかいな長屋の人々の心理に乗っかって話を誘導したのである。

むろん、この調書が、町奉行所の〝笛師殺害事件〟の主体をなして、青江弦四郎に追捕の手がのびたのだが、庄三郎も非常に悦んで謝礼としてくれたのが二十両。三十俵二人扶持の同心ふぜいには大金だった。

米価や物価の変動の甚しい時代だったが、まずおおまかにみて、一両は現今の二万円近いと見ていい。読者周知のことだが、同心は今の平巡査、定廻りはパトロールだ。

岡っ引きはその同心の嗅ぐ鼻、見る目であって、公けの職制にはない。むろん、僅かの小遣銭で働いたのであ

る。同心の名札につけて十手と捕縄を預かっていればハバがきいて副収入が多い。

伴内にしてみれば、筒井筒のころから上士と下士の身分差のあった弦四郎に、劣等感があった。弦四郎のほうでは感じまいが、伴内は彼をねたみ、憎んでいた。

したがって、こんどの措置は、伴内の私怨を霽らしたようなものだ。それが二十両になれば、一石二鳥。彼は庄三郎の隠し私兵になっていることに、満足をすら感じていた。

——それに……

と、狂女のあられもない姿体をじっくりと見て、舌舐めずりした。

——こんな余禄もある……

五

気を喪っているということが、伴内を大胆にした。彼は、狂女の帯に手をかけた。

「どうなさるンで、旦那……」

「目の保養だ」

濡れた衣類は肌にべっとりくっつき、脱がすのにほねが折れた。が、それだけに、着物の下から白桃の肌があらわれるのが、男の心をぞくぞくさせた。

「てへっ、こいつ気狂いのくせに、いい肌をしていやすねえ……」

「涎を垂らすな。きさまア籾蔵のおれんが似合っている」

前をひらいただけでなく、ついでに、すっかり脱がせてしまった。三つ又の中洲が近づいて納涼船はまだかなり遊弋していたが、伴内は平気だった。平気というより、慾望を制御できなかったのだ。

一糸まとわぬ裸にされながら、狂女は右手に死んでも離さじと笛を握っている。

「後藤どのは、花笛だけを狙えといわれたが、よほどの執着があるのだな。これをとれば化けてでるぞ……」

「死んじゃいますめえ」

「死なすには惜しい……」

伴内はうっとり見惚れた。

誰が狂人と見よう。やや苦しげに眉をひそめている表情が、初夜の快感を伴った苦痛に身をよじる姿、そのままだった。すらりと均整のとれた四肢もみごとで、難の

つけようがない。

陳腐な形容詞だが、花の香すら匂うような肌である。男を何ほども知らないのであろううず高い双つの盛りあがりは、俗にいう鉄砲乳。円錐状に弾力を秘めて、男の手を待っているように、かすかに息づいている。

腹から腰へのゆるやかな曲線といい、思ったより肉の盈ちた二本の円柱のきわまるあたり——淡い墨むらの陰影も、星のひかりは神秘的に見せていた。

「死なすのも惜しいが」と、ため息もあらわに伴内はいった。「眼をさまさないほうがいいな、気狂いだとはっきりわかると興ざめする」

「といって旦那、へっへっへ、まさかいまナニするわけにも……」

「なアに、おめえと船頭は星でも数えていな」

永代をくぐると涼み船はまばらになる。伴内は狂女の肌に手をのばした。乳首にそっとふれた。

そのときだった。

「だ、旦那！」

久六のひき吊るような声にカッとなって、

「うるせえやい、星を……」

「星を数えてどうする？」

怒鳴りつけようとした声をのんで、伴内はふりかえった。

その面前に、ざーっと水玉をはねとばして船にあがってきた男。

小さい船だから、転覆しそうに揺れた。ふなばたにしがみついた伴内は全身の血が凍った。

「あ、青江、あ、あ……」

「風邪をひいて声が出ないか。いかにも青江弦四郎、その女に、いやその笛に用があってついてきた」

ふいに久六が匕首をぬくやからだごと突っかかってきた。

「たわけッ！」

肘が僅かに動いた。

「うわァ！」久六の足は宙を蹴っていた。そのまま、もんどりうって、川の中へ——いな、江戸湾の潮がどぼり、と非情にこれを呑みこんだ。

二、三度、波間に顔が出たが、それっきり、金吹き久六の大きなからだは浮かばなかった。

「あわれなやつだ。おのれからもとめて、藻屑になりお

った。船頭」

「へ、へい」

「船を戻せ、新堀にでもいれるのだ」

弦四郎は、金座で庄三郎の秘密を洩れ聞いてから、ひそかに行動をさぐっていた。

——笛をもとめている首魁は、金座後藤だったのか！……

そうわかってみると、いくつかの謎も首肯できてくる。そして、後藤庄三郎を勘定奉行がバック・アップしていることが、弦四郎の闘志をかきたてた。

勘定奉行は弦四郎のもとの上役である。そして勘定吟味なども、弦四郎の生一本の性格がうとましく、左遷したのだ。角剣菱の紋服が、磯貝泰之進であることを知ると、一層、弦四郎はこの事件から手をひけなくなったのである。

——勘定所は腐敗している。金座後藤の勢力はほとんど浸透している。

すべては黄金の魅力、物質主義から来ている末世の様相だった。

弦四郎が、小えんの安堵を知ったのは祭礼のなかだったが、狂女の笛のことは、先刻知ったばかり。庄三郎自身が乗りこんで来たのは、なにやらの計画が大詰めにきたことを意味するのではないか。

弦四郎は、裸身に濡れ衣をかぶせてやり、固く握りしめた花笛を見た。

月明ではあったが銘は読めなかった。弦四郎が目を近づけとき、がばと篠田伴内が身をおこした。

夕映え剣士

一

まさかそこまでするとは思わなかったのである。船はお船手の番所近くまで来ていた。

伴内の思い迫った気配に、はっとかまえたとき、彼はふなばたから身をおどらせて、とびこんでいた。

「や……篠田！」

町役人のくせに、逃げなければならぬほど良心がとがめたのだろうか。

——篠田伴内に自白させて……

笛師庄吉殺しの下手人が、じぶんではないことは伴内は承知しているはずだ。あえて下手人に仕立てた伴内に心改めさせて、彼に寃罪を雪らさせねばならなかったのだ。

「しまった……」水の上だと安心していたのが、この失敗を招いたのだった。

茫然としている背に、弦四郎は、流れてくる笛の音を聞いた。

「あの笛は？……」

花火はもうやんでいた。

十七日の明皓々たる月が中天にある。蒼い光を浴びて、一艘の小船が近づいてくる。笛を吹く佳人は、その上にある。

——野風の曲だ！

むせび泣くような声、虚しい嗤いにも似た音いろは、秋風に独りたたずむ悲しさ、さびしさをあらわしている。

——彼奴！　白狐？

月下に白頭巾がみごとなまでに美々しく見えた。むろん、彼は弦四郎の船と知ってくる様子。三間の近くにきたとき、彼は呼びかけた。

「——白狐よ、水の上では十方手裏剣がふるえぬのか？」

「——わめくな、やがてに、わめきたくともわめけぬようにしてくれる」

白狐はおもむろに笛をはなして打ちかえした。

みよしが近づいた。白狐の枯木さながらの姿体は、小船に立つと、川口の強い風に打ち折られそうであった。

みよしとともが近づいていた。その先端が相接したと思われたとき、ひらりと——片懐ろ手したままの白狐のすがたは弦四郎の船に移っていた。

「船頭！」

「へい」

「おれとかわれ」

「へ？」

「おれのかわりに、むこうの船に移るがよい」

船頭にしてみれば渡りに船。かなりうまく、飛び移る。

「——このほうがよかろう、な、弦四郎」

「斬られにきたか、わざわざと、ご苦労なことだ」

「どちらか一人……死ぬ」

「狐だろう、そりゃア。もっとも笛好きの白狐は泳げるか知らぬが……」

むろん、殺気を孕んだなかの軽口であった。二人のあいだには狂女が死んだように、からだを横たえている。二人ともまだ刀の柄にこそ手をかけていなかったが、この二人の眼光や、姿体や、声音は——すでに抜刀したのにもひとしかった。

沈黙がきた。潮騒と、風の声が二人を包んだ。船は干潮に乗って流されている。

「——青江弦四郎、おめえとは妙な因縁で敵味方となったが、いままでおめえのような歯ごたえのある奴にはあったことがねえ……」

「おまえは」と弦四郎もいった、「それだけの腕を持ちながら、つまらぬことで人を殺す、世の中の裏道を歩いて恥ずかしいとは思わぬか」

「弦四郎、おれはいかにも、人を斬るのは好きさ、十方手裏剣が、ぐさっと刺さったときの小気味よさなンてえものは、理屈じゃねえ、金で買えもしねえものさ」

「たった、それだけの理由で？」

「莫迦いえ、たとえおれでも、そこまで愚かじゃねえ」

「おまえの本名を聞いておこうか」饒舌にとどめをさすように、弦四郎はいった。「吉原の投げこみ寺で供養を頼んでやる」

などあらゆる場合が、〝自分の金〟へのルートになった。

明和二年に家督してから、実に三十年間、彼は孜々として、金貸、あるいは純金を盗んだ。

金座と幕府の関係は一種の請負制度として発祥したから、いわば公団公社の性格に似ている。後にはしかし勘定方として大蔵省の管理内で、御金改役――すなわち金座支配の庄三郎は代々家禄二百俵。

年収額からいうと課長クラスだ。この身分で横領した金は発覚したとき十万両、と推定された。

が、なにしろ三十年間にもわたってしたことだ。調査の資料も揃わない。勘定方の計算では三十万両はあるのではないかという線が、ほぼ真に近いと噂された。

三十万両――現在の価値からすればおよそ五十億にもなろうか。

幕府の取調べは峻烈をきわめた。庄三郎光暢は横領金の隠匿場所をどうしても自白しない。

――博奕、遊蕩に使い果たしました……

の一点張り。多少は遊んだようだが、額がとにかく大きい。ことに用心ぶかくて、それほど目立つ遊び――紀

「投げこみ寺だと！」

怒気がこもっていた。

「尾花を……」

「あ、そうだったな。やはり、おまえが尾花の情夫だったのか。名はなんというのだ？」

「うるせえ！」叩きつけるような声が、「弦四郎、おめえにいい話を聞かせてやろう、同じ死ぬるにしても、花笛が気がかりで死にきれめえ」

二

十五年前――金座後藤は九代庄三郎光暢という。前名は金座役人青山兵之助といい、十二人扶持の軽輩だったが、八代目に世嗣がなかったので見こまれて養子となり九代を家督した。

家付きの妻が美貌ではあるが権高く冷たくて、夫婦の情を知らない。空虚な日常が光暢に、〝自分の金〟を貯えさせることに追いこんだ。

不正はいうまでもない。金座の機構を十二分に知った九代庄三郎光暢がすることだ。砕け金、納金、新貨鋳造文とか、奈良茂だとか淀屋辰五郎だとか、そういう莫迦遊びの噂は一つもない。

――必ず隠匿しているはず！

追及の手は拷問になった。凄惨目を蔽わしめる拷問にも、光暢は口を割らない。

生爪をはいで針を刺す、石を抱かせる、逆さ吊りして鼻から水を注ぐ、頭髪を非人にむしりとらせる。歯を引きぬいて歯茎に焼針を刺す――

連日の拷問は次第に、光暢の記憶力すらうすれさせることになって、当局を狼狽させた。

失神すれば水をぶっかけて、あるいは医者に手あてさせてまた始める。死ねば元も子もない。

――殺してはならぬ。死なぬように責むるがよい……

しかし光暢は強情だった。むしろ口を噤じて死んでゆくことに最後の勝利を感じているらしかった。

年月はその間にもたっていった。牢獄奉行石出帯刀も町奉行もなんども代わり――その拷問と、そして各方面から調査、捜索はひき継いで続行された。

――三十万両、それがどこかに隠されている！

上下ともに、その宝探しの話に酔ったが、十五年の歳月は、人々の記憶にかすかにとどまっている程度で、光暢その人が、いまだに衰弱の身をつながれて、時々思いだしたように拷問を受け、今ではまったく精神が狂って、ほとんど廃人になっていることも、知る人は少なかった。

そうして、御金改役も、十代をついだ光清は五年前に死に、庄三郎十一代目を光包が継いで今日に至っている。二人とも光暢とは血縁はない。

当局では近ごろではもうあきらめてしまっているが、あきらめない男がいた。

十一代庄三郎光包である。彼はたんねんに十五年前の光暢の私生活を調べて、人に知られない子を何人かもうけていることを発見した。

五十億もの巨額の金塊――周到な光暢が小判で隠匿するはずはないと思われる。金銀貨は常に新鋳する場合、旧貨を召し上げて、潰してしまう。これは改悪による批判や、比較を当局が恐れたからにほかならない。古銭蒐集が、銅銭にかぎり許されたのは金位の質の落差を世間に隠蔽したいからであった――。

その事情を知っている光暢のことだ。秘匿するからに

は金塊であらねばなるまい。

人々が、なお半信半疑だったのは、

「気がふれるほど責め問いされてなぜ、白状しないんだ？　そんな金なんざ、ねえんじゃないか」

なぜそれほどまでに抵抗するか？　なぜ？……という疑問を、光包は、「誰のために」と、いうふうに置きかえた。光暢自身も含めた人間に。

あれほど嫌った妻は、当初責められて獄中死している。子はない。

血すじはほかにない。

「――ないだろうか？」光包は反問した。その頭に閃いたのは、妻を偽ってひそかに愉しんだ、かげの生活、のことだった。

「隠し女が、そしてあるいは隠し子があるのではないか？」

その血縁が、三十万両を握っている！

庄三郎光包の執拗な、秘密調査は、その線でつづけられたのである。

三

「――庄三郎は秘密をつかんだ」と、白頭巾はいった。

「それが、この笛さ」

「花笛が……」

「この花笛ア七本あるはずだ。その七本がそろったとき、三十万両の隠し場所がわかるそうだ」

光包が端緒をつかんだのは、新吉原の尾花太夫からである。尾花の笛の金襴の袋が、光暢の好みで織らせた遺品と同じもの。

尾花が光暢の隠し児だったとさぐりあてたのは、彼女が白頭巾との関係がぬきさしならなくなって、自害して後のことであった。

「光暢には七人の娘があることがわかった」白頭巾はいった。「おもしれえことに、その七人の誰もが、てめえのおやじを金座後藤だと知らねえことだ……」

「子にまで自分を隠していたわけか」

推測では、まず妻をおそれたこと、次に悪事が露見したとき、類禍のおよびを未然に防ぐため。

子ばかりではなく、女にまで、素姓を秘めていたらしい。だから、幕府の力でもってしても、その関係者を探し出せなかったのである。

「尾花には尾花の笛、真葛には真葛の笛――これだけは、どんなことがあっても手放すなと念をおされた形身――とすると、ほかの五人にも、一本ずつ、笛がわたっているとみていい……」

笛師庄吉は七本、同じ笛を光暢に頼まれて、生涯、秘密にすることを約した。

真葛たちが亡父に教えられた憶良の歌。

――萩か花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤ばかま

朝顔の花――

光暢は歌が好きでことに憶良に傾倒して、寺島村百花園には、憶良の碑をたて、右の歌をきざませたりしている。

これは周知のことだった。

七人の女の子――七本の花笛。

その線にそって、光包は捜査をはじめた。

「七本の花笛こそ、三十万両の秘密を蔵しているものにちがいない」

と。

青江弦四郎は懐中をおさえた。花笛の二本がそこにあった。尾花と萩花と。

「――おれが吹いているこれは撫子よ。奥山の茶屋女お島が持っていたやつだ」

「……」

「一昨日の祭りで、真葛からとった葛花の笛は庄三郎が持っている。そして、この気狂い女の手にあるのは……女郎花にちがいねえ」

「なぜわかる。藤ばかまかもしれまい」

「ふふふふ、藤ばかまは、お藤が持っている」

「お藤？」

弦四郎が、両国の蛇つかい女お藤を思いだしたのは当然である。彼の知る範囲に、ほかにお藤という女はいない。

――まさか、あのお藤ではあるまい……

弦四郎は打ち消した。

「知るまいな、おめえ」無気味な笑い声がまた頭巾をもれた。「おれの、女さ。庄三郎には渡さねえ、ふふふふふ」

——萩乃も光暢の娘だったのか……

庄三郎は萩花の笛を入手するため、木谷孫左衛門をも一味に誘いいれたのである。

葛花の笛を奪うためには勘定奉行をそそのかして、真葛を祭礼に出場させた。

計画通りにことは運んでいたのだ。

「——弦四郎、すっかり話してやったのは、ほかでもねえ、おれと組まねえか」

「なんと！」

「おめえと勝負をつけるのも面白えが、せっかく三十万両手に入るンだ。どうだ十五万両ずつ山分けで、手を打たねえか」

弦四郎の頬に侮蔑のかげがうすく浮かんだ。

「その前に、もう一つ聞きたいことがある」

「なんだ」

「きよ香を初めに殺したのはわかる。桔梗の笛をとるための手段だったのだろうが、なぜ小えんまで殺そうとした？」

「きよ香は邪魔だったンだ。山甚と相談しているところを盗み聞きした。それでことがばれちゃいけねえので、殺ったのさ。山甚のお膳だてでな。桔梗の笛なら、山甚にどうでもなったさ」

「そうか。小えんが、きよ香と仲良しゆえ、おまえらの秘密を小えんも知っているかと、疑ってのことなのか」

「邪魔なのは消してゆくのが、おれさ」

「すると、青江弦四郎なぞ、もっとも邪魔な存在だな」

「ああ、おめえにゃ苦しめられたな。だがよ、善に強いは悪にも、というからの、おめえとは話が合いそうだ」

弦四郎は苦笑した。

「そのお藤とやらはどこにいるのだ？」

「両国さ、蛇つかいの、妙な女さ」

「……」

「面白いやつだが、女は女、邪魔なほうが多い。男同志のようなわけにゃゆかねえ」

「よほど、見こまれたようだが……」と、弦四郎は苦笑を浮かべたままいった。「せっかくだが、青江弦四郎、昨日までは直参だった男だ。頭巾をせねばおもてを歩けぬような殺人鬼とはなかまになれぬ」

四

一気に冷水が沸りたって奔るように、怒気があふれるのがわかった。白狐はいきなり頭巾をむしりとっていた。

十七日の月は、あくまでも中天にきらめいて、この世間から隠れてきた顔を照らしだした。

きりぎしのように削げた頬の、残忍酷薄な性格をそのままかたちにしたような、けわしい相貌だった。

「見ろ、見たか、見たか、見たか」

「……」

「いま、なんといった、直参だって、ひょっとすると返り咲けるとでも思っていやがるのか。勘定吟味や金座後藤の不正をばらしゃア、たしかにもとにかえれるかもしれねえな。だが、そう問屋がおろさねえぜ、おろすもんか」

憎しみを叩きつけるように、彼はいった。

「おい、この黒崎弥九郎だって、直参だったのだ、三年前までな。おめえよりゃ家禄は高けえ四百石どりだ。女遊びがすぎて甲府勤番に追いやられたンだ。が、おれア用心棒になりさがっても江戸の街から離れられねえ。勤番道中の途中、小仏の関のまえからこっそり立ち戻っての浪人ぐらしさ。面を見られたら軽くて遠島、悪くすりゃ切腹……」

「用心棒が殺人鬼になったか」

弥九郎の唇がゆがんだ。ぎりぎりと奥歯が泣いた。

「こ、この、弥九郎を、甘く見やがったな、くそッ」

殺人刀が光の箭のように、弦四郎の胸に走った。鏘然とこれをむかえて、弦四郎の剣も鞘走っている。

「う、うぬ！」

「弥九郎！　きさまの望み通りにしてやろう」

「な、なに？」

「きよ香、庄吉、お島、真葛、それに木谷孫左衛門の仇討ちをしよう。黒崎弥九郎は三年前に死んだ、いま死ぬるのは、血に狂った白狐だけだ」

ぐうッと異様な呻きが、喉仏を破るように奔った。二本の白刃は、すさまじい叫びで、月明の海上に交わった。

三十万両の夢と、世間への憎しみをすべて、弦四郎に

むけて、狂ったような弥九郎であった。月に吼え、波を切る。刃は刃を噛み、哭きに哭いた。

その、不安定な小船の上での死闘はどれくらいつづいたろうか。

漁師でも知らせたのであろう。お船手方の提灯が漁り火のように海面を焦して、近寄ってきた。

船頭のいない船は佃島の近くに流されていた。

「ううむ、邪魔が入ったな」

これまで、と思ったのか、兇刃はさっとあらぬところに走った。

なまぬるい鮮血が、弦四郎の肘にしぶいた。なんという残忍さ——女郎花の笛を握った狂女の手が、肘からすぱりと切り離されて、

「またあおうぜ」

弥九郎はその腕を、薪でもつかむようにして、さっとふなばたを蹴った。

「待て！」

弦四郎の声に応える水しぶき。

それから——小半刻ほどのちに、弦四郎はお船蔵の汐臭い小屋に沿って、お藤の長屋に急いでいた。

——弥九郎は当然くる。その前に……

お藤は、いた。独りで寝酒をかたむけていた。

「なんだい、いまごろやってきて」

「お藤、そちは、藤ばかまの銘がある笛を持っているか？」

「ああ、持っていますよ。それがどうかしたのかえ」

お藤は膝をおこした。

「見せてくれい」

「いやだよ。なんだい、てめえに都合のいいときばかり来て、あたしがあんなに惚れてやったのに、莫迦にしくさって」

「……」

「女のほうから、はっきりと惚れたといったンだ。裸でぶつかっていって、あんな恥をかいたことアない」

「恥をかかせるつもりはなかった」

「そうでしょうよ、そんな閑人じゃないってね。腐った蛇女より三十万両のほうがいいからね」

「なに、知っているのか」

「悪うござンしたかえ、そりゃ白狐の弥九郎は善人じゃないよ、ろくでなしさ。でも、あたしを可愛がってくれた、いじめもしたが、可愛がってもくれた。教えとくけどね、女ってものアそれでいいんだ。それがほしいンだよ青江さん」

語尾は、ふるえた。偽らない女の気持が、弦四郎の胸を打った。

三四の蛇を愛撫する掌にぽとりと涙がしたたった。

「親なし子のあたしにゃ、三十万両よりも毎夜抱いてくれる男のほうがいいんだ。親なし子の苦労をしらないお武家さまにゃ、どうせあたしの気持なンかわかりゃしない」

「——お藤」と、弦四郎はいった。「おれはそちを救うことのできない男かもしれぬが、弥九郎だけはあきらめろ」

「妬いちゃいけないよ」

「知らぬのか、そちは。弥九郎は、そちの異母姉妹を四人も手にかけたのだぞ」

「え、まさか、そんな……」

「信じられぬなら、それでもいい。おせっかいのようだが、案じられるのでいうのだ。ほかの男を探すがいい」

五

顔いろも変えない弥九郎であった。無言で、手酌で飲んでいる。

「——おまえさん、ほんとうじゃないだろ、嘘だろう、嘘だといっておくれ」

「よく数えたな」

弥九郎は、ぽつりといった。

「え！」

「四人目はいまこの手で斬ってきたばかりだ」

お藤のひき吊ったような表情を、冷たく彼はふりかえって、盃を伏せた。立ち上がって、帯を結びなおした。

桔梗と撫子と女郎花と、三本の笛は腹巻の中におさめられている。

「お藤」

「……」

「出せ」

「え？……何を」

「笛よ。藤ばかまよ」

お藤は黙って、首垂れた。
「さ、早く出しな。どこへしまってあるンだ」
「おまえさん……ほんとうにあたしの姉妹を四人も斬ったの？」
「まだいってやがる。ほんとうならどうだってんだ、え？」
「ほ、ほんとうに」
「何が悲しいンだ、姉妹といっても腹ちげえだ。姉妹は他人のはじまりともいうぜ」弥九郎としては歯の浮くような言葉だった。「夫婦は三世だ」彼は、そんな言葉を口にしたのが苦々しげに、とがった顔をゆがめた。そして、怒鳴りつけた。
「出せ！　早く。出さねえか！」
お藤は、涙のたまった眼で弥九郎を見、悄然と茶箱の底から出してきた。らんぼうにひったくる腕に、思わずお藤はすがりついた。
「う、嘘だね、だれか、ほかの悪いやつが斬ったのね、そうだね」
「うるせえやい」弥九郎は女の腰を蹴とばした。「おれが斬ったとも。おれの刀は血を吸いたいンだ、くどく吐かしやがるな」
「ほんとうに、ほんとうなの」
「くどい！」
「そんな、そんなおまえにゃ、これはやれない」お藤は笛にとびついた。
藤ばかまの笛はやぶれ畳を転がった。お藤がつかんで走り出そうとしたうしろから、
「うぬも！」
お藤は右肩から、左わき腹へかけて、ぐんと殴りつけられたような気がした。どっと倒れた拍子に、笛は土間へはねとんだ。
斬られた——という意識はなかった。殴られたのだと思った。朦朧としてくる意識の表面に、古い絵巻物のように、幼女のときからの生活がゆるやかに、おそろしい速さで、流れていった。
「笛……笛が……」
お藤は這った。土間へおりようとした。もう目は見えていなかったが、指のさきに笛が見えて、彼女は指を動かしながら、
「あたしにも、姉妹が、あったのね、きれいなお姉さん……可愛い妹が……」
それっきり、がっくりとなった。孤独をなぐさめた蛇が二匹——太郎蛇と三郎蛇が、ぺろぺろと紅絹の舌で血を舐めながら、お藤の背中へのぼってきた。
そんな惨劇を起こしたのは、どこの誰だという顔で、四半刻ほど後に黒崎弥九郎は金座後藤の役宅を訪れていた。
「——この通りだ」
四本の笛が並べられた。庄三郎が葛花の笛を出す。
五本の笛は、小柄で割られた。横笛の構造は簡単なものだ。指穴は七笛。吹口から頭の端まで鉛が入っている。それをふさいだ栓を調べ、赤地錦の小布も仔細に見た。
席には磯貝や山甚のほかにも、五人ほどの金座役人と勘定方のものがいた。
いずれも、金座を利用して私腹を肥やしている連中で、こんども一味していたのである。
「慎重にやらねばの。苦労して、金を使うて三十万両を発見したらお上のもの、というのでは間尺にあわぬからのう」
蟬——と名づけられた部分は唐木でできている。
伝説によれば、鳥羽院の御宇に支那より渡来の甘竹で笛を作ったが、その節の形が蟬がとまっているように見える。珍しい横笛として重宝された。あるとき高松黄門実平卿が吹奏中に落として蟬を折ってしまった。唐木でそこを修理したことから爾来この笛は蟬折と名づけられたが、この故事から、その節の部分に唐木で蟬をつけるようになった。
その蟬に、暗文らしいものを山甚が発見したのだ。
それは〝桔梗の笛〟だったが、平がなで一字、
「た」
と、読めた。
「ほかのも蟬に注意してみよう」
そこに、中間が、
「見知らぬお方から、こんなものが届けられましたが……」
と、包みを持ってきた。
一見して、一座の顔いろが変わった。細長いその包みは、誰の目にも笛と思われたからである。

六

「おお、これは……」期せずして、彼らは叫んだ。「花笛尾花と萩ではないか」青江弦四郎が持っているはず。不審の一座を、弥九郎が見まわしていった。

「青江の送りものじゃ」

「彼奴が？　そのようなことが……」

「おれの説得がきいたのだろう、三十万両と聞いて愕いていたが」

「わけまえを貰ったほうが得だと悟ったのだな」と、磯貝が磊落に笑って、「もともと頭は悪くないやつだから」

「あまりよくもない」

庄三郎はさげすむようにいった。

「わけ前の金は」と、弥九郎をかえり見て、「そちらの手裏剣をくれてやるがよろしい」

「ふふふふ、ふふふふ、そうするか、ふふふふ」

陰気な笑い声をぷち切るように山甚が、頓狂な叫びをあげた。

「できた！　できたぞ、わかりましたぞ」

「蟬か、やはり！」

「蟬と歌、憶良の歌じゃ、百花園じゃ」

大分限の山甚が狂ったような声になっている。

やはり――蟬に謎は秘められていた。

桔梗が、「た」であることは述べた。葛花は「ぶ」、撫子は「み」、女郎花は「の」、藤ばかまは「し」、であった。

送られてきた尾花が、「い」で、萩が、「し」――

「これを憶良の歌に並べてみるのじゃ」

と、山甚は奉書紙の上において説明した。

「まず、萩か花で『い』、尾花葛花なでしこの花で……『し』『ぶ』『み』とこうつづく」

「いしぶみ！」

庄三郎が、思わず膝を叩いた。

「あの碑か、寺島の百花園の？」

「左様であろう……そのあとは、の、し、た……となる。古書には桔梗は朝顔の異名とされている」

「すると、いしぶみのした……碑の下、と判読してよいのか」磯貝がいった。「さっそくゆこう、寺島まで船を出すか」

「猪牙でも馬でも」

とおどけたように一人がいうと、

「廓とまちがえまい」

と、みんな笑った。

おし黙っていた弥九郎が妙なことをいった。

「七の五は、三十の幾つになろうか……」

「なんじゃ、難かしいことを」

「いや、七の五は、三十の……二十、一か二」

「なんのことじゃ、いったい」

弥九郎は庄三郎を見た。

「七本のうち、五本はこの白狐の働きによるものだ、その計算をしているだけだ、三十万両のうちの二十一万両はこちらに頂けるという寸法だ」

「妙なことをいいなさるね」庄三郎が坐りなおした。「そのような約束をしたおぼえはない。いままでにもたびたび合力してきたし……」

「いやなら、三十万両そっくりおれが貰うまでだ」

弥九郎は立ち上がった。

そのとき、はっきりと庄三郎は、弥九郎の存在が邪魔者でしかないのを感じた。利用するだけした、と思ったとき、庄三郎はとびすさって懐中から精巧な短銃をとりだしていた。

「――火縄のいらぬ和蘭陀渡りの飛道具」と庄三郎は女のような声で笑った。

「白狐はこのあたりで消えたほうがよろしかろう」

「うぬ！」引鉄がひかれようとした刹那、弥九郎の手から十方手裏剣が――

手練のほどは弥九郎自身が知っている。しそんじることはないはず。だが、轟然たる音で、銃口は火を噴き、鉛玉が、弥九郎の心ノ臓を貫いていた。

弥九郎は手をあげたままよろめいた。十方手裏剣は、まだ掌に、あった。

「――蛇が！」

一座は、ぎょっと竦んだ。濃い硝煙のなかに、弥九郎の手、腕から頸に巻きついた一匹の錦蛇が見えた。

それは、お藤の死体のそばから姿を消していた次郎蛇であった。

七

寺島村の百花園は百華園ともいい、広大なところに四季折々の草花を咲かして、行楽の客足を呼んでいた。春は花、夏の月、秋の花、冬には雪と訪れる人が少なくない。

句会や、茶人の集まりなどにも亭を貸すし、風流人士は道を遠くとせず杖をひく。

九代庄三郎光暢がたてた山上憶良のその碑の下が掘りかえされたのは翌十八日の夜のことであった。

碑のところは起伏にとんだ地形の小高い築山を利用したもので、土饅頭のように、盛りあがったところを、掘りかえしてみると、鉄の大きな箱が出てきた。

すっかりさびついた錠を叩き破ってあけると、かまぼこ型の流し金が、燦然と彼らの目を射った。

そのときだった。見張りを峰打ちに倒して、青江弦四郎が、颯爽たる姿をあらわした。

「ご苦労なことだったな」

弦四郎をかこんで白刃が閃いた。

彼の剣はよくこれをむかえて、次々と倒していった。

「死に急ぎをするな、百花園のまわりはすっかり御用提灯の輪ができているぞ」

篠田伴内は一味の中に交っていたが、弦四郎の言葉を聞くと、彼らしい保身のすべを考えた。

ひとり逃亡をはかった庄三郎を捕えようとしたのである。鉛玉が、伴内の下腹を貫いた。撃たれながら伴内は庄三郎の足を斬った。

町奉行所へ、弦四郎の状を持って駈けこんだのは武平である。ちょこ亀は萩乃をともなって、百花園に駈けつけた。

月明のもとの大騒動が終わるころ、篠田伴内は萩乃に苦しい息の下からいった。

「――木谷どのを刺したのは弦四郎ではない。傷は両刃の……槍傷だった。槍を持っていたのが誰か、それは磯貝が知っているだろう……」

道を間違った男の、友情の最後の言葉だった。

萩乃は郊外の道を弦四郎に送られてもどった。多くの姉妹が自分にあったということもはじめて知ったのである。

「――お姉さまや妹たちを、ねんごろに供養しますわ。あたくし」

あたくしたち、と複数でいえないのは、武家娘の慎みなのだ。駕籠のなかで、萩乃はひとり頬あからめて、まぶしそうに弦四郎を見あげる。その蒼く見える端麗な男の表情は何を思っているのか。月のあかりは青江弦四郎を濡らしている。萩乃の心も濡れてくるのだ。

江戸の郊外にはもう秋の気配が迫っていた。星空も秋のものだ。野面をわがもの顔の虫の声は、駕籠が近づくとぴたりとやんだ。その虫たちに顔を見られるような気がして、萩乃は熱い頬をおさえるのだった。

「暑い暑いといっているうちに、もう秋ですのね……」

「いずれ日をあらためて」と、弦四郎はいった、「秋の七草を見に来ましょう、そのときはお誘いしてよろしいか」

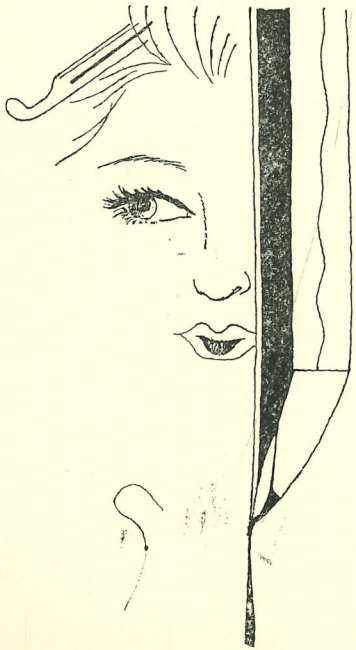
「ええ、ええ、あたくし……」

お待ちしています、と心のうちでいって、またそっと見あげる。

やはりまっすぐ前をむいたまま怒ったような生真面目な顔で、駕籠と歩調をあわせてゆく青江弦四郎であった。

長編異色時代小説

妖刀伝奇



一

ある不思議な恍惚感が、雨の音を消していた。伊丹靱負は闇のなかに目を細めて、茫然と立っている。陶酔といってよいかもしれない。いささかの抵抗もなく、白刃は走ったのである。筋肉を裂き、骨を断った刹那、こころよい手ごたえが、腕から肘、肩へ、すっとぬけた。哀れな男は、あまりにも突然だったせいか悲鳴もあげ得なかった。

雨は、闇を一層昏くしてけむっている。

堀割の流れの音は、白蛇が奔ったその刹那に消え、靱負の耳に、妙なる音楽のように聞こえてきたのは——

血？

ぽたっ、ぽたっ、ぽたっ……と。血だ、血の音だ。

単調で、寂しく、無限に——無気味な地獄の声のような、血の音なのだ。

間合いが、次第に遠くなり、最後の血が、刀身をゆるやかにすべり、鍔子から、ぽとっと、重くぬかるみへ滴たった。

——何故、斬ったのだ、おれは？……

汐のひくように、ふいに、彼は、われに返った。

被害者の呻きも甦った。手に泥をつかんでもがいているのは、同僚だった。筒井市太郎。三つ年長で、吉原へ最初連れていってくれたのも、この男だ。

怨みはない。憎くもない。それどころか、近いうちに……

——義兄になる筈だったのに……

茫漠たる面もちで、靱負は呟いた。

「何故だろう……許せ。おれア斬る気じゃなかった」

雨脚が、やや強くなり、靱負の蒼い顔を叩いてきた。

「ひとりでに……そうなんだ市太、ひとりでにおれア刀を抜いた。抜く気じゃなかったのが、ひとりでに抜けたんだ」

悪いといえば、この雨夜に、人気なき三味線堀で、遭遇したのが悪い。

転軫橋を渡りかけたとき、鳥越のほうから唐傘がきた。それが市太郎だった。全くの過然だった。誰のせいでもない。

「おお！……」

と、かしげた傘の下から、人懐っこい目が出て、

「靱負ではないか、いまごろ何処へ？」と声をかけた。

「やア」

と、彼はいった。答えたものかどうか、口ごもった。

遊びの手ほどきさしたくらいの男だからそう固苦しいこともあるまいが、妹の婿がねとなると、やはり違ってくる。

深い女のところへなどとは、言えない。

「うむ……ちょっと、刀をな」

と、苦しげに靱負はいった。嘘は上手ではない。苦しまぎれだった。

「組頭の依田どののところへな、その、刀の鑑定を頼みにの」

「ほう……それか？」

彼の腰を見た。日頃の差料は紺の柄糸で透し鍔だ。これは朽葉色の柄糸が渋い。

新婦を迎えるので、土蔵の整理をしたら出てきたのである。村忠と在銘。

市太郎はちょっと好奇心を出したように、

「刀の鑑定なら、拙者のほうが目が高いぞ」

と、軽く笑い、では近いうちに伺うとしよう、と、市太郎は背を見せた。

その巾広い背が、

——武士にあるまじく……

死人にいいたい。隙を見た。隙を見せたのが、いけないのだ。たとえ相手が誰にてあれ、武士の心得ではない。

——斬れる！

ふっと感じた。瞬間、靱負の手から傘がおちていた。

それまでは記憶がある。手が朽葉色の柄にかかったのも知らない。彼は何かにとらえられた。夢を見ているようなあの快よさが——

夢の中のような……妖しい時が流れた。それは一瞬だったか、数弾指の間か？

臭いがした。異様な臭いが彼の面を打ったのだ。

雨の音に気がついたとき、合羽の背も、頭も、びっしょり濡れて、伊丹靱負は、斬りさげたままの姿勢だった。

「斬った……人を斬った？……」

手の刀を見た。

反りのかなり深い古刀である。恰も生きものの眼のように、無気味な、鈍い光に、靱負は思わずぞっとした。

二

「――どうしたの、おまえさん？……」

「む……」

「顔色が悪いようだけど」

「な、なァに、大したことはない……酒は、まだか？」

ぞくぞく寒気がする。

――雨のせいだ。濡れたせいだ……

そう思いこもうとしたが、三味線堀の妖しい闇のたたずまいが、ひしひしと、背中においかぶさってくるようで、靱負は落ちつかなかった。

――何故だろう？……

おれが、人を斬るなんて。嘘だ、夢を見たんじゃアないか？

夢であってほしい。全く、意味もなく、あの行為があった。責めを負う気になれない。そっと、彼は、隣室を盗み見た。

八畳の隅に立てかけた大刀である。朽葉色の柄糸。

――村忠だ……

夢ではない。やはり、現実だった。あわてて、靱負は目をそらした。

雨が降っていなかったら、と、思う。

緞子の袋に入ったまま、持ち出したろう。

傘が邪魔だから、差料の、新刀のほうは置いてきた。袋に入ったままなら、紐をといたりして、抜刀に手数がかかる。一時的な狂乱だ。刃傷に及ぶことなどなかったはずだ。

――とりかえしのつかぬことをした……

燗酒をあおっても、寒気は失せなかった。

恐怖と後悔とが錯綜して、もうなにもかも粉砕してしまいたいような、自棄っ八な昂りを感じてくる。

――いけねえ、こいつア悪酔いするな……

意識の底に、荒んだものが、頭が持ち上げてくるの

だ。

「――ねえ……」

と、お力は、そんな靱負の心情を理解しようともせずに、酌の合い間に丸い膝をべたっとおしつけてくる。

「頼んでいたものできて？……」

――くそっ。

盃を、そのそばかすの浮いた面上に叩きつけてやりたい。

――この女のために、すべてが、滅茶々々になったンだ……

そんな靱負の気持を忖度しようともせず、お力は猪口を舐めている。

お力は、靱負よりも三つ歳上だった。

肌を合わせたのと、知り合ったのと、同じ日、といえば、この二人の仲がどんな関係かは大体推察はつく。

あれは四月十七日から三日間の興行だったから、殆ど、二年前になる。中村勘三郎が寛永時代に、初興行してから二百年目に当たるとかで、寿狂言を催した。

そのとき、桝が隣り合わせたのが、縁といえば縁。ただそれだけのことだが、悪因縁だった。

お力は――女はつぶし島田で、派手な帯が、大柄で色白なからだを、ひときわ目立たせていた。

芝居を見るような、靱負を見るような、ちらちら流し目の目じりにさした紅が、一本の酒をもてあましたらしく、ぽっと肌に溶けて艶な風情だった。そのころ、二、三度しょうばい女を知ったばかりの靱負には、まぶしいほど美しく見えたのだ。華やかな席の故もあって、お力の姿は孔雀のように浮きたって見えた。

桝一重だから、起ったり坐り直したりで、袖もふれれば、たっぷり焚きしめた香の匂いも無遠慮に、鼻を刺してくる。

そのうちに、お力の髪から、簪が、靱負の膝にすべりおちたのがきっかけだった。わざとだったかもしれない。

「まあ、とんだ粗相をいたしまして……」

詫びる言葉とうらはらに、眼は大胆に若い男心をそそる媚にあふれていた。二言三言ことばを交すうちに、

「失礼でございますけれど、お詫びのしるし、お一ついかがでございます」

わざと、紅のついた盃で、

「あたくし、一本のお酒を持てあましているんですの、ほほほほ、日頃飲みつけないもので……助けて頂けません？」

と、そんな心安だてな口を利くようになった。

菊五郎が好きだとか、白猿は近ごろどうだとか、女らしい感情的なもの言いが、気になったが、ぐいぐい、のしかかってくるような女の臭いが、たまらなかった。

お力が、男を物色するために、そのためにのみ芝居を利用していたかどうかは、いまもって定かではない。

が、少なくとも、馴れ初めにおいて、靱負が熱をあげたことは、彼女の蜘蛛の巣にかかったようなものだ。この二年間、彼女の言いなりになる結果をもたらした。

芝居のあいだは、散々、艶っぽい姿態で、脳殺したくせに、はねると、とたんによそよそしい態度で、外へ出た。それも、男心をそそる女の手管だった。火をつけられた若い胸が、どうして、離れられよう。

靱負は、もう、うつつだった。人目もかまわなかった。提灯の洪水のような帰路についた人混みのなかで、追いすがった。

「あいや暫く……」

と、耳朶を染めて、声をかけていた。

「お差しつかえなければ、どこぞで、もっと、話を……」

「お話って？」笑みを含んだ顔がふりかえった。

「いや、いろいろと、その……ここでは、どうも、立ち話もなんだから」

「よろしいかしら、何だか、あたし、こわいみたい」

「い、いや、別に何も、話だけ、話だけ……」

「それならいいけど」

それだけで、もう勝負はついた。

女に案内された水茶屋の奥で、靱負は鼻毛をぬかれた。歳が上だけではなく、一枚も二枚も女は上手だった。

以来、二年の間、お力の魅力にひきずられて、金品を貢いでいた靱負であった。

三

家禄二百五十石、御納戸衆としての役高二百石、二の丸焼火の間詰めという、大した身分だった、まだ初心な男は女から見れば赤児同然だった。

「六十両ばかり、なんとかならないかしら……」
無心も度々だったが、この金額には唖然となった。
相場に変動はあるが、大体、一石一両と見れば年俸はわかる。が、旗本としての体面を整えるには、馬や仲間や、家扶や、その他もろもろの出費があるし、家督していつまで独りでいる気だ、と、お節介な親類に、やいやい責められて、婚約してしまったので余剰な金などない。
というと、他力本願のようだが、市太郎の妹、記代は清純な美しさを湛えて、旗本中でも狙っている者が多い。靱負も惹かれていたのは事実だ。記代のほうでも、自惚れを離れて見ても、靱負に好意を抱いているらしい。
縁談は整い、来月半ばに式を挙げることになっていた。
女としての魅力があるが、旗本の女房になれるお力ではなかった。仲が深くなってから、芸者をしていたと前身を明かした。それはよい。芸者を妻にするのはちょっと面倒だが、それだけではなかった。深間の男が多い。火消しのだれそれ、地廻りの誰も情夫だったし、角力の大関稲妻雷五郎と関係があったと得意気にほのめかされて、驚くというより呆れたが、そのときにはもう、ずるずると底無し泥沼に引きずりこまれた後だった。
——手を切ろう、切ったほうがいい……
漸く、その思いが持ち上げてきたころ、要求されたのが、その大金だった。
男の心が見ぬけるお力のほうでも、そろそろ汐時という気持がいわせたのか、手切金、暗黙のうちに了解した。
が、伊太八の文句ではないが、一門類葉、借りるだけ借りて、新婦を迎えても、当分は贅沢するどころではない、伊丹家だ。靱負はやむなく、刀を持ちだしたのだ。
——村忠、聞いたことのない名だが……
焼刃の乱れも見事だし、古刀でも、室町期と、ふんだ。それくらいの目はある。上作らしいし、拵えも、はばき元や目貫も金無垢らしい。父親の同名靱負が、存外な刀剣趣味だったから、ひょっとすると掘出し物かもしれない。
五十両や六十両にはなるかもしれない。その心算で、持ちだしてきたところ——

三味線堀の奇禍だった。
——とりかえしのつかぬことをした……
天下の旗本の名誉も誇りも、安楽な生活も、新婚の夢も、すべてが、遠くへ去った。
——隠しおうせぬだろうか?……
軽率だった。
悪いことに、あの橋へかかる前に、番屋で顔を見られている。
——あいつが、証人になる!
破滅の恐怖が、はげしい戦慄を呼んだ。
「くそ!」
かっと、頭の芯が灼けた。手の盃を、はげしく障子に投げつけていた。
「何をするのさ!」
かん高く、お力が叫んだので、はっとした。
「およしよ。乱暴なことは……まるで、気狂いみたい」
「……済まぬ」
母親に叱られたように、悄然となる若い男が、年増女にはいじらしくないこともない。
「——できなかったの、お金?」
「……」
「困ったねえ、あてにしていたのに」
と、ちょっと、眉根に皺よせてみて、
「でも、まア、大金だから、急にはしかたがないけれど」
ほっと、思い入れたっぷりに、衿に手を入れて、吐息をつかれると、
「許せ……なんとかして、つくる」
「有難いわ、そうしておくれだと。こんなことは言いたかアないんだけど実は、兄さんが病気をして、烏金を借りたもんだから」
兄? お力の兄という男は、何人もいた。話の辻褄が合わぬことが、尠くなかった。情夫だろうと、薄々察しながら、強いこともいえぬ靱負だった。
——あせっちゃア駄目だねえ……
正面きって手切れ金などと言いだしては、相手が武士だから、まずい。だから口実をかまえたのだが、やはり無理だったようだ。
それくらいのことは情夫と、話し合って覚悟しているお力だ。こうなったら、次の手を考えるしかない。むろ

んこのままはひかない。
「もう、おつもりにして」
と、優しい姉のような眼になって、
「やすみましょうよ、ね」
「……もうないのか。酒」
「あら、まだ飲むのかえ？　三本あけたうえに……強くなったわねえ」
「酒をつけろ」
「やんちゃをいわないでさ……」
ふわりと、柔らかい風をおこした袖が、男の肩を抱いた。
濡れた朱唇が、妖しい欲情も露わに近づいてくる。蠱惑的な光を湛えた眼が、笑っている。
——強がっていたって、すぐに溺れてくるくせに……
酔いは、抵抗を裏切るのだ。靱負を蒲団に誘うと、
「あら、急がなくったって……」
嫣然ととしなめて、男の着物を畳みかけた手が、ふと止まった。
「血……」

四

そのとき、靱負は、はっきりと見た。
女の恐怖を。
「血が……」
斬ったとたんに、合羽がめくれて、返り血がはねたらしい。裾前に、べっとり血汐が、焦茶色に附着していた。
靱負の目は、それを見るより、女の表情に惹きよせられていた。
顔色を変えて、首を竦め、
「まさか……辻斬りなんかを」
と、怪しむような声音も、瞳の色も、まるっきり赤の他人だった。冷たい眼だった。
——二年前、どんな気持で、おれを、あやつっていたのだ、この女は……
「犬を斬ったんだ」
突き放すように、彼はいった。
「犬を？　ほんとう？　いやなひと」

信じたようでもない。が、靱負に殺人するような覇気がないと見くびっている女だから、疑いもしなかったのか。
女は、それでも、無精者には珍しく、台所へ立って、その部分をつまみ洗いした。
がぶ飲みしたのが、蒲団の温みで、酔いのまわりを促した。雨の音を聞きながら、うとうととなったところにまるい腰がすべりこんできて、
「ひとりで寝るなんて、薄情者」
逆だった。ぽってりと、ふとくて白い腕が靱負の首の下に入った。
「明日は、非番なんでしょ」
返事も待てないように、荒く息づく唇がおちてきた。男も貪るように吸いついている。
酔いと、腰も萎えるばかりの痴楽で、どろどろした泥沼のような眠りに、おちた。何もかも忘れたかった。刀のことも、人を斬ったことも、そして、このお力のことも。ただ、女の肉体というだけでよかった。靱負は、二度溺れ、三度目には、女の秘所に顔をうずめ、そんなおのれを蔑みながら、とち狂った。
眼がさめたときは、とっくに朝だった。雨は夜のうちにやんだと見え、うすい陽が雨戸のすきからさしていた。
お力は、いなかった。
「何処へいったのか？」
はっと、昨夜のことが甦った。刀を見た。村忠は、昨夜の位置にそのまま、無事だった。
「——殺人を、犯してしまったのだ……市太、許せ……」
悪夢のような……現実なのだ。
「何処へいったのだろう……」
気にかかった。あんな女でも、傍にいてくれれば、何か気が休まるような気がした。密告にいったのではなかろうかと、不安な思いが、胸を掠めたが、急いで、その考えを打ち消した。
さらでだに、頭が重く、右の顳顬が、錐を揉みこまれるように、痛む。
「迎え酒でもするか」
茶の間に入っていって、戸棚を探していると、裏の井戸端で、近所の女たちも無遠慮な声が、聞こえてきた。
「——へえ、ほんとかねえ、甚内橋だって……」

「嘘なもんかね、また聞きじゃない、あたしがちゃんとこの目で見てきたのだから」
「お武家だって？」
「まだ若いのさ、こう橋杭にひっかかって……なんでもお役人衆の話じゃ、肩をね、うしろから、すぱっと斬られているんだってさ」
「お旗本衆だと聞いたよ……いやだねえ、辻斬りなんて」
——発見されたのだ、昨夜の……
靱負は顔色を失っていた。
酒どころではない。倉皇と立ち上がって脇差を前半にさした。が、思いなおして、またはずして、着物を着はじめた。
あたしゃア、霖雨のほうがいやだよう、と、頓狂にいうのが聞こえ、げらげらと、健康な笑い声がまき起こったのに追われるように、靱負は狼狽した。
——どうしよう？——
ひょっとすると、お力が……と、疑うと、凝っとしておれなかった。いまにも、評定所へ呼び出しが来そうな恐怖で、立ったり坐ったりしたが、
——叔父の所へ行こう。叔父なら相談に乗ってくれるかもしれぬ……
啾もせずに、猿屋丁の家を出た。空は、また泣き出していた。
叔父、根本藤右衛門は、蔵前の八幡宮、成田不動裏、俗に堀田原という馬場と、道一すじはさんだ所に屋敷があった。
若いころは、大御番組で、大坂城に勤務したというが、変人だった故か、小普請組に堕されると、かえって気楽だと、貧乏暮らしに文句一つ言わず無役に甘んじている。五十近いいまでも、独身で、近親交際も、殆ど、しない。
別に気骨があるとか、一徹だとかいうのではない、気性であろう、言動に異常性が強いという噂だった。
無役となってからは、よんどころない外出には、日雇い仲間で間にあわせ、飯焚きも置かずに孤独を愉しんでいる。
伊丹靱負が、耳門から入ってゆくと、人気の少ない屋敷は、陰鬱な雨のなかに、寂然としずまりかえっているようである。手入れしないままに、伸び放題に旺盛な青

葉の呼吸は、淫らな匂いをふくんでいた。
「叔父上……」
玄関も閉ったままなので、木戸の方にまわった。
寝所の辺と見当つけ、軽く雨戸を敲くと、微かに物音がした。
——寝ているのか？
と、思ったが、その耳に、ひそやかな囁きが、聞こえた。
——来客？……雨戸を閉じたままとは？

色

一

「叔父上！……」
追われている身も、ふっと忘れて声をかけていた。雨戸のうちへの興味が、思わず声を、大きくした。
「靱負ですが……叔父上、まだ、おやすみですか？」
暫く、間があった。囁きもふっと止んだのである。間をおいて、嗄れた声が、靱負か、といった。
「——どうしたのだ靱負、いったい何じゃ、いまごろ！」
いま開けるから、待て、と、押える声に、眠りをさまたげられただけではない、焦だちと、狼狽が感じられた。
それからも、ちょっと間があったのである。雨戸が漸

くあき、寝間着のままの叔父が、蒼い顔をのぞかした。
「どうした？」
と、眉がけわしい。
「この雨に……非番なのか。おかしな奴じゃな、まあ来たのならしかたがない、とにかく、あがれ」
陰湿な温気がこもった寝所だった。
男世帯の、それも初老の独り寝にしては嬌めかしい、紅絹の蒲団が不似合だった。枕屏風にはあぶな絵が貼ってあるし、異様な臭いがこもっていた。靱負は眉をしかめた。
「何の用か知らぬが、早くいえ。わしは眠りたりないのじゃ……」
不機嫌に、煙草盆をひきよせる。靱負の目を恐れているように見える。落ち着いて見せながら、虚ろな視線が、おどおどと、宙を這いまわる。
「誰か……来ていらっしたのでは？」
「なに？　なにをいう、誰も居るものか。こんな朝早く一体、何の用じゃ、非番なら、朝寝をすればよかろうに、どうしたのじゃ、急用か、え？」
「ほんとうに、どなたも……」
「くどい」
癇癪をおこして、老人は、煙管を吐月峰に叩きつけた。
「朝っぱらから推参して、何のたわごとだ、よい加減にせい！」
さっきのは、そら耳か？　女でもひきこんでいたのではないかと思ったが、そこまで怒る様子では、こっそり帰ったのかもしれぬ。
靱負は、変だとは思ったが、それ以上、追求することもない。
「――あやまちを犯してしまったのです……」
と、始終を物語った。
叔父は、紫煙を喫かしながら、黙って聞いていた。
「――仕方があるまいの」
と、投げやりに、とどめを刺した。
「顔を見られていては、逃げ隠れもなるまいがの」
「あの……」
「それでも、逃げるか？　逃げきれるか、上方にでも走れば別だが、難かしかろう。その自信がなければ、始末するのだな」

「――しまつ、というと」
「切腹、さ」
こともなげにいう藤右衛門だ。
「切腹……」
「やむを得ない。いろごとでは、わしに意見する資格もないし、人間の業だと思うが、人を殺したとなるとのう」
この変人がいうのだ。救いの道はなかった。絶望は、靱負を諦めさせた。
彼が沈思すると、叔父も口を噤んだ。息づまるような沈黙は、かなり永かった。そして、顔をあげたとき、靱負は紙のように蒼ざめていた。
「やむを得ませぬ。切腹いたします。叔父上、介錯願わしゅう」
「介錯か、わしがするのか……」
藤右衛門は、ちょっと眉をひそめて、
「それも、やむを得ぬか」
虚ろな笑いを口辺にきざんだ。
「どこでやる、雨がやみさえすれば、庭がいいが。わしもこの年齢で、甥の首打とうとは思わざったの。とにかく早くしてくれ」
「因縁です。そうです、この刀が……切腹する前に、これを鑑定してくれませぬか？」
叔父は、うるさそうな顔で、朽葉色の柄を見た。反りのふかい鮫鞘を見た。
「古刀か？」
「村忠、と銘がありますが」
「村忠？」
口のなかで、呟いて、聞かぬ名だ、と、藤右衛門は、手をのばした。
懐紙を口に咥え、作法通りに、鯉口をきって、三寸あまり、刃裏をかえして見た。
眉が、けわしく、吊りあがって、双眼が、ぎらっと、光った。異様な空気が、二人を包んだ。一種の真空を、靱負は感じた。明け放した雨戸のあいだから、外光が、湿った白いあかりを流しこむなかで、村忠は、異様に光った。
妖気！
三味線堀の、自己を喪失した一瞬が甦って、靱負が慄然となったとき、
「やあっ！」

火を吹かんばかりの形相とともに、村忠は一閃した。

二

おもてをふって、兜剣を逃がれるや、足は畳を蹴って、手許へ躍りこんでいた。剣気に促されたような、反射的な動作である。

妖雲に包まれ、夢中で、手足が動いた。どう動いたか、記憶にない。叔父を蹴倒し、刀を奪いとったのも、夢中だった。その動きに、靱負の意志はない。誰かに動かされたようであった。恰も、運命という魔性の者に命じられたように。

絶叫が、夢を破った。生温い血のしぶきを浴びて、我にかえったとき、伊丹靱負は、血刀のもとに、虚空をつかんで、仰臥した叔父を、見おろして、佇んでいた。

——また斬った……

前後の脈絡も定かではなかった。

どす黒い渦と、灰色の麻の乱れで、もやもやする頭の中が、かっと裂けて、真っ赤な血ぶくを吹きだすような。

「叔父上！」

靱負は、血刀をなげだした。おもてを蔽ってがっくりと膝をついた。

「許してくだされ、斬る気はなかった。何ということだ。この刀が……ああ、靱負の、靱負の知らぬことだ！」

気が狂いそうであった。

——斬った！……

——二人も、斬ってしまった！……

魔の剣！

妖雲の剣！

ぞっと、身を顫わして、靱負は、後ずさりした。

血油を、微かに浮かせて、村忠は、蒲団の上に転がっている。

反りがふかく、身幅がせまく、鎬が高い。刃わたり凡そ、二尺三寸。無心に見えながら、血曇りが、得体の知れぬ貌に見え、靱負は、色のない唇をわななかしていた。

がたっ、——と、そのとき襖のうしろで、音がした。

時が、時だったし、ほかに人が居るらしい、と思ったこともすっかり忘れていたのだ。冷水を浴びせられたように靱負は、とびあがった。

我知らず——そうだ、誰が命じたのだ？　靱負の手は、また村忠をつかんでいたではないか。まるで、村忠のほうから、彼の手に吸いついてきたような。

彼は、血刀を握りしめるや、目を吊りあげてその音の方へ近づいていた。蹴放すように、宋拓の襖を左右にあけた。

「や？……」

瞠目した。人がいたではないか。

「きさま……何者だ？」

異様な、というほかはない。

すがたは、御殿女中のような、紅絹うらの矢がすりの着物に、根のくずれた四の字髷に平打の簪。幅広の提帯を抱えて、おどおどしているのだ。湿っぽく暗い部屋のなかに、厚化粧の顔が浮かんでいる。手もほそく白い。

女？　女にしては、肩幅がひろいようだ。

「出ろ！」

「——た、たすけて……」

しゃがれた声が、可憐な容姿に不似合いだった。

「こちらへ来い」

「助けて、助けてくださいまし、この通り……」

と、手を合わせる。

「そうか……」

靱負は頷いた。漸く、それと悟った。叔父の変態ぶりが、はじめて、わかった。

「きさま猿若町の、色子だな」

舞台子、ともいう。女形役者の下っ端が、容色を売るということは聞いている。錯覚かと疑った囁き声、叔父の狼狽、不機嫌、すべてが、解けた。

「——さっきからの次第、見たな」

「は、い、いいえ……」

「叔父はおれを斬ろうとした。それゆえ、おれが、逆に、斬った。そのことだ」

「は、はい、その通りでございます、その通りで……」

歯の根も合わぬ恐怖で、米搗きばったのように、拝んでいる。

一晩中、叔父が、こんな男女と痴夢に耽ったかと思うと、不快だった。何やら、きたないものがぐぐッと、胸にこみあげてきそうで、

「名を申せ」

瀬川何とか、いった。色子でも、いざというときの証人にはなる。

「さっさと出ていけ！」

小やみになった戸外をちらりと見て、靱負は、血刀で示した。

帯をひきずって、色子は、小走りに——内股で逃げだそうとした。

その根のくずれた四の字髷の鬢から、自粉をたっぷり塗った襟足の感触が、むうッと胸に来た。

靱負は、かっと、咽喉の奥で呻いた。あの異様な熱っぽい衝動が彼を動かした。一足追いすがりざまに、後袈裟の一刀を走らせている。

ぎえっと、色気のない声が奔った。矢がすりを、なめに裂いた一刀は、余勢で、叔父の臀へ斬りこんでいた。

「——三人……」

風が吹きねけるような、感情のない声だった。

瀬川なにがしという、この哀れな犠牲者は、しかし、三味線堀の一件を耳にしたはず、所詮は、生かして置けなかったのだと、気がついたのは、雨の外へ、出てからだった。

こんどは注意ぶかく、汚れをしらべて見た。

二度目からは、やはり馴れたのであろうか、それとも斬れ味が、冴えたのか、幸いどこにも返り血は浴びていなかった。

もともと、変り者で通っていた。近所交際もしたことのない叔父である。彼が、当家へ来たことを知る人もいない筈だ。

尾行を恐れた靱負は、しかし訪れたときも、街すじに、怪しい影のないのを確かめてから、耳門を押している。

出るときさえ、人目にたたねば、証拠は残らないのだ。

無意識だったとはいえ、人を短い間に三人も斬ったことが、そして、それが悉く、一刀で致命傷を与えたことが、この若者に、ある自信を持たせることになった。

——そうだ……

と、雨の音を傘に聞きながら、靱負は、微笑した。

——叔父が、村忠を抜かねば……無暴に斬りつけねば、おれは黙って切腹していた……

あのときは、真実、死ぬ気だったのだ。

不思議なことだ。村忠で死のうとした彼は、村忠で、救われている。

——この刀は、おれに何をもたらそうというのだ？

不可解だった。妖刀の持つ怪しい力に、彼は、畏れと好奇を抱きはじめている。運命そのものが、怪奇ですらあった。

靱負は雨にもかかわらず、活気に充ちて急わしげな下町の往来を、もの珍しげに眺めながら、まだ、信じられぬもののように呟いた。

「生きているのだ、おれは……」

三

平右衛門町の小料理屋で、朝飯とも昼飯ともつかぬものを食べた。こうした所を知っているのも、お力の手引きである。

腹ごしらえが出来ると、ますます、靱負は、大胆になった。

——おれのせいではない……

その思いが、最初からある。いわば、災難なのだ。市太郎も、叔父も、それから色子も、

「——おれが殺ったのじゃない……」

村忠が、おれの手を借りただけじゃないか？　妖剣に違いない。剣のなかには、鍛冶の心がけ如何によって、魔性を秘めることもあるという。

千子村正の名は、常識的に、耳にしている。

やはり室町期の名匠で、勢州桑名の出身だ。正宗にも劣らぬ斬れ味というが、妖気を持っているので、徳川家では、お禁め刀に指定している。

——村忠……村正の弟子でもあるのだろうか？

いずれ、然るべき鑑定をしなければ、と思いながら歩いているうちに、大黒湯という銭湯の暖簾を見て、傘をすぼめた。

気のせいか、全身から、血が臭い立っているような気がしたのだ。

「お武家さま、生憎なこって……」

「やすみか？」

「いいえね、女湯のほうが、修繕してますで……」

独り将棋をさしていた番台の男が顎をしゃくった。男

湯なのに、女の白い肌が、四つ五つ見えた。

男女混浴は、一応禁止されていたが、のんびりした時代で、こうしたときには、役向きも、大目に見てくれる。なかには、故意に修繕を繰り返して、繁昌した湯屋もある。

「かまわぬ」

と、靱負は大小を刀架にかけた。

番台の男は盤面を睨んだまま、事務的に言った。

「懐中物をお預かりいたしましょうか」

彼はうすく笑って、預けるほどの金額ではない、と、いった。

銭湯は脱衣場につづいて、流し場があり、湯槽は、石榴口をまたいで入るのである。湯の温度を下げないために、蒸し風呂の形式を残した室になっていて、中は昼間でもうす暗い。

脱衣するうちから、こちらを盗み見していたらしい女たちが、

「あら、ごめんなさいまし」

媚もあらわに、身をくねらして、手桶を膝へ寄せたり、急に話し声を高めたりした。

こんな時刻に入浴している連中だから、どうせ、堅気ではない。囲い女か、玄人、夜の遅い商売に違いなく、それだけに、念入りな糠袋のつかいようだ。

男たちも、隠居らしいのが二人と、長屋住まいの浪人者、商家のぐうたら息子といった手合いで、生活の影はない。

のんびりした昼風呂のなかで、だから、靱負に話しかけてきた、目つきの悪い男だけが、水に油の感じだった。

「殿様アお旗本衆で？」

無躾な言葉には、返事の必要はない。

靱負が、一瞥もくれず、肌の蒸れるのを待っていると、

「ねえ、殿様、人間てえ奴ァ、金ピカ衣裳でも半纏でも、脱いじまやァ裸百貫、人間に変わりはねえ、こうやって銭湯にお出でなさるんだ。わっちらと話が合わァね」

靱負は苦笑した。

「其のほうは、何だ」

「大名」

「なに？」

「えっへっへっ。一夜大名一夜乞食といいまさァ、今日ンところは湯銭が身上これっきり、乞食とおっつかつで、えっへっへっ」

石榴口から出ると、すかさず、くっついてあがってくる。奇妙な男だ。無頼者らしく、宝珠を争う二匹の大蛇——といっても、金がつづかなかったのか、痛くて中止したのか、筋彫りだけの文身が、背中から両腕の肘まで這っている。

「えっへっへ、殿様。お背を流さしておくんなさい」

「断わる」

「へ、肘鉄でげすかえ、同じ洗槽で垢をかいた仲だ、邪慳にしなさんな」

「酔っているな、きさま」

「酔っても、ナニしても、そんな背中を流すぐれえ……」

まともに相手になっていては莫迦々々しい。

「遠慮をしておこう、二匹も大蛇を背負っていたのでは重くてしかたがあるまいが」

「なアに、こいつら雌でンね、雌ならおめえ、何匹でも、えっへっへっ」

煮しめたような、汚ない手拭で流してくれようとするのだ。

「よいと申すに、退れ」

あしらいかねて、怒鳴ってしまった。すると、かたちよく膝をまげて、軽石で踵をこすっていた女が、

「ほんとうだ、しつっこすぎるよ、大蛇の兄さん」

と、艶っぽい声で、助っ人にでた。

四

いつの間に来たのか、そんな、あでやかな女が、近くにいるのに気がつかなかったのだ。

女は、二十歳前後。すんなりした四肢の、痩せがただが、胸や腰が豊かで、絖絹の肌が、昼風呂の余光のなかで、まぶしいほどだった。

靱負は、おたらい、というその髷の名こそ知らなかったが、粋な風情ということだけはわかる。

あまりの美しさに、思わず、まじまじと見つめていると、

「ああら、いやでございますわ、そんなに……」

優しくにらめる。ぞっとするような、嬌めいた姿態の動きだ。

「見ないでくださいましなア」
消えいりたいばかり、しなをつくって、ぽっと紅くなる。
大蛇の哥兄のほうは、諦めたのか、さっと脱衣場にあがっている。
恥かしいのなら、石榴口のなかへでも逃げこめばいいものを、女は、むしろ、傍へ寄ってきて、
「ほんとうに、この辺は、あんな下司が多くてねえ。入り混みのときなんざ、ほんとうに、嫌なんですのさ」
「そなたは、この界隈のものか」
「ええ、蔵前寄りなんです。お嫌でございましょう、こんなところ。お殿様がたのいらっしゃる場所ではありませぬわ」
「なに、面白い観物もある」
「あらいやだ！」
「いや……その、さっきの彫もののことだ」
「あら、私ったら……」
きゅっと、にらめた親線が、灼きつくように、男の目をのぞきこんでころころと、女は、笑いむせんだ。
白く豊満な腰から腿へかけて、期待にあふれるような脂肪の艶やかさ。鉄砲乳、と、俗にいう、ぴっと上向いた乳房に、うす紅を点したような乳首が、恥じらうような、誘うような——ちらちらっと、靱負の瞳を惑わすのだ。
「——ご無礼かしら。ご無礼でも、三助よりはいいでしょ、ねえ」
と、自問自答する調子で、
「お背なを、流させてくださいましな」
否定するより先に、ぴたりと、背中にはいつくようにして、女は、甘い匂いで、寄り添っていた。
微かに、靱負は狼狽したが、
——下町の連中は、他人の背中を洗うのがよほど好きらしい……
のんびりと、微笑ましい洗い湯の空気に身をゆだねていると、血の臭いも、魔剣の妖気も、すっかり拭い流れる気持だった。
まわりの女たちの嫉妬の眼や、聞こえよがしの、嫌味な言葉や、涎を垂らしそうなのらくら息子の静瓢箪づらから目をそらして、彼は、脱衣場を見た。
もう、あの大蛇の哥兄はいなかった。

「——これくらいじゃ、如何？」
「……」
「痛いかしら……この糸瓜、買ったばかりだから……」
やや、かすれたような声が、しのびやかに、靱負の心を、まさぐるように、囁く。
「ごめんなさいまし、殿御がたのお肌って、勝手がわかりませぬのさ……」
くくッと、こみあげるような含み笑いにかこつけて、女の内腿や、乳首が、つと、触れてくる。
お力と違い、小柄だし、痩せがたで、靱負には新鮮な果物だった。
——記代どのには、こんな健康さがない……
佳人、という語が、いかにもふさわしいその女は、慎ましやかで、笑い声すらたてたことがない。
旗本の伝統のなかに、ひっそりと咲いた花の、折り目ただしく、気品のある姿態が——それだけに、下町の強靱さには欠けていた。
温室咲きの花だった。世間の風波にも耐えられぬような、弱々しさが——ある魅力には違いなかったが、お力という色気がすべての女に二年間、夜の愉しさ、女体の秘密を知らされた靱負には物足りなく感じられた。
——記代どのが、男と肌をあわせたら、どんな……
不埒な妄想を逞しくしてみることもある。
そんな場合、その影像は、慎しやかに、顔を背向けて感情がつかめない。崩れたところ、感情に激動する記代などというものは凡そ、考えられなかった。
この女には、それが、あった。
生々として、それでしなやかな恥らいをこめた腕、手に加わる意外な力、ふとももの量感、弾力を秘める腰——そして、男に応えるに吝かならぬ鉄砲乳——
「そなたの……名を聞いてもよいか？」
隠居と三助が、靱負の言葉が耳に入ったらしくちらりと、こちらを見た。
女は、しかし傍目を無視して、こっくりした。
「新旅籠町で、お京といえば、すぐわかりますの」
「お京と申すか、わしは……」
そのとき、石榴口のなかで、
「よう、よう、ちょいとお二人さん、まアだお天道さまは高けえンだよう」
と、怒鳴る者があった。岡焼きの女たちが、けらけら

笑った。
「いい加減にしてくンなきゃア、逆上てやりきれないよオ」
さすがに、お京は、それ以上、靱負にはりついてもいられなかった。おか湯を汲んで、さっと流すと、お先へ、と、そこそこと、あがっていった。
その、なよやかな腰つきに未練があったが、強いて目をそらせて、靱負は、湯に入った。
後を追うようで、すぐには、あがれない。茹って、湯気に包まれたからだを、拭いかけて、靱負は、何気なく、刀架をふりかえって、あっと、口走った。
村忠が、消えていた。

恋

一

そのころ、大蛇の半端文身を霧雨と潮風になぶらせながら、とっとっと歩いて行く男の小脇に長いものが抱えられている。
くたびれた半纏で、それを包んだあとは、首にまいた濡れ手拭ひとすじと、あまり綺麗とはいえない下帯の空っ尻。湯あがりのほてりがさめても小糠雨を冷たいとも感じないのか、
「――えっへっへ、縞の財布に五十両、とくらァ、五郎十郎曽我兄弟、鏡台はり箱たばこ盆、坊やはよい子じゃ寝んねしな……」
尻とり唄を、鼻唄まじりで、とっとっと、両国橋をかけてゆく。

「品川女郎衆は十匁、十匁の鉄砲玉、玉屋の花火は大元祖、相場のお金がどんちゃかちゃん、四文おくれ、えっへっへ、四文どころかよォえっへっへっ」
すれ違った空駕籠が、よお、と、声をかけた。
「景気がよさそうでンね、大蛇の哥兄」
「べらぼうめ、景気不景気わしゃ知らぬ。盆と正月が一ぺんで舞いこんだってね」
「お裾わけしてくんねえ」
「おとい来やアがれ、お暮れが過ぎたら、お正月、お正月の七福神……」
その辺から、面倒臭くなったのかすっ飛ばして、
「藁でたばねた投島田、島田金谷は大井川、可愛いけりゃこそ神田から通う、通う深草百夜の情け、酒と肴で六百出しゃきまま、ままよ三度笠横ちょにかぶり、かぶり縦にふる相模の女、女やもめに花が咲く」
九十六間の両国橋をわたりきって、本所に百本杭、藤堂屋敷の長塀沿いに、川端を走ってゆく。
雨はやや激しくなったようだ。
「へえ、牡丹に唐獅子」飽きもせずに、繰り返しはじめている。「唐獅子竹に虎、虎を踏まえる和藤内、内藤さまは下り藤、下り藤、下り藤に間違えねえや、えっへっへ」
百本杭から、駒止め石をすぎて、お米蔵の首尾の松と向かいあったあたり、その内藤山城守の下屋敷がある。
裏門から馴れた様子で入ると、門番は顔馴染みらしく、おう、また来たのかえ、と、いった。
「尻の毛までひっこ抜かれなきゃ、止まらねえ病だぜ」
「えっへっへ、金銀小判をザアクザクってね、帰りは重てえだろうから、助っ人たのみまさア」
仲間部屋では、ころころと、骰子の音がしていた。
銭箱をひきつけて、胴元の仲間頭が、
「なんだ、誰かと思ったら、辰か」
と、呆れたように、
「てめえ、今朝はすっからかんになった筈だが、銭が出来たか、褌でも質入れてきたのか」
「とっとっと、下劣なことは言いっこなし、いくら、わっちでも、フル金になってまで、博奕ア打たねえ」
「そうだろう、うす汚ねえ褌をとる質屋があったら、聞きてえと思ったのさ。まあ、いいやな、銭が出来たのなら、そこらへ入んな」

場は栄っていた。部屋博奕だから、俗にいう鉄火場で、駒札は使わない。

新吹の南鐐銀や一朱金が、百匁蠟燭のあかりにきらきらしていて、大蛇の辰の咽喉仏をぐびりとさせた。

四百諸侯と一口に言うが、大名はたいてい三つ以上屋敷を江戸に持っている。主君は常に上屋敷に居るが参勤交代で、国元にあるときは、下屋敷などというと、閑古鳥が鳴いている。

ひろい仲間部屋で、部屋頭が胴元になっての博奕開帳は、いつか、外部からも好事の連中が入りこんで盛んになっていた。お留守居が黙認している分には、問題は起こらない。町奉行所の手も、大名屋敷には及ばないので、蔵前の通人や、日本橋辺の旦那衆、武家の隠居、遺産の使い道に困っている後家などが、遊びにくる。

胴元の多蔵の前に、大蛇の辰は、半纏でくるんだ長いものを出して、

「部屋頭、こいつで賭金を貸しておくんねえ」

「なんだ、質物は刀か」

「さいで。それも、二振とはねえ名刀、へへへへ、はずんでおくんなせえ」

大蛇の辰はつるりと、無精髭の顎をなでた。

「十両といいてえが、五両」

「五両だって？　どうせ、てめえのもってくる刀だ。赤鰯のナマクラだろう、五両は凄まじいぜ」

「こいつァお見限りだ。こいつは、たしかに名刀でさあ、ナンのナニガシの作に違えねえンだ。さるお旗本の腰にあったもの」

「かっぱらって来たのは困るぜ」

「拝領ものでさア、汝の大蛇の文身が見事ゆえ、これをつかわす、とね」

「てめえの半パ文身が五両になるのなら、おれの皮を剝ぎゃア百両だ」

部屋頭の多蔵も文身自慢らしい。

濡れた半纏をくるくるっと、ひろげると、一本の大刀。靱負が見たら、あっと驚くだろう。

おけらになって、鵜の目たかの目で歩いていた辰が、目をつけて大黒湯に入ってきて、石榴口から目が届かないのを幸いに、刀架から失敬してきた〝村忠〟に相違ない。

「ふうむ、辰にしちゃア悪かアねえ、ちょいとした拵えだな」

「でげしょう、この狂い獅子の目貫だけでも、大した金無垢、二匁や三匁はかかりますぜ」

「刀ばっかりは、拵えだけじゃわからねえ」

「だからさア」

痺れをきらして、辰は盆茣蓙を見かえりながら、

「その、拵えだけでも五両」

「三枚だな」

三両分の一朱金がちゃらっと、膝の前で音をたてると、ちえっ、吝え、と、ぶつくさいいながらも、どうせ盗んだものだ、あきらめて、

「じゃ、お預けしておきますぜ、どうして三両で譲れる代物じゃねえンだから」

「ごたくは、勝ってからにしな」

「勝ちますって、命がけの思いをして持って来たンだ。あわあわあわ」

多蔵の苦笑をうしろに、辰は、盆茣蓙へわりこんだ。

「まっ平ごめんねえ」

「筋彫りか」

膝をよけてくれたのは、六尺近い上背なのに、尖った肩の、げっそり窶れた頬を一見してそれとわかる浪人者だった。

二

——筋彫りたアなンでえ、癆咳野郎め……

辰は、初っからこの浪人が好きになれなかった。

陰気な目ばかり光らして、蓬髪には虱が湧きそうだし、色のあせた紋服、塗りの剝げた恐ろしく長い太刀。紺の柄糸もほどけかかっている——うすい胸のあばらが浮いて見えたし、力ない、だが執拗な咳をするのが気に合わなかった。

——こいつが咳をするたンびに、張り目が狂ってきやがるンだ。貧乏神め……

隣へ坐ってしまったことを後悔したが、坐を変えるわけにはゆかない。

浪人者は、それっきり、辰を忘れたように運命の壺のほうに目をむけた。

その浪人者のことが脳裡を離れなかったからだろうか、もともと骰子の神から見放されているのか、とった

りとられたり、壺が十べんも音をたてぬうちに、盗んだ刀を代えた三両は羽が生えて飛んでいってしまった。

「筋彫りでは、大蛇も宝珠も、冥加がないの」

嘲笑のようにいう浪人は、結構小きざみに南鐐銀や一朱判金を膝前に蒐めている。中には二分判金も見えた。

「ちえっ勝手にしゃアがれ」

不逞くされて、自棄酒を（酒と寿司くらい無料でふるまってくれるのだ）呷るには、しかし、あの名刀が惜しい。

「おめえ……じゃねえ、旦那、ちょいと、お願えがあるンだが」

「――わしに？」

「へえへえ、ちょいとお顔を貸しておくンねえな」

浪人者は黙っていたが、突っぱねる気もないのか、膝前の儲けをざらっと巾着に流しこんでから、ゆっくりと膝を起こした。

隣の室にくると、

「――ねえ、旦那、実ア、五両ばかり貸しておもらい申してえンで」

「借銀の話か、そんなら断わる」

「おっとと、そうはっきりといいなさんな、鉄火場じゃ万更知らねえ顔でもねえじゃござんせんか、無情はいわねえでおくんねえな」

「断わる」

「――まア、待っておくンなさい、タダ貸してくれってンじゃねえンだ、実ア、あの刀だ」

と、多蔵のわきの村忠に顎をしゃくって、

「三両で預けてあるから、二両の色をつけてくれるンなら、お譲りしやす」

柄糸もほどけ、塗りも剝げている浪人者の大小を、じろりと蔑むように見やっての交渉だった。

「五両か……」

浪人者も、多蔵の交渉のときに、刀に目はとめていたのである。

「銘はあるか？　古刀に間違いないか？」

「なンだか知らねいが、とにかく立派なお旗本衆の差料なンでさア」

「買ってもいい」

「へ、有難てえ」

「買ってもいいが……」

と、浪人者は、多蔵のほうに戻りながら冷たくいった。

「景物に踊りでも、踊らぬか」

「へ？」

「この霖雨だ」

眉をしかめて、浪人者は、外を見た。

昼間から蠟燭のもとに勝負しているのだから、時間の経過もわからなかったが、すでに外は黄昏て、気を腐らせる雨の音が、屋根や茂みに騒がしかった。

「鬱陶しくてならぬ。かんかん踊りでもやれ」

「へえ、へえ、かんかん踊りをねえ」

莫迦にするねい、と、啖呵を切る元気もない大蛇の辰は、見様見真似で、かんかんのう、きうのれす、きうはきゅうれす……と踊りはじめた。

埃が立たアと、誰か、負け越しらしく、癇癪をおこしたように怒鳴ったが、ようようと、徳利をたたいて、お囃子つけるほうが多かったのは、雨に降りこめられて、骰子と睨めっこの気霽らしの心算だろう。

踊らせておいて、浪人者は、ろくすっぽ見ようともせず、多蔵のところに来た。

「部屋頭、その一刀、わしが買う」

小粒をあわせて三両、ずいと押しやると、村忠をとりあげる。

「へえ、野沢さん、鑑定が出来るンですかい」

「落魄はしても、一通りのことはやる」

怒りもせずに、野沢武助はいい、鯉口をきった。すらりと引き抜いて、作法通り、うらおもて、凝った目を舐めるように這わせたが、

「ふむ、これは」

と、ふと、眉をひそめて、蠟燭に近づけた。

「野沢さん」

多蔵が、声をかけた。

返事もせず、武助は、ふらりと立ち上がった。影のように、辰に近づくと、大蛇の背に骨ばった手をかけて、

「来い」

と、促した。

「――な、なんでい」

突んのめりそうになった辰がもがくのを、意外な力でずるずると縁側へ引きだす。お囃子連中がぽかんとして唄をやめた。

「――きさま、人を斬ったな」

三

部屋頭の多蔵のところから、大蛇の辰が、何と弁明しているか、その言葉は聞こえなかった。

ただ、みんなが、騒ぎをやめたあとに、雷にそそのかされたように土砂降りになった雨の音が耳を聾して、仲間部屋を包んだ。

雨を交えた風が吹きこんだ。蠟燭がふっと一つ消えた。

何やら、声高に、怒鳴りあっていると見えた大蛇の辰が、そのときふいに、刀に手をのばすのが見えた。

問答無用というように、ひったくって逃げだそうとしたのである。

二、三人が、あっと、膝を立てたとき、急に夜の色を濃くしてきた外に、辰が身をひるがえして飛び出ようとした。

ぎらりと、白刃が、その背に異様に光った。

絶叫が——

沛然たる豪雨のなかにも、かん高く、奔った。

縁先で、きりっと、身をひねって、よろめいた辰のからだから、三尺離れて、一閃した刀を、だらりと重げに下げたままの野沢武助のすがたは、痩せて粗衣をまとったせいもあったが、さながら、幽鬼のように、おぼろに無気味であった。

「——二両でこの世とおさらばか」

多蔵が呟くようにいい、煙管を置いて立ちあがった。

武助は、濁った目で、多蔵を迎えた。

「野沢さん……」

「殺った」

吐きだすようにいい、彼は、件の血刀を、まるで、きたないもののように、手荒く、多蔵の足もとに、がらりと投げ捨てた。

「兇刀じゃ……」

「え?」

「触れるな……刀は血を吸いたがっている」

それはしかし、多蔵の耳に、無思慮な殺人の弁解と聞こえたのである。

だが、縁側へ来て、ぬかるんだ土に半ば埋まるようにして、うつ伏せに倒れた辰の右手に、固く、鞘が握られているのを見て、

「そうだろう、奴は斬られ損、申しひらきは立たアな」

と、独り合点した。

「おまはんが五両で買った。ところが、この刀のはばきに血がついていた。誰だって、おかしく思わアな、辻斬りか押込みか、そいつを責めると、この野郎が、刀をかっさらって逃げようとした。でしかたなしに斬った——どうですイ、それで筋ア通りますぜ。へえ、あっしが、生き証人だ」

「いや……」

何かいおうとして、口ごもったまま、武助は、血刀を見、辰を見、その視線をふたたび、血刀へうつして、ふーっと、吐息をついた。

「——わしは、斬る気ではなかった」

何をいいなさるンだ、と多蔵は、けげんな顔をしたが、それっきり、武助が酒徳利に手をのばすのを見ると、

「平公、三吉、どぶ鼠の死骸を片附けな」

と指図をしはじめた。

「お留守居にゃおれが申し上げるからな」

この変事で、もう盆茣蓙の空気は白けたものになっていた。多蔵は、テラ箱の中味をざっと、頭で勘定し、

「客人がた、いやな雨のうえに、いやな臭をふり撒いて迷惑でござんしょうから、今夜ア盆はたたまして貰いやす」

そして、こう付け加えることを忘れない。

「念には及びますめいが、野沢さんの無礼打ちァ、いわば盗っ人の成敗だ、つまらねえ他言は無用に願いますぜ」

「ああいいとも、また遊ばせてくださいよ」

と旦那衆や後家などが、町駕籠を呼んで帰ったあと、多蔵は、もうびくりとも動かない大蛇の手からぬきとった鞘をすっかり拭わせて、はじめて、血刀を手にとった。

注意深く、血糊を拭いとりながら、彼は、始めて、刀を扱うもののように、ある戦慄が、背筋を走るのを覚えた。

名刀の持つ、凄まじいまでの冷やかさが、目に見える妖気となって、ふわりと、多蔵を包む。

激しい衝動が、腕を痙攣させた。目の前に、茫と、靄

のようなものがかかり、周囲の人影が、朦朧となって、まるで、亡霊に追い詰められたような幻覚がきた。

「うぬら？」

くわッとなって叫ぶや、左手の刀を右手に持ち直す。

その僅かの間が、そして、別人のような形相が、仲間たちを救った。部屋頭、あ、何をしなさるんだ、危ねえ、わっと、とび退いたあとへ、

「うぬら！」

ぴゆっと、白刃は、影を撫いで、走った。

「うわっ」

「く、狂いなすった」

「部屋頭！」

どどっと、仲間たちは、転びながら、四散した。

剣術を知らぬ悲しさ、多蔵は、虚しく、宙を切った刀にふりまわされて、どたりと倒れた。その手から村忠がはなれ、生き物のように、柱に突き刺さった。

悪酔いしたように、蒼白になったおもてに、眼だけがものに憑かれて、兇々しく光っていた。多蔵は、唇をわななかして、柱に手をのばす。

「多蔵、迷いだ！」

一升徳利から冷酒をあおっていた武助が、そう叫ぶと、その手から徳利がうなりを生じてとんだ。

みごとに、柱に当たり、微塵に砕けた。残りの酒と破片が飛散した。

多蔵は、あっと、顔をおさえて、のめった。

ゆっくりと、立ちあがり、武助は、村忠をぬきとると、刀身から目をそらして、ばちりと、鞘におさめた。

そして、底なしの雨を見かえり、

「淫雨のせいかもしれぬ……」

誰ともなく呟やいた。

「人間にまで、黴が生える」

四

まだ宵の口だったが、雨は、屋敷町の夜を一層、昏く、深くしていた。

下町と違い、暮れ六つ過ぎると、人通りも急に途絶える。見附がしまると、武家では大門を閉じるのである。

いつか、伊丹靱負は、駿河台の淡路坂をのぼりかけていた。いうまでもなく、合羽の下は脇差のみの軽い腰であった。

厄払いをした……

——村忠を盗まれた驚愕が去ると、明るい思いが、湯あがりの胸にたゆとうてきた。

——あれア兇剣だったのだ、おれの意志でなしに、手から離れたのは、亡くなった父母の加護だろう……

と、感謝もした。

もとより、その恩人？　の大蛇の辰が、そのころ、村忠によって、不帰の客となったことは知る由もない。

——戻ろうか、逃げようか……

自分の心一つであるように思えた。筒井市太郎も叔父も、そして瀬川某を——斬った兇剣は、すでに靱負から離れている。証拠もないことではないか。

明朝から、口を拭って出仕すれば、誰も知る者はない。上司から目をかけられているし、家名を挙げる機会も尠くないのである。出世と、名誉と……

雨空が、からりと霽れたような清々しさだった。

心を決定するためにあてもなく歩いていた靱負が、駿河台に歩を運んだのは、八つ小路の大名屋敷で、婚礼でもあるらしく、雨中に高張提灯をかけ、家紋の幔幕を張りめぐらして、多勢の礼装の武士や町人（御用達の者か）が賑々しく出入りしているのを見たからであった。

——そうだ、記代が……

お力とは、これかぎり逢うまい。

未知の肌の興味だけでも、お力の魅力から脱出できそうであった。大黒湯で、お京の肌を見たことが、それとは知らず、

（お力ばかりが女ではない）

と、思いきるきっかけにもなっていたようである。

淑やかな武家女房としては、記代は完璧に近い。

それゆえに、魅惑されることはなかったが、こうなってくると、女大学の教養というヴェールの下に隠された無垢の肌への好奇心も湧いてくる。淑やかなだけ、秘められているだけ、期待は妖しい情感すら、そそりたてるのだった。

「市太への供養にもなろう」

記代も父を早く失っている。市太郎に嫡男がないことは筒井家の没落を意味する。

罪ほろぼし、とはなぜか、靱負に実感がなかった。村忠が斬ったのだ、という思いが、詭弁のようだが、否め

ない本心なのである。

雨の闇に強く芳香が漂っていた。

「――もくせいが……」

そう気がついて、歩みをゆるめた。木犀は塀の内から匂ってくる。そこが、筒井家の庭だったと、闇を見まわして、靱負は微笑した。

五

木犀はここにも匂っていた。

故人の執念を慰撫するように、雨を逃がれてきた甘い芳香が、部屋のなかにもしのび入っている。

通夜がしめやかなのは人情だが、横死ということが、特に内輪だけの、話し声もないおくりの夜とした。主人持ちの身が、抜き合わしもせずに果てたのは、罪ですらある。

甚内橋で死体が発見されたときから、母は、がっくりと倒れて、床から頭があがらなかった。

何故か、伊丹靱負は、新仏との対面も許されず別間で、待たされた。

母屋と渡り廊下がつづいた祖父の隠居部屋で、木犀の樹は近くにあるらしい。それはいいとして、何故ここに通されたのか。

かなり待たしてから、影のように、記代があらわれた。

――悲嘆のあまり、化粧に手間取ったのであろう……

靱負は、軽くそう思っていたが、あらわれた記代は、婚約者を見る目ではなかった。冷たいくらい、固い表情だった。

靱負が型通りの挨拶をしようとすると、記代の色のない唇が、こういった。

「あたくしのほかは、誰もおりませぬ」

何をいいだしたことかと、靱負は、声を呑んだ。その顔を、きっと睨んだ記代の眼が泣いように朱いことに、はじめて気がついた。

暫く、無言だった。記代は、悲しみとも怒りともつかぬ、はげしい感情の動きに、必死に耐えていた。瞳が、うるんできて、唇がわなないた。

奔り出ようとする言葉を、耐えるのに、記代は、身をもんで下唇を、破れるほど噛みしめている。うるんだ瞳

は、火のような憤りをこめて射るように、靱負を見た。
「――記代どの」
記代は、かぶりをふった。瞼をあふれた滴が、はらはらと、膝にしたたった。嗚咽に、胸を喘がせながら、再び、おもてをあげたとき、黒い炎は消え、男を恋する女のすがるような弱々しい瞳になっていた。
「記代どの、如何なされた」
その言葉を、彼女は、そらぞらしいと聞いた。
「あたくしに、言わせないで！」
訴えるように叫び、にじり寄った。その手は、膝前をつかみ、はげしく身をふるわした。
「ね、仰有って、靱負さま。記代を失望させないでくださいまし。仰有って。靱負さまの口から聞きたい、一言でいいの、ね、ね、仰有って！」
「……」
「記代は、恐い、靱負さまを信じることができないなんて……恐い」
靱負は、真っ蒼になっていた。
この女が――その驚きだった。人の世の信不信を、靱負一人に賭けるほど、いつの間に愛していたのか。
慎ましやかに、感情をおもてにあらわさぬ記代の想いが、そこまで昂揚していたことを、いままで、靱負は、露ほども知らなかった。
自白の恐怖よりも、若者にはその衝撃のほうが、はげしかった。
愛の真情が、若者の胸をゆすった。
「許してくだされ、拙者が斬った！」
靱負は、血を吐くように叫び、がっくり両手をついた。
「ま、やはり……やはり……」
強いながらも、もしかしたら、と、一縷の望みをつないでいた記代だった。
番太郎も、「はっきりしたことは申し上げられませんが」と前置きして語ったのである。
雨の夜のこと、見違いということがある。記代は、番太郎に口外しないことを頼み、靱負の家を訪れた。留守だったことが、疑惑を深めた。
刃傷の理由はない。しかし、理由の有無をいえば、他人に害される理由も、また兄にはなかった筈である。
「いかにも、拙者が手にかけた」

と、靱負は繰り返した。
「だが、これだけは信じてくだされ、何の意趣もあったのではない、試し斬りなどでは毛頭ない、拙者も知らぬ、知らぬうちに、市太郎どのを斬った……」
「知らぬうちに？」
「信じられまい、信じられぬが道理だ、が、神仏に誓って、嘘言は申さぬ。刀が、村忠と銘ある刀が、拙者を誘うたのだ」
「……」
「信じられまい」
と、靱負は、悲痛に呻いた。
「拙者自身も信じられなかった。いかに申せばとて、心なき刀が、左様なふるまいをなすなどとは、解せぬと申されれば、それまでのこと……」
事実を陳述するほど、底無しの古沼に足をとられたような、焦りと、困惑と、絶望を感じていた。
それは、記代が信じようと信じまいと、己れの過失を白状したという、気の弛み、解放感をもたらした。
「これ以上申しても無駄でしょう」
と、静かに彼はいった。
「真偽は拙者が強調すべきではない。その点村忠も、盗まれた――と申せば、疑うのが当然であろう。だが、拙者はこれ以上、申す言葉を持たぬ。とにかく、この手で市太どのを斬ったは事実、そなたにとって仇に違いもない……」
靱負は、むしろ、肩の重荷をおろしたようなさばさばした気持になっていた。
脇差をぬきとって、前に置いた。
「兄者の仇、……お討ちなさるがよい」
それまでの決心は彼女にはついていなかったようである。だが、目の前に刀を出されると、やはり武家の娘に育った処女の胸に、従容たる男の態度が、一瞬、憎しみの火を点じた。記代は、やにわに、胸の懐剣を抜き放った。
靱負の来訪を耳にしたとき、す早く紐を解いた。袋も捨てて、すぐにも刺せる用意を整えて来たのだった。
「――お討ちなさるか」
「討ちます！」
「よかろう、手向かいはつかまつらぬ……」
むしろ、抵抗があったら、そのするどい鍛子を、憎い

男の胸にうちこめたろう。

「か、仇……」

迷いを踏み切るように、叫ぶ声も、語尾は虚しくうすれ、逆手星眼に擬した懐剣が、処女の心を伝えて、宙に悶えた。

「仇……仇……」

声が絶えたと思うと、ぽとりと重い音が——、女の手を離れた懐剣が、垂直に、畳に突き刺さっていた。

驚いて目をあげた靱負に、

「討てませぬ、記代には討てませぬ……」

落涙とともに、処女は、無垢の肌をなげるように、男の胸に倒れた。

靱負は、呆然と、いつかその肩を抱いていた。

せきあげる女の熱い涙と、そして、雨の声にとざされた離れ家である。

自失がさめぬうちに、いのちの充実を彼は感じていた、季節には早い木犀の薫るように、若さは、こみあげる衝動を行為に移さずにはいられなかった。

血

一

大名屋敷のお留守居というのは、主君の帰国中一切の政治交渉の任に当たる。大名旗本間の交際や政治的機密の情報をキャッチするのも重要な仕事で、したがって機智に富み、社交にたけ、博識でなければならない。誰にでもつとまる役目ではない。ことに当時、地方と中央の差をちぢめるためにも、方言を直し、標準語を饒舌れることが条件の一つだった。

したがって、酸いも甘いも噛みわける、老成した人物が多く、機密費が、ある程度自由にもなるので、柳橋の花街は、大名のお留守居によって発達したとすらいわれているほどだ。

内藤家のお留守居役渋川主殿は、本卦帰りを三、四年

前にすませている老齢ではあるが、矍鑠たるものだった。

遊びにかけては、万能で、趣味も広い。ことに、春画と刀剣にかけては、目がない。鉄ぶちの眼鏡も、その趣味のために大金をだしたという噂があるほどだ。

だから、仲間部屋頭多蔵の届出で、妖剣の話を聞くと、異常な関心を示した。

「その大蛇の始末は、変死人として、隠亡にさげ渡せばよいわ。二分もつかわせ。ところで、その刀じゃが、明日にでも持参せい」

多忙なのが、脱立たしいほど、まだ見ぬ妖剣に惹かれた。

その気狂いぶりを知っているから、

「野沢さん、こいつア、ちょいと小遣いになるかもしれないの」

と、多蔵が、浪宅に呼びにきた。

「お留守居の刀好きア、尋常じゃねいのだ。まア気狂いの部に入るね、石川五右衛門の隠密刀だとか、千利久が鍛腹切った刀だとか、本物かどうか知らねいが、曰く因縁のあるものを集めている方じゃ、お江戸広しといえども五本の指に入るのだそうだ。あの魔性の刀も、きっと高く値をつけてくださるかもしれねいぜ」

「喜ぶのは小判を手にしてからにするほうがいい」

「あれだ。どうもおまはんとは話が合わねいが、今度のことア張本人だから、一緒に来てくんねい。まア、蛇が出るか、鬼が出るか、儲けは山分けとだけァ決めておくぜ」

ところが、二人連れ立って、上屋敷に渋川主殿を訪ねると、老人はろくに顔も見ず、挨拶もそこそこに、手を出した。

「ほうこの刀か。で、その大蛇とやらは始末したかの。うむ、野沢武助と申される、先祖は、上杉の浪人か。覚えておこう」

せかせかと言葉を交しただけで刀身を改めようとはせず、

「実は急用が出来ての、せっかくじゃが永話もできぬ。うむ、これは納めておこう、いずれ、相応の礼金はとらせる」

それっきり、立った。

二人は、しかたなしに、屋敷を出た。なんだか、瞞されたような感じだった。相手が大名の留守居でなければ

詐欺にかかったようなものだ。
「――小判どころか、鐚銭一文もくれぬとは見上げたものだ、さすがはお留守役」
「嫌味はよしねいよ」
と、多蔵も、憤りの持ってゆき場がないように、べっぺっと、唾を吐きちらして、
「二、三日待ってくんな、おいらの面を立てて貰いてい」
「立てれば、どうなる？」
「あれが、お留守居の悪い癖なんだ。てめえじゃ鑑定が確かでねえから、ちゃんと値段を聞き合わせた上で、値切ろうてンだろう」
「ふむ、値切られた上に、部屋頭がびんはねしての、残りの鐚銭が、わしの手に残るという寸法か、どうやら、うぬらの腹が読めてきた」
「おい、皮肉ってどうなるンだえ」
多蔵は泳えていたものが噴きだしたように、怒鳴った。
「おまはんは、まかり間違えや、佐渡か八丈送りになるところだったンだぜ。そいつを思うと、有難く感謝してもらいてえところだ、それを」
「遠島か、ふん、それも面白いかもしれぬ」
「なんだって？」
「江戸も八丈も、わしにとっては同じようなものだからだ」
「……野沢さん、おめえ……」
「生きていても、たいしたこともない世の中だ。島で暮らすも、江戸で暮らすも、どれほどの違いがあるというのだ」
今日も、空は灰色だ。雲は低い。陰湿な街の屋並みを、無情な雨はいつやむとも見えず、しとどに濡らしている。
多蔵は、ぞっとして、死人を見るような目になって、二、三歩離れた。
けむる雨のなかに、傘をかたむけた野沢武助の痩軀は影のように、はかなく見えた。
――永かアねえからだだ……
博奕に勝っても負けても、無表情に盆茣蓙の前に坐って骰子を見つめている姿が、思いだされた。そのくせに、あの腕の冴えはどうだ。
――刀も刀だが、人間も普通じゃねいや……
多蔵は、自分も、兇剣の妖気に惑わされたことを忘れ

ていた。
友だちの所に寄るから、と、用事にかこつけて、武助と別れると、厄病神をふり落とすように、後も見ずに、はねをあげて歩み去った。
武助がひとり深川要律寺門前丁の浪宅に帰ってみると、傾いた軒下に雨をよけていた女が、迎えるような眼をむけた。
水茶屋女とも見える、派手な容子の俠な顔だちが、なにもかも灰色の街のなかで、花が咲いたように、華やかだった。
ただの雨宿りではなかった。彼を待っていたらしい。
「野沢武助さま、ですね？」
無言で頷くのへ、お京と申します、と、名乗って、
「お伺いしたいことがございますねえ」
伝法な口調で、いった。
「大蛇の辰を無礼討ちになすった、と聞いて来ましたのさ」
「うむ……」
この女は、辰の何かに当たるのか、と怪しみながら、
「かんかん踊りが、見おさめだった」
「辰が持っていたはずの、刀は、どうなりまして？」
死因よりも、女の関心が、あの刀にあると知ると、野沢武助は、ふっと新鮮な興味を感じた。荒涼たる砂漠にふいに碧潭の泉を見た思いである。
霖雨のうちに、季節は夏に入りかけて温気は高い。単衣の、大胆にあけた衿から、女の白い胸の盛りあがりが、久しぶりに、武助の欲情を刺戟した。
「入らぬか？」
と、彼は漸く、傘をすぼめ、とがった顎をしゃくった。
「狭苦しいが、雨ぐらいはしのげる」

二

咳こみながら――骨ばった四肢は、執拗にお京の肌を苛んだ。
苛むという意識が武助にあったわけではない。人生に、希望を喪い、虚無と病苦に、忘却していた色欲が、堰を切ったようにあらわれたにすぎなかった。
永い冬眠からさめたように、いな、明日知れぬ病軀ゆ

えに、年増女の熟れた肌に、狂った。
男を知らぬお京ではなかった。むしろ馴れているはずだったが、武助の愛撫はその静けさの反面、強烈で、手荒にすぎた。
何度か、苦痛に悲鳴をあげ、その声が、男を、一層狂わせると知ってから、兇暴な嵐の通過するのを待つ姿勢になったが、そのときは、女の肉体が、沸騰する熱情のしぼるような呻きを制馭できなくなっていた。
ちくしょう、こんな癆咳病みに！
お侠な気質が、その間にも、反撥する。
あの刀の行く方を教える、といわれて、ふと出来た間隙に、男の手がすかさず侵入してきたのだ。
からだを与えてまで、その行く方を探りたかったのではない。大黒湯で、ゆくりなくも知った伊丹靱負の若い肌にこそ、甘い夢をかけていた。
名も住所も知らないのだ。
靱負に逢える唯一の手がかりが紛失した刀だと、翌日大黒湯に来て、盗難事件を耳にして、感じたのである。
お京は両国の水茶屋の出だが、柳橋の亀清の仲居になったこともあるし、僅かな間とはいえ、山下で蹴ころ、といわれる私娼におちたこともある。いまは蔵前の河田屋清兵衛の囲い女。あてがい扶持の若労のない身分が、ふっと、昼風呂の恋風に戦慄した。
——一度でいい、あんな殿御に抱かれてみたい……
旗本というだけしかわからない。
大蛇の辰の噂は、すぐに耳に入った。内藤屋敷の仲間から聞いて深川の浪宅に武助を訪ねてきたのである。
——あの刀さえあれば、あの方の素性もわかるはず……
男から金品は絞っても、こんな気持になったのは始めてのお京だった。
我とわが身の愛おしさが——かえって、武助のつけこむ隙となった。
「——内藤家のお留守居渋川主殿だ」
果てて後、やっとその言葉を聞き出すと、お京は、身づくろいもそこそこに、浪宅をとびだした。
傘が重く感じられた。灰色の雲のうしろに、ぼんやり白っぽい陽のあるのが妙にまぶしい。雨は霽れかけていて、全裸の子供が泥んこになって、ふざけていた。
歩きながら、髪のほつれや、帯のゆるみが気になった。

痺れたような下半身の、異和感のせいだろうか、ぬかるみをよけて、股をひらくとき、誰かに凝視されているような、羞恥で、足がすくむ。
——なにさ、虫けらにくすぐられたと思えばいいじゃないか……
あんな癆咳浪人と、痴夢に溺れたとは、その陶酔が揺曳しているのに、信じたくなかった。
白昼夢だと思いこもうとする。それが、ますます、靱負の、若々しくて、気品のある肉体への思慕をかきたてる。
——刀さえあれば、きっと、あの方も手を尽くして探しておいでだろうから……
お京が、一つ目の橋にさしかかったときである。
元町すじで、はげしく犬の咆哮が聞こえた。つづいて、わっと、叫びが流れてきた。けんかだ、病い犬だ、と、あわてふためいた声に、お京は橋の袂に立ち竦んだ。
どどっと、人々が雪崩れてきた。小雨だったが、傘を落とした者もいて、悲鳴がけたたましい。その中をつんざいて、狂ったような犬の声が走る。
犬は、泥と雨で汚れた黒毛の獰猛なむく犬であった。
若い町人の包みの端を咥えて、目をむき、唸りながら、ひきずられている。
そこらの野良犬が五、六匹とびだしてきて、まるで綱引きを援助するように吼えたてている。
町人は、これも泥まみれで、包みをとられまいと、逃げようとしたり、逆に棒押しでふり放そうとしたり、真っ赤になって苦悶しているのが、滑稽やら、哀れやらで、弥次馬が、むく犬を棒っきれで殴ろうとしていた。
「——ありゃ、人間様のほうが悪いンだ」
お京の傍へ流れてきた一人が声高にいうのが聞こえた。
「あたしゃ最初から見ていたがね、あの若僧がむく犬を蹴飛ばそうとしたから、怒ったんだ」
「そうじゃねえ、あの気狂い犬がよ、鼻面あげて、くんくん尻を嗅いできやがるンで、蹴ったらあの通り、喰いついてきやがったのさ」
「へえへえ、どっちゃにしろ、木戸銭が要らねえだけ得だァね」
正直な弥次馬根生で、聞いていた者たちが笑いくずれたなかに、

「あの若いのは亀沢町の刀屋相州屋の手代じゃないか」
と、いう者があった。
お京は、はっとした。むく犬が食いついて放さない細長い包みは、刀に相違ない。

三

その声が聞こえたのかどうか、若者は、とうとう悲鳴をあげ、助けを求めた。
「だ、誰か……大事な品物でございます。この、野良犬を、ぶっ殺して……」
鳶の者や自身番の六尺棒が、むく犬に殺倒する前に、若者の力は尽きていた。
四肢をふんばって、ぐんと、頭をふると若者はぶん廻されて、ばしゃっと、ぬかるに突んのめった。
むく犬が、ふりおろされた棒の下をくぐって件の包みを咥えたまま駈だす。子供が泣き声をあげ、群集が右往左往するなかに、お京は、若者に近よっていった。
「早く、早く内藤さまの……」
と、泥だらけで若者は、まわりの者に喚いていた。
「大切なお預かり物でございます、内藤さまお留守居役渋川……」
「渋川主殿さまの頼まれ物なのかえ」
若者は、お京を見あげて、そうなんで、そうなんで、と、頷いた。
相州屋は、江戸の刀屋として、著名ではない。が、中、下屋敷の近くではあり、内藤侯の出入りだった。渋川主殿は、したがって、彼の蒐集刀剣を研がせることが多い。長い馴染だし、血の附着した、いわば曰く物を頼み易かったのである。
相州屋は亀沢町にある。渋川のもとからの帰途、この奇禍に、お京が行きあわしたのは、偶然に過ぎない。が恋する女には、
——あたしの想いが届いたのだよ……
神仏のひき合わせ、と微笑んで、群集のほうへ行こうとしたとき、断末魔の犬の絶叫が聞こえ、群集のどよめきが、これを消した。
欝金木綿の風呂敷はずたずたに破れて、鮫鞘にも、犬の歯型がついている。
むく犬の胴なかに、鳶口をぶちこんだ威勢のいいのが、刀をかかげて戻ってくると、お京は、手早く小粒を紙にひねって、
「あたしからも、お礼をいいますよ、これで一杯やってくださいな」
「へえ、こいつァどうも、いえね、こんなにして頂くほどのことじゃア……」
おひねりを受けとる、刀を渡す——自然な受け渡しで、お京の手におちようとしたとき、すっと、刀は、横からでた手につかまれていた。
「あ、なにを……」
「あらためる」
と、その武士は、いった。色の浅黒い筋骨質の、上背のあるからだが、圧倒的だった。じろりと、見られると、お京も鳶の者も、口を噤んでしまった。
「あれへまいれ」
と、その武士はいい、先へ立った。少し年下と見られる貧相な男（同心ふうの）が、群集を追い払いながら、おい、と、相州屋の若者を促した。
自身番へ、お京は惹かれるように、入っていった。その刀から、離れられない気持だった。後ろめたい気持は少しもない。
「盗賊火附方与力、結城彦太夫さまだ」
と、同心は説明した。番太郎が、群集を追いたてた。
彦太夫は、朽葉色柄、唐草の明珍鍔、狂い獅子の目貫などの拵えを仔細に見ていた。そして、頷いた。
「確かに……間違いはない」
それから鯉口をきった。血を見たのであろう、ぴたりと、おさめ、膝の上に置いた。
「犬が刀に喰いつくなど尋常ではないと思うたが、やはり、このせいだったのだ」
「あ、てまえは、何も存じませぬ、てまえはただ、さるお方に頼まれましただけで……」
相州屋の手代は、土間に坐りこんで、がたがた顫えだした。
「へえ、お断わり申したのでございます。犬の試し斬りしたのだと仰有いましたが、へえ、てまえどもでは、それは、困じはてますので何度も、お断わり申しましたのに」
「名は申さずとも、わかっておる」
あわてて彦太夫は遮った。が、動顚した手代には、聞

こえなかった。
「渋川さまは、ああいう一徹なお方でございますし、内藤さまへのお出入りも、昨今のことではなし、特に渋川さまには、それはもう永いあいだ……」
「渋川？　内藤？……」
急に、彦太夫はけげんな顔をした。
はずれかけた爪革をなおしもせず上框のはじに腰をおろして、凝っと彦太夫を見ていたお京は、弾んだ声で、いった。
「お武家さま、そのお腰の物の持主をご存知なのですね。教えてくださいましな、あたしゃそれだけが知りたくて……」
彦太夫は、じろりと、ふりかえっただけである。

四

あらかじめ、家人を遠ざけたのは、彦太夫が、この刀の持つ魔性を熟知していたからにほかならない。
彼は、濡れ手拭をかたえにおき、注意ぶかく、朽葉色の柄糸を解いた。目釘をぬいて忠を見た。先細でタナゴなりの栗尻である。剣形中心先細くタナゴなりの栗尻、剣形中心先より二、三分ほど上でクレタものも、その特徴とされている。銘がきってあった。
村忠——一見、そう読める。伊丹靱負も、そう読んだのである。
だが、仔細に見れば——改竄されているのだ。
「勢州桑名の名匠、千子村正の作だ……」
村正の正の字が行書できざまれているのが、この思いつきをなさしめたのであろう。
正を行草書で書くと、忠の心に似てくる。正の一劃は忠の三劃とし、五劃の一点を加えれば、村正が村忠となる。
何故、改竄したのか？
いうまでもなく、古今百千の刀剣中、妖刀として、お禁め刀とされているからだ。
村正の斬れ味は定評がある。室町期には多くの刀匠が輩出したが、実戦用として群をぬいている。名刀に違いないが、難をあげれば武用最適のために、品においておちる。
が、忌まれたのは、その故ではない。

由来、妙なまわり合わせで、村正は、徳川家の兇事に関係している。
曰く家康の祖父清康、父広忠が災を受けたのが村正、長子岡崎三郎信康の切腹の際、介錯したのが村正、加えて、家康自身が、村正の槍で負傷するなど、偶然の重複が、村正を禁忌するようになった。
当時の非科学性は、これを兇刀とし、祟りと見た。妖刀、とひとたび烙印されると、根も葉もない妖異譚がまことしやかに流布されるのも世間である。
そうした意味での妖説を、しかし、結城彦太夫が信じたわけではない。
彼は、先代の伊丹靱負に、碁仇として親交があった。彦太夫はそのころ南町奉行附与力であった。
与力三十五騎のなかでも上席の年番方で、若年ながら抜擢されたほどで利れ者として信任されていたが、ある不祥事を惹起した科で、左遷の憂き目を見た。
その原因が、この村忠——村正である。
一夕、彦太夫は、八丁堀に客を呼んだ。
そのときすでに三十歳であった彼は、御書物奉行の娘に懸想し、知人を通じて、意を伝えるとともに、ちょっとした内祝いにことよせて、招いたのである。
与力という職掌柄でもあったが、若輩で上席にある彼は、二百石の生活も不足勝ちで、誇るべき道具一つ持たなかった。で、靱負の先代に乞うて、刀を借りた。
「千子村正だ」
と故靱負はいった。
「が、銘は村忠と改めてある。妖刀であるから、抜いてはならぬぞ。よいか、約束せい、飾るだけならば、お貸ししよう」
飾るだけ。
だが、客が来て、話がたまたま、その刀に及ぶと、約束は守れなかった。彼自身も、見たかったのだ。
そこで、何が起こったか、もはやいうまでもあるまい。
彦太夫は、刃から発する冷たい殺気にそそのかされて、客に斬りつけた。幸いだったのは、相手が、かなりの使い手だったことだ。辛くも逃がれたので、刃傷にはならなかった。
血こそ見なかったが、騒ぎはひろがり、正気づいたときは、すでに遅かった。
彦太夫は、旬日後にお先手組へ左遷されてしまった。

「お貸ししたわしが悪い」
と故靱負は、ふかく悔やみ、土蔵の奥深くしまった。
それが十五年前のことである。
以来、何を決意したか、彦太夫は、妻も娶らず、独身のままに、不惑を越している。
お先手組から、盗賦火附方改めの加役与力に任じて三年。
血ぬれた村正にめぐり逢おうとは。
彦太夫は、己れの運命の狂いが、村正を借りたときに発したと反省してから、これまでの、すべての望みを捨てた。
それは、人生の躓きであった。彼は宿世の輪廻を信じない。彼が、村正に祟られる理由が何処にあろう。
理由は、彼のほうにはない。
村正は名刀である。乱世の刀匠が、「斬れるように、斬れるように」と、念願こめて鍛錬した刀に、刀匠の魂が、乗り移ったといわないまでも、影響せずにはいないことも考えられるのではないか。
また、その比類なき斬れ味ゆえに、多く、血を吸った白刃が、鞘をはなれたとき、血を求めて、狂うのだ。

その意味で、これは正しく妖剣であった。
結城彦太夫という男が、たまたま、これを抜いただけである。運命の狂いは、そこに来た。
盗賦火附方改めの与力となった彼が、本所でこの刀に偶然めぐりあったのは、一体、何を意味していたろう。
渋川主殿のこと、野沢武助のこと——これだけの事実があれば、上司たる加役に申し出るのが役目である。が彼は、当然、靱負のことを忘却するわけにはゆかなかった。
旗本が、銭湯で腰のものを盗まれるなど、大いなる恥辱である。況や、妖剣とはいえ、その刀で殺傷沙汰があったにおいては。
「相談してみよう、靱負どのの若い運命を狂わせてはならぬ」

五

伊丹靱負の運命は三転して、思いがけない倖せをもたらしていた。
「離れませぬ、離れませぬ」

あの貞淑な記代が、女になった喜びの呻きだった。
「離さないで、記代を離さないで！」
兄の通夜に、加害者とのこの行為は、どのような陳弁が許されるだろう。
不道徳、そうだ、その言葉を否定はしない。だが、連日の雨雲にも増して、暗く、重かった女大学の仮面を脱いで、記代は、人間性をとり戻していた。肉体の眼ざめは、精神の開眼につながっていたのである。
刺そうとした相手と……
記代の恍惚は、また靱負にも最初の夜のような、歓喜と希望を与えていた。
「初夜だ」
その余燼のなかで、靱負は囁いたのだ。
「夫婦になろう、誰の反対があってもかまわぬ、初七日明けには、夫婦の盃を……」
ぎりぎりの感情で、結ばれたふたりである。
その恍惚のなかで、靱負は、市太郎への義理立てではなく、心から、記代を愛せると信じた。それは、お力やお京への袂別をも意味していた。
通夜と初夜と——背徳と希望の一夜が明けて、晴れ晴れとした顔で、伊丹靱負は出仕した。
叔父と瀬川某の発見されたということを、帰宅してから知った。
「変人だったが、ほってはおけぬでの」
と、知らせに来た遠縁の者がいった。
「おてまえは筒井家のほうにも義理があろうが、ちょいと顔だけ出してくれると」
靱負は顔色も変えず、行く、といった。
「お願いします。が、どうも変死が流行って困るな。もっとも、同じ改易になるにしても、衆道の心中は、ちと、うす汚なくって」
そんなことをいって去ったあと、靱負は仲間を督励して屋敷内の整理にかかった。記代を迎えるには少しでも綺麗にしておきたい。
もう本格的な梅雨に入ったのだろうか、この雨だけは、掃除の邪魔だった。
「いまのうちに降ってくれれば、輿入れのころにはからっと、あがるだろう」
そう楽観した。何もかも、すべてうまく行くような気がした。あのいまわしいことは忘れようとした。この倖

せの深さが、忘れさせてくれるようであった。
夜に入って、また激しくなった雨の中に、訪客があった。
——記代からの使いか？
市太郎の葬儀は明日の筈であった。
手燭のあかりのなかに浮きあがったのは、思いがけなく、肩巾のひろい結城彦太夫であった。
知人ではあるが、ずっと往来も絶えていた。
彼は、ありふれた袋入りの刀を別にさげて差し迫った語気でいった。
「至急御意得たいことがありましてな」
座敷に通されると、挨拶もそこそこに、袋から、村正をとりだした。
その瞬間、ぞっと、靱負は背筋を冷気が貫くのを覚えた。
「——拙者の手に入ったのが幸いだった。が、役目のてまえもあり、如何するが得策かと、ご相談にまいったのだが」
好意以外の何ものでもない。
彦太夫は、相州屋の手代とお京から得た刃傷事件を話した。むく犬の件も話した。
その間、靱負は一言も発しなかった。首垂れた額に油汗が浮き、膝に置いた手が、心の動揺を伝えて、わなないていた。
彦太夫は、単純に武士の魂を盗られた自責の苦悶と見た。
「血痕でもなければ、事は簡単なのだが」
大蛇の辰の血を言ったのである。したがって歯に衣着せなかった。
それが、脅迫観念に戦く靱負には、兇行の現場に連れ戻されたような——三味線堀を、堀田原を、指されたような気がした。
「くそっ、お終いだ！」
くわっと、目を吊りあげて、村正を摑んだ。
「あ、なにをする」
彦太夫は、反射的に、膝で、鮫鞘をおさえた。が、次の瞬間には、きらりと、妖刀はその鞘からすべりでて、
「お終いだ！」
悲痛な叫びとともに、小手返しに、彦太夫の肩先に走っていたのである。

右手に大刀をつかんだだけで、どっと、彼は前にのめった。
「お終いだ、何もかも！」
唇がわななき、涙が、あふれでた。
妖刀の作用で殺傷した靱負は、このとき、全く、彼の意志によって、白刃をふるったことの——認識がなかった。が、彼は、こんどこそ、もとめて人を斬ったのである。
妖刀は、我意を得たかのように、行燈のあかりを吸って、ぎらぎら光った。
その反射光が、柱に、襖に、天井に、幻覚のように閃きをなげた。
「お終いだ、お終いだ……」
涙で、顔をぐしゃぐしゃにして、靱負は、泣き喚きながら、走りだしている。
血刀は、襖を、障子を、屏風を、手当たり次第に斬って、走った。
足袋はだしのまま、玄関を走りでる若主人の狂った姿を、仲間が、瞠目して、声をあげながら追った。
靱負の耳に、女の悲鳴が聞こえ、白いおもわが見えた。
彦太夫の後を尾けてきたお京だった。
おそらく、狂った靱負の眼には、雨夜の亡霊としか映らなかったのであろう。狂気の、意味不明な喚きの尾をひいて、靱負は走っていた。
雨、雨、雨……
いつになったら、飽きるだろうか、空も、家並みも、草木も、ただ黒暗々に塗り潰して、今宵も、雨はやまない。

血の匂う唇

一

気ばかりあせっても、思うように走れないのだった。しとどに濡れた裾が脚にへばりついて、歩行を阻んだ。

路もぬかるんでいる。もともと、この根津から谷中へかけては赤土が多く、それが霖雨となると、こねまわされた粘土より始末が悪い。

走るうちに足駄をとられ、いつか裸足になっていた。

——早く、早く……

女は、あえぎながら、ふりかえった。

三更の闇の音もなく濡らす小糠雨のかなたに、ぽつ、ぽつ、と、螢の群れとぶような灯——追っ手の提灯だった。

呼び交し、確かめあいつつ、虱みつぶしの声が、潮騒のように、追ってくる。漁火に追われて、渚へあがった小蟹の狼狽と焦燥で、

「ああ、どっちへ?……」

あわただしく見まわす左右は闇。昼間でも見通しがきかぬ根津の森なのだ。

——権現さまをぬけて、あけぼのの里へ出るンだよ、それから千駄木町を神明さまの前を団子坂へおりれば、あとはこっちのものさ……

朋輩のお時という女は、そう言ってはげましてくれたのだが。

木戸から出るとき音を立てたので計画通りの路は辿れず、あっちへ逃げこっちへ走り、無我夢中で、人気のないほうへと闇を泳いできたのだ。

西東もわからない。

「——桜門があったはずだけど……」

桜門をくぐって、社沿いに境内を突っきれば、裏門へ出る。

漠然とその絵図が頭に描かれているだけ。

惣門よりうちは、境内と呼ばれているが、ずらりと並

んだ切見世の一軒に、女はいた。

去年の九月の祭礼に、それも昼間の雑踏のなかを、袖を男衆に握られて参詣したっきり。

二年もいるあいだに、たった一度それを小半刻たらず見ただけの地ノ理は、この闇と雨の夜に、どれだけの役に立とう。

「あっちだ、あっちだ」「裏門へ、誰かゆけ」「ほうびは三日三晩、抱きっ放しだとよ」「うへえっ、こたえられねえの」下司な哄笑と濁声が、灯とともに近づいてきた。

——ああ、もう駄目……

せっかく、籠を破って逃げしたのに。

絶望的な目に、しかし、闇の空を劃る破風屋根が見えた。

——桜門だわ……

女は駈けだした。

石段がある。急な勾配だった。のぼった。さらにまた石段。

ふっと、不審が翳った。

——こんな高いところに……

その一字のもとにきて、はじめて気がついた。

「観音堂じゃないか……」

本社からはずれた左がわの丘山の上にある観音堂だった。京の清水寺を模したもので、慈覚大師の手になる本尊千手大慈の像がおさめてある。

そうしたことは知らなかったが、有名な清水寺の舞台を小さくしたもの——その櫓を見て、絶望に目まいがした。

——駄目、逃げられない……

背後の喚声は、満潮のように、あがってくる。

「——観音堂だァ」

「袋の鼠だぞ」

二

「観音さま、助けてくださいまし」

女は、階段を這いのぼった。

「あたしは、汚れています。二年ものあいだ、毎夜ちがう男と、いいえ、ひと晩に二人も三人もの男と枕を交して……」

提灯のあかりは段々はっきりしてきた。叫喚が、観音堂を包むように、裏のほうにも起こった。

それも知らぬげに、いや、男の手が襟がみをつかむまで、その寸刻を惜しむように、ふりかえりもしなかった。

扉にすがりついて、訴えるのだ。

「――地獄と、罵られ、さげすまれながら、……あたしは嫌だった。無理やりに……それで、とうとう逃げだしたんです、どうか、どうか……」

声と灯の群れは、舞台下まできた。

「――観音さまのご利益だぜ」「観音さまに、弁天さまを捕えて貰うかえ」「べら棒め、おれが一番乗り」「おっとそうはさせねえ」「何をしやがる、仙八」「あの女の肌あ、二年めえにおれがお初穂さ」「古すぎらァな、昨夜はおれが」

先陣を争って、みにくい喚きが、押しあいへしあい、階段をのぼってきた。

いた！　と、早くも発見したらしく、獲物にとびかかる猟犬のように、

「おこま！」

と、一人が、提灯をなげ捨てて、

「捕えたぞ」

濡れた肩に、がっしと、鷲の爪のような手が――

「あ、観音さま……」

「観音さまじゃねえや、仙八さまだ。それ、いい思いをさせてやるぜ」

にたりとした乱杭歯に、ぞっとして、

「放して！」

おこまはもがいた。

「放さねえ」

「放して！　おねがい」

「放すもンけえ、雷さまが鳴っても放すこっちゃねえってね」

もがく肌が、男の欲望をそそった。仙八は、おこまに、おいかぶさるように、わきの下から、手をいれた。

ずぶ濡れの着物は、からだの線をあらわにしていた。もりあがった乳房を、ぐっと抱きしめると、

「あっ」

こころよい抵抗と、体温に、仙八は、また乱杭歯をむきだして笑った。

「ひひひひ、三日三晩たっぷりと可愛がってやるわな」

「お、おねがい、放してッ」

「放さねえ、根津のすっぽんは、食いついたら、ひひひひ、腎虚になるまで放さねえ」

「――放せ」

ふいに、誰かが言った。男の声だった。

「てやンでい、三日三晩、すっぽんの仙八さまのものでえ」

「放せ」

また、聞こえた。

「なにっ」

と、仙八はふりむいて、

「未練たらしいことをぬかすねえ！」

提灯が宵祭りのように集まっていた。一番に手をつけたとはいえ、一人占めに愛撫している仙八に、嫉妬の眼が集まっている。

霖雨のつめたい深夜に狩り出された連中の目的は色と欲。娼婦宿の顔役には義理もあるが、地廻りとして取引価値がない仕事には懸命にはならない

「どの畜生だ、嘴さしこむのは」

「おれだ」

「え？」

ぎくりと、仙八が背を竦めたのは、その声が、自信と、余裕にみちていたからである。

無頼なかまには、仙八を威すほどの奴はいない。威すというほどの語気ではないが、静かにずばりと、一言で押える、力が感じられた。

二、三十人いた無頼ものたちも、一時に鳴りをひそめていた。

「――観音さま！」

こう叫んだのは、おこまである。声はお堂のうちから漏れたように、一縷のねがいをこめたおこまには聞こえた。

仙八の手を、ふりもぎって、扉にすがった。

「おっと、何を……」

と、袖を握られた。

「執こいのう」

こんどは、はっきりと、仙八たちにも聞こえたのである。

「だ、誰だ？……」
「観音だ」
挪揄しているように、冷ややかな声だ。それでも、おこまには救いの神に思えるのだろう。
「おねがいです！」
絶叫して、なおも、扉にすがった。仙八が強引にひき放そうとしたとたんに、ぱっと、その扉が開いた。

三

衝動で、仙八は転んだ。滑った拍子におこまの袖を放していた。
「観音さまッ」
と、駈けこもうとしたおこまを、
「おっと、やらずの雨」
と、別の手がつかんだ。
おそろしく、爪のとがった指だった。ぐっと抱かれた。臭い息が、おこまの顔を突風のように襲った。
しかし、それは一瞬だった。おこまの悲鳴がもれないうちに、その男は虚空をつかんでのけぞったのである。
提灯をかかげて、我も我もと、野獣と化して襲いかかる体勢にあった連中には、おこまが、柔術の手でもつかったかのように見えた。
「まあ！」
愕きは、おこまの面上にあった。ぶっ倒れた男の耳の下に、キラリ、と小柄が光った。
——誰か？
——どこから？
奇妙な数瞬の静寂に、
「……？」ふと、人々は、耳をそばだてた。
門け放されて、漆黒の闇を孕んだ堂内に、ひたひた、と、足音がしたのである。
「ひ、ひとが……」
仙八が、やっと、うわずった声をだした。
おこままでが、逃げるのを忘れて、瞠目した。提灯のあかりのなかに、ぼんやりと、影が浮かびあがった。
「だ、誰だ！」
思いきって、仙八は、どなった。
「——おれか？」
静かな声が、木魂のようにかえってきた。

「観音の化身だ……」
冷たい声には、嘲りが含まれている。
ぎょっとしたが、すぐに無頼ものたちは、われにかえった。恐いもの知らずが表看板の連中だから、「けッ笑わしやがら」「観音さまの化身なら、女のはずだァな」「こいつめが、吉に手裏剣を……」「食いつめ浪人め。みんな、ぶっ殺してやれ」匕首をぬいた者もいた。
武士、ということだけは、横柄な口調からわかったのである。
江戸時代も半ばすぎると、もう士農工商の段階が牢固たるそれぞれの伝統をつくって、すがたも、声音も、おのずから、きまったものが、身についていた。
だから、武士が町人姿にやつしても、腰つきでそれとわかったものだ。そうした習性だけでなく、三代と続いた血は、変えようがなく、何も知らぬ童でも、武士の子は威張った風があった。
いましも——
深夜の観音堂から、忽然と湧いたような武士を、浪人もの、と直感したのは、必ずしも早合点とはいえない。
が、悠然と、刀を左手にし、提灯のもとにでてきた武士を見ると、
「あ……？」
食いつめ浪人と、罵った男が、口を噤んで二、三歩、あと退った。
その武士は、月代が蒼かった。
無精髭で出仕することは許されない時代だ。月代も毎朝のように剃らねばならない。浪人すると、その必要がないから、つい延ばしてしまう。
——浪人でもない武士が、どうして？
埃くさい観音堂なぞに泊まっていたのか、その不審が、無頼ものたちの気勢を削いだ。
「——女」
と、その武士は無頼ものたちの視線を気にもかけず、言った。
「中へ入れ」
「え？」
「暫くの間だ、入っておるが安全だろう」
おこまの全身を、喜悦が小波のようにゆすった。
——観音さまの化身かしら、このおさむらいさま……
「は、はい！」

とびたつように、武士のわきをすりぬけて——
入ろうとするのを、どっこい、容易にひき下がる連中ではない。ぐいと、無情な手に帯をつかまれた。
「そうは問屋が卸さねえ」
「あれッ」
ずるずるっと、おそろしい力でひき戻される。
「放せ」
「なンでえ、この……あっ」
武士の右手が、柄に走るのを見て、咄嗟に、おこまを楯にしようとした。したのだ。誰もが見た。楯になったおこまを。血は、とたんに、沸騰していた。凄まじい絶叫とともに——

四

どこを、どう斬ったのか？　恐るべき手練だった。
男は、絶叫して、のびあがったからだを、血飛沫にあおられるように、よろめかせて、がっくり、蝦なりにまげると、そのまま、横倒しに、転倒した。
おこまには掠り傷もない。
あわれな愚か者が、ただの一刀でこと切れたのか、もはやぴくりとも動かぬのを見やって、
「——斬れる……」
武士は、愛しげに、手の刀に視線をうつす。
「千子村正、血を吸って嬉しいか……」
ぎらりと、刀は提灯の火をうつして、鋭く光った。
「おれも、血の匂いが、段々好きになる。伊丹靱負に血の味を教えてくれた村正、今宵は飽くまで血を吸うか」
無頼ものたちが、ぞっと背筋を寒くした言葉であった。
「女、入るがよい」
左手で、おこまの細い手頸を握ると、引き倒すように、堂内に入れた。
そして、ずい、と、一歩踏みだす。
無頼ものたちは、恐怖をおぼえて、崩れ立った。どどどッと、音をたてて、階段を、数人が転げおちた。
だが、数のなかだけに、腕に覚えのある奴もいた。喧嘩には馴れているのである。
伊丹靱負と名乗る。白面の武士の手練が、あまりにも入神の業だったために、その腕前が信じられなかったの

だろう。
「おこまを、うぬのような野良犬に遣れるけえ」
七首を腰にあてて、からだごと突っこんできたのを、
「死にたいかッ」
身をひらいて、さっと、後ら袈裟に一太刀浴びせる。
たたたッと、泳いで、どっと、欄干にぶつかったが、踏みとどまるには、痛傷にすぎた。
男の姿は、もんどりうって——
悲鳴が、尾をひいて、舞台から、三丈も下へ落下していった。
命知らずが、狂ったように左右から襲いかかった。
一人は片手を肘のところから切り放されて号泣しながら、血の海をのたうちまわり、いま一人は、なぎ払われた顔を蔽って柱にぶつかり、さらに欄干に突きあたり、足をすべらせて、真っさかさまに、墜落した。
それが浮足だった連中に、決定的な恐怖をなげた。
もうおこまどころではなく、先を争って逃げだした。
濡れた赤土の傾斜は、滑りがよく、草は足をさらう。
一人が滑ると、ずずっと、坂おとしに、十数人が重なりあって、転がった。提灯がとび、怒号や悲鳴が、闇をかきみだした。
「ふふふふ、莫迦ものどもが……」
高みから見おろして、靱負は、冷笑した。
激痛と出血で、失神したのか、片腕斬られた男は、舞台から半身のりだしたまま、死んだように動かない。
鞘をおさめた音を聞いて、おこまがこわごわ、顔をだした。
「あ、もう……」
「済んだ。そちをあきらめたようだな」
「有難うございます、おかげさまで……」
おこまは、靱負の足にすがりついた。
「礼は観音菩薩に申すがよかろう」
「あ、あなたさまは?」
「観音の化身と、かえ?」
聞きかえして、くっくっと、泣き笑いのように肩をゆすり、
「おれは……素浪人。今日から素浪人の伊丹靱負」
ふっと、声が曇った。
靱負は、それなり、背をむけている。おこまを置き去りにして、階段をおりてゆくのである。

二年という歳月のあいだに、男の欲望のあさましさを、いやというほど知らされているおこまだった。
ちょっとしたことでも、恩を着せて、女の肌を狙うのが、男の本心。おこまの知識ではそれ以外の何ものでもなかった。
彼女が、他の女のように、間夫をつくって恋物語に酔おうとしないのも、そのせいだった。
——男なんて、みんなけだものなんだから……
そう信じていた。それが
——こんなひともいる?……
驚異だった。我が目が信じられないほどだった。
「待って!」
ひかれるように、おこまは、叫んだ。その叫びも、虚無に包まれた男には聞こえないのか、影のように、伊丹靱負は去ってゆくのだ。
「待って、靱負さま!」
思わず、口走った。その人の名である。
はっとしたとき、ほの白く、端麗なおもてがふりかえった。
「——何だ?」
——まあ……
おこまは、胸がつかえた。かっと、頬が上気した。歇むを知らぬ小糠雨が、ここちよく、おもてにしぶく。
「あの……」
言いよどむのを、
「何だ?」
と、靱負は虚心だった。
「どちらへ、お帰りでございますの?」
やっとの思いで、言った言葉を、虚無的な声のない笑いが消した。
「——知らぬ」
「え?……」
「三界にこの身を容れるあてもない靱負だ」
「——でも」
と、追いすがるのにふりむきもせず、
「この、村正に聞いてくれい」

魅惑

一

「――村正が、血を吸うをやめぬうちは……おれの運命は、この白刃の裡にある」

そう言いながら、その過去を口にしない靱負が、おこまは、恐ろしかった。

「昨日のことは忘れた」

と、言い、

「明日は知らぬ……」

生きとし生ける者が、それぞれに抱いているどんな小さな希望すらも、靱負にはないのだ。

虚ろな双眸は、若さの生気を喪い、灰いろに曇っていた。

――あんな立派な腕をお持ちなのに……

おこまは、解せなかった。

しかし、剣が武士の表芸であった時代は遠い昔でしかない。

腕前如何で、人間の価値を見られたのは、天下が乱れている時代のことである。

理由は何であれ、腕で領地を斬り従える時代でこそ、刀槍のわざの価値がある。徳川氏が天下を掌握するに及んで、武士――大名は、政治家になった。したがって、家臣もまた、政治経済の道に明るい者が重用されるのは治世の必然なのだ。

剣が、支配階級たる武士の象徴として、士道の最たるものであったとしても、それは崇高な精神を意味するものでなければならなかった。

仏教哲学たる禅の精神と剣が合致する、剣禅一如に、剣の昇華がみとめられるのは、右の理由による。

伊丹靱負の剣のわざは、妖刀村正によって冴えているのではなかろうか。

そうした精神の有無は別としても、

「――おれは、日蔭しか歩けぬ身だ」

と、もらした一言に、暗い過去の片鱗を、おこまはの

ぞいた。

「では……だから、あの、観音堂に泊まっておいでしたの？」

声のない、自嘲の笑みが、その返事だった。

その夜の、小猫の生毛のような、やわらかい雨の冷たさを、おこまは後々まで覚えている。

首垂れて、あとに跟いてくる彼女に、

「くるな」

と、靱負は、言った。

「どこぞへ行くあてがあって、追われていたのではないか、早く行け」

そうも、言った。

「いいえ、あてなんか……」

まともな縁者も持たぬ孤独の身。知人はすべて私娼窟にひっかかりのある者ばかりである。

そうしたおこまだから、一筋にすがりついてきたのだろうか。

慕ってくるのを振り切りもできず、靱負はあきらめたように、しかし無言で、深夜の街を歩いていた。

突然、おどりでた影がある。執念ぶかく、尾行してきた奴らであった。

待った、と大手をひろげた男の手に脇差が閃いた。

靱負がおこまをうしろに庇ったとたん、天水桶のかげから、兇刃がもろに突きこんできた。

「卑怯者が」

凛とした一喝とともに、千子村正が斬りさげた。返す刃が正面の敵を斬り伏せるのも数瞬と要しなかった。

そのとき、おこまは憮然たる白刃の声に身をすくませてしまったが、卑怯者が呻いてとりおとした刀に、足を傷つけられたのである。

「世話をやかせるやつだ」

そういいながらも、靱負は、襦袢の袖をひき千切って繃帯してやったあげく、濡れびしょのからだを、背負って、

「どこに行く？」

「――どこにでも……」

「こやつ……地獄へ供をするか？」

虚無の翳に蔽われた伊丹靱負の心にひそむ優しい心根に、おこまは惹かれた。

――伊丹靱負さま、伊丹靱負さま……

巾広い男の背に顔をつけ、その名を噛みしめるようにおこまは、何度も何度も、口のなかで呟いていた。

二

その、暗い道に果てが無いことを、おこまは願っていた。二人の、浅草坂本町の真竜寺における同棲が始まったのはその翌日。

真竜寺は、伊丹家の菩提寺という。住職は靱負を見ると、ひどく驚いた様子だったが、かくまうことを承知した。幸い門前町の裏店に空家があったので、その夜から、二人は同棲した。

同衾すれば、あとは、男と女である。どちらからとなく、肌を合わせた。

おこまは、

——あたしは、靱負さまによって救われる……靱負さまは、けがれを潔めてくださる……

いのちのかぎりと、ほむらを燃やしていったが、靱負は、昂りをおもてにださず、静かな冷たいくらいの愛撫で、これを受けとめた。

灯りをつけたままであった。靱負は、その行為のあいだじゅう、何か、別のことを考えているような目つきだった。

——ほかの、女のひとのことを……

本能的に、おこまはそう感じた。

が、どうして、口にだせよう。いまの彼女は、靱負の心のなかに、一隅でもよいから、抱きとめてくれる席を見つけるだけで、精一杯なのではないか。

「——おれは、昔のことを忘れた。聞くな」

問わぬ先から、靱負は、言った。

「おれも、そちの過去を問うまい」

伊丹靱負、という名も、世間には秘密にしなければならない。その理由も、おこまは聞こうとはしなかった。

靱負は、月代を伸ばしはじめた。

「気楽なものだな、浪人ぐらしも……」

髭だけあたりながら、淋しそうに笑う。その、翳のある笑顔に、おこまはぶるっと、胸のふるえを知るのだ。

世にあるときは、大身だったのだろう、と誰の目にも見える、気品のある顔立ち、挙措にも国侍にはない垢ぬけたところも、たまらなかった。

——お旗本にちがいない……

そう推測した。

——何かで、人を斬って……

家名も扶持も棒にふったのだ。おこまのような無知な者でも千子村正の妖刀と関連して、およその事情は、考えられる。

——恐ろしい刀……

掃除をするにも、手をふれ兼ねた。恋する者の偏愛で、

——お刀が悪いのだわ、靱負さまは、おやさしいのに……

夜昼の区別はなかった。

雨戸をしめたきりの日もあった。二人は食事もぬくことがあった。希望を持たず、まともな社会という籠の目からふるい落とされた二人は、不安を一時の恍惚と陶酔に忘れるために、愛欲に心身を没入した。

雨は連日降りつづいた。

古い長屋の天井は雨をもらし、壁は濡れて、畳は湿気でふくれあがっていた。

干すひまのない夜具は、水分を含んで冷たく固かった。淫らな臭いが滲みこんだような蒲団からぬけだして、二日に一度、靱負は、村正の手入れをした。

「おこま、庫裡にでもいってこい」

必ず、追い出してから、靱負は鞘をはらう。

妖刀は、すぐに血を吸いたがる、手入れをするときの、靱負の眸は、恍惚と残忍な異常なかがやきに満ちている。

血の臭いが……白刃から、陽炎のようにたちのぼる。

その、もやもやと、靱負を包む妖しい陽炎は、しきりに、

——血を、血を……

囁くがごとく、威すがごとく、あるいは訴えるがごとくに、靱負の心に呼びかけるのだった。

「妖刀め！」

腹だたしかった。妖刀のおかげで、友を斬り、叔父を斬り、知人まで手にかけて、名誉と家禄を失ったのだ。いまいましい。

打ち砕いてしまいたい。しかし、その憎しみの反面、手古摺る悪童への愛着にも似て、鎬に頬ずりしたいばかり、可愛いい。

——おれは、村正に憑かれている……

狂的な愛欲の数日は、倦怠と虚脱をもたらした。
板廂をうつ雨の音に耳をかたむけていた靱負が、ぽつりと、言った。
「――悪い男をつかんだな」
「え？」
と、おこまは、丈なす黒髪をくしけずっていた手を休めて、靱負を見る。
「いま何と仰有って？」
「おれは村正に魅入られている」
「……」
「この半狂人のようなおれに、そちは魅入られたようなものだ」
「そんなことは」
「――気がつかぬか、それに」
おこまは、怒ったように、
「誰に惚れようと、あたしの勝手でしょ」
ぷりっと、むくれたように、そっぽをむく。
はじめて知った恋。死をもって購われる愛というものの実体をおこまは、この日蔭の生活に感じていた。
――倖せだわ……
心から、そう思った。
いまなら、靱負さまのために死ねる……
ひたすらに愛した。しかし、この世では日々の糧がすべてに先行する。
生活は逼迫していた。
ある日、
「――これを歪げてこい」
と、靱負は、脇差をおしやった。
「――まあ、お腰のものを」
「武士の魂も背に腹はかえられまいて」
真竜寺は貧乏寺だ。そうそう靱負たちの面倒も見られない。
靱負は、村正のはばきを、初めに売り払った。金無垢が十匁二分ほどかかったので、三両と少しになった。
その次には、目貫を売った。後藤彫りで、これは一両二分あまりに売れた。
おこまも、唯一の財産である鰭甲に珊瑚の五分玉のついた簪を安物と代えて幾何かになったが、そうした居食いは、山まで食い潰すという譬えもあるほどで、消えるのは早かった。

「おあし、というのはほんとうねえ……」
「愚痴を申すな、この脇差は新刀だが、五両や十両にはなる、まげてこい」
「でも、質屋じゃア……」
「質が駄目なら、刀屋に売ってくるがいい」
「え？……ご先祖さまからのお譲りものでしょ」
「先祖もおれが干ぼしになるのを喜びはすまいさ」
未練は、しかし、靱負にもあった。
脇差が狡猾な刀屋に叩かれて、小判で三枚と分金で十二粒に代わってくると、さすがに淋しそうだった。
おこまは、一両で、形ばかりとの脇差を買ってきた。
「莫迦な真似ばかりする。どうせ一本刀でもかまわぬものを」
叱りながら、女の真情が胸をうった。靱負の眼にきらりと光るものがあった。
床板まであふれ水が浸す梅雨があけ、本格的な夏がくると、通風の悪い長屋が、蚤や蚊や、暑熱に悩まされた。
その夏も漸く去って、台所や裏の墓地で秋虫が鳴きだすころには、財布のなかは、青銭が二さいあまりとなってしまった。
「――あたしが働きます」
「よせ」
「でも、もう売るものがなんにも……」
靱負は、黙りこんだ。
その暗い視線が、村正に走ると、おこまはぞっとした。
「いけない！」
「む……？」
――辻斬りでもする気なんだ、このひと……
これ以上、悪の道に踏みこませたくなかった。斬りとり強盗、武士のならいという。だが、やはり、それは人の道にはずれたことなのだ。
――辻斬りをさせるくらいなら……
容易に金を得る方法を、おこまは知っている。たとえ、それが名誉ではないことでも、人殺しよりはいい。
その日のうちに、彼女は職を見つけてきた。
柳橋のさる料理茶屋の仲居で、
「――ご親切な女将さんで、困っているなら、給金を先にと」

貸してくれたのが、十両ざらざらっと、山吹色を並べられると、
「おこま！」
靱負は、じろりと見た。怒りが、虚ろな眸に、燃えた。
「おれァ……落魄はしても、女にからだを売らせてまで生きようとは思わぬぞ」
「——何をいうのさ」
一瞬、おこまの頬に、ある翳りが掠めたが、すねたように、
「そんなこと、あたしゃ、もう、死んだって嫌だと、あれほど言っているじゃないの」
「嘘ではあるまいな」
「嘘なンか、嘘なンか……」
「——許せ」
くるりと背をむける靱負に、おこまは、しゃくりあげてすがりついた。
「ね、ね、勘忍して、そのうちに一緒に暮らせるようになるわ」
「おれは、所詮、孤りだ」
「そんなこと言わないで」
おこまのほうから、火のような唇で、男のそれをふさいだ。女の真実が、そこにこもっていた。ふるえる唇は、はげしく囁いた。
「三日に一度、ね、三日に一度おひまを貰ってきますから、ね……」
唇は泪で塩っぱかった。
三日に一度、たしかにおこまは、戻ってきた。そのたびに、なにがしかの金を持ってきたし、着物なども新しくなっていた。
帰ってくるのは、たいてい昼間で、一刻ばかりであったが、その貴重な時間の殆どを二人は愛撫で過ごした。
靱負の心にも、孤り寝の夜のあいだに、人並みの妬心が胸に重なっていた。
——どんな客がくるのか、客の中には、わるさをするやつも多い。仲居も店によっては客をとるという話もあるし……
おこまは、その仕事のことや、店のことを話題にしたがらなかった。
「せめて、おまえさまと二人きりのときぐらいは……」

嬉しいその心情も嫉妬が深くなれば、懐疑に拍車をかけることになる。
「いいおとこが出来たのか？」
「そんな」
「では、なぜ言わぬ？」
「だから……」
そんなやりとりのあとに、一層情火は燃えさかるのだ。
おこまの秘密を知ったのは、秋色が濃くなった九月に入って間もなく、外を狂ったような風が吹き荒んでいる日だった。
その風に吹きこまれるようにして、とびこんできた男があった
「——お前さんかえ、おこまのいろおとこってェのは？」

三

「——無礼であろう」
叩きつけるように、一言。靱負は、身を起こしもせず、一瞥したきりで、瞼を閉じている。
「なんだと！」
武家屋敷の仲間と思えるふしがあるその男は、
「おい」と、連れをふりかえって、「無礼だそうだ、おいらを無礼討ちにするそうだぜ」
「えっへっへっ、して貰いますかね。まンだ、刃物の味を知らねえので、スカッとやられてェね」
敏捷なからだつきの小兵が、ちょろりと顔をだした。
連れは、それぞれ風体は違うが、五、六人いた。
「こちとらが無礼で、さむれえのくせに美人局するのア無礼ではないそうな」
「つつもたせ？」
「ほッ、知らねえとよ。おまはんのことさ」
靱負が、起きあがるのが見えた。
小兵の男はびくりと、首をすくめて、
「怒りやがった」
と、舌をだした。
「おのれは！……」
「おっとっと、これでも名前がありまさ。羅漢の多蔵といやァ、ちっとは聞こえた男だ」
多蔵は、くるりと半纏をぬいだ。その背いっぱいにぎ

っしりと彫られた五百羅漢。
「名前は忘れても、この刺青は一目見たら生涯忘れめえ。おっと、羅漢さまを自慢するつもりじゃさらさら無かった」
「さいで、おこまの旦那が、かんかんの薬缶、金柑、夏蜜柑、この木鼠の小平はとんちんかん」
——旦那？
靱負が耳を疑った言葉である。
「へッ、白ばっくれなさンな、いまどき、その術は流行りませんとさ」
「おこまは……柳橋で仲居をやっているはず……」
「へえ、仲居だとよ。お囲い女が、仲居だとよ」
「知らざァ言って」
と、小平はそこまで、声いろをつかって、
「兄哥、聞かせてやんなせえな」
「聞かせるほどもねえが、腹っぺらしてものが言えねえのなら、言ってやら。内藤山城守さまお留守居役渋川主殿さまというれっきとした旦那の持ち物になりながら、痩せ浪人の間夫とあいびきするたァ、何たることだ、え？　主殿さまならずとも、腹ン中が煮えくりけえるのも当たり前」
「——渋川主殿？」
おこまが、囲い女に？
その驚愕も、偽態と、多蔵たちは見た。
「芝居をするなら上々吉におやんなせえ。いまさら知らぬ存ぜぬは卑怯ですぜ」
「ひ、卑怯だと、おれが」
「そうじゃがんせんか、支度金といって、初に十両、それから着物だ髪のものだ小遣いだと、なンだかんだで、二、三十両も、おこまを唆かしてふんだくってやがって」
「そうか、そのようなことだったのか……」
漸く、靱負にもわかった。案じた通りだった。仲居では、とてもあのように、ゆとりはない。哀れと思った。靱負に見つかることを必死に隠していた女の哀しさが、胸にひろがった。
「愚かな女だ……知らなかったことだ」
「けッ、芝居はよしな。それより、詫びるなら詫び証文。それがいやなら三十両。ここへちゃっと、耳をそろえて出すがいい」
「金か……」
「三十両、鐚一文かけても、おこまは」
その声にあふられたように、がっと、靱負は刀をつかんだ。
「千子村正。四十両や五十両にはなるが、売り払うくらいなら、先にうぬらの血を存分に吸わせてからにしよう」
膝前にひきつけて、冷笑を片頬に浮かべた靱負の眸に、鬼火のような嗜虐の炎が燃えていて、多蔵の五百羅漢はふるえあがった。

悶え

一

「——村正だといったか？」
「左様でございます。村正は妖刀だ。あの野郎も尋常もンじゃねえ」
「……村正」
「左様なンで、妖刀を持った妖鬼、へえ、あの目つきア、五人や十人なぶり殺しに、してきたような……」
渋川主殿は、多蔵の話を聞いていないようであった。
——村正、千子村正……あのときの……
それが癖の、少し猫背になって、障子をゆする風の音にいらいらしたように黄いろい爪を前歯で噛んでいた。
ここは、内藤家下屋敷とは大川一つへだてた目と鼻の距離。お厩の渡舟にのぞむ三好町のしもた家である。

上屋敷にお長屋がある渋川主殿は、おこまの肌に戯れるために中下屋敷に所用と称して他行する。下屋敷の腹心の者と口裏を合わせるためにも、万一誰かに見られたとしても、この界隈ならば、言い訳がたつ。

おこまは、以前同じ根津で客をとっていた女で柳橋で髪結いになっているおつねを頼って、主殿に囲われることを奨められたのである。

「――村正があのときの刀ならば……」

と、爪を噛み噛み沈思のあと、主殿は、狡そうな金壺眼をあげて、

「おこまはくれてやってもよいの」

と、言った。

前にも述べたように、渋川主殿の刀剣趣味は、気狂いの部類に入っていた。

彼はいわゆる名刀を欲するのではない。蔵書家にも初版本の蒐集とか、珍書奇書ばかり集めて深夜ひとりで土蔵で悦に入っているという奇嬌な者がいるように、主殿の好事は、いわくのある刀剣にかぎられていた。

いわば、刀剣のげてもの趣味。その意味では妖刀といわれる千子村正の作品は数も少ないだけに、喉から手の出るほど欲しい。特に、あの村正なら、なおさらだ。あのとき、手に入れたものの、研に出したのを、相州屋の手代のうかつから、犬に噛まれたりした騒ぎで行く方知れずとなっていた。

――おこまをくれてやってもよい……

刀剣のことになると、実の子と引き換えもやりかねない主殿だ。あの村正を入手できるなら、親でも売ったかもしれぬ。ちらりと、部屋の隅を見ると、

――だが……

二の足を踏んだ。

おこまは、両手を縛られて、転がされている。

主殿の留守を狙って坂本町に戻ったのを木鼠の小平に尾行されたのを知らなかったのが破局を招いた。

縛られるときもがいたので、衣紋がみだれ裾がめくれていた。

主殿の狡猾なおもてに迷いがただよったのは、ゆたかに年増の肉の盈ちた胸や、肩のまるみや、ふとももの雪白の肌の量感である。

初老の五体が、この肌に接して、活力を盛りかえした主殿だった。

――惜しい……

刀も欲しいが、女も手放せない。

「――多蔵」

と、老人は、ほそい頤をしゃくった。

「こやつを、ひん剝け」

「は？」

「ひん剝くのじゃ、ちと灸をすえてやれい」

「へえ、わっちが」

木鼠の小平が、しゃしゃり出た。

「ひっこんでろ」

突きとばして、多蔵はおこまに近寄った。

「――お留守居の言いつけだ」

疚しさをふり捨てるように、ぶっきら棒にいい、多蔵はぐいと襟をひき剝ぐ。

「あれ！　なにも、そんな、ああ……」

羞恥におののく声を、風の音が消した。おこまはもがいた。なまじ美女がもがくのは、一層、残忍な快感を煽る。

「ほ、本来なら、二人重ねて四つにぶった斬られるところなンだ。有難いと思え」

多蔵も昂奮していた。手がわななき、唇の端が、ひくひく痙攣していた。袖がひき千切られ、衿が裂かれて、乳房が、恥じらいながら顔をだした。

「あ……勘忍して！」

幾つもの視線が、胸に、腰に、箭のように突き刺さる。おこまは、背中まで屈辱に真っ赤になって、哀願した。

二

女には多少の差はあれ、露出症の傾向がある。心理的に見れば、自己愛の変型だろうが、美へのあこがれが強いだけに、肉体の美しさを衆目にさらすことに、羞恥とともに、同じくらいの愉悦すら味わうのだ。

おこまは、その、倒錯した快感をしかし、味わうゆとりはなかった。

長煙管が、縄のあいだにつっこまれ、ぐいぐいと、背中をこじりあげ、責め苛んだ。

「――傷をつけるなよ」

親切でいうのではない。主殿は、歯をがくがくさせな

がら、陶酔したように、もがく肉体に目を細めているのだ。

間歇的な、おこまの悲鳴が、一汐、興をそえるらしかった。が、

「声がもれはしないか？」

「いやこの風ですから」

「だが……」

と、用心ぶかい老人の意を汲んで、さっそく、猿轡を噛まされた。

悶絶するのではないかと思われるほど、苦しみもがいたあげく、ぐたりと、おこまが白い肌をなげだすと、漸く、多蔵は、長煙管をぬいた。

残り惜しそうな、その残忍にかがやくあから顔に、湯を浴びたような汗が吹き出していた。

「――ちっとは懲りたろう、え？」

主殿の骨ばった手が背を――肩を這いまわる。

「いままでのことは許してやろう」

「え……ほんとうに」

「うむ。だが、村正の刀が所望じゃ。その村正を持ってくるのじゃ、すりゃ許してやる。だいたい、あの刀は、わしのものじゃ、話せば長くなるが、真の持ち主は、この主殿じゃ。な、よいか、よいの」

全裸に近い恰好を四囲から淫らな視線で見つめられている女が、どうしてこの身勝手な男の申し出を拒めよう。

おこまは――風のなかをしょんぼりと、坂本町に戻ってきた。

白い脛を見たがるいやらしい風にも気をとめなかった。

夢遊病者のように――あぶな絵のすがたに、通りの男たちが卑猥な声をなげた。

――できない……あたしにはできない……

靱負を瞞して、千子村正を持ち出すなどということは、確信が持てなかった。

――どうしよう……

逃げようか。

だが、木鼠の小平か、誰か尾行しているのは（姿は見えないが）間違いない。あるいは三、四人いるかもしれない。

多蔵は身分はお下屋敷仲間部屋頭だが、悪党なかまには顔が利いている。大名屋敷というものは、それだけイザという際の力が強い。一種の治外法権だった。

その組織からは、とても逃げだせるものではなかった。

――あの刀、あの刀一本で、二人が倖せになれるのなら……

おこまは、いま安息が欲しいのだ。刀さえ持ってゆけば、主殿は宥してくれるという。

「村正」

真竜寺の築地塀を、おこまはいつか、行きつ戻りつしていたのだ。

決心がついたのか、紅い唇をひきしめて、おこまは長屋の木戸をくぐった。

夕食後で、共同の井戸端では茶椀の音、水の音、がやがやといつに変わらぬ姦しい女房たちの談笑が渦まいていた。

――ひとの気も知らずに……

その日暮らしで貧しいながら、気楽そうな人々の笑顔や、高声が、憎らしいほどだった。

「おや……」

誰かに声をかけられたようだが、ふりかえる余裕はなくおこまは悪事をおかした人のように、おもてを伏せて我が家へ戻った。

「――ただいま」

声も小さかったし、他人の家に忍び入るような、後ろめたい、いやな気持だった。

そっと格子をあける手もふるえた。

「――お風呂かしら？」

部屋の中は真っ暗だし、おこまか、と、迎えてくれる靱負の声もない。

何故か、おこまは、ほっとして、上へあがると、いつもの位置の行燈を手さぐりでひきよせ、燧石で火をつけた。

「あれっ……」

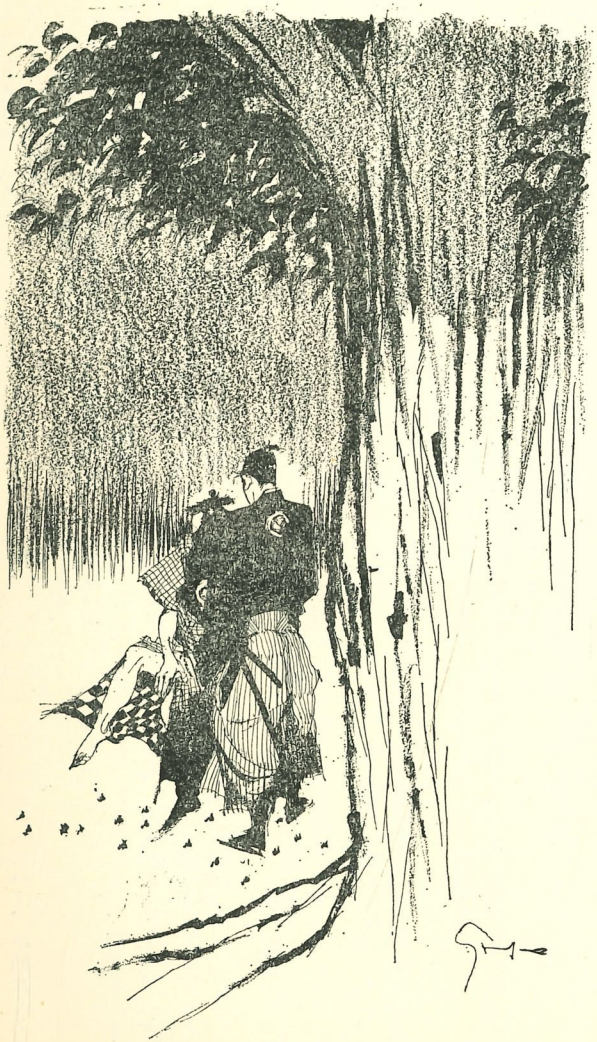
叫びかけた語尾を、あわてて噛み殺す。

靱負が、うたた寝していた。

咄嗟に、おこまの胸の中に、

――いまだ！

と、いう思いが、突っ走ったのである。はじめから、その気だったわけではない。靱負が起きていたら、そん



な気は起こさなかったろう。
おこまは、そっと、手をのばした。瘧を病んだひとのように、ふるえる手だった。
つかんだ。持ちあげる。袂でくるむようにして、脇にかかえ、出ようとした。
と、
「おこま！」
はっと、からだが竦んだ。
「――村正を何処へ持ってゆく？」

三

五体が痺れたように動けないおこまである。伊丹靱負は、不動の術をほどこしたかのように、ゆっくりと起きなおった。
「何処へ持って行くのだ？」
静かな口調だった。
「は、はい……」
「……」
「あ、あの、実は……」
「質か？」
「――ええ、あの、いいえ……」
「質なら質と申せ。盗っ人のような真似などせずとも」
靱負は言いさして、目をそらした。多蔵の言葉が甦ったのである。おこまの眼を見ていられなかった。
その、あわれみが、つんと、女の胸を刺して、
「か、かんにんして！」
村正を抱えたまま、どっと、靱負の膝に泣きくずれていた。
「あたしが悪かったの、気が弱くて、それでとうとう、こんなことを。でも、この刀さえあげれば、いままでのことは宥すといって、だから、あたし……」
しゃくりあげながらの、きれぎれの言葉が、靱負の胸をうった。
靱負に、何が言えよう。何を責められよう。
身を捨てて、二人の倖せを求めるおこまの心情が、春のあげ潮のように、ひたひたと、靱負の閉ざされた胸のうちを浸してきていた。
「だが……」
と、彼は、村正をとりあげて、

「そちを、世間のきたない奴らの慰みものに出してまで、酒を飲もうとは思わぬぞ」

ぷつっと言い捨てて、おもてへ出た。

優しい言葉をかけることを知らぬ靱負の、動哭を、おこまはそのなかに聞いた。怒ったような動作も、衝撃をかくす男の悲しさなのだ。

嬉しく、その言葉を聞いて——やっぱり靱負さまは、あたしを愛しんでくれた、と、やがて顔をあげたとき、もう靱負はそのあたりに居なかった。

「ま、どこへ……？」

靱負が、木戸から出ると、

「来やがった」

と、隠れようとした影があった。夕闇のおりた欅のかげに、蝙蝠のように、すっと視界を掠めたのである。

そのとたんに、ひゅっ！　闇を裂いて、白光が糸をひいた。

「ひえぇ！」頓狂な声で、人影が突んのめるのが見えた。

にやりと、片頬に軽侮の笑みを浮かべて、靱負は近寄ると、

「——さきほどの奴だな」

襟がつかまれて、ひき起こされたのは、小柄なくるくるした男。

「木鼠の何とやら言うた」

「へ、へえ、小平で。あ、あ、あたまが、脳味噌が……命だけはお救けを、金なら、なんぼでも出しますで」

「大きく出たの、十万両でも貰おうか」

「げッ、ご、ご冗談、十文ならいますぐ」

「たわけが」

蹴放して、さっと、靱負の手が、小平の頭髪から、何やら抜き取った。

小柄だった。

ひえっ、と、また、首を竦めて頭に手をやるのを、

「髷に刺しただけだ。が、逃げると、今度は頸を貫くぞ」

「ぶるるる、に、逃げるなんて、旦那……」

「渋川主殿のもとへ案内するのだ、忘れたとは言わさぬ。さあ、行け」

小平は、素走っこく左右に逃げ道を探した。

「無駄なことはよすがいい」

「へ？」

「それとも、婆婆に愛想がつきてのことなら遠慮なく申せ、印導わたしてくれよう、どうだな、木鼠の何とやら」

「そ、それには及びません」

「遠慮することはない。おれの村正は、きさまの血を吸いたがっている」

強い風がさっと、その声をさらった。

刺客

一

「手向かうな、抜かせるな、この村正は一人の血を吸やァ二人、三人、この場にいる数だけの血を欲しがるんだ」

渋川主殿の胸ぐらとって、靱負はじろりと、ふりかえった。

その一言が、腹心たちの、気勢を削いだのである。

懐中に手をつっこんだ者や、気早に匕首を逆手に握っている者もいたが、気を呑まれて棒のように立ち竦んだ。

「そうだ、そのまま、つくしんぼうのように突っ立っているがいい」

そう言った靱負の口から、べっと、青痰がとんだ。

主殿の額にねっとりとはりついた。

「女を囲うがらか」
「う、う、おのれ」
その顔が、瞬後に、草履の下にあった。靱負は、怒りをこめて、踏みひしいだ。
「この村正が欲しいそうだの、だが、こやつはおれから離れたがらぬ。おこまと同じにの、せめて一見させたい……が、抜けば、血を見ぬではおさまらぬ」
靱負は、村正から奔る殺気の誘惑に耐えていたのである。永居すれば、血河を流しそうであった。彼は、背を見せて、歩きだした。
主殿の危機に、多蔵たちは、ただおろおろしているだけだった。
下屋敷は近いが、この妾宅を藩士に知られてはまずい。表沙汰にできぬ内情を見越したかのような小面憎い靱負の狼藉だった。
靱負が悠々と立ち去ってから、
「――あ、思いだした」
と、文字通り、膝を打った仲間が、
「どこかで見たと思ったら、ありゃア、お尋ね者ですぜ」
「靱負は妖刀村正を持っていた。村忠と在銘じゃが、あれは、どう見ても村正を切り直したもの、その村正に唆かされて、わしを斬ったのじゃ、靱負に罪はない」
被害者がそういうのだから、普通の刃傷沙汰では扱えぬ。しかし、身分ある者の失踪である。当時、武士たる者、旗本国侍たるを問わず一夜無断外泊すれば切腹が常識である。
靱負も、まずそれは免れない。極秘裡に町奉行所の機能をあげて探索の手をつくしていたが、いまに至るも、行く方不明とされている。
極秘といっても旗本の失踪などという稀有の事件は、恰好の話題となる。役向きとしてはせいぜい、瓦版を禁止するくらいだ。
「――わっちゃ、奉公していたお屋敷が近かったので伊丹靱負の面ア見たことがあるのさ」
と、弥三は得意顔で、
「だが、月代のばしてよ、無精髭はやしゃア、ああも、人体ちゅうもンは変わるものかえ」
「たしかに伊丹靱負だな」
主殿はそのことが大事だった。尚も暫く、空にうなる風の音に耳を傾けていたが、
「これだな」
ばっさり、片手を動かした。
「誰か、いないかの。腕が立って、金で話がつけやすい男……」

二

「――野沢さん、そういう次第だ。何しろあっちは、曰く因縁のある妙な刀が好きときているンだから礼はたんまり……」
「たんまり、と念をおしておくぞ。おれは、あの刀は好まぬ。一つ間違うと、村正の錆と消えるかもしれん仕事だからの」
野沢武助は、かっかっと、嗄れた笑い声に肩をゆすったが、苦しそうに咳こんだ。
孤独な浪人者野沢武助は、死人のような陰気な蒼い顔で部屋博奕にあらわれる。
博奕上手というのではない。生きるのもわずらわしいが死ぬのも面倒だ、というような、投げやりな調子が、
「なにっ！」
と、多蔵が、その胸ぐらをとって、
「ほんとうか、やい、弥三！」
「く、苦しいや、部屋頭。あいつ、月代がのびてるから判らなかったンだ。なるほど、道理で村正だ」
「何を言ってやがる。すじ道立てて話せ」
「お留守居ならご存知でさア、ほら、伊丹靱負ってえお旗本が」
「あっ！」
と、泥を洗い落としたばかりの濡れた顔で、
「あいつか」
主殿は呻いた。
お尋ね者、伊丹靱負、村正――この三題話のような事件は、まだ耳新しい。
二の丸お納戸衆の伊丹靱負が失踪したのは梅雨のころである。結城彦太夫という盗賊火附方改与力が失踪直前の靱負に斬られたのだ。
深傷ではあったが一命とりとめた。
「怨恨沙汰ではない。すべて妖刀のしわざでござる」
と、加害者を庇って彦太夫は、

博奕のやりかたにもあらわれていた。
確信があってか、気まぐれなのか、丁なら丁ばかりに三日も四日も張りつづける。負けても勝っても、悲喜何れの感情も顔に出ないのだ。
誰の目にも胸の病いということが、それもかなり甚いらしいことがわかるのだが、武助は、二日も三日もぶっ通して盆の前に坐っていることがあった。
みんなが嫌がるのは、痰咳特有の、かすれたような、痰の突きあげてくる咳だった。
剝げちょろけの朱鞘の無反の長いやつを落し差しに影のように街を歩いていると、誰もが道をさけた。頬骨がつき出て、険しい顔を、一層醜悪にしているのは、頬にざっくりと入った刀傷のひっつれだった。
武助をなかに、羅漢の多蔵、木鼠の小平の三人は、浅草奥山のごふく茶屋で日暮れを待っていた。
「だが、村正の錆となっては、美味い酒も飲めぬの。いっそほうびの半金は手附として貰うてくるのが本筋だったかもしれぬ」
いましも、サーッと、降ってきた雨のしぶきをよけて、緋毛氈の上にあぐらをかいた武助は、他人事のような顔で、こう言う。
村正、という言葉がでたとき、うしろむきで茶を飲んでいた武家娘が、ふっと、ふりかえった。
半刻後に起こる死闘を思って、多蔵も小平もわくわくしていて、気がつかず、
「な、なァに、あんな旗本くずれの剣法なんか、野沢の旦那の腕から見りゃ、ものの数じゃございますまい」
「旗本くずれ……」
おのれの過去が甦えったのだろうか、武助は、冷笑した。
「伊藤なんとやら申したの……」
「いえ、伊丹。伊丹靱負って野郎でさァ」
「おこまに可愛がられてへなちょこになっているンで、なァに赤児の腕をひねるようなものでさあ……」
三人は、話をやめて、ふりむいた。
「あの、お話中でございますが……」
と、茶屋女にしては、しちっ固い声がわりこんできたのである。
さっきから、背中あわせに坐っていた武家娘、と見て、
「へ？……へえ、わっちですかえ」

木鼠がにたりとした。
「いえ、あの……」
「うぬは、のきやがれ」
と、多蔵が突きとばして、
「木鼠が茶がまから面をだしゃァ、お姫さまは吃驚すら。へえへえ、ご用でしたらてまえがうけたまわりまさ」
「あの、無躾けでございますけれど」
「とんでもねえ」
「お伺いしたきことが」
武家娘は、張りのある、切れ長の眼で、ひたと武助を見つめて、
「ただいま、旗本くずれの伊丹靱負、と仰せられたようでございますが、靱負さまをご存知でございましょうか」
「へ、そりゃア……」
多蔵は口ごもった。
靱負はお尋ね者だ。靱負に報復するのは容易である。町奉行所へ訴人すれば切腹の場へ引かれるのは明らかだった。が、それでは村正が手に入らない。武助に斬らせて村正を奪えば、一石二鳥になる。その腹づもりだから、
——この女は……
うっかり、それと洩らせず、三人のあらたまった詮索のまなざしに気づくと、
「わたくし、伊丹さまとは近しい間がらで……筒井記代と申す者です」
それだけでは説明不足の顔つきに、躊躇したあげく、やっと言った。
「わたくし……嫁ぐ約束になっておりましたの」
頬を染めて記代は目を伏せた。消えいるような声だったが、それは三人の男たちの緊張をほぐすだけではなく、あらたな好奇心をかきたてたのである。
「ほう……」
と、それまで無言でいた武助がちかりと蛇のような眼をひからせて、無躾な視線をほそい頸から胸、腰へと這わせた。
「それで、伊丹どのを、お探しか？」
「はい……」
「幸いだった。拙者もこれから行くところだ。お連れ申そう」

三

意外だった。まさか、武助がそういうことを言いだすとは、思いもしなかったのである。多蔵があわてて袖をひくと、

——黙ってろ！

と、けわしい眼が叱りつけた。

かつて、武助が見せたことのない、烈しい感情がその蒼く痩せこけた頬に動いていた。

「——これから、すぐに？」

記代は、困ったように、

「実は、供の者とはぐれたので、ここの者に探しにやったのですけれど」

「お腰元か。それなら、連絡させればよい」

武助の眼のいろを、敏く多蔵は受けとって、調子を合わせた。

「木鼠、てめえここで待っているンだ」

「部屋頭そいつァ……」

不服そうな顔の耳をぐいとひっ張って、何やら囁くと急にえびす顔に変わった。

「へい、左様でげすか。お腰元をお待ちしてへい、あとから参じますでござんす」

通り雨か、あんばいよく、空は霽れてきた。

しかし、雨に呼ばれたように、空は黄昏れてもきた。

「でも……」

記代は心を決めかねたふうで、

「伊丹さまのご住所だけ承われば……」

「さ、それがでございます。あんなお身の上なので、ひとつ所にお出でじゃねえので、その、隠れ家を、ちょいちょい変えますンで、ご一緒に二、三カ所あたりゃア……おい、駕丁！」

雨のなかを吉原へでも送りこんできたらしい町駕籠が、随身門前を通りかかったのを、多蔵が呼びとめた。

「さ、お姫さま。善は急げって言いまさア」

——善か……

ある期待に燃える笑みが、蒼白の頬にのぼった。野沢武助がその駕籠をとめさせたのは、深川の浪宅前。六間堀は濃い汐の香を無遠慮に放っていた。

「ここに？……」

「そうだ、そなたを恋しく思う男の家だ」

急に、ぞんざいに、露骨になった言葉も、世間知らずの娘の靱負を慕う心には、悪党を見ぬけなかった。

駕丁を帰し、二間きりの浪宅へあがると、湿った万年蒲団が、主の留守を物語っていた。

「——靱負さまは？」

「靱負？　なんだそやつは？」

笑いもせぬ武助である。とぼけた声で、疲れたように腰をおろす。大小を投げだすように置いた。

「そうだ、そなたの恋しい男だったな」

はじめて記代の胸に疑惑が雲をまきおこした。

「——では、わたしを瞞して……」

「瞞しはせぬ。薄情な男のことなど、忘れろ、惚れるより惚れられることだ。そなたを恋しく思う男が、ここにいるではないか」

「ふたりもねえ」

記代は抱きすくめられた。

痩せてはいるが、強い力だった。獣めいた欲情が、わななく指先から伝って、

「無礼なことを！」

気丈にもさっと懐剣を抜いたが、簡単に、叩きおとされた。男臭い蒲団の上に、記代はねじ伏せられていた。

「——多蔵、表で待っていろ」

記代の抵抗をこころよいもののようにあしらいながらの言葉だ。

「ちえッ、お手柔かに願いますぜ、あとが使いものにならねえってことのねえように。駕籠賃も茶代もあっしが払ったンだ」

「わかっている。早く行け」

「いまごろは木鼠もいい思いをしているこったろう。腰元を、舐めるなり齧るなり勝手にしろと言ったのでねえ」

何という悪党たちだろう。

「無礼者、お放し！」

はねかえそうとしたが、武助の五体が、五体にそっくり重なっていた。重い。臭い。鮮烈ないろのうすい唇が迫っていた。記代は怒りに燃えて、おもてをふりながら、

「許しませぬぞ、許しませぬぞ」

「許すさ、女のからだがの……」

あらぬところを、武助の手がまさぐる。下半身に火が

ついたような、羞恥と、屈辱で、記代は気が狂うかと思われた。

「野沢さん」

多蔵が、おもてから呼んだ。

ほとんど同時に、

「女草履のようだけど……」

かすれているが、からみつくような色気の匂う声が格子戸をあけた。

四

「――お京か……」

悪いところに、と、武助は唇を噛んだ。運が悪い。武助は、これまで、ツイていると思ったことは一度もない。常に運が悪かった。好運は彼に背をむけて通りすぎている。

いまいましげに舌うちしたが、まだ、記代をおさえつけたままだった。

お京は蔵前の河田屋の囲い女だが、武助から手ごめにされて以来、武助の力にずるずるに惹きずられていたのである。

「おう、入っちゃいけねえよ」

「いけすかない、袖なんか引いて」

多蔵の手をふり払って、ずかずかとあがってきた。

「――派手だこと」

ちらりと見て、さすがに正視できずお京は、そっぽをむくと、ぴたりと坐った。

「まだ日が暮れたばかりというのに……」

「姐はん、おめえ……」

そう言いながら多蔵も好色の目をぎらつかせて、中をのぞいた。

これではいくら何でも、武助もあきらめざるを得ない。腿の触感を愉しむにとどめられて、武助のあばらの浮いた胸は未練で喘いでいた。

「――運が悪いな……」

と、武助は、帯をしめなおして、自嘲に頬をゆがめた。

「そうですとも、そうそう神様は悪党の思うようにさせやしませんさ」

突然のお京の出現は助けの神だった。目に感謝を告げただけで、記代は、衣紋のみだれを直すのもそこそこに逃がれようとした。

だが、格子戸の前には多蔵ががんばっていて、

「どこへ行きなさる。あっしは、女には親切ですぜ」

羽交締めにして、後れ毛のねばついた頸すじを穴があくほど、吸った。

誇りも意地もない記代の叫びが、格子のすき間から、路へ奔りでた。さらでだに、傾いた古いしもた家である。

近所から人がとびだすし、通行人も立ちどまってのぞきこむように見守っている。

「野沢さん、下手をするとこりゃア……」

多蔵は五百羅漢を背負っているくせに、存外気は小さいのだ。間誤々々して、記代の手足をありあう縄や紐で縛ると、猿轡をかけて、

「な、姐はん、怒っちゃいけねえ。このお姫さまア、あっしのものなンだ。野沢さんにはおまはんがいる。な、浮気はあっしがさせねえよう、だから……」

ちょいとの間、預かっておくんなさい、と拝み倒すと、武助を促して外へ出た。

「こうしなくちゃァ、町役人にでも注進されたら元も子も無え」

名案だと思ったが、武助は欲情をとぎられたいまいましさで、顔をゆがめたまま、むっつりと歩いた。多蔵などに、記代のお初穂（としか彼らには思えなかった）を奪わせてたまるか。

たかってきた群集は、お京が追い払った。

「やれやれ、何だか、莫迦を見るのはあたしみたいだけど」

お京は、簪でやけに、髷の根をかいた。転がされている記代を、じろりと見る。

女というものは、場合によると、男より冷酷で非情なものだ。記代を見るお京の目には、嗜虐のかがやきすらあった。

「どこのお嬢さまか、お姫さまかしらないけれど……あんまりいい図じゃアなかったねえ」

記代は顔をふっている。苦しそうだ。冷ややかに見ていると、つぶらで汚れを知らぬ双眸に泪があふれてきた。

「――苦しいのかえ？　死んじゃア羅漢さまが悲しむだ

ろうから」
猿轡をはなして——と、それだけだった。
「逃がして！」
記代は、旗本の娘という身分を忘れて哀願した。
「おねがいです、この縄を……ね、逃がして！」
「そればっかりはねえ」
「お礼はあげます。だから、だから……」
「逃がしてあげたいけど……武助に斬られるのは、あたしゃ嫌だから」
「おねがい！」
「駄目ですったら」
「おねがい、おまえに迷惑がかからぬようにします。あるお屋敷に注進してくれるだけでいいの、筒井記代が、ここで……」
ふっとお京の心が動いたのは、憐愍の情ではない。多蔵の欲望が嘘でないにしても、武助のほうが、初々しいこの肌をあきらめきれないだろうということだ。
——武助の鼻をあかしてやるンだ……
「行ってきてあげる」
「え、ほんとうに！」
「だけど、断わっておきますよお姫さま。決して、あんたのためじゃないのさ。あたしゃ武家がたが大嫌いだからねえ」

叫ぶ白刃

一

半刻ばかり、そこらを歩きまわって——二人とも、まだ昂奮を残していた。足が地につかない感じだった。
家の前にはもう群集は誰もいない。
ほっとして、格子戸に手をかけた二人だったが、
「や……誰だ！」
「——戻って来たな」
記代の足の縄をときかけてふりかえったのは、立派な武士だった。
「野沢さん、邪魔が？」
と、多蔵が眉をぴくりとさせて、
「あっしが」
前へ出ようとするのを、
「よせ」
とめたが、もう五百羅漢の耳には入らなかったようだ。
——こんないい女を奪られておたまりこぶしがあるけえ！
逆上したように、
「おう、おう、何しやがンでえ、その女ァいわく因縁あればこそ、そうやって……第一、うぬァ何だ。ひとさまの家に、横着な面ァしてあがりこみやがって、そいつァ盗っ人と同じじゃねえか、やい、ここを誰さまのお屋敷だと思うてけつかる……」
「盗賊というか？」
「あたりき」
「盗賊並びに火附方お改め——わしは与力だ」
「げっ！」驚いたというような生やさしいものではない。一時に血の気を失って、さっと身を飜えした。
叩かれると、どれほど埃りがでるかもしれない身だから、逃げ足は早い。
「お、どうなされた。早合点な。その与力の身分もこの梅雨までのこと。いまの結城彦太夫は無役ゆえ安心する

がよい」
「結城彦太夫……それが、何しにきた」
と、武助のほうは、腹を据えた。
彦太夫はあの傷が漸く治癒したのであろう。よく見れば、からだが歪っているようだったが、顔色はいい。
——白ばっくれるつもりか！
彦太夫は、記代の縄をといて、
「この方は、知人じゃ、身分ある者を、かような手ごめ、許されることか？」
「おれは知らぬ」突っぱねた。「誰かがやったのであろ」
「そのもとではない？」
「うむ」
彦太夫は、お京を見た。
つと、そっぽをむいてお京は、
——助けてあげるけども、あたしゃ野沢武助がおっかない。彦太夫が、眼つけて入ってきたことにしておくんなさいな……
その約束だったのだ。
「どうやら、あたしの役目は終わったようだから、ひっこみましょうかねえ」
と、立った。
「お邪魔さま」
その白い襟足が格子の外の宵闇に溶けこむと、彦太夫は、語をついで、
「——では、あの刺青の男か？」
「知らぬ」
「あの男は何処の？」
「知らぬ」
「そのもとの存じよりではないと、言う心算か？」
「知らぬ」
と、小莫迦にしたような調子で、
「せち辛い世の中に、一々、他人のことを詮索しておれるか、え？」
暗い眼つきが、彦太夫の質問を打り切らせた。
——一筋縄では吐かぬやつ……
いまの彦太夫には、何の権限もない。
たとえあったとしても、一度まがったら、死んでも饒舌る男でないことは、痩軀に漂よう陰鬱な雰囲気でわかる。
「——ここは、そのもとの家であろうが」

彦太夫は戦法を変えたが、
「そうらしいの」
「で、このありさまは？」
「うるさい男だのう、じゃから知らぬと申しておる……」
たまりかねたように、記代が口をだした。
「彦太夫さま、このお方は、伊丹さまをご存知なのでございます」
「なに……」
愕然として、
「伊丹を！……ほ、ほんとうか。それは。まことに伊丹靱負を？　そのもと、ご存知ならば教えてくれぬか」
「知らぬな、そんな奴」
「まあ！」
記代の咎めるような視線にも、武助は平気だった。
「そのような名なぞ、聞くのも始めてだ」
「ひ、卑劣なッ」
「そうだろう、むかしからおれは立派だといわれたことがない。ふふふふふ」

二

彦太夫も記代も、いつかな腰をあげようとしなかった。
「おねがいでございます。伊丹靱負さまに逢って是非とも話さねばならないことが……」
ただに許婚という仲ではない。記代は靱負にすべてを許していた。
まだ江戸市中にいるとすれば、捕われるのは時間の問題なのだ。
彦太夫にしても、兇刃をあびて、からだの格好はまがっていたが、親友の仵である靱負は、妻子のない彼にとって、可愛かった。
自首して出ることが切腹を意味する以上、他国へ落としてやりたい。
——夫婦旅……あたしもご一緒します、どんな辺鄙な山奥へでも……
想い一筋に、探し歩いた記代だった。
こうした奇禍にあっても、毫も、執着はおとろえなか

った。おとめの心は一すじなのだ。
三人とも黙ると、行燈の灯がじりじりと、虫鳴きするだけである。
重苦しく、白けた空気だった。時々、武助が咳をするだけの時間。夜は更けてゆく。
武助はしびれをきらしたように、
「迷惑な客人だ……」
と、立ちあがった。
「そんなにこの家が気に入ったか？　ならば夜あかしなさるもよかろう、拙者は所者があるので他出する」
「あいや」
「寝るときは、灯だけは消してくれ。近頃油が値上がりしているので」
「それでは、拙者らも……」
「遠慮することァない。ゆるりと、ご両人で乳くりあうもよろしかろう」
ふりかえりもせず、他人の家を辞するように、武助は、外へ出た。
宵のうちには、まだ星が数えられたが、雨をもよおした雲が、濃くひろがってきて、真っ暗な夜だった。

町かどまで行って、武助はふりかえった。彦太夫たちの尾行を気づかったのである。
武助は——浅草へ戻ってきた。真竜寺門前町。その裏長屋のどんづまり。武助が訪うと、おこまが顔をだした。
「伊丹どのはご在宅かな？」
「あの……」
靱負には友はない。
主殿の陰険、老獪な性格を知っているから、おこまは笑顔を見せない。
「ちょっと、他出しましたので……どちらさま？」
野沢武助は名乗らなかった。またくる、といって、長屋の木戸から出た。
その姿を物陰から見ていたのは、やはり尾行してきた彦太夫と記代である。
「——あの家だろうか？」
「さあ……」
武助たちが伊丹靱負に、穏やかならぬ感情を抱いていることは明白であった。
「あたし、あの男を跟けます」

「そうしてくださるか」
彦太夫は、長屋の奥に入っていった。そのときまで、武助が尾行を感づいていたかどうかは明らかではない。
彼が墓地に入っていったのも、野心がさせたものならば、真竜寺ではなく、隣接した松源寺を選んだはずである。
処女の匂いが、陰湿な墓地で、武助の嗅覚を刺戟したのではなかろうか。
墓地は暗い。
——どこへ行くのかしら、近道なのかしら……
街中のような距離では影は闇に呑みこまれてしまう。あせりが、記代を急がせた。草履の音が夜の道に音を立てた。
墓地の中ごろに亭々たる榎の大木がある。そこまで来て、影を見失ってしまった。
——どっちへ？
のびあがったとき、
「誰をお探しだ？」
嗄れた声が、背後でした。

三

「あっ！」
野沢武助が、懐ろ手で立っていた。
「拙者か？　抱かれた味が忘れられなんだか？」
逃げようとした肩に、大きな手がかかった。骨ばった、長い指。
記代は百斤の重みを感じて、よろめいた。
「——放してッ」
「そなたのほうから、追ってきたのではないか、つまりはおれに抱かれたいのであろう。羞しいか、羞しいか、ふふふふ」
柔かい叢の褥に押し倒されると、もう、羞しさと不安と、屈辱で大きな声すら出せなかった。
「慮外な……無礼者が、ああ」
「ここなら邪魔は入らぬ。ゆるりと二人で愉しもうぞ」
「いやです、そんな……」
「いやなことはない。そなたは、おれが好きなはずだ、好きになるぞ、すぐにな。おれを知った女は、誰でも、

好きに……」
「理不尽な……」
泪を含んだ声は、汚辱でかすれた。
——もう駄目……
諦めて抗う力も萎えたとき、ふっと、百斤の重石に感じていたのが軽くなった。意外にも野沢武助が仰むけに倒れたのだ。
だが、記代が起きぬうちに、武助は敏捷に一転して、樒のかげに立っていた。
「誰だ！」
「名乗る要もあるまい」
「なに！」
「野良犬にはな」
——聞きおぼえのある声？……
記代は瞠目した。
おぼろに、白い着流しの武士——浪人らしい姿を見あげた。
「去ね、墓地は死人を埋めるところ。死人は、男女の左様な姿を見ては浮かばれぬ。抱き合いは、おかどちがいだろう」
ひろい肩が背をむけた。
記代の胸にひろがった温かい雲が、
「靱負さま？」
低く、呼んでいた。
浪人者の足はとまった。ふりかえって、
「——おれの名……あっ」
「記代です、記代でございますっ」
はじかれたように、女は、すがりついていた。
月代がのび、髷のかたち、口のききかたも零落してはいたが、夢寐にも忘れたことのない、恋しい伊丹靱負そのひとに違いなかった。
「記代か——」
信じかねるように、片手抱きにして、頬を撫でる。
そんな仕ぐさに、失踪の月日が感じられた。陋巷の荒んだ生活が見えた。
記代は、男臭い、その胸にとりすがって、泣きじゃくった。
「そうか、そなただったのか……」
感激のこもった声ではない。
が、その次に言った言葉は、記代への愛が、過去よりも少しも減っていないことを意味していたのである。
「話はあとだ」
と、記代をうしろに庇って、
「きさまを生かしてはおけぬ」
「な、なにを……」
鞘ぐるみぬいた武助の大小は、榎の根元に立てかけてあった。あわてて、とろうとした。が、間に合わぬ。
靱負の足が、これを蹴った。
「とれ！」
拾ったが、さすがにすぐには抜かぬ武助。呆然として佇立していた。
その痩軀が、左右にゆらいだと思うと、くくくっと風が竹筒を吹きぬけような、あの陰気な笑い声が洩れた。
「伊丹靱負、伊丹靱負……村正がやってきたのか……」
「……？」
「村正、その腰のものが村正だな」
「千子村正だ。それが何とした」
「貰うた！」
「病葉が、ぱっと、舞う。白刃が白刃を呼んで、死の静寂が、欲望の叫びと変じた。
凄絶な太刀から発する火花の剣風であった。記代はおもてを蔽って、傍の墓石のかげにうずくまってしまった。
「おうりゃァ」
「とう！」
どちらの鍔子が剪ったか、ばさっと、小枝がおちた。
「——く、くそッ……」
罵りが絶え、沈黙がきた。まだ勝負はおわっていない。
おずおずと、おもてをあげた記代の眸に、入れ違った二人の影が——
「あっ……」
竦んだ。
三尺と離れぬところに、眼があった。野沢武助の眼。憎しみをこめた眸である。
とびかかってくるかと思われたが、ふっとその憎しみがうすれ、怨むような、悲しげな色が掠めると、武助はにやりと笑った。そして、どう！　と、倒れたのである。
刀は握ったままだった。
「靱負さま！」

「む……」
勝った、という感動もないかのようであった。
静かに血汐を拭って、
「村正は……」
あわれむように、言った。
「おれから離れたくないそうな……」
「――そうだ……」
武助は、咳こんだ。頭をふるわせてかっと黒いものを吐いた。おびただしい血汐がその半面にしぶいた。苦しげに、あばらの浮いた胸を大きく波うたせて、
「む、村正が、その村正が……」
「……？」
「きさまを、やがて斬るぞ」
「なんと？」
「きさまの血を、ふふふふ、いつか、必ず、きさまの血を吸うときがくる、そのときが……」
それなり、武助のいのちの糸が切れた。
「靱負さま！」
記代が駈け寄った。靱負のおもては、苦痛に歪んでいた。まるで、深傷でもうけたかのように。
その眸は虚ろに、闇の一点を見つめていた。

四

渋川主殿からさしむけられた刺客を返り討ちにした以上、彼の方から密訴されるのは時間の問題であった。こう話しあっているうちにも、役人が来ないとも限らぬ。元旗本とはいえ、いまは浮浪人の兇状持ちである。容易に町役人が縄をかけ得るのだ。
「ひとまず、靱負どのをお匿いするから」
彦太夫と記代は、靱負を連れ去った。
――仕方がない……
おこまは、薄幸の人生に流されて、諦めを知っていた。
生まれて始めて得た恋である。灼熱のその恋も、喜びと背合わせに、こうした冷酷な結果がひそんでいたからともいえるのだ。
――いつかは別れねばならないときがくる……
常にその不安がつきまとっていた。
最初から、暗い宿命の翳を背負っていた伊丹靱負なの

だ。
——どうせ、あたしなんかと、いつまでも一緒におれる人じゃァないのだから……
記代の、上品さ、美しさ、可憐さ——すべて生まれの悪い自分にないものばかりではないか。
半年前までは、靱負はれっきとした身分、四百五十石どりのお殿さまと聞いて、茫然自失してしまったおこまだった。
「存じておるかもしれぬが……」
と、前置きして、彦太夫は語った。
「あの腰のもの、千子村正というて、稀代の妖刀なのじゃ。靱負の心ない刃傷も、あの妖刀に命じられてのこと。お役を棒にふるどころか、先祖代々の家名まで失うてしもうた原因たる、妖刀村正を捨てねば、靱負は地獄への道を歩まねばならぬ……」
彦太夫は知らないのだ。
すでに、妖刀村正が、伊丹靱負の一部と化していることを。
ある、抗し難い力が作用しない限り靱負の腰から村正が離れることはあるまい。
「——あたしは、靱負さまの妻……」
孤りになると、おこまは、数カ月の生活をふりかえった。
不如意ではあったが、囲い女などにはなったが、いやそれなればこそ、三日に一度の逢瀬がどんなに愉しく、生き甲斐を感じたことだろう。
——何かある……
妖刀のせいとは知らなかった。おこまは靱負の陰鬱の原因を探していた。
——あたしの力で明るくしてあげたい、二人だけの倖せを築きたい……
主殿の手が肌をまさぐっているときでも、靱負を思っていた。靱負との明日の生活を夢みて屈辱に耐えた。
——このまま、別れてしまう……
そう思うと、恐ろしかった。
孤独に耐えられそうもない。人の世の愛を知ったとき、おこまは、ぬきさしならなくなっていた。靱負を知らない以前ならともかく、靱負に愛を感じてこの世に生存の意味を見い出したおこまが、孤りになって、生きている理由は考えられなかった。

翌日、おこまは彦太夫宅を訪れている。
玄関に出てきたのは、記代だった。
「——靱負さまに……」
「ここにはお出でになりませぬ」
意外に冷たい記代の言葉である。
「では、どちらに？」
「おこまさん。靱負さまのことは、諦めてください。あなたの気持もよくわかりますの、でも、このまま、靱負さまを陋巷で朽ちさせたくはありませぬ」
「——そんなつもりでは、あたし……」
「靱負さまは、旅に出ます」
「何処へ？」
「申しあげられませぬ」
と、はねつけたが、
「あなたにはお世話になったそうでございますね、ちょっと待ってくださいまし」
記代は一たん奥へ入ったが、紙包みを持ってきた。
「些少ではございますが、おおさめくださいな」
「おかね？」
おこまの窶れた顔に微笑が浮かんだ。灼熱の恋を知らぬ生まれのいい娘への蔑みだった。
そのとき、はっきりと、彼女の心は決まった。
「——お嬢さま」
あふれる泪を指で払って、強いて笑顔をつくりながら、おこまは言った。
「そのおかねは、靱負さまへ、路銀の足しにと差し上げてくださいまし。そして、どうかおしあわせにと……」
おこまが去ると、記代は式台に打ち伏して、泣いた。
恋に勝った喜びの泪であり、敗者を憐れむ泪であった。
ひそかに江戸を抜けて他国でほとぼりをさます。田舎暮らしも三年もすれば世間は忘れてくれる。靱負ほどの若さと、才と腕があれば、前途は明るいのだ。
おこまの面影が、靱負の胸から消えるのに半月もあれば充分だと、その夜、神田の船宿から出させた屋形船の上で、恋の道行きを、記代は愉しんだ。
千住の先で船を乗りかえて、川越へまず行くつもりだった。
ところが、橋場のあたりにかかると、矢のように漕ぎ寄せてきた猪牙から、黒小袖に黒袴、おもてを布でかく

した者が、やにわに抜刀してとびこんできた。
せまい屋形のうちである。靱負は村正を抜刀したが振るえない。
「推参な！」
湯呑みをなげつけて、ひるむ隙に、柄も通れと貫いた。
「ああ……」
悲鳴に、女の声を聞いて、はっとした。白い、ほそい手が、村正の鍔を、おののきながらつかむ。
愕然とした靱負を見た眼——おこまだった。
ばりっと障子が破れた。
「おこまか……」
「靱負さま……村正は、あたしが頂いて、尽未来……」
ぐらりと屋形船がゆれた。
「お倖せに……」
胸に妖刀村正を刺されたまま、おこまは仰のけに、大川へ転落した。
「おこまっ！」
かまえようとした手も虚しく、ざぶっと水飛沫がかかった。
「おこま、そちは、そちは……」
満汐なのか、おこまを呑みこんだ大川は、黒いうねりに、たちまち波紋を消してしまう。
夫恋う千鳥の声が、屋形船の上を、尾を引いてとび去っていった。

花の雨

一

それっきり伊丹靱負の行く方は杳として知れなかった。半年もたつと追求の手がゆるみ、靱負の人相書も高札からはがされてしまった。
そうして、その年も暮れて、文政は十年を閲した。花見さわぎも葉桜となって落ち着いた三月末のある日、江戸浅草見附外第六天門前町で血腥い事件が起こった。
女髪結のおつねとその亭主松七、それに木鼠の小平という男。さながら朱瓶をぶち撒けたような血糊のなかで三人ともこと切れていたのである。
発見したのは毎朝元結を売りにくる向柳原のおぶんが格子戸から気軽く声をかけ、中へ入ってみて仰天した。すぐに町名主や鳶の者が駈けつけ役人を呼んだ。検死の結果では、兇行は昨夜と推定された。
近所の聞込みでは、
「そういえば、なにやら怒鳴り声がしていたようですが……」
と、首をかしげる程度のもの。昨夜春雷に伴われた豪雨が半刻ばかり続いた。その間らしい。ことに日頃から痴話喧嘩の絶えない夫婦だったから、近所でも馴れっこになっていて気にしなかったというのも当然である。
あるいは、もっと知っていることがあったかもしれないが、一様に、あいまいに語尾を濁したのは、松七が、無頼者で佃島の寄場の臭い飯を食ってきた前歴がある上に、近頃お上御用の目明しをしていたからにほかならない。
おつねのほうも、以前根津権現裏で客をとっていたという噂があり、木鼠の小平というのがまた、渡り仲間で小悪党だった。いまは藤堂和泉守お下屋敷の部屋にいる。
町奉行所のほうから照会してみると、
「当家には左様な奉公人はいない。当家御名をかたる者であろう」
というそっけない返事。

これは大名や高位の旗本なら当然の返事で、渡り仲間や下女なぞ一期半期の奉公人のトラブルに名前を出されては面倒だから、知らぬ存ぜぬと突っぱることが常識になっている。町奉行のほうでも、その答えを予期していて無縁寺にほうりこむ。

兇行現場の様子では三人が何かの理由で殺しあいをしたと見られた。

おつねの手には剃刀があり、小平は匕首を握っていたからである。

三人の経歴と性格を、考えあわせると、

「悪事に関した……痴情怨恨沙汰に相違無之……」

というところで、町奉行所の調書はこの事件を落着させた。町役人としては常識的な推定線であった。

二

その半月ほどまえ、やはり春雷のはげしい日だったが、浅草猿屋町のしもた家で、軒端の雨垂れを、つまらなそうに見あげている男女がいた。

「やれやれ、これで花もおしめえか。つまらねえ」

男が大きくあくびをする。

「言わないことじゃない」

と、女は白い肉づきのよい腕を惜しげもなくさらして、簪の根でかりかりとぼんのくぼを掻いた。

「だからあたしが、そう言ったろう？　今年ァ雨年だから三分咲きのうちに花見に行こうってさ」

女というものは、すぐ責任を男になすりつけるものだ。男はまたあくびをした。

「弥三さん！」

「なんでェ」

「なんでェじゃないよ」

「じゃァなんでござンしょう、お力姐さん」

弥三郎は生っ白い顔をおどけて見せる。

「莫迦っ」

袖で打つ真似をする。その手を、つと下からつかんで、

「どうせ、莫迦さ」

と、弥三郎は、お力を膝の上にひき倒した。

「あれ、およしよ」

「真っ昼間から、枕絵どおりに遊んで、疲れたの、つまらねえのと、どう見ても悧巧じゃなさそうだぜ」

「ふふふふ、だって……」

お力の声が甘くなって、腕が白蛇のように弥三郎の首にからんだ。「よしねえよ」そう言う唇に熱っぽい唇が蛭のように吸いつく。

黄表紙や枕絵や煙草盆。それから湯呑、小菊紙まで乱雑になげだされた六畳に、これも畳の縁目から歪んで敷いた三布巾の敷蒲団がお力の派手な長襦袢をこわしたものだから、生温い空気まで動物的で淫らだった。

弥三郎は、濡れ髪弥三と呼ばれるくらい垢ぬけた容姿をしている。

取柄といえば、その女形にして舞台に立たせたいような優男ぶりだけで、読み書きはできないし、力もなく金もない。お力のほかにも若後家をひっかけたり、ときには処女に泣きの目を見せる腕はあるというのだから、屑みたいな存在である。

定職というものがないのだ。

横山町で山甚という呉服屋が伯父に当たるので、背負呉服をさせたところが、女ばかりひっかけて商売には身をいれないのでいまは勘当同様になっている。

お力と知りあったのも、戸別に品物を売りに来て、ちょっとつまんで見たくなったのである。

ところが、女を喜ばせるのはお得意だから、お力ほどの女がうつつをぬかした。

金廻りのよさそうな男と見れば、武家町人のきらいなく近づくお力が、こんなだらしのないやつを情夫に持ったのも、その二枚目ぶりに惹かれたからだった

お力は大がらというと、骨太の肩怒りというのが多いが、お力は撫で肩だし、踊りで洗練された軽やかな所作が、大輪の絢爛たる花を思わせた。

「春信や歌麿が生きていたら、あたしを一枚絵に描いたろうよ」

ぬけぬけと、こう言って恥じない。

「そいつァどうかな」

と首をかしげる男たちも、一度お力と寝たら、陶酔のなかで兜を脱がざるを得ないのである。お力はそんな自分の魅力を知っている。

疲れた倦きた、といいながら、唇をあわせ、はだけた胸が直接に肌にふれると、若いだけに非力だが弥三郎は

勃然と欲情して、腰を抱いた。

傘に当たる雨の音が近づいたのも夢中の男女は気がつかない。訪う声もなく、がらっと格子戸が開いた。しもた家である。花の季節だ。あいだは襖が一枚あるきり。

お力が、さすがに愕いて、唇をはなしたのは格子戸の開けかたに特徴を聞いたからだった。

「いけない、雷だよ」

「なんだって！」

押入れに隠れるひまはない。身を離すひまもなかった。

「お力、わしじゃい」

巨軀で畳がきしった。

巨軀だから鈍感とはかぎらない。まして惚れた女の秘事、ぴんと感じたらしく、弥三郎が半身起こしたところに襖が両方にひき開けられてしまった。

「ちえっ」

帯ひろ裸で、くるっと敷蒲団のそとへ転がりだして仰いだ眼に、天井に髷のふれんばかりの巨軀が見えた。

「やあ、稲妻！」

日ノ下開山横綱稲妻雷五郎の双眼が、火を吹くばかり、さっと怒気が並の二倍もある顔を朱に染めて、

「わりゃア、背負い売りの弥三郎！」

仁王のような手が襟がみをつかむ。帯が解けかけたままだから、身をひねると、するりと脱げる。下帯も弛み、とても外へ出られた姿ではないが、鬼のような形相の横綱につかまれては命が幾つあっても足りぬ。弥三郎は湯呑を蹴とばして、台所へ逃げこもうとして、障子ごと転がり落ちた。

「やい、犬っころ、わりゃ何処へ逃ぐる気かい」

耳をつかんで、ひいィと悲鳴をあげるやつを水瓶に首を突っこむ。

お力は、こうなっては白をきっても無駄だと、度胸をきめて、煙草をふかしはじめている。

こんなことは、初めてのお力ではない。お力としては八百善の料理に飽きて、笹ノ雪の豆腐料理でも味わうくらいの軽い気持の仲なのだ。たとえ弥三がひねり殺されたとしても、後追い心中する気はさらさら無い。

水責めにしただけでは、四十貫の巨軀に漲った憤怒はおさまらなかった。

「横綱が女を寝とられたとあっては、殿様にも顔むけ出来んわい。われが人前に出れんよう、こうしてくれようで」

巨きな手が濡れ髪の小鬢をつかんだ。膝で頭を押えつけて、ぐいぐいむしり始めたから百千の毛根から血が噴きだし、頭の皮がばりばりっと剝がれて、濡れ髪弥三郎、稲妻の袴の膝に爪を立てたまま、失神してしまった。

三

手に血がこびりついているようであった。胸がむかむかする。駕籠に乗れば、一層吐き気が増しそうで、稲妻雷五郎はずんずん歩いていた。

幾らか雨は勢いを弱めたが、道はぬかるんでいる。重いからだで、べた足で歩くので、泥飛沫で裾がべとべとに汚れるのだが、それも知らぬ気に、巨きな双眼で眼に入るものすべてを睨みつけながら歩く。

格子のうちや、軒下から、あ、横綱だ、まあ稲妻よなどと憧れや、讃仰の声も耳に入ったが気は霽れなかった。

——殿様に顔むけ出来ん……

と、いうのは、あながち誇張ではない。

稲妻雷五郎は藤堂和泉守のお抱え相撲である。稲妻はしこ名であるが、士分になると苗字化して帯刀を許される。むろん譜代の武士とは違い一代かぎりで、それもおおむね土俵に在る間だけの奉公にせよ、士分に変わりはない。

したがって、稲妻雷五郎の恥辱はただちに藩公の恥辱に通じるのだ。まして春場所を数日後に控えて、市井の視聴を集めている横綱なのだ。

瓦版にでも出れば、とんでもないことになる。

先年不世出の名力士と称された雷電為右衛門が死んだりして、いまの雷五郎は同時期に横綱免許を受けた阿武松緑之助と、江戸中の人気を二分していた。

「あれだけ痛めつけてやれば手を引くじゃろわい」

お力は捨てられない。

肌もよいが、ただ陶酔するだけではない。大がらの五体から発散する活力が、奇妙に雷五郎の土俵に作用するのだ。

相撲は酒と女に溺れると、顴面に力が失せるという

が、雷五郎とお力の場合はそうではなかった。同衾の翌日には体力が充実する。

「女房にゃ直せんが、情婦にゃ二人とない、女ッ子じゃわい」

吸いつくような肌を思いだすと、快感が甦ってきて、漸く、頬の筋肉が弛んできた。

心をくすぐるような遠雷が低い空にひびいた。稲光りが東の空にぱっぱっと閃く。雨は小降りになっていた。

その足で稲妻雷五郎が訪れたのは、本所亀沢町だった。相州屋という刀屋。

「稲妻じゃが、頼んだ一振は研ぎあがったかい」

「あ、これは横綱！」

「研ぎあがったかい」

「は、はい、あの」

と、手代は何故かおろおろして、

「いいえ、その、ちょっとお待ちくださいまし」

と、奥へ駈けこんだ。

「どうしたんじゃい」

出された座蒲団に腰をおろすと殆ど隠れてしまう。相州屋長兵衛はどうしたのかなかなか出てこなかった。

また空が曇ってきたからではないが、雷五郎は待たされているうちにおさまった胸が、また泡立ちはじめるのを知った。

「一体全体、何が起こったんじゃい、この稲妻は気が短いぞ、あの村忠がどうかしたかい」

「は、はい、暫時お待ちを……」

雷五郎が不審を感じたのも、その村忠在銘の一振が曰くがあったからである。

先日のこと、雷五郎は和泉守の供をして鉄砲州へ漁りに行った。春鰹の季節で、ほかに小河豚、鷹ノ羽鯛などとれて、和泉守も上機嫌だった。

帰途に三つ又あたりで漁師が騒いでいるのに逢った。近習が耳にしたところでは網に刀がひっかかってきたという。そういうことはしかし格別珍しいことではない。が、引きあげるうちに赤錆の刃に触れた部分が数カ所も切れた、という。

「ほう、或いは由ある名刀やもしれぬ、需めよ」

和泉守は格別、物数奇というのではなかった。雷五郎を同伴したことから、ある因縁を感じたのである。

雷五郎は、五年の昔、和泉守が参覲の途次木曽で拾いあげた男だ。山のような炭を背負った怪童を見て心が動いた。強力の相撲を抱えることは大名の趣味であり、殿中控えの間でも鼻が高い。

雷五郎は和泉守の期待に応えて五年にして大関となり、とうとう横綱を免許された。和泉守は晴れの土俵入りに秘蔵の志津三郎兼氏二尺五寸五分を与えるつもりでもあったが、この、

「名刀」

に、気を惹かれた。

雷五郎も自分が拾いあげねば木曽谷に埋もれた山男にすぎない。無銘であっても、名刀ならば一そう彼の土俵入りにふさわしいのではないか。

研師の隠語で錆刀を早急に判断することを、〝窓をあける〟という。一部分を研いで見るのだ。刃渡り二尺三寸、村忠という在銘が刀剣鑑には見えなかったが、業物らしい、という返事が、和泉守と雷五郎を喜ばせた。

その研ぎあがる日なのだ。

「まだかいの……」

焦々しながら待っていると、やっと相州屋長兵衛がでてきた。

「お待せいたしましたることは、重々お詫びいたしまする、が、これには仔細のあること、奥へお通りくださいまし」

四

奥には先客がいた。

「あ、これは」

と、雷五郎は愕いて、巨きなからだをちぢめて拝揖した。

「渋川さまがおいでとは知らんで、莫迦声はりあげ申して」

「いや、いや、そうかしこまらんでもよろしい、ここは相州屋じゃ。それに固くなられては話もし難い……」

渋川主殿は藤堂家江戸屋敷お留守居役なのだ。世話になることが多いから、稲妻雷五郎もあたまがあがらない。

床の間の立派な鹿の刀架に、白鞘の一振がかかっていた。

「あれでござんすかい、わしの刀は」

「左様でございますが」

と、長兵衛はちらちら渋川主殿に視線を投げながら、
「そのことについてお留守居さまに来て頂いておりましたところで……」
長兵衛は、この刀の忠を見て、はっとしたのだ。まさかと思った。研いで見て、いよいよあのときの刀とわかった。それで主殿に知らせたのである。奇妙な因縁だった。
「あの刀を研ぎましたるところ、意外なことに気がついた、と申しますのは」
と、長兵衛はいまさらのように、言った。
「お禁め刀らしゅうございます」
「お禁め刀？　何じゃい、それは」
「妖刀じゃ」
渋川主殿が嗄声をはさんだ。
「千子村正、と言えば存じておろう、この銘は村忠、と読めるが、仔細に見ると村正を村忠に切り直してあるのじゃ」
そこまで説明されると、稲妻雷五郎の知識でも納得がいった。
おおかた、名刀を惜しんだ者が、村忠と改竄してひそかに所持していたのではないか。それが何か兇変でもあって海中に投じたか、いずれかであろう、というのである。
「そこでじゃ……」
渋川主殿は、凝っと雷五郎を見て、
「おことはこれを晴れの土俵入りに使おうという。知らぬうちならまだしも、妖刀と知って使えば、不祥事をひき起こすことになるのではないかな」
「……」
「というて、殿にも相談できるものではない。ご当家は譜代ではあるが、下世話にも言う、さわらぬ神に祟りなし。もしご当家に恨みを含む者の耳にでも入って、ご公儀に仇なさんとして云々などと、あらぬ噂たてられれば一大事となる。殿がお買上げになった品ゆえ申し開きが立たん。それゆえ、わしがしかるべき処置をすることに」
長兵衛にも、論理の飛躍が感じられる言葉だった。が、まるっきり無いこととともいえない。
主殿が熱心だったのは、お家を想う為ではなく、おのれの蒐集帖のなかに、この妖刀を加えたいからにほかならぬ。彼は、この一刀が、またもや、おのれの前にあら

われたことに、異様な宿命に似たものを感じていた。刀のほうで逢いに来たのだとすら思っていた。
まるで、その二人の腹を見ぬいたように、急に、稲妻雷五郎は笑いだしていた。
「ははは、そんだらことなら、心配はいりませんわい、この稲妻は、妖刀などと称われるもののほうが、ようござんす」
「これ、稲妻、そのような……」
「わしは生まれ損いじゃで、人様の反対ばかりじゃ。妖刀がわしの東方の手にあれば、西方の者どもに祟りが行きましょうわい、ははは」
そう言いながら、彼はお力の肌の感触を思いだしていた。

飛ぶ血

一

両国回向院境内は、群集で埋まっていた。
櫓太鼓の景気のよい音に惹かれた老若貴賤を問わぬ男女が、ぬかるみに下駄や草履を汚しながら、木戸口にひしめいていた。
「押すなってェのに」
「なんだと、いつ押した」
「いま押したじゃねえか、鼻糞め」
「べら棒め、おいらのうしろから女が押しているんだ、おいらのせいじゃねえ」
「女、へ？　若いか婆ァか」
「若けえとも、年は二八か二九からず……」
「おっと、おめえ前に行きな、代わってやら……」

群集は浮々していた。

霖雨で花は駄目になるし、角力は見られないし——とあきらめかけているところに、やっと雨がやんで、晴天十日興行の初日の幕があいた。

急いだせいであろう、席がけの総二階桟敷のあちこちでは、まだ鳶の者が丸太組みに鎹を打ちこんだり、荒縄で縛ったり立ち働いている。

現今と違い、そのころは本場所は春夏の二回きりで、晴天十日と決まっていた。だから土俵も青天井の桟敷の小屋がけも、十日保つだけの雑な作りかただった。もっともたいてい寺社の境内を寺社奉行に願いでて一時的に借りて興行するのだから恒久的な建物はできない。

本場所興行地は必ず回向院境内と決まったのは天保四年の冬からで、それまでは回向院が最も多かったが、芝神明、御蔵前八幡、茅場町薬師などでもできたし、春夏本場所以外の、いわゆる花場所としては、深川八幡、西大久保八幡、神田明神などで行なわれていたのである。

木戸前の蒙御免の東西番附の前には下馬評が渦を巻いているし、煮売屋の屋台がいい匂いをぷんぷん流しているし、地べたに席を敷いて饅頭や餅を売っているかと思えば、一方では絵双紙屋が、相撲錦絵を売りたてている。さすがに、女子供の客がこれは多い。

その雑沓の中を、「あっちだ」「逃がすな、藍微塵の着物だ」怒号が聞こえ、どっと群集がくずれた。

「うぬら、邪魔すると、しょっ引くぞ」「お上のご用だ、のけのけッ」

威たけ高に怒鳴って、うす陽にきらっと光ったのは十手だ。人々が待ちかねた春場所のだというに捕物騒ぎ。こうした場所でご用風を吹かすのが、得意でもあるらしく、人相のあまりよくないのが、一人々々、のぞいてまわっている。

頭巾や笠の者はもとより、手拭のうちまでのぞきこむ厳重さだった。

その一人、誰やら役者の手拭ですっとこかぶりをしていたのが、うしろからぐんと引かれて、

「う、う……痛てッ」

男らしくもない悲鳴をあげた。

「何が痛てえ、面ア見せな……」

良心にふっと棘が刺さった程度の狼狽で、目明しの松七は、

「これァ繃帯けえ……なんだ、てめえ弥三じゃねえか」

「あ、松七親分！」

どきりとしたのは、胸に一物あったからである。

「どうしたんだ、え、喧嘩か？」

「へ、まあ、左様なもんで、済んません」

弥三郎は頭半分を巻いた繃帯に手をあてた。

ずきんずきんと、小鬢の傷は痛む。すっぽり毛をむしりとられて左の小鬢が生まれもつかぬ不具になった。

まだ熱はひかないし、疼痛は烈しく、眩暈すらしたが、いつになく、弥三郎をここまで運んだ意地が、形のいいうすい唇のあたりに、翳をつくっている。

「気をつけな、奴に間違われちゃおめえの損だ」

「へえ、全く、へえ。ここへ逃げこんできたんですかい、何てェ野郎なんで？」

「伊丹靱負てェ浪人者だ」

「へえ、兇状持ちでござんしょうねえ」

「もと旗本で去年の秋口に人を殺めて草鞋を穿いていやがったのだが……」

話しする間も、ぎょろぎょろ群集の動きのなかに特定の姿を追っていた。

「そんな奴ですかい、じゃあっしも気をつけておきますから」

と、弥三はこんな手合にはお追従を忘れない。

「そうするがいい、褒美ァ貰ってやる。おっと、そいつァ武家姿じゃァねえぜ、町人髷で藍微塵だ。まだこの辺にいるに違いねえ」

そのうしろ姿に、

——ペッ、女髪結の亭主が、何でエご用風吹かしやがって……と、唇のうらで毒吐いた。

——伊丹靱負、伊丹靱負……どこかで聞いたことのある名だぜ……

思いだせなかった。頭が悪くなったのかもしれない。頭の皮を一部分剝いだのだから、隙間風が入るのは当然だ。

——ちくしょう、よくもこの濡れ髪弥三郎を二タ目と見られねえようにしやがったな、どうするか、見てやがれ！……

前にも述べたように、端麗な容姿だけが生存価値だというのに、画竜点睛を欠くどころの騒ぎか、べろりと赤禿が小鬢に出来たのだから、

——もう女たちも寄りつきゃしねえ、死んだも同然だ、あんな生まれ損いに殺されたようなもんだ、ちくしょう！……

懐中の匕首の柄をそっと握りしめると、木戸銭をなげ捨てるようにして小屋のうちに駈けこんだ。東の花道ぎわに席をさがすのだ。

二

そこから、少し離れた席に、身巾のせまい小粋な仕立ての藍微塵を着た町人が、まわりの喧騒とは別世界の、喜悦を知らぬ冷たいおもてを土俵にむけていた。

一勝負ごとに、わーっと喊声があがる。土俵ぎわの勝が敗に転じ、敗が勝機を摑む一瞬の昂奮の坩堝のなかで、そこだけ異質のものが——水に油がまじった感じ。いや、湯が沸っているなかで一滴の油だけが泰然としているに等しい。

勝負を見ていながら、見ていなかった。

相撲——本場所の昂奮というか、耳を聾するばかりの近所となりの喧騒は、それだけで江戸の縮図ともいえる。

——帰ってきた、とうとう……

その感慨だった。

世にあるときは、れっきとした旗本二ノ丸御納戸衆で役料二百石本知二百五十石の身分——それが逃亡の果てにこの姿だった。

遠い昔ではない。旗本、伊丹靱負の名が武鑑から消えてまだ一年にもならぬ。予期し得ぬ運命に翻弄されて、お役を棒にふっただけでなく、家名も喪い、浪人に落ちた。

さらに、人を殺して、江戸を離れたのである。その僅かの間にいろんな女も知った。歓喜の裏にひそむ寂寥も知った。笑いの次には必ず涙がくるのもわかった。

普通の人が五年も十年もかかって知る哀歓を半年で知ったといっていい。その月日はまた常に死を隣へ置いていたことも事実なのだ。

——おれは何故、帰ってきたろう？……

我ながら理解に苦しむ。

江戸は生まれ故郷でもあるが、彼のすべてを失わせた土地でもある。まだ半年にもならぬいまでは、余炎はさめてはいまい。

江戸を後にするときの心持では、二度と帰らぬ心算だった。帰れば獄門と屈辱が待っているだけなのだ。

にも関らず、田舎の冬が去り、春が来て、花の季節になると無性に江戸が恋しくなった。江戸の春が恋しかった。

わざわざ、浪人髷を、職人のそれに結い代えさせて、大小もなしに江戸へ入ってきた。

——これなら、誰にもわかるまい……

朋輩知人にあっても、これが快活な四百五十石どりの旗本と誰が見破ろう——灰色に閉ざされた伊丹靱負は、そう思うとはじめて茶目ッ気な気分になった。

が、それは時間にして、三分とつづいたろうか、千住の宿場はずれの茶店にいた男が、あ！　といいながら、腰を浮かした。

知人ではない。そう思ったとき、

——岡っ引だ！……見つかった！

何てお人好しだったのだろう。半年あまりで舞い戻った兇状持ちを見すごすほど江戸の岡っ引は無欲者ではないはず。

相手もしかし半信半疑で、すぐに縄をかけたりはしなかったので助った。

尾行されていると知ると、回向院の境内にまぎれこみ、大相撲を幸いともぐりこんだのである。

寺社の境内は寺社奉行の支配下になって町奉行の権限は及ぼさない。現行犯でおさえる必要があるとき以外は、だから町役人は奉行を通じてしかるべき手続を踏んで許可を得る。たいてい寺社奉行（大名である）輩下の者が立ち会う。

そういう面倒なことを知っているから、伊丹靱負は群集にまぎれこんで平然としていられた。

靱負も相撲は嫌いではなかったが、逃亡の数カ月が、彼を田舎者にしたように、馴染む心がうすかった。以前ほどの感興は少しもない。空はうす陽が消え、曇ってきていた。

ぼんやりと見ているうちに中入りとなり、幕内の土俵入りがはじまった。大分空が暗くなったがこれがすむといよいよ横綱の登場だ。

東の花道を、露払音羽山次作を先に、稲妻雷五郎が巨軀をゆすってくる。うしろに従うのは金王為八、糸巻太刀の拵えも華麗な太刀を陽々とかかげてきた。

何気なくふりかえった靱負は、なぜかふっと、その太刀に惹かれた。

拵えのゆえではない。何か、靱負に訴えるものが——彼の心が、またこれに応えるものがあったのではないか。

そう思ったとき、わーっと喊声があがった。

鍋島家中の一団が口火を切り、群集が和したのだ。横綱、日本一、大男、稲妻、富士鷹なすび！　言いたい放題の喊声がうおーんという雑音になって空へぬけて行く。

その空からぼつぼつ、落ちてきたようだったが、突然桟敷から躍り出た人影が、もろに稲妻の腹にぶつかった。

と、見えた。

「なに、さらす！」

音羽山次作がつき飛ばそうとしたときは、稲妻が凄まじい形相になってたたッとよろめいていた。とびかかるとき、男の手に匕首が光ったのを靱負は見た。

三

衝動、というほかはない。幼時から身についた咄嗟の判断と、軽い身ごなしであった。

匕首はかなり下腹を刺していた。が、一えぐりする前に、靱負の手が利腕を打ち、短刀をぬきとろうとした。

雷五郎の四十貫の巨軀は、ためによろめき、

「金王、太刀じゃ」

痛みを吐き捨てるように吠えた。

金王為八は太刀持ちをつとめるのは、今日が初めてであった。いささかあがっていたところに、匕首の閃きである。太刀をさげたまま、ずずっと退った。

雷五郎に呼ばれて、思わず、

「親分！」

と、投げた。こういう場合はかえって重いからだが自由にならない。

雷五郎は手をのばしたがとりきれない。

がっ、と、靱負がつかんだ。左手だった。渡巻のあたり。その衝撃で、鯉口がきれた。太刀はするっと滑りで

る。

空は曇っている。雨が降りはじめている。いちめんに灰いろに塗り潰されていたはずである。

が、伊丹靱負は見た。鯉口三寸の露呈した刀身から放つ、無気味な、しかし懐しい光を。

そのときはまだ判然と千子村正だとは気がついたわけではない。

そうした懐疑も判断も、混乱のうちにできようはずがない。一弾指の間なのだ。白刃は自らすべりでて、伊丹靱負の手に持たれていた。

彼は眼の前が霧がかかったように、朦朧とぼやけるのを知った。

殺気が身内を貫いた。あの妖しい戦慄！

——斬る！

行為のあとの自覚である。

斬った。ぐんと斬りさげた刃に、快い手ごたえ……。

夢のような、その幻影が、誰であったか、靱負は知らない。

だが、血の臭を嗅ぎ、刀の斬れ味と刀身のバランスの記憶がこのとき瞭然と甦ったのである。

——この刀なのだ、千子村正なのだ！

伊丹家の封印された家宝だった。その封印を切ったことから血を招いたのだ。

三河以来の旗本の家と父祖の名誉と、そして、おのれまで失ったもとは、すべてこの妖刀村正なのだ。

「宿命だ！」

無意識に彼は絶叫し、さっと身を翻えしてたたっと、花道から土俵に駈けあがった。四本柱に凭れていた年寄検査役が、とびあがり袴を踏んで土俵下へ転がりおちた。

靱負は血のしたたる刀をふりかざしたまま裏口へとつっ走る。

武士も多勢いたが、呆然として、遮る者もない。もしそうした者がいたとしても五人が五人、この阿修羅のような凄まじい刃に、斃されていたろう。

こんな、椿事のあとで相撲がとれるわけがない。雨も降りだしている。

気の弱い女小供は匆々と帰りはじめたので、年寄中が式守伊之助に意見を伝える。伊之助はすぐに土俵にあがると、東西々々と呼ばわった。

「晴天十日の間相撲興行の処、雨となり候わば、今日は

入懸々々」

まるで、それを合図のように、雨ははげしくなった。半札をひっちぎるように受けとる木戸の混雑はいうまでもない。

武士の大身はお陸尺が駕籠乗物を用意しているし、馬が待っている。帰り客を狙う町駕籠の群れ、煮売屋たちは店を片附けはじめる。その屋台にとびこんでくる者、水茶屋の葦簾に走る者——。

寺社奉行堀大和守輩下瀬沼なにがしが勧進相撲の取締りで出張っていたので、定廻り同心坂上久馬が、伊丹靱負召捕り方について申し入れていた間に、事件は起こった。

一応周囲に網は張っていたが、手先の一人は、哀れにも真向額唐竹割りに、頭骸骨を両断されて大の字なりに倒れていた。

「これは凄い」

と、瀬沼なにがしは、傷口をあらためて感嘆した。

「この分ではまだまだ死人が出ますぞ、境内はそれがしのほうで探索させるゆえ、当寺周辺二、三町ほどは、虱つぶしに洗われるがよかろう」

四

「——知りませんよ、そんな」

「ほんとうか」

「嘘と坊主の髪ァ……古くさいことを言わせないでくださいな」

「ほんとうならいいのさ、ほんとうに、知らねえンだな」

愉しんでいるかのように、尋問しながらにやにやしている松七である。

「ええ、ほんとうに」

「ああそうか」

あっさり頷いたので帰るかと思うとそうではなかった。故意に闕の盛り塩を爪先で蹴くずして、ずかずかとあがった。

「あら、親分、知らないっていうのに」

「そうさ、おめえたちァそういうわな」

「だったら……」

「莫迦野郎、金猫の鳴き声聞いてへい左様でございますかと背中を見せて帰ってよ、お上ご用がつとまるけえ」

内処へ入って行く背に、つんと唇を尖らして、

「いけすかない、なにさ、お上ご用ばっかりふりまわしてさ」

「ねえ……」

と、銀猫のお鈴も大袈裟に、袂でぶつ真似をした。

「あの松七、女房に食わせて貰ってンじゃないか。一人前の男の甲斐性もないくせに、糞威張りに威張りちらしてさ」

そして、しゃがみこんで盛り塩を集めていたが、

「駄目ねえ、縁起が悪いったらありゃしない、これじゃ、今夜はろくなお客は来やしないよう。新しいの盛りなおそうかしら」

「ああああ、どうせ今夜もお茶っ引きさ……」

首を竦めて見あげる空から、無情の雨が惜しげもなく降ってくる。そこへ、

「お京！」

と内処から佐平の声がした。

「親分をご案内するがいい、急いでな」

と、最後の言葉は松七への皮肉だった。

縁起棚に、二匹の張子の猫がお出でお出でをしている。金猫と銀猫。ここは回向院うらの大徳院地内の私娼窟、いわゆる岡場所の一つだった。

いつの世でも私娼が絶えたことがないが、江戸百数カ所の岡場所のなかでも、ここはちょっと知られている。東西両国橋袂の盛り場に近いせいもあるが、値段がきまりよい。

それも金と銀と二タ通りきり。二十歳前の女が一分、二十歳以上は当時としては女の盛りを過ぎたというので二朱。

一分は一両の四分の一で、一朱の四倍に当たる。銀粒もあるが一分金もある。それで一分の女を金猫と呼び二朱女が銀猫と呼ばれるようになった。縁起ものの招き猫を金と銀にして象徴したのは有名になってからである。

お京はほんとうの歳は二十一になっていたが、十九と言い張って金猫を稼いでいた。

この界隈にない美貌なので、佐平はうすうす察しながらも、文句はいわない。

繁昌するといっても岡場所である。小部屋が二階に四つ階下に三つあるだけで、捜すのに時間はかからない。

「――ふうん、まさか鼠みてえに天井裏か床下にもぐっているんじゃねえだろうな」
「よそさんを捜してくださいな、うちァこれっきりなんですから」
「へへへへ、おっとまだ一つ捜し足らねえとこがあったぜ」
松七は病ん目のような眼でお京を見た。顔色が変わらないように、凝っと見返すと、かわいた上唇を舐めて、やにわに手を懐へ突っこんだ。
「何をするのさッ」
「へへへへ、怒ることァあんめえ、これもお上ご用さ」
「莫迦におしでないよ」
「莫迦にするもんかな、金一分持ってくりゃ」
「いいえ、お京は嫌いなひとに千両積まれたって……ここは吉原じゃない。金猫が客をフルときはね、指一本さわらせないのさ」
「言い難いことァ言わねえほうが、身のためだろうぜ」
女房のおつねと比べると印籠と弁当箱ぐらいの違いはある。どうしても目明しの威しが、脆くなるのはしかたがない。
松七が隣へ移ると、お京は屋内へ駈け戻った。
二階へあがる。
「大丈夫でございます、伊丹さま」
金猫と思えないような言葉になっているお京だった。屋根の上で何やら返事が聞こえ、身軽く物干台へ降りたったのは伊丹靱負。
「――悉けない、礼を言うぞ」
「いいえ、そんな水臭い……」
浅草の銭湯で、男湯のカマが割れているというのでやむなく女湯のほうに入った。銭湯に馴れない靱負の背を流させて貰って、話をした。それがきっかけになった二人である。人間の運命は不思議なものだ。
めぐりあい、お京は、その言葉に酔った。伊丹靱負が、どんな理由で追われているかは、問題でない。
――あたしだけがお助けできる！
それが大事だった。いまのお京のすべてといえた。
金猫は自分の部屋を持っている。道具類もだから全部を自分のものだ。濡れた衣類をどうしようかなどと考えていると、ふっと世帯を持ったような楽しさになる。
湯で手足を洗い、頭を洗う。

「町人髷がお似合いになりますのね」
「ふふふ、そうでもあるまい、似合えば、ばれなかったろう。やはり武家は武家だ。形になっていればよいのだが、結いなおしてくれぬか」

春雷の夜

一

松七は伊丹靱負の事件にこだわっていた。
「あれだけ固めてあったんだ。十重二十重といってもいい、辻から露路のぬけ道まで、ちゃんと若けえ奴らが守っていた。斬られたのは一人、とすると、羽でも生えねえかぎりどう見てもあの近辺から逃がれっこはねえ……」
手柄を焦る気持が多かった。松七は定廻り同心坂上久馬から目明しとして、名札と一緒に十手捕縄をあずかったのが一年前。
小盗っ人や掏摸はちょくちょくあげたことはあるが、武家浪人者についての手柄は一度もない。もうこの辺でそろそろ大物をあげなくては都合が悪い。小悪党なかまでは二足の草鞋を穿きたがっている奴が多いし、十手捕

縄をとりあげられてしまえば、ただの女髪結の亭主にすぎない。

それに小盗っ人の証拠をおさえて、

「お目こぼししてやるぜ、おれの胸三寸におさめてやら」

これで確実に三両や五両になる。おけらの奴が多いから、むろん一度にではない、顔さえ逢えば酒代に不自由しない。それに目明しということがわかると、小料屋や水茶屋で大事にしてくれる。どうせ蔭では悪口いっていようが、松七にしてみれば、

「こんなうめえことァねえやな」

——要するに、こんな温かい座を離れたくはないのだ。そのためにも伊丹靱負を捕えることは大手柄なのだ。

もと旗本でいまは兇状持ち。それも凄い腕前ときている。横綱の土俵入りの太刀を奪っているし、その刀が村正——これほど瓦版むきの兇状持ちがいるだろうか。松七は靱負を捕えて名があがることを思うと、腕がぶるぶる顫えた。

子分、というほどではないが、そこらにごろごろしている奴を十手の重みで、見張りや走りつかいにする。愚連隊は常に役人とコネがついていることを喜ぶものだ。

他の悪事がお目こぼしして貰えるからである。

三日経ち五日経ったが、伊丹靱負の消息はない。人相書も沢山刷らせてくばってある。七日すぎた。

「おかしい、こんなにボロがでねえはずはねえ……」

松七はもう一度回向院から道を辿ってみた。

雨が降っていたし、人目につかない路。諸条件を考え合わせながら、露地を辿ってゆくと大徳院地内が、どうも臭い。

「ははァ、やっぱり金猫のあたりに違いねえ」

前より一層、きびしく見張らせることにした。そうしたある日、おつねが、

「おまえさん、伊丹の一件はどうなったんだえ」

「うむ、まあ、松七さまの腕前を見ていろ」

「何だか頼りないねえ、ねえ、その伊丹を捕えれば村正って刀も一緒なのかい」

「そうさ、それがどうした」

「ねえおまえさん、伊丹なンかよりも村正を狙いなよ、あれ何でも七、八両するんだってさ。ね、そうおしよ、伊丹を捕えたってさ、坂上さまのお手柄になるのがオチ。こちとらは、せいぜい青ざし十貫文くらいのもンだろ」

おつねは、さすがに根津権現裏で、手練手管で谷中日暮しの里あたりのお百姓を喜ばしては金をまきあげていた凄腕だから金銭の点はまことにはっきりしている。

その点、小悪党だが、松七のほうがまだ目明しの名声や意地などにこだわるだけ、人間が善い。

「それもこれも、所在がわからねえことにゃ話にならねえやな」

そうして松七は、名案が浮かんだのか、若い者にある男を呼びにやった。

男はその夜、更けて来た。

「へい、木鼠の小平でございます」

藤堂家下屋敷の仲間である。

「おう、こっちへ来な、寄りな」

長火鉢のそばへ招いて、松七はずばりと言った。

「おめえの本職ァ、何だっけな」

「へ、へえ……鳶で」

「そりゃア、いわば年期奉公の間だろう。一人前になってからよ、丁度幸いとばかり鳶の身ごなしを何に使ったっけね」

「へえ、へえ、親分、盗っ人ァもう廃業しましたんで」

「白状すりゃいい。その盗っ人の腕に頼みがあるんだが、なァに、お上ご用での。おめえそのことが出来りゃ、駒形の質屋から十四両三分三朱強奪したのは、お目こぼしてやる」

小平は、あっと言ったきり返事も出来ないでいた。

二

小平は仲間奉公を隠れ蓑にして、夜盗をするくらいだから、一応頭はきれる。目耳も敏い。

金猫銀猫の佐平の家に客となってあがって様子を探ると、お京がかくまっているらしいことがわかった。

松七の勘は当たった。いつもなら目明しの仕事はこれで終わりである。しょっ引くだけなら誰にでも出来ることだ。兇悪犯の場合は突棒刺叉袖がらみという捕物陣が大仰になるだけの違いにすぎない。

ところが、同心坂上久馬のほうには連絡しなかった。

「刀をまず手に入れてからだ」

その夜、暮れてから、また雨になった。

花はすっかり葉桜になり、霧島産であろうか気のはや

い躑躅はほころび初めている。
お京の部屋では伊丹靱負が膳を囲んでいた。店屋もの の二、三品に酒が五、六本。以前からみると、靱負の酒は強くなっている。
「そちは身を堕し、おれは兇状持ち。食事に気をつかわんでもよい」
「いいえ、世にあるときは四百五十石のお旗本が」
「それを申すな」
お京は勿体ないと思う。幸福だと思う。この倖せがいつまで続くものでないと知りながら、このまま永遠にと思うのだ。
あれ以来、お京は殆ど客をとっていない。佐平がこうした家には珍しく物のわかった男だから、十日ほどもこうして過ごしてきたが、お京の貯えも底を尽きかけていた。
「根気比べだったが、町奉行の奴らももう倦いてきたろう、今夜でも出立しようかと思う」
「ま、今夜！」
「この雨だ、幸いなことに」
「いや！」
と、叫びざまに、お京は男の膝に身を投げていた。
「どこにも行かないでくださいまし、おねがい！」
靱負は茫然としていた。お京は毎夜のように燃えて挑んできた。心痛のすべてを忘れて現在の倖せを最大限につかもうとする、ぎりぎりの女の姿があわれでならなかった。
——おれは、明日をもしれぬ身だ……
兇刃に奪った幾つかの生命が、血が、魂が、伊丹靱負の胸の裡でどす黒く、苦く、臭く、醱酵してぶつぶつ泡立っている。
——おれは村正に憑かれている。村正があるかぎりおれは狂人なのだ、が村正から離れられぬ、村正もおれから離れまい。
この夜、一夜と思うと、お京は半狂乱のようになって、しがみついてきた。
その肌に応えている時間ですらも、村正の無気味な光が、瞼から消えないのだ。
「——許せ、お京、おれは妖刀に魅入られたのだ」
悲痛に呻いて、お京を抱きしめたときである。
ふっと雨気が入った。実感としてはそれだけだった。

が、そのとき木鼠の小平の敏捷なからだは部屋に侵入して、千子村正を摑むや、屋根の上へとびだしていたのである。
「あっ——待て！　鼠賊！」
鳶あがりだけに、往昔の忍者のように身軽くすばしっこい小平だった。雨は降っている。三更の雨夜に人かげはおろか猫一匹いない。
伊丹靱負はずぶ濡れになって追ったが、両国広小路で見失ってしまった。
「——村正、村正……何処だ、村正……」
靱負は雨雲を見あげて、叫んだ。雨は容赦なくその顔にしぶいた。眼に、鼻に、唇にしぶいた。
「呼んでいる、村正が呼んでいる……」
ふらふらと歩きだした。夢遊病者のような足どりで、柳橋のほうに歩いてゆく靱負は、恰も気のふれた人のそれでしかない。
——そのころ——
第六天門前町の路次奥おつねの家では六つの眸が、千子村正を仄暗い行燈のもとで見ていた。
小平が盗んでくるとすぐに売りに行く予定だった。奇剣珍剣をほしいという分限者は尠くないのだ。
いわくがあるほど、高価に売れる。
「だがよ、一見もしねえじゃ、話にならねえやな……」
松七はすらりとぬいた。行燈の仄明りにうつしてみると、一層、その鈍い光りかたが妖奇的であった。
「これが妖刀か……」
松七が呻くように言った。
「何十人も人を斬ったのか……」
「おおよしよ」
と気丈なおつねも言った。
「あたしの顔が写っている。おお気味が悪い……」
木鼠の小平も夜盗のくせに背すじがぞくぞくしてきて、
「じゃァ、分け前はいずれ、頂きにあがりやすから、今夜ァこれでわっちは」
松七は返事もせず刀身に見入っている。
そそくさと小平が立とうとしたとき、轟ッ、突如、雷鳴が夜を裂いた。
たてつけの悪い雨戸の隙間の真昼のような光が閃いた。雷に伴われたように、ざーッとひときわ雨は激しく

なった。

「これじゃ帰れやしない、泊まっていったらいいじゃないか、ねえ、おまえさん……」

ふりかえって、おつねは、ぎょッとして立ち竦んだ。白刃を凝視しているのは亭主ではない。亡霊だ。いや、亭主松七に違いない。が、嗄れた声、

「妖刀か、これが。斬れそうだな、おつね……」

松七の声ではなかった。が、おつねをふり仰いだ顔、そこに幽霊の顔があった。

「お、おまえさん……」

おつねは思わず剃刀を握った。

小平も反射的に匕首の柄に手をかけた。

「斬れる！」

村正がおどった。小平は身を退いが柱にぶつかって、前へのめった。匕首をぬいたとき、村正がざくっと脇腹へ入った。

血の臭いと雷鳴と雷光がおつねを狂わせた。

剃刀が松七の頸動脈を切ったとき、苦悶のあまりふりまわす匕首が、おつねの腿を、腰を、乳房を、滅多矢鱈に切った。

村正の呼ぶ声に惹かれて亡霊のような伊丹靱負がこの家の門口に立ったのは、その直後のことであった。

松七の手から村正をもぎとると、飄然と再び雨のもとへ出た。何処へ行くのかそれを知るものは、ただ村正とそして夜の雨のみである。

新しい娯楽小説の確立を…
ベストセラー・ノベルズ

泉　大八　品切れ
ヘンな体験　奇想スリラー小説
失踪した友人を求めて、敵中深く潜りこんだが……？

川上宗薫　¥600 〒110
催淫の行　長編快楽小説
彼はそっと女の腰を支えた。飛行機の中で燃える二人

早乙女貢　¥640 〒110
忍び無惨　長編時代小説
忍びの者―その宿命的存在に鋭いメスを入れる代表作
忍法乱れ雲　長編時代小説
忍法無惨帖

藤原審爾　¥660 〒110
の奇妙種族　長編ユーモア小説
わが国おんな三割安　新宿のお座敷ストリップ社の女たち
今日駄目人間　オムニバス長編
が競う人生色道。

生島治郎　¥620 〒110
汗血流るる果てに　長編国際事件小説
イラン王室宝物館の襲撃の裏にかくされた罠とは…？

菊村　到　¥680 〒110
殺人者は砂に消えた　長編推理小説
色と金と政治が複雑に絡み合う著者独壇上の長編推理

〈ワニの本〉小説シリーズ…ベストセラー・ノベルズ

柴田錬三郎の 無頼殺法 長編時代小説 ¥580 〒110
遊太郎巷談 修羅の巻 魔女の巻
凄婉なエロティシズムを駆使した長編時代アクション

柴田錬三郎の 秘剣乱舞 長編時代小説 ¥780 〒110
顔十郎罷り通る
長編時代小説
流動感あふれる傑作剣豪小説、ここに完全収録！
主水血笑録

福本和也の 空間殺人 長編推理小説 ¥740 〒110
霧の翼
オムニバス推理
独得の作品世界で読者を引ずり込む著者快心の長編
雲上飛行

川上宗薫 密室結婚 長編官能小説 ¥720 〒110
話題騒然！ 著者が描く官能長編、ここに完全収録。

多岐川恭の 死の悪戯 長編推理小説 ¥600 〒110
牝(めす)
長編推理小説
異色の推理小説。著者全力投球の力作長編二冊。
狐独な共犯者

清水一行の 会社恐喝 長編企業小説 ¥680 〒110
虚業集団
異色問題小説
ユニークな作品世界で読者を魅了する代表長編二冊。
賭け

新しい娯楽小説の確立を…ベストセラー・ノベルズ

菊村 到 夜の野獣を狙え ¥680 〒110 長編推理小説
娘とタイネシア国第二王子との結婚だがその矢先——

樫原一郎 女を剝ぐ ¥600 〒110 犯罪エロチカ
〝犯罪のかげに女あり〟——女の生態を抉る話題作。

藤原審爾の 極楽亭主 ¥620 〒110 爆笑コメディ
東京どまんなか
ユーモア長編
当社既刊〝奇妙種族〟に次ぐ長編ユーモア作品。
わが国女房五割安

豊田行二 怪物大統領 ¥600 〒110 書下し にっぽん痛快小説
俺は日本国初代大統領。政策はすべて庶民のため——

福本和也 消えたパイロット ¥600 〒110 書下し長編航空ミステリー
米軍輸送機と自衛隊機が激突。事件の幕は開かれた。

川上宗薫 おんな狩り ¥700 〒110 長編官能小説
笹原は女に関して専門家になりたい そのためには…？

早乙女貢の 殺　　1975 ©

昭和50年9月5日　初版発行

著　者　早乙女貢（さおとめ みつぐ）　〈検印省略〉
発行者　岩瀬順三
発行所　KKベストセラーズ
東京都千代田区神田神保町2の10
電話　東京（263）9121　代表
振替　東京　103083
印　刷　東京ベル印刷
製　本　明泉堂製本

0293-511149-7617